11月号 第6巻第12号 通巻70号 1992年11月1日発行(毎月1回1日発行) 1988年(昭和63年)12月3日第3種郵便物認可

MONTHLY

パチ・パチ・ロックンロール

PATi-PATi ROCK'N'ROLL

新装刊第3号

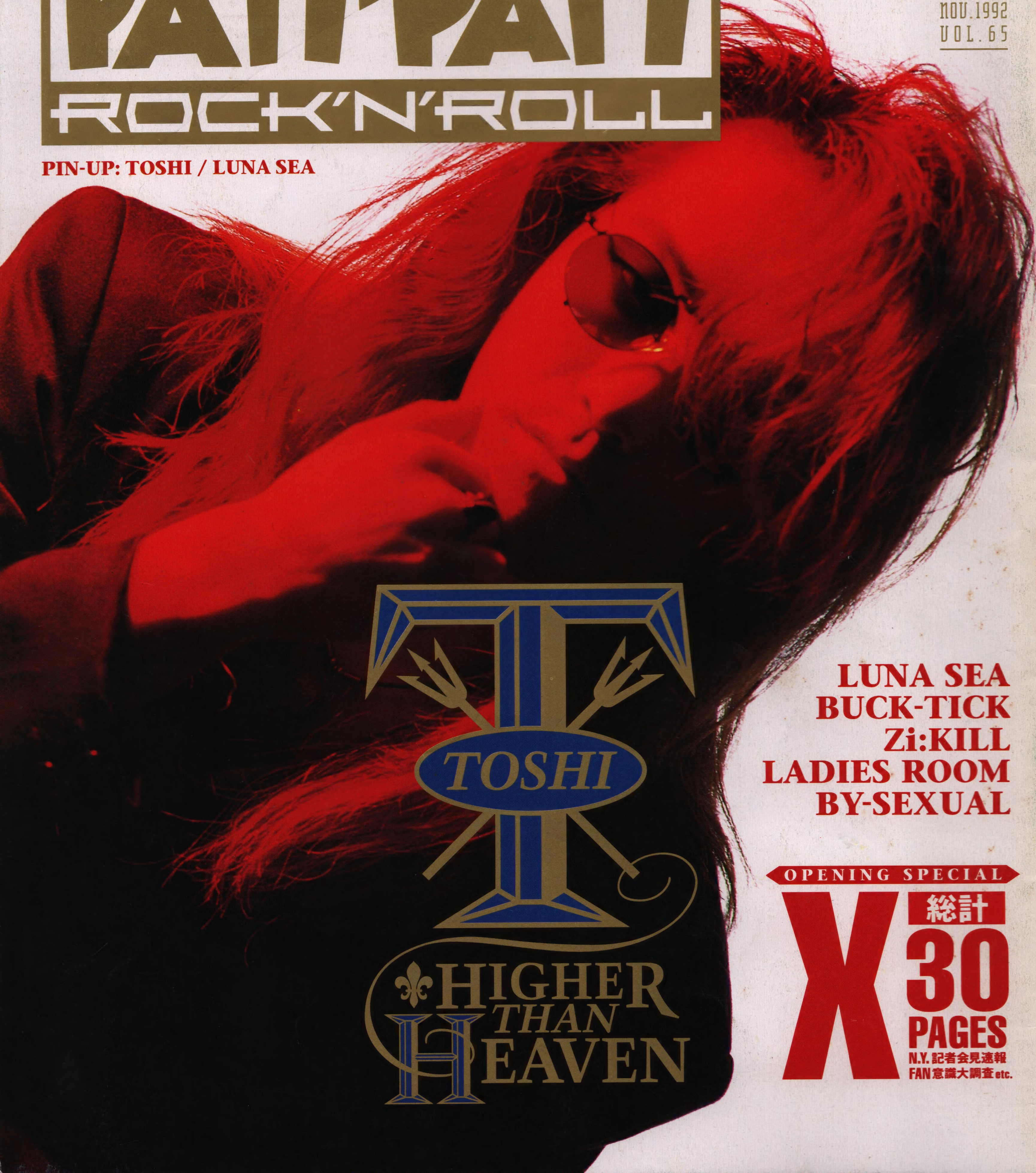
390 YEN

11

NOV. 1992

VOL. 65

PIN-UP: TOSHI / LUNA SEA



TOSHI

HIGHER THAN HEAVEN

LUNA SEA

BUCK-TICK

Zi:KILL

LADIES ROOM

BY-SEXUAL

OPENING SPECIAL

X 総計 30 PAGES

N.Y. 記者会見速報

FAN 意識大調査 etc.


Toshi
[テレビ朝日ステーションEYEエンディングテーマ]
made in HEAVEN
First Solo Single 10・21 Release
BVDR-133 ¥930 (Tax Included)
coupling with:
[メナードジュビエルCFイメージソング]
Welcome to my destiny
First Album 11・21 On Sale!
いつも新しい音楽の会社です。
BMG
BMG VICTOR, INC.


それは、心のかけら
HEAVEN
ariola



X Opening Special

“必ず大復活するぜ”と宣言したYOSHIKI・Xは、その宣言から約1か月後の8月24日、その宣言をより具体的な形で、N・Yから全世界に向けて発表した!! ワーナー・ミュージック・インターナショナルと全世界発売契約を結び、つまり、全世界デビューするということと、新ベーシストとなるHEATHを初めて公にしたのだ!! この記者会見の模様を中心に、急に動き出したXをパチ・ロクは追った!!

◆8月24日 N.Y.記者会見

◆新メンバー HEATH

◆今後のXを予想 どうでるX!! 第2弾

◆Xファン意識調査 結果報告

Photography **Yasuhide Joju**





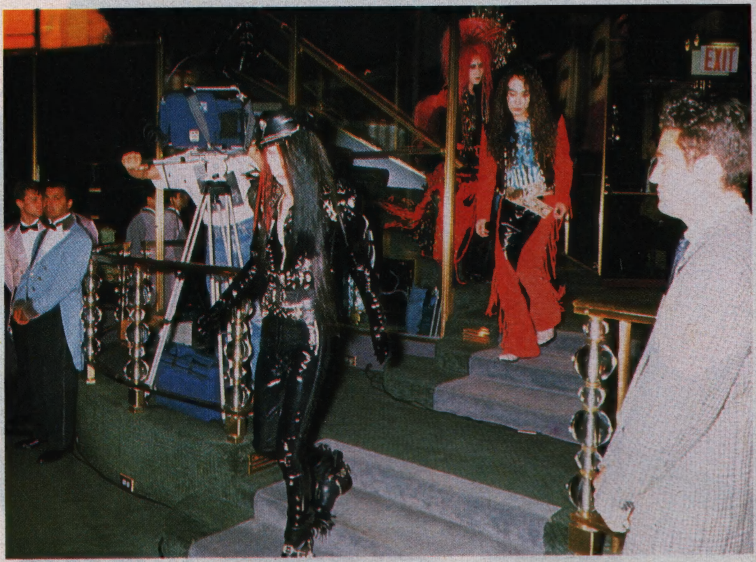
8.24 N.Y. 記者会見

● X.ワーナー・ミュージック・インターナショナルと全世界契約!!

●新メンバー HEATH 初お目見え!!

X が N.Y.で記者会見をするということは，7月30日の YOSHIKI のトークライブでも発表されていた。しかし，それでもまだ半信半疑だったことは否定できない。そう，一通のエアー・メール が編集部に届くまでは……。そのエアー・メールは差出し人の名がワーナー・ミュージック・インターナショナルとなっていて，8月24日に N.Y.のロックフェラーセンターにおいて，X の記者会見を行うという，プレス向けの案内状だったのだ!!

8月24日の X を N.Y.に追う!!















これが記者会見の行なわれたロックフェラーセンターのレインボー・ルーム。ショービジネスの殿堂ともいえる

新ベーシストであるHEATHは，この日，初めてXのベーシストであるということを発表した

ワーナー・ミュージック・インターナショナルのラモン・ロペス会長よりトロフィーを贈られるYOSHIKI



X 8.24 N.Y.

――英語もできないくせに，何しに来たんだ!!――

X 世界デビュー発表記者会見

空飛ぶスポーツライター小林信也（ヒーロー工房）快速レポート

Text **Nobuya Kobayashi**

8月24日、午後6時30分、ニューヨーク。X、世界デビュー発表記者会見は、予想に反して、刺激的な展開を見せた。

――X FROM JAPAN というバンド名はなぜ選んだのですか？（ドイツ人記者・男性）

ヨシキ（英語で）「Xはもう10年前、高校時代につけた名前です。なぜ、と言われても……（苦笑い）」

小杉MMG社長「Xは彼らが10年前につけた名前です。アメリカのマーケットではロサンゼルスにXという名のバンドがあり、同じ名前が使えません。そこで〝X FROM JAPAN〟としました」

――アメリカのトップ・バンドと同じようなプロモーション戦略をとる予定ですか？（フォーチュン誌記者・女性）

WMI（ワーナー・ミュージック・インターナショナル）「はい、同じようなパッケージでPRするつもりです。主にツアー、MTV、ラジオ・プロモーションなどです」

――過去に日本からは〝ラウドネス〟などのバンドが来ましたが、あまりうけませんでした。Xを確実に成功させる方法が何かありますか？（フリーのDJ、男性）

WMI「比較は適当でないと思います。Xは最も才能あふれるバンドであり、このようなバンドが過去に日本からアメリカに来たことはありませんでした」

――契約は長期ですか？ アルバムの制作枚数などの契約はありますか？

MMG「3年契約ですが、オプションはあります。アルバムは少なくとも2、3枚、Xはミュージック・ビデオの評判がよいので、当然ビデオも出す予定です」

――影響を受けたバンドはありますか？

HEATH（ヒース）「ぼくの場合は一番最初に見たバンドがヴァン・ヘイレンで、それが小学校4年生の時です。あとはモトリー・ク

新メンバー HEATHとは



8月24日、Xのベーシストとして初めて、その姿を現わしたHEATH。当日、配付された資料での彼のプロフィールは、1968年1月22日、東京生まれ、血液型B型。事情通によるとメディア・ユースに在籍していたらしい。

ルーとか、そんな感じです」

新メンバー、ヒースの初見参。外見は鋭利で中性的な印象が強い。1968年1月22日、東京生まれ、血液型B型。

春以来、Xは何人ものベーシストのオーディションを繰り返してきた。その中で最もフィーリングの合ったHEATHがメンバーに迎えられた。ヨシキによれば、「一緒にステージで演る姿が自然に見えたから」だという。

——〝ラウドネス〟とか、けっこう才能のあるバンドが（アメリカで）あまり成功していないのに、どうして〝X FROM JAPAN〟が成功するんでしょうか？（アメリカ人女性、日本語で）

ヨシキ「名前を教えて下さい。最初のコンサートのチケットを送ります。それでわかってもらえると思います」

——もうちょっとマジメな答えを聞きたいですね。（同じ女性、日本語で）

小杉MMG社長「いえ、これは大変マジメな答えです。誰もXを言葉で説明できません」

——しかし、英語を母国語にしてない国のバンドが、なぜアメリカに来るんですか？ そういうバンドが成功した例なんて今までにありません（同じ女性、英語で）

ヨシキ「ぼくは音楽には国境はないと信じています」

——ラウドネスは英語で歌い始めたら何かを失った気がします。Xの場合は自分たちのやり方を通すか、レコード会社の方針に従って英語の曲を歌うのか、どちらですか？（フリーのDJ、男性）

WMI「とにかくレコードを作ることが先決です。1993年のリリースになると思いますが、英語の曲になるでしょう」

トシ「アイ・キャント・スピーク・イングリッシュ」（会場から拍手）「バット、ウィー・ビリーブ……音楽に国境はない……（英語で）」

——私もそう思います。アルバムを一枚もらっているんですが、その中であなたは英語で歌ってますよね？（フリーのDJ）

トシ「はい」

——そのうち2曲を何人かの友人に聴かせたんです。Xのことは何も説明せずに。そしたら彼らは大変エンジョイしていました。私自身とても気に入りました。だから私は、音楽に国境があるはずがないと言えます。

ここで会場の半分から拍手が湧き起こった。しかし、言葉の壁を疑問視するムードは予想以上に強く、さらに質問が続く。

——言葉の壁をどうやって乗り越えるつもりですか？

ヨシキ「簡単な方法はないと思います（笑）。だから何度も何度も練習します」

トシ「最善の努力をするつもりです。それにえっと……」

ヨシキ「プリーズ・トラスト・ミー、トラスト・アス！（ぼくらを信じて！）」

WMI「アルバムのリリースまでには英語のコーチングも、行いますから、たぶんそれまでに英語は目覚ましく進歩するはずです」

——最近はどんな音楽を聴いていますか？

ヨシキ「メタリカ、セックスピストルズ、ケイト・ブッシュなどが好きです。でも、ぼくたちは誰かのようになりたいとは思っていません。ぼくたちはぼくたちです」

——言葉よりたぶん中味の方が大事だと思うんですけど、アメリカの人たちに一体何を伝えるために次のアルバムを作るんでしょうか？（日本のWOWOW担当、男性）

ヨシキ「心です」

最後にヨシキはきっぱり「心」と、日本語で答えた。しかしハプニングは続いた。これをうまく英語で訳せないのだ。

「ココロ、つまり、イモーション……」

ヨシキの言う「心」とは、近いけれど違う。ヨシキは場内の当惑を察して「愛です」とつけ加えた。

言葉の壁。それは、英語が喋れるか喋れないかの問題ではない。「心」という、日本人には当たり前の感情を表現する言葉が英語にはない。

日本とアメリカの間には、言葉以上に大きなすれ違いがあることを改めて思い知らされる記者会見となった。

その壁をぶち破って新しい世界を拓くために、Xはアメリカに来たのだ。ぶち破って「心」を伝える手段は、音楽しかない。ライブしかない。

アメリカに渡ったXを、ぼくらは他人事のように見守るだけでは足りない。

〝オレは一緒に闘うぞ！〟

美しいセントラル・パークを見下ろしながら、燃える思いを、胸の奥でかみしめたのは、きっとぼくだけじゃない。



WE BELIEVE X!!

Xファン意識調査 第2弾実施!!

～待ってたかいがあったぜ～

待っててよかったね。とりあえず，新ベーシストHEATHも決定し，世界デビューも決定したX!!
けれども，“大復活”宣言してから，ほんとうに復活するまでは，かなりの時間を必要としている状況のようです。
ま，世界にはばたこうとも，日本のファンを決して忘れないであろうXだから，とんでもない世界デビュー＝大復活を考えてるんだろう。
だから，うがった見方をすれば，今回のN.Y.記者会見も待ってるファンへのデモンストレイション的な側面もあるんじゃないかと思える。
でも安心するのは，まだ早い!! まだまだ待つ日が続くのじゃー。と，いうわけで，前回大好評のXファン意識調査第2弾を実施します。
We Believe X!! ってことで，あなたたちのストレートなレポートを待ってます。こぞって応募してください。

X Opening Special

応募方法

前回と同様，必ずアンケートに答えてから，原稿用紙を封書で送って下さいね。
① N.Y.の記者会見で，あなたのXへの想いに変化はあったか？
②世界デビューする次のXのアルバムは全曲英語になると思うか？
③はたして世界デビューするのは一体いつ頃になると思うか？ 待てるか？

以上の3項目に答えて，Xに対する現在の想いを自由に書いて下さい。あて先は〒156-91東京都千歳局私書箱25号 ソニー・マガジンズ パチ・ロク「Xファン意識調査」係。氏名・住所・年齢・職業・電話番号も明記して下さい。優秀なレポートは誌上で発表，賞金もあります。〆切は10月末、よろしく!!

特別企画

どうでるX 第2弾

出席者

森内　淳 パチ・ロク初登場以来のXウォッチャー。彼なくしては，パチ・ロクでのXはなかったともいえる。音楽評論家として多方面で活躍

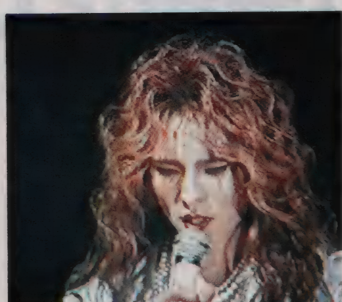
加藤祐介 新進気鋭の若手ライター。世代的にも音楽的にもXと共通項は多い。今月はTOSHIのインタビューで大活躍

前田慎二 ソニー・マガジンズ，ワッツ・イン代表。ワッツ・インでX関係のページを担当。冷静，客観的な視点でXを見ている

廣田喜久次 今年1月にパチ・ロクから異動になったが，なぜか，未だにXのページの担当をしている社内でも謎の編集者

ここにきて，急に動きの出てきたX。7月23日のYOSHIKIの記者会見，同24日のミュージック・ステーション生出演，そして同30日のYOSHIKIのトークライブでの“大復活”宣言。そして，今月，お届けした，8月24日のN.Y.　X・世界デビュー発表とTOSHIのソロ・プロジェクト。世界にまさにはばたこうとしているXの今後を予想するべく，特別対談が企画された!!
予想できないのが普通のXを予想するってんだから，相当，無理っぽい企画だが，どうでるX第2弾!!　さぁ，いってみましょーか!!


7月23日，YOSHIKIの記者会見。東芝EMIとのソロ契約を発表。具体的な計画は発表がなかった


7月24日，YOSHIKIミュージック・ステーションに生出演。その時点でのXの状況を直接，発表した


7月30日，YOSHIKIのトークライブ。TOSHI，HIDE，PATAも集まり，〝必ず大復活するぜ〟と宣言した


8月24日のX，N.Y.記者会見!!　新メンバーHEATHとワーナー・ミュージック・インターナショナルとの全世界発売契約を全世界にむけて発表した

X SPECIAL

ドーム3DAYS以降、X情報に対して一種の飢餓状態が生じた。ドーム以降の活動停止は、かえってX人気をあおる形になったんじゃないか？

N・Yの記者会見後のXの動き、メンバーのソロ活動は？

森内　まずはTOSHIのソロの話からしたいんだけど、ファンはどう思うんだろう？一連の流れとしてさ、Xのアルバムが出るか出ないかわからない、YOSHIKIのソロも出るか出ないかわからない、とりあえずTOSHIのソロは出そうだ、それでひと安心するのかな？

廣田　一応テレビに出てるのを見てひと安心はしてると思うんだけどね、YOSHIKIが出て来て活動を再開するっていう発表をして。でね、そこでひとつのピークを迎えたっていう気がするんですよ。この前のパチロク8月号のXの特集もすごい反響あったんですけど、それはなぜかというと、ファンはXが活動休止してる間はすべての情報を細かくチェックしてるみたいで、そういう飢餓感みたいなのがガーッと煽られてるときにYOSHIKIから広告が出てたじゃないですか？それから1ヵ月遅れぐらいでしょ？　YOSHIKIの記者会見は。その効果っていうのはすごくあったみたい。

森内　俺、行かなかったんだけど、YOSHIKIのトークライブは、ファンの集いのデカいバージョンみたいな感じだったらしいじゃない。（笑）

加藤　あれはすごかったですよね、質問コーナーもあったりしてね。（笑）

前田　プリンとメロンとウニ。（笑）

森内　（笑）でもああいうファンとの密なコミュニケーションていうのはこれから取れないわけでしょ？　海外にいるから。どうするんだろ？

前田　今までは活動休止中はフィルム・ギグっていう手法があったわけじゃないですか？

森内　そうそう。でもあれは日本側の体制がしっかりしててちゃんとしたフォローがあったから出来た物であって、今回はちょっと違うんじゃない？

廣田　なんかね、僕は去年ぐらいまでの本人不在のフィルム・ギグに集まるファンの心理もわかんなかったんだけど、今年活動停止してからさらにファンの次元が変わってるような気がする。

森内　どういう風に？

廣田　もうホントに生きる支えっていうかね、「声が聴ければそれでいい」とか、そこまで行っちゃってるみたいな。

森内　そこまで行っちゃってますか？　神の域まで行ってる？

廣田　うん運命共同体的意味で。だから東京ドームをやる前ぐらいがヘンな意味でテンションがちょっと盛り下がってたと思うくらいにね。

森内　飽和状態だったからね。

加藤　いろんなことやってましたからね、パワステ3daysとかライブハウスとかエクスタシー・サミットとか。

廣田　で、東京ドーム終わって活動停止してからまたレコード・セールス伸びてるでしょ？　ドームが終わってから100万枚越えたはずですからね。

森内　ああ、そういえばそうだよ。う〜ん、わからんな。どういうことだろう、これは？

廣田　けっこうね、「東京ドームのライブを初めて観た」とか「ドーム終わってからX好きになった」っていうファンがかなり多いんですよ。

森内　じゃあキャパシティーでかくして正解だったかもしれないね、埋まんなかったけど。あそこで思い切ってやったっていうのは正解だったんですね。

廣田　そこでファンになった人は探してたものがやっと見つかったと思ったら、すぐに情報がなくなったもんだから、一種の飢餓状態というか、異様にテンション上がったんですよ。

森内　路頭に迷ってるわけね。

　でもさ、Xがこれだけ売れたのって、日本の文化にはまったっていうのはあるよね、例えば昔の漫画の最終回っていうのは必ず主人公が悲惨な末路を辿るわけですよ。でも今の漫画って明るい未来を照らしつつ感動の涙で終るっていうのが多いんですよね。そこでXがやってることっていうのは昔の漫画的なあいう壮絶な終末の美しさっていうかさ、それがあの独特の世界を形成してるんじゃないかな？　だからそういう部分に対する飢餓感っていうのが今の子たちにはあるんじゃないかな？　昔はあった物が今ないわけでしょ？　例えば先輩・後輩の関係とかっていうと昔はあったけどそれが悪しき物だっていうのがわかった時点でどんどん排除されてったわけでしょ？

前田　だから都市の浮っついた流行の先端が切り捨てて行った物をXは集積してあの美意識を作り上げて、それが100万のヒットを生んだんでしょうね。

森内　しかもそれがエンターテイメントの中だけで機能してるから見てる側には実害は及ばないわけですよ。それが実際の生活の中での先輩・後輩の関係だったらすごくヤなことじゃない？　でもXは別世界でそういうことやってくれるわけだから。

廣田　だから少年マンガ誌の暴走族漫画の主人公的な要素はあるよね。僕も暴走族漫画とか読んで主人公に感情移入しちゃうことあるけど、現実に自分がそうなりたいとは思わないもんね。

前田　そうそうそう。入っては行かないけど見てみたいっていう欲求はあるからね。そういう部分を意識せず、すくい上げてるっていうのはありますよね。

森内　だから手の届かない物理的にも遠い存在になればなるほどそれが増幅されちゃうのかもしれないね。憧れの先輩みたいなさ、「こっちを見ただけで嬉しい！」みたいなさ。（笑）

　だけど、そこで全世界を相手にそういう物が受け入れられるのか？　っていう問題が浮き上がってくるよね。

廣田　だからこの間のニューヨークの記者会見でもそこが問題になってたらしいんですよ。「ラウドネスがダメだったのにお前たちは何をしに来たんだ？」っていう感じで。

森内　うん。この間TOSHIにインタビューしたときにもその話したんだけども、「それは考えてる」というんですよね、「海外は海外なりの戦略を考えている」と。

前田　でも、ワーナーとしては少なくとも日本の中での100万枚という売上を考えたときに、向こうにすればメリットあるわけじゃないですか、日本では必ず100万枚は売れるっていう。

森内　でもXとしてはそういうレコード会社としての思惑とは違うところに意義を置いてるわけでしょ？「全世界でレコードを出す」っていうところにね。でも前田さんが言ったようにワーナー側にすれば、もう単純にビジネスですから。だからそこの闘いですよね。そこでアーティストの真価が試されるっていうかさ。

前田　だからそこで100万という数字がイキてくる。Xは日本の中で音楽業界の中で戦いながら、100万という数字を作った。でもアメリカの厳しい音楽業界で素手では戦えないでしょう。ラウドネスがいい例で。だから日本で100万枚読めるというのは向こうで戦う武器になると思うんですよ。ワーナーに対するバーゲニング・パワーというか。

廣田 もちろん、そうでしょうね。そうでないとN・Yで記者会見もないでしょう。

森内 YOSHIKIはどっちに行くんだろうな? いわゆる日本的な様式美を捨てて海外の物に作り変えるのか、そうすると今度は日本で受けなくなるわけでしょ? そこの思惑の違いで随分話は変わって来ますよね。その100万枚がなくなっちゃうかもしれないじゃないですか、まるっきり海外向けに作り変えちゃうと。

加藤 でも僕は今回の海外進出は日本のファンのため、みたいな気もするんですよね。昔の大東亜共栄圏でもないけど、「お前たちが信じてるXっていう文化は世界でも通用するんだ。だからお前たちは俺たちだけを信じていればいいんだ」っていう日本のファンに対するアンサーのような気がするんですよね。だから実際にアメリカでのセールスの結果は関係ないような気がするんですよね。

廣田 いや、俺はYOSHIKIは本気でグラミー賞とか狙ってると思うよ。

森内 俺もそういう気がするな。だからそうなった場合疑問なんだよね、100万という土台が崩れちゃうかもしれないわけだからね。それにライブの活動も向こうが中心になっちゃうんでしょ?

加藤 でもね、五木ひろしとか演歌の人がラスベガスとかでショウやったりするでしょ? 日本でのネームバリューを上げるために。今回のXの海外進出はそういう側面もなくはないと思うんですけどね。

森内 だからそういう風に割り切れば話はすごく見えてくるんだよね。さっき前田さんがいった100万枚持って来ました。その代わり全世界でディストリビュート出来るっていうメリットをXは手に入れる。そこで今まで通りのことをやってればいい、みたいな。それはすごくよく見えるんだけども、それとは違うところにあると思うんだよね、YOSHIKIの思惑は。となると最初のアルバムってすごくキーになるよね。

前田 そう、日本で売れないと困るし、かといって向こうでも売れないと困るし。

森内 そうですよね。ビジネス的なところとミュージシャン的なエゴとね。つまり今までのような形じゃやって行けないってことでしょ? レコーディングの方法にしろ曲の作り方にしろ。

廣田 でもニューヨークで記者会見するっていうのは東京とかで記者会見するよりもプロモーション効果的には強いよね。応援しよう、したい気持ちになって来るんじゃん、ナショナリズムでもないけどさ。

加藤 高校野球で別に出身校じゃないけど地元の学校を応援しちゃうみたいなね。

廣田 で、ニューヨークでの記者会見で「英語で歌うんですか?」っていう質問があってそれにはレコード会社の人間が答えてるんだけど「とにかくレコードを作ることが先決です。93年のリリースになると思いますが、たぶん英語の曲になるでしょう」って答えてるんですよ。

森内 ワーナーとは3年で2~3枚っていう契約でしょ? 1年半で1枚?

加藤 どう考えても無理ですよね、今までのペースだったら。(笑)

森内 リリースはいつになるんだろうね。

加藤 早くて来年の夏でしょう。

前田 あ、その前に、フル・アルバムの前に「アート・オブ・ライフ」を出すっていうのもあるんじゃないですか?

森内 あ、それはあるかもね。だってあれを出さないと『ジェラシー』が完結しないわけだからね。それを出しぃの、夏にアルバムと。

廣田 他のメンバーはソロとか出さないのかな?

加藤 HIDEとかPATAは? 現実問題としてXが始まっちゃうと出来ないでしょう。

廣田 YOSHIKIのソロは?

前田 YOSHIKIがソロやりたいっていう気持ちがあるっていうのは記者会見もしたし間違いないことだと思うんですけど、当面は出来ないでしょうね。

森内 同時に作るとはいってるけどね。でも無理だろうなぁ。

廣田 まぁ、あとは復活ならぬ〝大復活〟っていうのをレコード・リリースのときに実際にどうやって行くのかっていうね。

森内 ライブってことでしょ?

廣田 やっぱりライブかな?

加藤 それしかないでしょ。

森内 だから〝ワールド・ツアー〟って銘打つんじゃないですか?

加藤 一発めは向こうですかね、やっぱり?

森内 そうしないと形にならないでしょう。

廣田 でもワールド・ツアーでバン! てぶち上げといて一発めはエッグマンでシークレットやっちゃうとかね。(笑)

加藤 それはないんじゃない(笑)? いくらなんでもここまで来たら正攻法で来るよ。

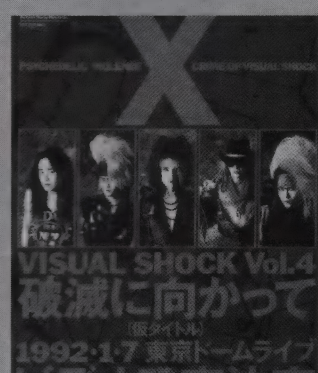
森内 俺もそういう気がするな。だってそれやっちゃったら意味ないもの。(笑)

海外進出しようとするXなんだけど、彼らの方法論はどっちに行こうとしているのか!? 日本的な様式美を捨てるのか、そうじゃないのか?

気になるX周辺ネタ

1992・1・7東京ドームライブビデオ発売決定!!

YOSHIKIのトークライブで武道館にまかれていたチラシや、広告等で、御存知の人も多いとは思うが、TAIJIが存籍していた頃のXのラストライブである東京ドームでのライブがビデオで発売されることが決定している。気になる発売日は、10月21日ということだったのだが、現時点の状況では、どうやら11月に発売がのびるらしい!! ここでも、やはりX進行は健在である。180分という長いビデオだけに早く発売して、ドームでのライブをもう一度、見て見たいものだ!! パチ・ロク来月号では、このビデオのレビューを予定しています。期待して下さい!!



ロック界・初!! YOSHIKIがリカちゃん憧れのミュージシンに!!

このチラシも YOSHIKI のトークライブで、まかれていたチラシだ。なんと、YOSHIKIが、ロック界て初、また実在の人物としても初めて、リカちゃんのファミリーの仲間入りすることになったのだ!! この「スターライト YOSHIKI」は、もちろん「タカラのリカちゃん」シリーズなのだが、リカちゃんの憧れのミュージシャンという設定。女の子なら誰でも一度は通る「タカラのリカちゃん」。ここに「スターライト YOSHIKI」が限定発売ながら登場するとは、あらためて、XとYOSHIKIのデカサを感じる!!



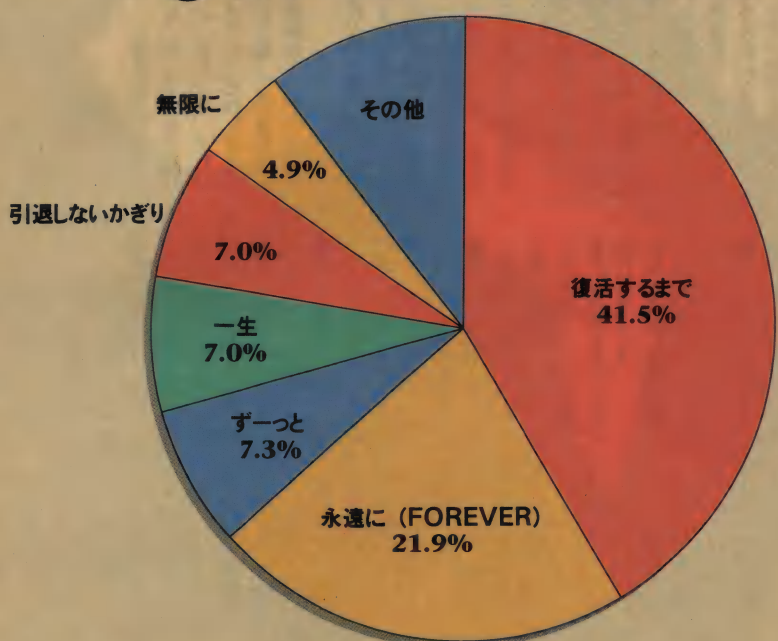
X Special WE WANT X

ファン意識調査結果報告!!

応募総数 5,920 通

パチ・ロク8月号で募集した、Xファン意識調査に、5920通ものアンケートと作文が集まりました。ほんとに、ありがとう。そして、Xファンの皆さんの真剣な気持ちも伝わりました。応募が多かったので、うれしい悲鳴をあげながら、集計した結果を発表します。ファン意識調査第2弾も実施いたしますので、よろしくお願いします。

❶ あなたはいつまでXを待つか



◎その他の回答
YOSHIKIの気合が入っている限り
待てるだけ
メンバーもしくは自分が生きてる限り
子供にもその子供にも伝えて待たせる

この質問には、ファンのみんなの気合が入っていました。復活するまで待つという回答が一番多かったのですが、Xファンにとってみれば、それは必要最低条件となっています。次に多かった回答は、永遠に（FOREVER）です。これは、もうXが復活しようがしまいが待ち続けるという強力な意志のあらわれと言えましょう。無限にという答えもすごい。人の命には限りがあるのに無限とは!! 孫の代まで伝えて待つという人もいました。

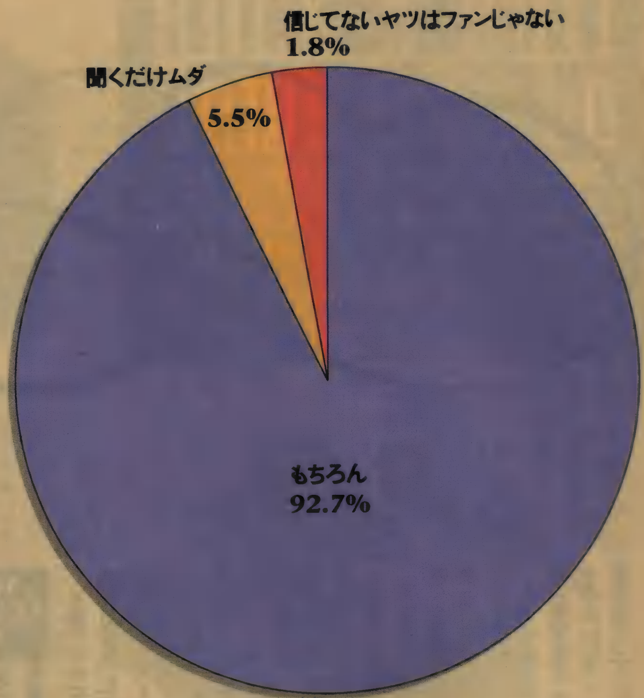
❷ その間はどういうふうに待つか

CDやビデオを聴きながら待つ	51.2%
雑誌や本を読みかえす	34.1%
TOSHIのオールナイトを聴いて	32.7%
X仲間とテンションをあげあう	19.5%
ひたすら信じてる	15.2%
お金をためる（復活にそなえて）	7.4%
Xの夢を見て待つ	5.2%
体をきたえる	4.7%
気合をいれて待つ	4.0%

◎その他の回答
手紙を書きつづける
他のバンドを聴いて自分を磨く
いつ帰ってきても受け入れる
ワクワクして待つ
自分らしく生きて待つ
がまんする
Xの絵を描いて待つ

この回答は複数回答です。Xを待つ間のすごし方。やはり順当なところで、XのCDやビデオを聴いたり見たりする人が圧倒的に多い。あと、情報チェックの為の雑誌や本、そしてTOSHIのオールナイトが票が高かったですね。復活にそなえて、準備する人も結構います。テンションをあげあう、お金をためる、体をきたえるetcです。恐るべし、Xファン。このままXの復活が長びけば、スーパーウーマンばっかりになったりして。

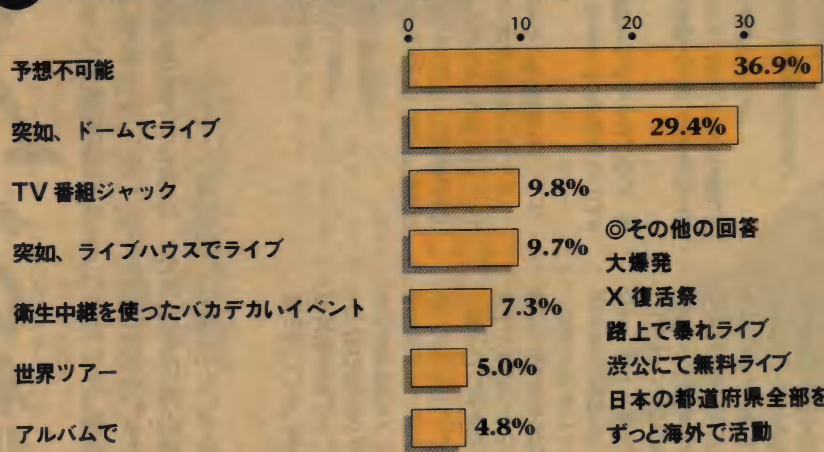
❸ あなたはXの復活を信じているか



YES 100%

これは聞くだけムダな質問だったかなと思いました。回答は、もちろん92,7%、聞くだけムダもちろんさが5,5%、信じてないヤツはファンじゃないが1,8%で全員がＸの復活を信じていました。半信半疑の人も何%かいるかな？　と思っていたんだけど、やはり恐るべしＸファン!!　そして、Ｘは大復活に向けて動き出している。この期待への答え方がＸのＸたるところなんだと思います。

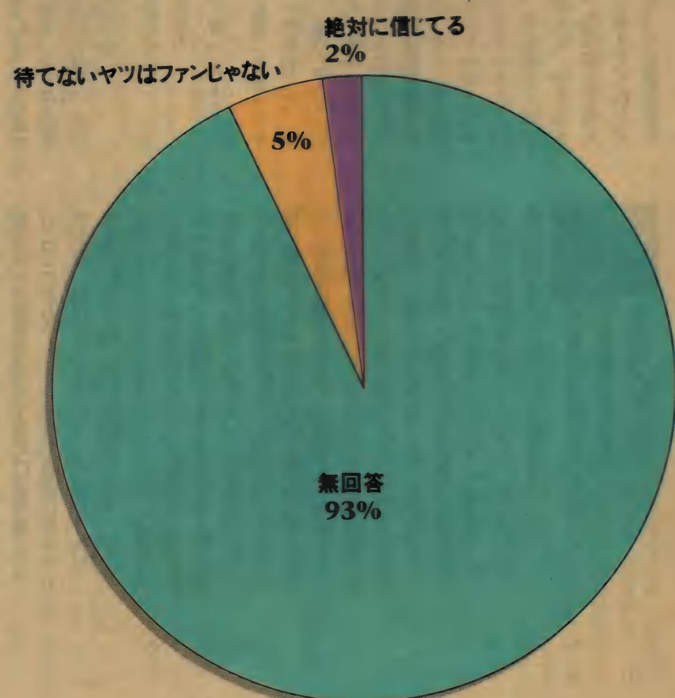
❹ 復活する方法を予想して下さい



◎その他の回答
大爆発
Ｘ復活祭
路上で暴れライブ
渋公にて無料ライブ
日本の都道府県全部をまわる
ずっと海外で活動

この質問は難しかったと思います。ＸのＸたる特長の一つとして、常に周囲の期待や予想を上まわる・いい意味で裏切るという点があげられると思います。そのあたりを考えての、予想不可能が36,9%と最も多かった。案外、低かったのがアルバムの4,8%、やはり音だけじゃなく、ライブやTVで動いているＸで復活を感じてみたいファンが多いようです。笑える答えが大爆発!!　そんなことしたら、死んじゃうってーの。でもやったりして……。

❺ 待てない人はその理由



100%

これも③と同じく、聞くだけムダな質問でした。待つ人が100%なんだから、待てない人がいないのは自明の理。ということで無回答が93%となりました。いや、しかし、恐るべきはＸファン。この意識調査に答えてくれた大多数の人がＸに命をかけています。Ｘによって世界が広がった人、変わった人、いろいろいると思いますが、これほどＸに生きがいを感じていたとは!!　あらためて驚きました。

X Special

WE WANT X

発表!!

Xへの想い!!

Xファン意識調査に送っていただいた〝現在のXに対する想い〟のレポートを発表します。7月後半から、刻一刻と状況は変化してきたので、このレポートを書き終えてから、気持ちに少しは変化もあるでしょうが、それがその時の素直な気持ちだったんですから、胸を張っていいことだと思います。レポート掲載者には賞品として図書券を送らせていただきます。どうも、ありがとう。

WE WANT X

X　FANって、『バカ』だと思う。

静岡県／堀田明子

X　FANって『バカ』だと思う。普通の人は好きになったバンドがずっと活動を休止していたら、とっくにFANをやめていると思う。でもX　FANはXを待っている。

Xのメンバーはテレビや雑誌では「必ず復活します」と、言っている。でもそんな保証はどこにもない。いつXが裏切るかわからないのに、ずっと待っている。

私が『バカ』の仲間入りをして2年以上たった。『バカ』は『バカ』なりに一生Xを信じ、追いかけていこうと思っている。

WE WANT X

Xのおかげで自分が見えてきたのだから……。

兵庫県／森恵子

本屋でパチロクの8月号を見たのはたぶん発売日当日。だけど手にした今日は7月21日。これを書いているのも同じ日。本屋でぱらぱらめくって見ていて、レポートを募集しているのを見て、なぜか書きたくなったのだ。

レポートを書くにあたって自分のXに対するテンションを上げたいと思った。『ジェラシー』をかけて、パチロク8月号の記事を読んでいた。はじめはBGMのつもりだったけど、そのうちヘッドホンにかえて、パチロクもいつのまにか閉じてしまった。

X以外の人が語ることよりXそのものがいい。今思うとそんな気持になったのかもしれない。今といってもほんの1時間くらい前のことなのだが。

ヨシキじゃないけど、私の中にも何人か違う人格が存在しているような気がする。今バカみたいにテンションが上がって汚ない字で書きなぐっている自分を見てる自分が同じ意識の中にいる。きっと今夜寝て起きたら、この文章を書いている自分は小さくなっていて、別の自分がこれを読んで思いきりけなしているのだろう。でもこういう自分もいるんだと分かってきて、何にも考えていなかった頃よりずいぶんすっきりした気分なのだ。何か霧みたいなものにあたりをおおわれていた頃から今はほとんど想像もつかない状態だと思う。そしてそれは全員本物の自分だとも。

私がこういうことを考えるようになったのはもちろんXに会ってからである。私が好きなアーチストはXだけではないのだが、自分についてこんなに考えさせてくれ、そして考えるきっかけをこんなに与えてくれる存在はいない。自分はいったいXのことを、ヨシキのことをどう思っているのか、それを考えながら書いていて今やっと答えらしいものが見えてきた。私はXに感謝している。Xのおかげで自分が見えてきたのだから。そして復活の日には、精いっぱい応えたいと思う。私にできるたったひとつのことだから。

WE WANT X

私はどんな事があろうとXについてゆきます。

神奈川県／P.N オタッキー3

去年の12月、Xの活動休止のことをラジオで聞いて、前の活動休止を一年も待って、やっと帰ってきてくれたのに、どうして!? と思い、本当にショックでした。唯一の救いがトシさんの放送するオールナイトニッポンでした。でもトシさんも、現在の活動状況をあまり教えてくれませんでした。どうして活動休止ばかりして悲しい思いばかりしなくちゃいけないの? でも、ファンをやめることは出来ません。Xは全てです。毎日毎日Xのビデオを見て、Xの事ばかり考えて、母ともXのことばかり話しています。他の事など考えられません。何故って、私に与えてくれたXの影響は、とても大きいから。Xの事を好きになって、Xのライブを見て、そのステージで、Xが見せてくれるもの、Xと同じ時を過した事が、私の活力となり、思い出が、心の支えとなるから。活動休止をするたびにXに対する気持ちが強くなって、早く会いたいと思う。Xは私達に寂しい思いをさせても、復活して、期待以上の事をやってくれるから、私はXのファンでいてよかったと思うんです。早くライブをやって欲しいです。Xと共にいられるだけで、同じ時間を共有出来るだけで幸せです。でも、もっと近くに行きたい。もっと近くでXのエネルギーを感じていたい。そんなに遠くに行かないで。私達の身近でいつでも身近に触れていられるXでいて欲しいです。私のメンバーの名前を叫ぶ声が、Xを想う気持ちが、ちゃんとメンバーにとどいているのかなと不安になります。それでも私はXが大好きです。それだけは本当です!

「ソロとしてXとして、活動を開始します」7月24日、Mステーションで、ヨシキさんが、そう言いました。赤い血の雨の中で、ピアノを弾くヨシキさんを見つめながら、Xを好きになりはじめた頃のこと、Xと分かち会った日々のこと、活動休止をしてからの7か月間のことを思い出しながら、ヨシキさんの「un-finihed」を聴きました。私はXがこんなに早く復活してくれるなんて思わなかったので、本当に驚きました。雑誌とかではなく、TVを通してヨシキさんの口から直接聞けたこと、そして、Xが復活してくれることをとても嬉しく思っています。Xが、新しいベーシストと共に、私達の前に現れてくれるのを楽しみにしています。そして、ライブで、再び私達に感動を与えてください。私はどんな事があろうとXについてゆきます。

WE WANT X

Xを見つめ続けることに一生を捧げるつもり

東京都／桜井美幸

私にとってX、そしてYOSHIKIは、正に、神様という表現が一番近いと思います。クリスチャンがイエス・キリストを崇拝し、その教えに一生を捧げるように、私はYOSHIKIを、またはXを、アーティストとして、ミュージシャンとして見つめ続けることに一生を捧げるつもりです。しかしその反面、一人ひとりの音楽家という人間として〝すごいなぁ、かっこいいなぁ〟と憧れている部分もあります。

少なくとも私は、Xを知ったことによってかなり自分の生きる道も変わったと思います。それまで私が歩いて来た、俗に言う、〝引かれたレール〟に少し疑問を持ちながらも毎日をやり過ごしていた私に、〝自分がやりたいことをすればいいんだよ〟とやさしく、そして時には厳しく語りかけてくれたのは、Xのライブであり、TOSHIの、HIDEの、PATAの、TAIJIの、そしてYOSHIKIの言葉や生き方そのものでした。

Xの曲を聴き、メンバーに興味を持ちだしてからの私は、何かとXに近ずきたくて、CD・VIDEO、単行本はもちろん、メンバーが感銘をうけたCD、映画、本など、夢中で視聴しました。そうして同じCDを聴き、同じ映像を見て、同じ本を目で感じることで、もちろん感じ方は違うとも、同じ体験をしたということで私は1歩でも（半歩かなぁ）心で近づけた様な気がするのです。ファンの中では、自宅に行ってしまったり、電話をかけたりする人がいるそうですが、私はそんなふうに物質的に近づくよりも、（たぶんメンバーが私の存在を知ることは天地が逆さになっても無い事だと思います）しかしこうして、同じ体験をしている、心で同じ事を感じていると思える方が私は幸せです。

数か月前、某雑誌の投稿欄にXのファンの便りとしてこのような文が掲載されていました。〝私はXのファンを最近やめました。コンサートが中止になったり、延期になったり。いいかげんにしてほしい…〟私はこの元ファンの人に対して怒りとも悲しみとも違う感情を覚えました。まず、〝ファンになる〟ということは自分の意志でやめたり、なったり、コントロールのできる事自体、なんだか違うと思うのです。それは人それぞれ違う感じ方や受け止め方をしているのはわかりますが、たぶん彼女は、もし彼女が行くことになっていたコンサートの次の日でコンサート中止が決まり、彼女はギリギリコンサートを見ることが出来ていたら、ファンを続けていたと思うのです。YOSHIKIが倒れてしまった事というより、そのことによって自分がお金を払って、時間を空けたコンサートが中止になり見ることが出来なかったことのいらだちと落胆がXに向かってしまったのだと思います。しかし疲れ果て、立ち上がることすら出来ないのに、行かなきゃ、とうわごとのようにささやいたYOSHIKIに拍手以外の何を送る気になるのでしょうか。

これからXが日本や海外で、どんな過激なショーを見せてくれるか、どれほど心に突き刺さる曲を表現してくれるか、私たちファンとしては手招き状態で待っているしかないでしょう。私たちの心や体をここまで快楽で満たしてくれるアーティスト達に私たちが出来ることといえば、彼らが楽器や曲、そしてXを、ファンを愛しているように、私たちもそれらすべてを、そしてそれらを愛している自分を大切に愛し、走り続けることのみではないでしょうか。

WE WANT X

今こそ本当の力を見せてくれ!!
信じているから

三重県／谷口玲子

はっきり言って今までにない苦境に追い込まれていると思う。

確かに彼らは今日まで無謀と思われることをやり遂げ、いくつもの困難に打ち勝ってきた。渋公で最初にヨシキが倒れてからロスでのレコーディングを終えて帰ってくるまで、その持てるパワーと知恵と勇気で彼らは、いくつもの困難に打ち勝って来た。その度に我々ファンは哀しみ、喜び、一喜一憂したものだ。そう、彼らは苦境によってファンを魅了してきたとも言える。もちろん本人の望むところではないと思うが。その度に〝戦略ヨシキ〟が磨かれたと言っても過言ではない。

が、しかしだ。今回は違う。今まで壊してきた、打ち勝って来た壁というのは主にモラルや体制といった外にある壁に対して、だった。（大きな流れで見ると、）だが今回はメンバー不在という理由で活動出来ないという、内にある壁だ。もちろん今までに何度もメンバーチェンジはあった。街を歩けば元Xに当たる、とまで本人達が言っていたくらいに、過去Xはメンバーチェンジが多かったが、あの時とは明らかに違う。動ける状態であって動けない状態に彼らは追い込まれてしまった。

時が経てば状況も変わる。もう彼らは戦略の為に家具や衣服を売らなくてもいい。半年以上もレコーディングの為に日本を留守にすることも許される。より良い音楽を作ることと引き換えに。それはすべて彼らが、いろんな状況に妥協を許さず行動してきた結果でもある。いろんな壁を、彼らの言葉を借りれば、ぶっ壊して来た結果でもある。運命共同体を横にその壁と戦って来ただけに、今回のタイジ脱退は痛い。

アルバム『ジェラシー』が、ヨシキ色に染まらずいろんな方向性を見せたのもタイジの影響が大きい。その音楽性を失ってしまうのはやはり痛手だ。しかし、私はタイジの脱退を知った時、残念に思う心とは又別のところでXだと思った。あまりにもXらしくて涙が出た。誤解のないように言っておくが、私は別にタイジの脱退を望んだ訳ではない。最初はやっぱり納得がいかなかった。私だって思いは沢山ある。だけどここでそれを蒸し返しても始まらない。それにもう、今となっては言うべきことは何もない。タイジは確実に新しい道を歩いている。これからも今まで以上に活躍してほしいと思うし、素直に応援したい。だけど私はそれ以上にXの復活を願っている。一日も早くシーンへ戻って来る事を願っている。

問題はタイジの事だけではない。レコード会社の期限切れやその他諸々———————。

彼らは昔こう言った。Xの前には道はない、と。確かにそれは言えるかもしれない。無機質、無感動や宗教などが流行る中、彼らのような何か、生き急いでる人間には風当たりが強い世の中かもしれない。だけど彼らはこうも言った。前に道がなければ自分たちで作る、と。私は信じた。彼らを信じた。やっとこの熱い魂が震える瞬間に出逢ったのだ。この感覚を忘れることはもう出来ない。堕ちるところまで堕ちよう。すべてを見届けよう。すべてを受け止めよう。私はもう、あの音でしか満足できないんだ。嘘じゃない……。

願わくは、一日も早いXのシーンへの復活を。願わくは、永遠にも似た彼らの魂の生きれる場所があることを…走れX！　止まるなX！　そして今こそ本当の力を見せてくれ！

……信じているから……

WE WANT X

Xが大きく動き始めている。
そして私たちも共に……。

大阪府／長澤祐喜子

Xが動き始める。彼らが活動休止をして、半年以上が過ぎた7月24日、MステでのYOSHIKI本人からの重大声明だった。

私はパチロクに送る原稿をすでに書き終えていたけれど、興奮さめぬままもう一度書き直すことにした。

彼らは活動休止中、私たちの知らない、私たちの踏み入ることのできないさまざまな現実的問題に直面し、一つ一つと戦っていた。

事務所問題、レコード会社問題、海外進出問題、そしてメンバー問題。

どれを取っても、私たちにはどうすることもできない問題ばかりで、ただこの半年間、彼らを信じて、ひたすら待つことしかできなかった。少しでも、彼らの力になりたい。毎日それはかり考えていた。

CDを聞いて、ビデオを見たりしていても、時々涙が溢れた。彼らの作る曲が大好きで、彼らの生き方、感じ方、考え方、彼ら自身が大好きで、いとおしくて……。

この半年間は彼らにとっても私たちにとっても、決して無駄ではなかったと思う。

私たちは改めて、彼らの存在の大きさを確認できたのと同時に、彼らを信じて待っていて本当によかったと、今心からそう思うことができる。そして、彼らにとってもこの半年間は、これから大きくステップするための基盤として〝意味ある時間(とき)〟だったと思う。

これから彼らは、より一層大きくなるだろう。まずその一つはソロ活動。私は、いいことだと思う。X、というバンドでここまでやってきて、認められるようになりメンバー1人1人が自分の可能性を追求してみたくなるのは当然のことだと私は思うからだ。メンバーのソロ活動=バンド解散などという考えは持ちたくない。

そして、もう一つは海外進出だ。正直言うとやっぱりさみしいというか彼らがどんどん遠く離れてゆく不安というものがある。けれどこれは、私がまだ子供的な考え方だからかもしれない。一歩引いて客観的に考えてみると私たちが夢を追うように、彼らも海外進出が大きな夢の一つだと思う。誰もが夢を叶えたい、それは彼らも同じだ。そんな走り続ける彼らに私たちも置いていかれてはいけない。歩いてる余裕などない。ころんでる場合じゃない。そ〜んなどこまでも走り続ける彼らは、まだUNFINISHEDなんだろうか…？そう、人間は生き続ける限り終わりはないのだから…。

人は、一生のうち、いったい何人の人間と出会い別れてゆくのだろうか。私は人との出会いを大切に思う。彼らと出会えて、そして彼らの作り出すすばらしい音楽たちと出会えて本当によかったと思う。この気持ちを、一体どれだけの人々が持っているのであろうか。今、Xが大きく動き始めている……、そして私たちも共に……。

BY-SEXUAL 55



シングル"Deep Kiss"に続き，アルバム「4 D POCKET」である。この4 Dとは3 Dの上の次元にあるミステリアスなものなのだそう。しかし，彼らはPOCKETという単語を組み合わせることによって，ドラえもんのポケット的な解釈をしているところが，おもしろい。今回のインタヴューはメンバーひとりずつによる彼らの"4 D"話。この世は目に見えているものだけで成り立っているわけじゃないんだよね。

BUCK-TICK 66



殺シノ調べツアー終了後，パタッと情報が途絶えていたB-T(まあ，要するに休暇をとってたわけで……なんかアチコチの飲み屋で偶然会ったりもしたわけで……ノンビリしているというよりはヒマそうだったりしたわけで……)ですが，ご存知の通り9月10日，11日と横浜アリーナでのスペシャル・ライブを行ないました。パチ・ロクとしちゃあ誌面でお伝えせずにはおれんので，まあ読んでください。最新情報&オマケ付きでお届けしますんで。

JUN SKY WALKER(S) 59



ジュンスカのニュー・シングル，遂に発表!! なんだかスゴイことになってるようなのだ!!

LADIES ROOM 43



シングル「READY TO KISS」のリリースと，ツアーを目前に控えたLADIES ROOM。メンバーの中から，代表してNAOとGEORGEが直前の心境を語ってくれた。

OPENING SPECIAL 4

X



◆8.24 X・ニューヨークにて，全世界進出発表・記者会見!!

◆どうでるX!! 第2弾!! 今後のXの動きは!?

◆ファン意識調査結果報告!!

遂にXが新ベーシストHEATHをむかえたうえで，ニューヨークはロックフェラーセンターにおいて，全世界進出を発表する記者会見を行った!! 8月24日に行なわれた，この記者会見を，速報でお届けします。新メンバー，HEATHとは!? 今後の活動予定は!? 全世界に向けて発信された，Xからのメッセージは!?
そして，11月にリリースされる東京DOMEのライブビデオ等，先月のYOSHIKIの記者会見以来，急に動きを見せてきたXの周辺情報を整理して，今後のXを予想する「どうでるX第2弾!!」。そして，パチロク8月号で募集した「Xファン意識調査」の結果報告!! とりあえず，ファンの皆様もほっとしたでしょうが，まだまだ待たなきゃいけなそうな気もしないではありません。

LUNA SEA 39



またまた難題インタビューを試みてみました。2号にわたり彼らを悩ますテーマは"美学"。このテーマに対して今回答えてくれるのは，ギターのSUGIZOとベースのJ。一見すると，対照的に見える2人が，どういった答えを出してくれるのか必見。また，今月はピンナップもついている。10月1日・渋公，10月24日・野音のチケットはもちろんソールド・アウト。本当に勢いづいている彼らだけに，話す言葉にもその勢いが感じられた。

すかんち 47

BOY'S BE AMBITIOUS Vol. 2

ZI:KILL 76

バラエティに富んだアルバムをKENが語る。

SHÄKE 50

シャケ・ストーリ第2弾／過去のバンド遍歴

UNICORN 63

5連発シングルを締めくくる男，手島いさむ。

Z BACK 52

セカンド・アルバム『二枚目』，絶賛発売中。

ORIGINAL ROCK'N'ROLL 103

ZIGGY／ラブ・ミサイル／Fishmans／東京パノラママンボボーイズ／山下久美子／ZELDA／G.D.FLICKERS／テレビアス／XEOレーベル／ダイアモンド・ユカイ／Bonnie Duck!?&SOY SOUCE SONIX／DOG FIGHT／M-age。その他にも，THE BOOM，忌野清志郎など，情報満載！

林 アキオ 84

よくわかる林アキオ。シリーズ連載の前編だ。

DIE IN CRIES 88

『NODE』の変化についてKYOに聞く。

LETTERS+COLUMN GO GO PARADISE 111

"秋探し 隣は何をする人ぞ"……隣の人はまたもや…（Peepin'Insideを見てね）

WILD FLAG 90

早くも，セカンド・アルバムのリリースだ！

PRESENTS 118

BRAIN DRIVE 81



おいコラ!! 笑ってる場合じゃないのだ。デビュー・アルバム『完全驚異』を解明すべく，爆笑直前の自虐パーソナル・インタビューを敢行だ。死ぬか笑うか…キミたちに残された道はこの2つのみなのだ。

THE BLANKEY JET CITY 73

超強力なライブ・アルバムをリリースするBJC。タイトルはそのままズバリ「LIVE」！ うーむ，なんのヒネリもない，なんて言ってくれるな。ストレートな感情ムキ出しの3人には，これは相応しいじゃないですか。来年リリースの新譜の話も，合わせて載ってるよ。

布袋寅泰 100

日本最強のロックンロール・バンドの登場だ。

SOFT BALLET 95



お待たせしました。ソフトバの移籍第1弾は「Million Mirrors」。"バカめ"と思いつつ作られたサウンドはどんなものになると思いきや……意外な展開……。しかし，ポップであろうとなかろうと，ソフトバの世界であることには変わりはない。今回，パチロクでは初の試みであるライター2名+ファン1名によるアルバム討論会を実行，三者三様の意見による激論が続く中，あくまでも冷静な彼らなのであった。



MONTHLY パチ・パチ・ロックンロール

PATi-PATi ROCK'N'ROLL

11

NOV.1992
VOL.65

第6巻第12号1992年11月1日発行
編集人：吾郷輝樹　発行所：ソニー・マガジンズ
〒102東京都千代田区五番町6-2 TEL 03-3234-7906（編集）
印刷：大日本印刷株式会社

EDITORS **Teruki Ago, Takashi Haga, Hideki Hayashi**
Miho Shimizu, Junko Hirahara, Miho Takeuchi, Rie Ohba
Kikuji Hirota, Mizuho Chiba
ART DIRECTIOR **Jin Ogawa**
DESIGN **Jin Ogawa, Masaru Yamachika** for ACCA International Ltd.
DESIGN ASSISTANT **Chieko Sasaki**

Contents





TOSHI

HIGHER THAN HEAVEN

Photography **Hitoshi Iwakiri** Text **Yusuke Kato**
Hair & Makeup **Kazuyuki Nakajima** Styling **Koichi Sakayori**

先月号で報告したように，TOSHI のソロ・プロジェクトは着実に進んでいた。まずは，ソロ・シングル「made in HEAVEN」が10月21日にリリースされる。シングルに続いて，アルバムも早ければ11月に，遅くとも年内にはリリースを予定しているという。この TOSHI のソロ・プロジェクトの全貌やいかに!? シングル「made in HEAVEN」をメインに，TOSHI 本人に語ってもらおう!! X 関連の音源としては，DOME 3DAYS 以降初めてのモノとなるだけに，単なるソロとしての意味以上のものが感じられる。アルバムについては来月，報告できることだろう!!





ソロ・シングル
Made in HEAVENを訊く!!

昔から〝バンドとは違う世界で独りで勝手に作ってみたいな〟っていう願望は夢のひとつの中に入ってたから。〝やれるんだったらやっちゃおう〟と。

「Made in HEAVEN」。

これがTOSHIのソロ第一弾シングルのタイトルである。信じられるだろうか? あのXの、あのTOSHIのソロシングルなのである。サウンドはといえば、強烈なキャラクターを全面に押し出したXからは想像もつかなかったソフト&メロウ路線、まさに〝歌もの〟と呼べる楽曲に仕上がっている。

ついに大復活への秒読み段階に入ったとはいえまだその雄姿を我々の前に見せてくれるまでにかなりの時間を要するX。その沈黙の間に出される唯一のX関連の音源という性格をも持ち合わせているTOSHIのソロシングル。それがなんと〝天国〟をタイトルに冠しているのだ。

年内にはアルバムも発表されるということで、ソロのTOSHIが何を考えどこに行こうとしているのかはそのとき明らかになるはずだ。今回はシングルを手掛かりにソロ活動を始めるに至った心境の変化を聞いてみた。

――まずはソロ活動を始めようと思った動機から聞きたいんだけど。

「昔から『バンドとは違う世界で独りで勝手に作ってみたいな』っていう願望は夢のひとつの中に入ってたから。まぁ全然具体的じゃなかったんだけどね、デビュー当時『いつかは東京ドームでやってみたいな』って夢のような話をしてるのと一緒のような感覚で」

――時期的にこの時期を選んだのは。

「今回たまたまXの休止期間ていうのがあって――水面下では動いてたんだけども――その間にメンバー全員個人活動を、僕だったらラジオのDJとかいろんな人とセッションしたりとかいろいろやってて、その中で他人の歌を歌うことが多くて『あ、やっぱりこういうのもいいな』と思って。『俺の音楽のルーツがここにもあるな』って思い返したりして」

――ちょっとXから離れたかったとか?

「別に離れたいっていうことはないんだけど、Xの方はいろんな契約上の問題で表立った活動が出来ない状況だったから、そんな中でやっぱり歌いたい衝動もあるし――休みたい衝動もあるんだけど、(笑)――ここでやっとかないとXの海外進出もあるし、その前にひとつのけじめっていうのかな? 『やりたいことをやっちゃえるんだったらやっちゃおう』っていう感じなんだけどね。ここでやらないとないからね、ホントに。海外行っちゃったりしたらソロなんていってる余裕はないからね。Xの余った時間でっていうのが大前提なんで、これから先余りそうもないから(笑)」

――そこにはXが次の音源を出したりライブをするまでの場つなぎ的な意味合いもあったりするのかな?

「そうね、いろいろメンバーがソロでやってるけども音源自体は最近はずーっと出てないわけで、そういう意味ではTOSHIっていう名前が出ればXっていう名前も出るわけだから『まだまだX健在だな』っていう。まぁ今後のXに繋げる魂胆もあったよね」

――戦略YOSHIKIならぬ戦略TOSHIがいると(笑)?

「まぁある意味では。(笑)別に決してマイナスなことじゃないから、自分の成長に繋がるしひいてはそれがXの成長にも繋がるしね」

――X本体としてはYOSHIKIのソロやHIDEの写真集とかと同列であると?

「そうだね。だからそれぞれソロ活動っていうのはXの時間を取らなければ自由にやって行こうっていう決まりごとがウチにはあるんで、そういう意味ではみんな同じレベルだよ。僕のラジオにしてもそうだしHIDEの写真集にしてもそうだしYOSHIKIの写真集にしてもそうだし、その中の一環。ただ、でも、音源というと意味合いが重くなってくるからね。そういう意味では自分なりのプレッシャーとか不安もあったし、例えば『こんな歌詞でいいのかなぁ?』とか。今までのXにはないイメージの言葉使いだとかメロディーだとか楽曲の雰囲気だとかが出て来るわけで





〝じゃ、なんでXは作り込んでソロは自然体なの?〟って聞かれると困っちゃうんだけど、(笑)両方とも好きなわけよ。多重人格なだけで。(笑)

あって——当然それをやるためにやってるんだけど——やっぱりいざ歌ってみると、初めてじゃない? いわゆるXとしては避けて来た表現とかありえない表現を自分で歌ってみるとなんか照れくさくてね。(笑) だから最初スタッフに『俺がこんな言葉歌ってておかしくない?』とか聞いて回ってた(笑)」

——そのXとの違いは具体的には?

「イメージ的にはXでは出来なさそうな物で自分のやりたい物っていう。すごくソフトな感じだったりメローな曲だったり、そういう感覚。Xで出来ることはXで出来るわけだから、今のところXでは可能性がなさそうで自分がずっとやりたかったことって感じかな」

——ということはソロのTOSHIの方が普段のTOSHIに近いわけじゃない? とすると、Xのファンにしてみれば〝XのTOSHIはウソつきだ!〟ってことにならない?

「ああ~そう思われちゃったらどうしようかねぇ(笑)。でもほら、やっぱり俺はX10年やってるわけでさ、嫌いなこと10年やれるわけなんてないじゃない、俺の性格だと。(笑) それはもう、どう思われるかわかんないけど、どの俺も俺だからさ。だってみんな多重目的人間ていうかさ、絶対にいろんなことしたいわけだよね。どんな人でもいろんな顔持っていろんな夢があったりさ、出来ればいろんなこと出来た方が楽しいもんね、生きてて。だからそれが出来るっていうことの方に単純に嬉しさを感じるんだよね、Xも出来て、あんなヘタクソなフォークギターも人前で弾けて。(笑) そういうことが出来てしまう自分というのがいいなぁって思う。だから誤解する人もいるかもしれないけど、全部俺なんだよって。それにXっていう土台がちゃんとしてるからその上でこういろいろ出来るわけだからね。じゃなきゃこんなにイメージ・ギャップがあるのにラジオでバカなことといったりフォークギター持って人前で歌うことなんか出来ないもん(笑)。4年前だったら出来ないもん。それはXっていうものにある程度自信が出て来たから『じゃあこの可能性も試してみようか』って。今いったような怖れが段々なくなって来たからね」

——で、実際に上がった音は非常にソフトというかポップス系のサウンドなんですが。

「自分にとってはいわゆるポップスとか歌ものとか、聴かせる歌っていうのをやりたかったというか、まぁ曲集めたら自然とそうなっちゃったっていう感じなんだけどね。すごく自然にやりたかったの、自分が楽曲作ったとしてもいつも鼻唄で歌ってしまうような、手癖でピアノで弾いてしまうような、どこかで聴いたようなメロディーだけどノッちゃうみたいな。そういう、素直にあんまり考え込まないで、そんなイメージの曲を作りたかったから、あんまり思い悩んで作るんじゃなくて自然にフッと沸いたものでいいからそういう感覚を大事にしたかったからね」

——そういうあまり考え込まないで自然に出た物を素直に歌うっていうのがもしかしたらTOSHIの理想のボーカリスト像なんじゃないの?

「それはわかんないんだけど『そのやり方もありかな?』と思って、もちろん考え込んで作ったりイメージづけして作ったり、その作り上げっていう物はそれはそれですごく大事なことだと思う。ただそっちはXでやってるし、逆にナチュラルな自分というのをソロで出そうと思ったの。そこで『じゃあなんでXは作り込んでソロは自然体なの?』って聞かれると困っちゃうんだけど、(笑) それは両方とも好きなわけよ。ただ単にそういう多重人格なだけで。(笑) イメージの世界で作った自分を第三者的に立ててその中で自分を投影してって表現者になりたいっていうのがXのTOSHIだよね。ソロの自然の自分というのを説明すると、ありのまま? 鼻唄じゃないけど聴いてて心地いいとか歌ってて心地いいとかそんな感じだよね。そこに違いはあるけれど同一人物っていうか何も矛盾はないっていうか、自分の中では。だから女の人がお化粧するのと同じ感覚かな? お化粧して自分を飾って出掛けても、それは自分は自分で何も変わんないわけで」

——あとさ、Xだってポピュラーといえば大ポピュラーだよね、100万枚も売れてるわけだからさ。そのXのポピュラーとソロでのポピュラーとは違う物なのかな?

「そういう意味では同じなんじゃないかな。知名度があったりいかに浸透してるかいかに売れてるか、そういう意味では同じだと思うんだけど、攻め方? プロセスが違うんじゃないかな? 100万枚売るってすごいことだもんね。(笑) 自分のが100万枚売れちゃったらもうすごいね(笑)」

——もしXより売れちゃったらどうする?

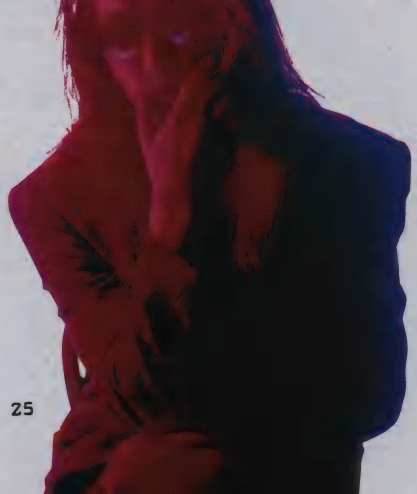
「もし売れちゃったらねぇ。(笑)どうしようかなぁ? 1本立ちしますか(笑)」

——そういう意味ではXでは獲得出来なかったファンにもアピールしようっていう意図もあるのかな?

「うん、だから、いっちゃえばXだって広いんだけどまだイメージ的偏見だとかそういうのがあると思うんだよね。そういう意味ではまた違ったまだ全然振り向いてくれてないような世代まで巻き込めたらなっていうのはあるね。例えばテープが売れたりするじゃない、売れてる人って。ああいうイメージ。だからホントはXより売れちゃうことだってありえるわけなんだよね、ホントはね(笑)」

——自信満々だね。(笑)

「いやいやいや。(笑) なぜかっていうと、その未知な部分? 今までの100万枚売れるパワーが全部あったとしたらね、100万枚プラス、上の世代なり横の広がりなりもっと広がるわけじゃない? だから、本当はすごいんだよ、本当だったら。(笑) という考え方もあるけど、実際はそう上手く行かないからね(笑)」




TOSHI
HIGHER THAN HEAVEN



ALL THAT TOSHI

ソロの動きのなかで，X では出していなかった TOSHI の自然体がみとめられる!!
さて，この TOSHI の多重的な魅力――ボーカリスト，X のフロントマン，大和魂あふれる日本人，そして地に足の着いたユーモア感覚――について，本人自身に語ってもらった。
これは，TOSHI 本人の語る TOSHI の実像である!!



ALL THAT T TOSHI

ボーカリストとしての俺

（子供の頃から）ハイトーンで、あとは歌が好きっていうのが相まって自然とボーカリストTOSHIっていうのが形成されてったんだけどね。

ボーカルを始めたきっかけ？　それは随分ロング・タイム・ア・ゴーなことになりますねぇ。（笑）基本的にウチは音楽的な家庭だったんで、オフクロがピアノの先生だったりオヤジが歌の上手い人だったりしたから常にピアノが鳴っていたみたいな。だから覚えちゃったわけよ、曲を。バイエルとか、譜面は読めないんだけど弾けるわけ。ドとかレとかわからないんだけど感覚で弾いちゃうみたいな。だから音楽的には恵まれた環境だったんだけど、一番最初に歌ったっていうのは、童謡の歌集みたいなの見ながら歌ってカセットに吹き込んで。当時オープンリールのこんなでかいヤツを買ったわけよ、昭和43年ぐらいに。（笑）それで珍しいからいろいろ吹き込むじゃない？　その中に俺のすっごい小さい頃の俺の歌が入ってたの。それが初めて人前で歌った歌なの。人前っていうか最初の録音物ね。（笑）未だにそれとってあるんだけど、上手いんだよ。（笑）それでしかもすごいのは、詰まったりするとオフクロが横で一緒に歌ってくれそうになるの。で、歌うと「歌わなくてもいいよ！」っていってるんだよね。（笑）自己主張が強いんだよね、その当時から。（笑）すでにリードボーカルとしての資質をかいま見た、みたいな。（笑）

あとは音楽的には兄貴が二人いるっていうことでさ。しかも上の兄貴が日本の歌謡曲とかフォークとか好きで聴いてて、下の兄貴が洋楽でビートルズとか聴いてて。だから小さい頃から両方がいつでも流れてるみたいな。で、片方ではクラシックのピアノが流れてるみたいな。だからその頃にバンバン吸収したんじゃないかなぁ。その時点でも今の音楽性が決定されてしまったっていうかね。（笑）

で、やっぱり最初はカセットに合わせてとかレコードに合わせて歌ってたんだけど、兄貴がギター弾きながら歌ってるのとか見て「やっぱ早くああなりたいな」と思って、自分の伴奏で歌えるようになりたくて楽器を手にしたんだよね。だから小学校4年ぐらいかな、ピアノ習い始めたんだけど、それもクラシックを習うんじゃなくて歌うためのピアノ？　自分で伴奏して歌いたくてすべてが始まったみたいな。だからやっぱり歌が先行なんだよね。歌を歌いたい道具として楽器が欲しいっていう、そういう感じで練習してたんだよね。だから小学校のときから何も上達してないんだもん、楽器。（笑）

そうしてるうちに中学ぐらいになって人前で歌いたい、自分で曲を作りたいみたいな欲求が出て来て、フォークギターでフォークソング作ったり、片方ではエレキギター持ってロックンロールやったり。その当時から両方だったんだよね。

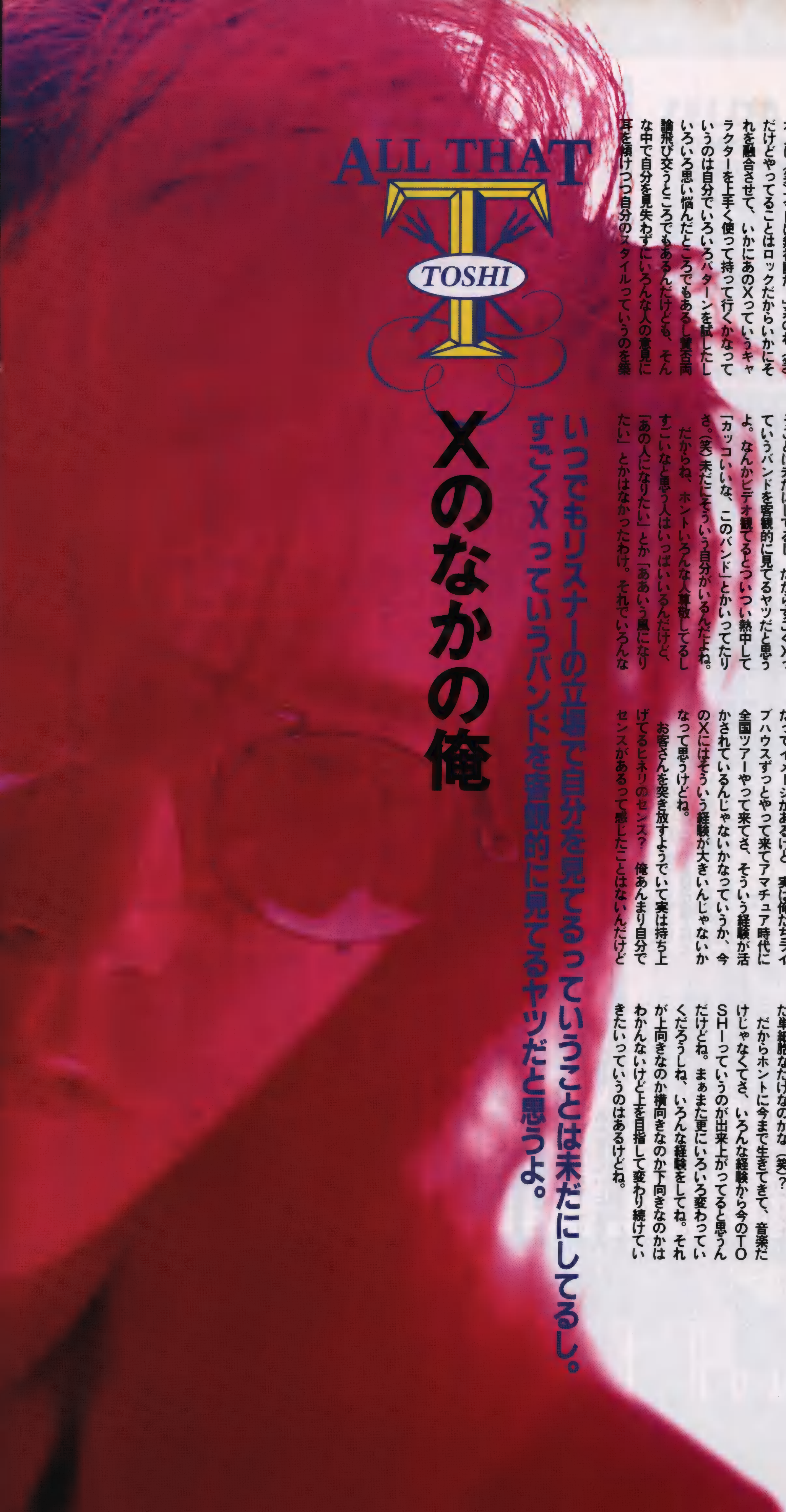
それで中学からバンドをやるようになっていわゆるバンドのボーカルとして人前で歌うようになったんだよね。

でも俺、最初はバンドにギタリストとして入ったの。で、ボーカルが学校が変わっちゃったんで俺が歌ってみたわけよ。そしたら上手いわけ。上手いっていうかやたらハイトーンで。例えば何か曲をコピーしても前のボーカルはオクターブ下で歌ってたのに俺は同じキーで歌えちゃうのよ、もうツェッペリンだろうがロブ・ハルフォードだろうが（笑）。そんな感じで、もちろん子供みたいな声だけどハイトーンで、あとは歌が好きっていうのが相まって自然とボーカリストTOSHIっていうのが形成されてったんだけどね。

うん、だから今回のソロでも全然違和感ないんだよね、Xとは全然違う路線の曲でもね。元々自分の中にあるものだからね。

XのTOSHIじゃなくてソロボーカリストとしての武器？　あんまりたいした武器持ってないんだけど。（笑）とりあえずそのときに感じたままにやりたいっていうことぐらいで、これを特徴にしてっていうのはないけど、ただ歌が好きっていう気持ちとか音楽聴いて心地良いっていうことを表現できればそれでいいかなっていう感じかな？　Xが心地良くないっていうわけじゃないよ。（笑）Xをやったときの達成感っていうのは至上の喜びだからさ。あれはもう追い詰めてテンション上げて、自分を苦しめるわけじゃないけどそういう追い詰め方？　でもソロは自分を解放してテンション高めてくっていう感じだからね。もう「気持ちよければいいや」みたいなレベルっていうかさ、どう伝わるかは俺にもわかんないんだけどそれを俺が受け入れてみんなも受け入れて耳に残ってくれたらそれでOKみたいな。Xはそうはいかないからね、受け入れる前に考えちゃうみたいな。（笑）考えてもやれないことはやれない、でもやらなきゃいけない、みたいなね。（笑）

でもね、結局行き着こうとしてるところっていうのは同じ場所かもしれないんだけどね、攻め方が違うだけで。そういう風に聴こえないかもしれないけど。（笑）



ALL THAT T

TOSHI

Xのなかの俺

いつでもリスナーの立場で自分を見てるっていうことは未だにしてるし。すごくXっていうバンドを客観的に見てるヤツだと思うよ。

Xと俺っていうことでは象徴的なのはやっぱりMCかな？　XではMCっていうのはすごく重要で非常に俺も悩んで来たところでさ。まず根底に流れるのは、今までのロックの人たちのMCは大嫌いだっていうこと。「ハロー・トキオ！」系は逆背筋が寒くなっちゃう、みたいな。(笑) だってアメリカ人がいう「パーティーしようぜ！」と日本人がいう「パーティーしようぜ！」じゃさ、だいたいパーティーする土壌がないのに「パーティーしようぜ！」はないだろう？　っていうのがあるわけよ。だから俺がもしステージに立ったらああいう風にはしたくないなってずっと思ってたわけ。どっちかっていうとパーティーよりも「宴会しようぜ！」っていう。(笑) 宴会の一瞬芸とかね、そっちの方だと思うな、日本人は。(笑)「今日は無礼講だ！」系のね。(笑) だけどやってることはロックだからいかにそれを融合させて、いかにあのXっていうキャラクターを上手く使って持って行くかなっていうのは自分でいろいろパターンを試したしいろいろ思い悩んだところでもあるし賛否両論飛び交うところでもあるんだけども、そんな中で自分を見失わずにいろんな人の意見に耳を傾けつつ自分のスタイルっていうのを築き上げて来たつもりだけどね。だからただ本当に自分が客観的にファンになれるボーカリストになりたいなっていうかさ。それには自分に嘘をつきたくないし自分がいいと思うボーカリストでありたいっていう。「こんなこといわれたらゾクゾクしちゃう」「こんな風にいわれたらドーッ！　てなっちゃう」みたいなさ、元々俺もファンだったからさ、音楽ファンでコンサート観に行ってそこで感動していろんな思いを味わって来て、それをたまたまXっていうものがあった場合・TOSHIっていうボーカリストがいた場合、俺が観てたらどんなことをいわれたらイッちゃうかな？　みたいなさ、そんなところから全部発想が生まれてるんだよね。だからいつでもリスナーの立場で自分を見てるっていうことは未だにしてるし。だからすごくXっていうバンドを客観的に見てるヤツだと思うよ。なんかビデオ観てるとついつい熱中して「カッコいいな、このバンド」とかいってたりさ。(笑) 未だにそういう自分がいるんだよね。

だからね、ホントいろんな人尊敬してるしすごいなと思う人はいっぱいいるんだけど、「あの人になりたい」とか「ああいう風になりたい」とかはなかったわけ。それでいろんな人のいいところも悪いところも見えたし、それを総合したりあるいは自分なりの資質ってものをプラスαしてTOSHIっていうボーカリストを作り上げて来たと思うんだよね。

ホントそこにはいろんな意見があったし、いろいろ叩かれたりしてやっぱり思い悩みましたよ、これでいいのかどうかすごく不安になったときもあったし。でもやっぱりお客さんが喜んでる姿が一番の答えだなと思った。

そりゃ失敗はあったよ、ライブハウス時代から数限りなく。落ち込んでね、言葉ひとつですべてをダメにしちゃったっていうときもあったし。だからそれは「俺たちライブハウスやって来て良かったな」っていうかさ、「俺たちライブバンドで良かったな」っていうさ。けっこう世間ではXってパーッ！　と出て来たってイメージがあるけど、実は俺たちライブハウスずっとやって来てアマチュア時代に全国ツアーやって来てさ、そういう経験が活かされているんじゃないかなっていうか、今のXにはそういう経験が大きいんじゃないかなって思うけどね。

お客さんを突き放すようでいて実は持ち上げてるヒネリのセンス？　俺あんまり自分でセンスがあるって感じたことはないんだけどさ。(笑) なんか俺ってセンスっていう言葉が一番似合わない男かなって。(笑) だけど本当に自分がいいなって思うっていうか自分でもニンマリ出来るっていう、そういうところを大事にして来たっていうのはあるけどね。例えばキッスのポール・スタンレーとかジーン・シモンズのMCでもけっこうユーモアが効いてるのよ。そういうのも参考になってるのかもしれないけどね。まぁユーモアが効いてるといっても俺ほどまでお客さんを突き放さないけどね。(笑) でも突き放されると「この野郎！」っていう気になるじゃない。(笑) それはまぁ俺が体育会系だったからかもしれないけどね、なんか監督に突き放されれば突き放されるほど「よーし、今に見てろ！」っていうさ。(笑) 単純なのかな、俺(笑)？　ただ単細胞なだけなのかな(笑)？

だからホントに今まで生きてきて、音楽だけじゃなくてさ、いろんな経験から今のTOSHIっていうのが出来上がってると思うんだけどね。まぁまた更にいろいろ変わっていくだろうしね、いろんな経験をしてね。それが上向きなのか横向きなのか下向きなのかはわかんないけど上を目指して変わり続けていきたいっていうのはあるけどね。

ALL THAT T
TOSHI

日本人としての俺

自分の生まれた所だし、やっぱりプライドを持って生きないとさ。それに日本語をしゃべれるっていうのはすごいことなんですよ、これは!



洋楽コンプレックス? あんまりない、ボーカリストのインタビューでもいった通りもう物心ついたときからクラシックは流れてたし、兄貴の影響でドメスティックな歌謡曲とかフォークとか聴いてたし洋楽ももちろん聴いてたから。だから、日本がいいよね。(笑) 日本は好きよ。(笑) だって、やっぱ祖国は愛さなきゃ。(笑) そんな激動の中で俺ら生きてないけどさ、でも自分の生まれた所だし、やっぱりプライドを持って生きないとさ。それに日本語をしゃべれるっていうのはすごいことなんですよ、これは! 英語しゃべれないコンプレックスもあるけどね。(笑) でも日本語はちょっと勉強しただけじゃなかなかしゃべれないよ? 英語は多少勉強すればある程度はしゃべれるようになるけど日本語はちょっとやそっとじゃしゃべれないからね。だからこんなに難しい言語をネイティヴにしてる俺たちって実はすごいんじゃないかと思うもん。

そりゃ「黒人の音楽はすごい」とかさ、音楽的なコンプレックスはいろいろあるけどさ。でもさ、そういう話をするんだったら日本の民謡だってすごくてさ、あれだってすごい声帯の使い方してるし独特の音階があるし、歌のレベルとしては黒人の音楽に負けないぐらいのすごいものがあると思うしね。だからいろんなことを考えれば日本人が外人に劣っているとかそんなことは決してないと思うんだよね。

まぁXもいよいよ海外進出するわけなんだけど、そうね、これまでの日本のミュージシャンの海外進出っていうと、例えばオリエンタルだとかさ、エスニックだとかさ、フジヤマ・ゲイシャ・ハラキリ(笑)? みたいな感じが多かったじゃない? でも俺たちの海外進出は今まで出て行った人たちとは違うやり方をやるからね。その準備のためにここまで延ばしたわけだからね。俺たちって一見いろんなことが無謀に見えてるかもしれないけど、でも実はその裏にはいろんな計画がちゃんとあるわけ。だけどやっちゃうときは無謀に気合いだけでガーン! ってやっちゃうんだろうけどね(笑)。

うん、だから基本的にはさっきもいったみたいに〝日本の代表〟としてやってくるから。別に今までのノリを変えるつもりはないんだけど、ただいろんな状況で、例えば海外にずっといるとやっぱり受ける影響っていうのはいろいろあるわけで、そのときに作る音楽っていうのはその場で与えられた影響から生まれて来るっていうのが大きかったりするからその辺はいろいろと変わって行く可能性はあるんだけどね。でも根底には日本の代表っていうのが流れてるからさ、今回のファースト・トライとしてアタックするときはまず今のスタイルをぶっつけてみたいっていうのがあるけどね。だってもし外国の音楽の真似事をしたとしても本物には勝てないからさ。よくオリジナリティーが大事とかいうけど本当にそうでさ、真似は誰でも出来ると思うけどその人の持ってる物っていうのはその人たちしか持ってないわけで、それを武器に出来たら一番有効的だし、もしそれが受け入れられたときは本物だっていうかさ。やっぱり日本人が出て行って外人と同じことをやっても本物の方が全然いいに決まってるからね、負けるに決まってるんだからさ。やっぱりやるんだったらそっちの方面でやって行きたいなと思うんだけどね。

そうするとボーカルっていう立場もすごく重要になって来るよね、歌詞とかさ。例えば今ある表現を全部英語に変えたって全然意味通じないとかあると思うんだ。だけど、それを全部向こうに合わせるんじゃなくて、それはアメリカ人が初めて聞くような造語でもいいと思うんだ、そのニュアンスが伝えたい心情に忠実だったら。例えば今ある曲の中でも「スタンディング・セックス」の中で造語を使ってるわけ、「レイニー・ローズ」とかさ。それはアメリカ人にはわかんない、アメリカにはないからさ、そんな言葉。でもそういう新しい物にアメリカ人が触れた場合にね、なんかそこに詩的な意味とか意味合いを持っていれば、別に文法的には合ってるわけだからなんとなくわかるわけじゃない、前後の関係とかからでさ。そこで向こうの人たちが感じられたら、逆にこっちが向こうを動かすことだって可能じゃない? そんなスタンスでやりたいと思ってるんだけどね。その辺の力技は相変わらず強引にやろうと思ってるけどね、アメリカ人全員に張り倒されようとも。(笑) でもそれはまったく無理な話じゃないと思うんだよね。可能性がゼロっていうことはないと思うの。1%でも可能性があるんだったらそこに突撃して行くっていうのが俺たちの姿勢だからあえて挑戦はしてみたいなと思ってるんだけどね。それはYOSHIKIとか俺とか歌詞を書いてる人の考えでもあるんだけどね。

ALL THAT TOSHI

俺のユーモア・センス

だから自分なりに自分を抜かしてあげつつ、だけど厳しく。生きてることで喜びを感じていないといろんなことやれないよね。

あの三枚目振りはどこから出て来たかって？　わかんないよ、そんなの。(笑)　たまたまそういう自分がいるっていうだけで。性格だろうね。でもあれがすべてでもないんだよね、あれはある程度演じてるところがあったりするんだけど、でも本質的には楽しい雰囲気が好きなんだろうね、人が笑ったり人が何かを感じるっていうのが好きなんだろうね。感動であるとか笑いであるとか、そういうのが好きなんだろうと思うけど。だから「こういったらおもしろいだろうな」とかさ、そういうのがビビビッと、それは本当に考えなくても出て来るんだよね。それがセンスなのかなぁ？　良かった、センスあって。(笑)

ホントね、ああいう没頭してるときって、ラジオでしゃべるにしてもステージでMCするにしてもいきなり出て来るんだよね、「ここでこういったらいいな」っていうのがピッて。言葉が考えるより先に出ちゃうの。でもそれがけっこう良かったりするの、感動的だったりいわゆるセンスがあったりさ――まぁ俺流のセンスだけどね、他人は認めてくれないかもしれないけどさ(笑)――それが考えなしに出て来るんだよね。

子どもの頃？　別にそうでもない。割りと普通。クラスで目立つとかそういうわけでもないし、目立たなくはないけど大将になるような感じでもないし、どこにでもいるようなごく普通の子供だったんだけどね。

で、そういうセンスに気づいたのはやっぱり音楽をやるようになってからじゃないかな、人前で。中学3年か高校1年のときに初めてMCっていうのを人前でやったときに、もういきなりこのノリだったのよ。(笑)　それでみんなから「ステージに立つと変わるね」っていわれてさ。だから自分でもわかんないの、いきなりこれだったから。(笑)　もうこれやって10年だから、この芸風一筋。(笑)

だから、ホントはいろいろ考えてるんだけどね、これでも。(笑)　だけど人前に出たりなんかすると変貌しちゃうんだよね。だからサービス精神が旺盛なのかどうかわかんないけど。(笑)まぁ楽しみながらやってますけどね、今。

でも、毎度毎度いうけど、そういう場を与えられてるっていうのはすごく嬉しいことだよね。例えばラジオなんてやるときにはもちろんXっていうバックボーンはあるんだけどあくまで「俺のキャラクターだけで勝負！」っていうところだからさ。みんな同じ土俵にいるわけだからさ、お笑いの人だろうが誰だろうが。そういう意味では嬉しいよね。だからなるべくXネタはラジオでは使わないようにしてるっていうのもあるし。というかヘタにXネタ使えないんだよね、メンバーにあとで何いわれるかわかんないから。(笑)「またイメージ崩して！」とかいろいろいわれるといけないから。(笑)

えっ？　完璧にキメてるヤツは嫌いでしょって(笑)？　「行くかな、行くかな、と思わせといて必ず落とす」みたいな(笑)？　うん、だからさ、そういうところにおもしろさとかさ、そういうところに美しさを感じちゃうんだよ。そこに瞬間の美学を感じちゃうのよ、俺は。(笑)　人それぞれいろんな捉え方があると思うのね、美に関しては。俺の美学はそこにあるんだよね、誰も受け入れてくれないかもしれないけど。(笑)「ここはこういうことはいっちゃいけない」とか「こういう落とし方をしちゃいけない」とか「こういうカッコつけ方をしちゃいけない」とかさ、自分なりの価値基準あるわけよ、誰でも。その主張が強いか弱いかだけでさ。俺はそれをあんまり口には出さないけど、けっこう一貫したものが実は流れてたりするんだよね。偉いなぁ、俺。(笑)　わかってんのかなぁ、みんな。(笑)

やっぱり俺はコンプレックスのかたまりだから、音楽にしても自分の姿に対しても。だから全部カッコつけちゃうことが出来ないんだよね。キメキメってヤツがさ。何にしてもね、どっかで抜いとかないと。コンプレックスのかたまりであるから反発する力は強いんだけど、「今に見てろよ！」的な。だけど「最後はこういう風に落としてやろうかな？」っていうね。(笑)「ザマァ見ろ！」みたいなさ。(笑)

自分？　自分好きですよ。それが自分に甘いって見られるのかもしれないけど、でもそれでもいいっていうか、逆に好きじゃなかったら自分に厳しく出来ないような気もするし。だから自分なりに自分を抜かしてあげつつ、だけど厳しく。でもやっぱりいろんなことやってるっていうか、大げさにいっちゃえば生きてることで喜びを感じていないといろんなことやれないよね。それだけいろんなこと感じてるからいろんなこと出来るんであって、せっかくいろんなこと出来るんだからいろんなこと感じて生きて行きたいなとは思ってるんだけどね。





To FAN From TOSHI

待ってるみんなへ
いつもそうだけど、必ず借りは返すということかな。

まずソロの部分としては，とりあえずもうすぐシングルが世に出ると思うんですけども，Xのファンの人もそうでない人も是非一度耳を傾けて欲しいなと。一度触れて判断して欲しいなと。あとはその曲についてどう思ってくれようが，どう料理してくれようが俺はもういいですから。たぶんどう料理してもらってもそれに対応出来るように作ってあるし，料理出来ない人用にも作ってあるっていうかな？ 深く聴かなくても浅く聴いてもOKという，そういう世界で作ってあるんで，あなたなりに感じて欲しいな，と。

別にソロは素材を提供してるってわけではないんだけどね，一応料理のつもりで作ったから。ただその味付けは聴く人の自由っていうのかな？ いわゆる聴いた人が思うことだよね。どう感じるか，どうイメージするか，どう楽しむかっていうのは自分で楽しんで下さい。Xの場合はガンコな天ぷら屋っていうかさ，『ウチは塩じゃなきゃ食わせねぇぞー』みたいな(笑)，『残すなよ，お前！』みたいなそういうイメージもちょっとあったりするかも，(笑) ソロの方はホントに受け入れてもらって自分なりの楽しみ方を見つけて欲しいなっていう感じですね。

Xの方は今後新たなステップに向かって，今までのひとつも無駄のない経験を基に更に大きな壁にぶち当たってぶっ壊して行きたいと思ってるんで。まぁホントにたまにしか出て来なくて，みんなも欲求不満が溜まったり，いろいろ心配かけたり，不安がらせたりするようなことがあったけれど，いつでも俺たちは走り続けてるんで——Xのメッセージになるといつもこうなっちゃうね (笑) ——今後共見守っていただきたいなと。いつもそうだけど，必ず借りは返すということかな。

いつ頃になるかって？ う〜ん……年内は厳しいかなぁ(笑)？ ちょっと今度はやることがでかいんで，更にみんなが仰天することを考えているんで。もちろん世界進出もそうだけども，それプラス日本のみなさまには特別にスペシャル・メニューを用意しておりますので，それを楽しみに，お腹を空かして待ってて欲しいなっていう感じですね。

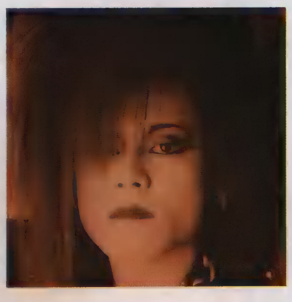
もし誰も待ってなかったら？ そうしたら強引にもう1回こっちを振り向かせる，お腹空かせちゃう(笑)！ 他の食べ物を全部取り上げちゃう(笑)！ それぐらい強引にやりますよ。

まぁ，あのぉ，がんばります。(笑)

LUNA SEA

Photography **Hitoshi Iwakiri** Text **Kumiko Murayama**

全国ツアーいよいよ開始！　10月1日に渋公、24日に野音のライブがひかえている。（もちろんソールド・アウト！）
8月末には『おはようナイスデイ』に出演するなど、様々な形で活動を行っているLUNA SEA。
今月・来月と2号にわたり、〝彼らにとっての美学とは何か?〟を追求してみたい。
トップを飾るのは、ギターのSUGIZOとベースのJ。
一見すると両極端にいるように見える2人だけに、それぞれの〝美学〟に対する考え方が興味深いところだ。



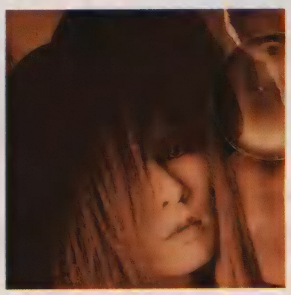
SUGIZO



J



RYUICHI



真矢



INORAN

AESTHETICS
SUGIZO×J
LUNA SEA

常にギリギリの危機の部分に身を置いているっていうのは、音楽とか創作活動をする上では素晴しいと思ってるから。だから、どんな時も安心はできないしね。（SUGIZO）

——今回のテーマは〝美学〟なんだけど、いきなり〝美学〟といっても漠然としてるんで、ポリシーっていうところから入っていきたいんだけど。バンドとしての、あるいは個人的なポリシーってありますか？

SUGIZO「バンドと個人ていうのは、ほとんどくっついてますからね、ポリシーが。分けることは難しいし、そこまでも生活に関わっていることだから」

——じゃあLUNA SEAのポリシー、ってことでいきましょうか。

J「ノン・ポリシー。(笑)」

——でも、こだわりはけっこうありそうじゃない。

SUGIZO「こだわりがないのがこだわり」

J「っていうか、最低限やることに関して責任持ちたいっていうか。途中で投げ出すのは嫌だし」

——そこだけきちっとしていれば、あとは自由っていう。

J「そうだね」

SUGIZO「あと、筋を通すことかな。それは結局責任を取ることですよね。ホント、ポリシーがないのがポリシーかもしれない。自分の中で枠を作らないっていうことが。これは良くてこれは悪いって、決まってるわけじゃないでしょ。それは自分の価値観であって、それを自ら狭めて、可能性を小さくするようなことはしたくないっていうのはありますよね」

J「だから、逆に辛い…っていうとまた違うかもしれないけど、漠然としてるから余計頑張らないと。仮に狭い範囲で考えてるんだったら、それに焦点を置いておけばいいけど、俺らとしては音楽もそうだし、見た目もそうだし、雑誌の露出から何から全て、自分たちである程度はコントロールしたいし。全部セルフ・プロデュースみたいなもんだからね」

SUGIZO「だからポリシーがないっていうか、範囲が広いっていうことは、逆に言えばその時々で自分たちのテーマが変わるんですよ。それはもう毎日かもしれないし、時間ごとかもしれないし、一瞬一瞬かもしれないし…。何か節操がないやつみたいだけど、その時その時でいちばん表現したいこととか、今何を訴えたいかとか、自分の何を磨きたいか、っていうのは、どんどん変わってる。ひとつのものができて、それで一生通すことは、今のところできないような気がするし」

——その最高のものに向かって、今は進んでいるっていう。

SUGIZO「うん、自分にとっての究極に向かって。逆に言えば、自分を探してるのかもしれませんね。まだそれが見つからなくて。もし見つかったら、それで自分の中では完結するのかもしれないけど」

——Jくんは、今の時点での美学っていうと何ですか？

J「とりあえず、今はもう後ろを見ないことですね」

——前進あるのみ。

J「うん。何が待っていようと」

——でも、これまでもそういう姿勢でやってきたんでしょ？

J「でも、やればやるほど不安ていうのは絶対出てくるわけだし。自信もあれば不安もあるっていうか」

——それは実感としてあるの？

J「もちろん。自信と不安は比例するよね。逆にふと気が緩むと、すごいナーバスになったりするでしょ、あらゆる面で。今だって、LUNA SEAにとって約束されたものなんて全くないわけだし、全てそうだと思う。だから、これからも進んでいくしかないな、っていう」

——それって、バントを取り囲む規模が大きくなってるから、っていうのもあるんでしょ？

J「もちろんそれもあるし」

——やっぱり自分としての目標も高くなってくるよね。

J「うん、高くなればなるほど。木登りといっしょで」

——でも木登りって、てっぺんが見えてるじゃない。

J「でも、登ってったら怖いでしょ」

——ああ、高くなるほど怖いっていう。

SUGIZO「ジャックと豆の木なんですよ。登れば登るほど伸びるんですよ、また。(笑)でも、メジャーっていうところに来てから、よりそういう感情が強くなったっていうのは思う。自分たちの動きや頑張りによっては、何かを変えられるかもしれないでしょ。自分たちにとっての世の中の嫌な部分を。昔はそれが漠然としていて、人ごとに感じてたんだけど、それが最近は自分たちが登って行くに連れ、いろいろな問題とか不安なものに直面してきてるわけで。その中でどれだけやりたいことができるかとか、自分たちのやりやすい状況に変えていけるかとか、そういう部分が。それを最近はリアルに体験してるわけで、そういう意味では諦めるんじゃなくて、自分たちを押し通したい、っていうと強引だけど、そういう気持ちは強くなってきてる。だって、やりたい音楽だけをやっていられる状況じゃないじゃないですか」

——まあ、バンドに関する全てのことが関わってくるからね。

SUGIZO「そういうことをやらなきゃ、やりたいことができないっていう状況にもあるんだけどね」

——でもバンドの方向性としては、初めから変わってないわけでしょ？

J「うん。だからその分自信もあるし、勢いもあるっていう」

——LUNA SEA結成当時って、何か



AESTHETICS SUGIZO×J

とりあえず、今はもう後ろを見ないことですね。何が待っていようと。(J)



LUNA SEA

美学みたいなものはあった?

J「やるところまでやる、という」

SUGIZO「最初は、際物でいたいっていうのがあったよね。あっと言わせてやろうとか、ビックリさせることをやりたいって。今もそれはあるけど、それよりも自分たちの感じたことを表現するほうに重点がいってるかもしれない。昔は全てのことに対して、ねじ曲げてものごとを考えていたから。でも、それがずっと強い美学でもあったしね」

J「でも、今も他から見たら際物だよね。(笑)」

——**(笑)そうかもしれない。**

J「でも、俺はそれでいいと思うよ。結局際物の中からしか新しいものって生まれてこない気がするもん」

——**新しいって、革新的なものっていう?**

J「うーん…、そうかな」

——**それもバンドの考え方として捕らえちゃっていいの?**

J「っていうか、基本的にうちの5人の価値観だと思う。もちろんそれにNOって言う人も絶対いると思うし、それがバンドを左右する問題でもないから。ポリシーといっしょだよ。それによってファンがどう考えてくれるかとも別に…」

——**自分たちがそう思ってればいいと。**

J「そうだね」

SUGIZO「で、今のところ、それに同調してくれる人が多かった、っていうだけじゃないかな。NOっていう人は、俺らとは違った場所にいると思うし、いっしょにいる人たちっていうのは、ある意味で同じ価値観ていうか、近い価値観があったんじゃないかな。それはバンド結成時と全然変わってないと思いますね。表面的な見た目とか音楽性は、どんどん進化してるけど」

——**それもLUNA SEAを形作ってる要素?**

SUGIZO「うん。美学かどうかはわからないけど。(笑)」

J「ただ、美学とかって今言われてるけど、それとは全然違ったところで動いている部分ていうのも、すごくあるよね。まわりが動いてる部分が。例えばこうやってしゃべってても、俺が思ってることっていうのは完璧には伝わらないわけじゃない。伝えようと努力はするけど。まあそれも、お客さんにとってはそんなの関係ない、ってことになるのかもしれないけど。それっていうのは、LUNA SEAの音楽が好きなんだ、っていうものでも別に押しつけようとか、そういうものでもなくて」

SUGIZO「美学っていっても、美術的とか芸術的な美学だったらわからないけど、いま話してる美学っていうのは全ての人が持ってる〝生き方〟なんじゃないかな。まあ俺らとしては、常に自分たちをちゃんと見つめていたいっていうのはあるし、足元を見失いたくないと思うよね」

J「もちろん背伸びもしたくないし。結果として、今になって全てが振り向いてくれる状況っていうか、それができてきて…。まだ、これでよかったんだとは思えないけど」

——**でも、来た道は間違っていなかったっていう。**

SUGIZO「それもホント、3年前からあったからね。俺たちは絶対間違ってないはずだっていうのが。精神的な話なんだけど。やっぱりその頃は、NOっていう人のほうが多かったですよね」

——**その時点で、どうして間違ってないってはっきりわかったの?**

SUGIZO「自分たちのやってることに、自信があったからじゃないかな」

——**結成当時から?**

SUGIZO「このメンバーが集まった時点で〝これは絶対!〟って。そこからきてるからね」

——**今の5人だから、ここまできたと。**

SUGIZO「それが強いと思う。それに、5人ともそれぞれのメンバーの生き方にすごい触発されてるし」

——**そうそう、なんかそれぞれに輝きってものがあるよね。**

SUGIZO「みんなで鎬(しのぎ)を削りあってるからね。やっぱり、ダイヤモンドはダイヤモンドじゃないと磨けないんですよ。鑢(やすり)じゃ磨けませんからね。そういう、常にギリギリの危機の部分に身を置いてるっていうのは、音楽とか創作活動をするうえでは素晴らしいと思ってるから。だから、どんな時も安心はできないしね」

——**メンバー間であっても?**

SUGIZO「そうそう。いい意味で、各自鎬を削りあってるし。だから常に自分を磨いていたいってことじゃないですかね。安心しちゃったら、安らぎはあるかもしれないけど、燃えるような思いっていうのは生まれないんじゃないかな」

——**LUNA SEAは、落ちつくことはなさそう?**

SUGIZO「まあ、オフは取りたいですけど。(笑)だから、常にギリギリのところにいたいっていうのは、もしかしたら美学かもしれないですね。常に崖っぷちでいたいっていう。そこまでの危機感、ていうのは言い方がネガティブだから、いつも輝きを絶やさないっていうか、ダイヤモンドを磨き続けてる状態っていうか…。そういう生き方をしていたいっていうのは、すごいありますね」

——**でも、常に崖っぷちにいたら、精神的に疲れることもあるでしょ?**

SUGIZO「疲れますよ。でもそれが、もしかしたらいちばん充実してることかもしれない。ずーっとこの状況が続いてるし、いつもメラメラ燃えてる状態だしね」

Photography **Hitoshi Iwakiri** Text **Yūsuke Katoh**



Ladies Room

READY TO KISS

シングル「READY TO KISS」、10月1日、リリース。
10月末には、東京・大阪・名古屋の3か所で大都市ツアーを決行!!
シングル・リリースとツアーを目前にひかえた心境を、
GEORGEとNOAに語ってもらった。



NAO

ツアー回るはずだったんだけどね，いいアイデアの曲がいっぱい出てきて，そのまま作っちゃおうと思って。アルバムが出来るのは来年だよ。

先々月号でもお伝えした通り、ブッキングまで済ませていた夏のツアーを一切キャンセルし次のフルアルバムに向けてのプリプロに入っているLADIES ROOM…つってもまだ信じられないんだよな、あのスタジオ嫌いのやつらがマジに毎日家とスタジオの往復だけなんてさ。なんでも最初は今までのノリとは一風変わったミニアルバムをリリースするべく曲作りに入ったところ、次から次へと出るわ出るわ名曲の数々！ これはミニアルバムなんていう企画物で終わらすのはもったいない！ てんで急遽予定が変更されたらしいんだけどね。

しか〜し、そこはなんだかんだいってもファン思いのLADIES ROOM、ちゃ〜んとニューシングルを届けてくれました。ちょっぴりセンチでキャッチーなメロディーがニクイ「READY TO KISS」。「ゲット・ダウン」を彷彿とさせるハードナンバー「BIG BOOBSN' BUNS」。この2曲だけでもLADIES ROOMの急成長がうかがえる、かな？

というわけで今月はGEORGEとNAOのインタビューだ。

——今月はニューシングルの話を……。

GEORGE「シングル？ 話すことないよ。加藤くん適当に書いといてよ」

——頼むよ、ひとつ。(笑)ちゃんと仕事しようよ。(笑)

で、この「READY TO KISS」と「BIG BOOBSN' BUNS」はミニアルバム用の曲を作ってるときに出来た曲なのかな？

GEORGE「うん、その通りだよ」

——でさ、この前インタビューしたときに「ミニアルバムは今までウチになかったパターンの曲が5曲ぐらいと、これまでのウチのノリを踏襲した曲を1曲入れて6曲入りにする」っていったよね？ ということは「READY TO KISS」が今までのLADIES ROOMのノリを踏襲したパターンの曲で、「BIG BOOBSN' BUNS」が新たなパターンの曲っていうことなのかな？

GEORGE「いや、そうじゃないよ。作った曲の中で"それにしようか？"っていうことになって選ばれたのがこの曲。たくさん出来た中でどれが一番その雰囲気を出してるかな？ っていうことを考えたときに、この2曲になったってこと」

——その雰囲気って？

GEORGE「曲たくさん作ったでしょ、アルバムの。その中でどれが全体の雰囲気を表せるかな？ っていうことを考えたときにこの2曲がいいんじゃん？ っていうこと。ただそれだけ。まぁアルバムはこんなもんじゃないけどね、まだまだ」

——ということは次に出るニューアルバムの先行シングル的な意味合いも持ってるってこと？

NAO「いや、別にそういうわけじゃないんだけどね。先行シングルは先行シングルで……まぁお茶でも飲んでリラックスしてよ。(笑)」

——あ、どうもすいません……て、そうじゃなくて！(笑) じゃあ先行シングルはまだ別にあると？

NAO「あるんだよ、それはそれで」

GEORGE「まぁ予定だけどね。予定は未定。まぁウチの場合はいつもよくあることだから」

——ありすぎんだよ、おまえらは！(笑)

GEORGE「だから別にそんな深い意味はないよ。アルバムの中に20曲も30曲も入ってると疲れちゃうでしょ、聴く方もレコーディングする方も。だからちょっと出しとこう、今のうちにっていうこと」

——あのなぁ……。

GEORGE「ただ単に、ミニアルバムのために曲作ってたわけでしょ、最初は。それが"これはミニアルバムなんていう企画物にしちゃったらもったいないねぇ"っていうことになって、それぐらいいい曲ばっかりだったから。"じゅあもういっそのこと次のフルアルバムに持ってっちゃおう"っていう話になって。で、ミニアルバム出せないから"じゃあしょうがねぇ、ちょっと2曲だけ手の内を見せてやるか"って、そういうノリ」

——なるほどね。でもこの前いってたような大幅なイメージ・チェンジはしてないよね、この2曲は。

GEORGE「あ、それはいきなりパッて出しちゃうとお客さんにもかわいそうだし、"まぁ初めの一歩はこれぐらいにしといてやろかな"っていう。だからそんな深い意味はないんだよ、俺はね。NAOは深い意味あるみたいだけど」

NAO「深い意味なんかねぇよ！」

GEORGE「BIG BOOBSN' BUNS」の14小節めにちょっと入ってるリフとかね」

NAO「そんなの入ってるか？(笑)」

——「READY TO KISS」の原曲は誰が持って来たの？

GEORGE「オーナー」。

——はぁ？

GEORGE「ひっくり返すと？」

——なるほどね。(笑)NAOさん、この曲のアイデアはどこから？

NAO「いや、別に」

GEORGE「俺も不思議なんだよね、この男がどこからアイデアを持って来るのか」

——よし、聞いてみよう！ どこから持って来たの？

NAO「家からだよ」

——知ってるよ、そんなことは！(笑)

GEORGE「なんか、コイてるときに浮

かぶとかいってたけど、前は。(笑)」

――(笑)じゃあNAOさんはこのリズムでコクわけですね?(笑)

NAO「まあ大体そうだね。(笑)」

GEORGE「4ストロークなわけね。(笑)」

NAO「いい加減にしろよ!(笑)」

GEORGE「だからいつもエンディングになるとハシるわけね。(笑)」

――もういいっつーのその話は!(笑)だからアイデアの出所だよ!

NAO「アイデアつってもなぁ……」

GEORGE「まぁウチはアイデア出してもその時点でイメージ崩れることが多いからね。〝モトリー・クルーっぽいの〟ってもみんな全然違うこと考えるからね。NAOの場合は「ホーム・スイート・ホーム」だし百太郎の場合は「シャウト・アット・ザ・デビル」だし」

――作りながら絵が浮かばないね、最初の時点では。段々出来上がって来るに連れて情景が浮かんで来るけどね

――「READY TO KISS」は?

NAO「ちょっと切ない感じの、なんつーのかな……」

GEORGE「ちょうどエロビデオでコイてて〝よし、行くぞ、行くぞ、行くぞ!〟つったらパッと画面が男の顔に変わっちゃって〝ああ、切ないな……〟て感じ」

NAO「それは切ないじゃなくて情けないだよ。(笑)」

――あのなぁ(笑)!

で、「BIG BOOBSN' BUNS」ですが、これはどういう意味? 辞書引いたけどわかんなかった。(笑)

GEORGE「まぁ俗語くんなんだけどね」

――でも良く知ってるよね、スラング。〝ロック・アンド・キー〟とかね。

GEORGE「ていうか〝ロック・アンド・キー〟だったらなんとなくわかるでしょ? これもまぁ〝ロック・アンド・キー〟に近い意味なんだけどね。自分で想像してください、みなさん」

――これはもうLADIES ROOMが当然やっててもおかしくないような気がするけど実は初めて、みたいな感じの曲だよね。「ゲット・ダウン」のヘビーさとはまた違うし。

GEORGE「ああ、なるほどね。まぁウチはヘビー・メタル・バンドじゃないからね。俺はこれもロックンロール系だと思ってるから。まぁ、NAOがジワジワジワジワ、ジューダス・プリースト系に持って行こうとしてるのを俺が一生懸命阻止してるんだけどさ。(笑)」

NAO「逆だよ、逆!(笑)そんなことって〝そういうのやってください〟なんて投書来たらどうするんだよ。(笑)

あ、これ「READY TO KISS」のカラオケも入ってるんだよな」

――でもね、このカラオケには歌メロのガイドが入ってないから歌えないんだよ。(笑)

NAO「それはすかさず1曲めに戻ってだね、聴いて、歌詞を見てだなぁ、感じるままにカラオケで練習してくれって感じかな」

GEORGE「まぁカラオケだとギター・フレーズも全部聴こえるしね」

――ギター・キッズがコピーするには最高のカラオケだね。(笑)

NAO「それは随分オタクなカラオケだな」

――ボーカル邪魔なときあるもんね?

GEORGE「ひっでえ!(笑)」

NAO「ないよ。(笑)」

――いや、ギターをコピーするときに(笑)。

でこのシングルのレコーディングからすかさず次のフルアルバムのプリプロに入ったわけですが。あのスタジオ嫌いのLADIES ROOMからは予想もつかなかった行動に。順調ですか?

NAO「進んでるよ、ちゃんと」

GEORGE「いいね、曲いいね、まぁあと3か月ぐらいレコーディングまでに時間があればもっと良くなるんだけどな」

――本当にそんなにスタジオ通うのか?

GEORGE「今回は真面目にやってるからね。もっともっと練る時間欲しいな」

NAO「俺はいつも真面目だよ」

GEORGE「え、真面目にやってんの、NAO? スマン! 俺もこれから真面目にやるよ!(笑)」

――でもさ、やっぱり未だに信じられないんだよ、あのLADIES ROOMがあとは告知するだけという段階まで決定してたツアーをキャンセルしてまでスタジオ・ワークに専念するなんてさ。ファンにもあれだけ〝今年の夏はツアーをガンガン回る!〟って宣言してたにもかかわらず。

NAO「俺も回るはずだったんだけどね、〝そっかぁ、回ろう!〟みたいな。まぁだからそれは、いいアイデアの曲がいっぱい出て来たからそのまま作っちゃおうっていうのがあったから。もちろんツアーは回りたかったんだけどさ、せっかく出て来たんだから作っちゃうみたいなさ。まぁ今から作ったって出るのは来年だからさ」

――ツアーやりたくないの?

NAO「そりゃやりたいよ。だからやるよ10月に、野音」

――その心境の変化はかなり大きいよね?

NAO「心境の変化は毎日ですからね。いつも一か所にいるようなことはしないわけよ。動物と同じように成長してくと。大きくなり方では猫のような」

GEORGE「でも猫はすぐ大きくなっちゃって成長止まっちゃうよ。(笑)あとは子供産むだけじゃん。(笑)」

NOA「じゃあ子供産まなきゃ、今度。(笑)」

GEORGE「NAOが子供産みます。彼氏募集中です」

NAO「やめろよなっ!(笑)すぐ真に受けるんだから、ファンは!(笑)」



GEORGE

たくさんできた中でどれが1番雰囲気を出してるかな?って考えた時、この2曲になった。まぁアルバムはこんなもんじゃないよ。

8・30



二子玉川野外イベント

the 真心♥ブラザーズ & Rotten Hats

プラス CAMP

Photography **Mori-Q** Text **Various Writers**

いンや〜,実に気分が良い! 青空の下だよサマー・タイム。夏のライブは野外に極まった!! 出演は⇨ご存じ真心ブラザーズ,赤丸人気ロッテンハッツ,何だか元気だキャンプの御三方。ビール飲む,風爽やか,夕焼け空真っ赤っかの SUN'S SUNNY SHINE DAY イン・二子玉。



と、いうわけで、先々月号でお知らせの通り〝真心&ロッテンのフリー・コンサート・イン・二子玉〟、始まり始まり。

いやあ、それにしてもこの日は絵に描いたようなピーカンの青空でさ、もう暑いのなんのってこりゃたまらんよ。でもその分「コンサートにはうってつけの日」って訳でさ、なんか夏の天気の神様まで真心&ロッテンの味方をしているような気がしましたね、僕は。

さて、一番手の出演は、〝キャンプ〟というグループである。事前に「出るよ」という告知がなかったようなので、ステージに登場のおりには「?誰?」というリアクションのお客さんが圧倒的でした。では、そも、キャンプとはどんなバンドなのか? パチパチ編集・黒木ミドリさんに聞いてみましょう。



「カウボーイ・ハットの良く似合う、アメリカン・テイストあふれるアウト・ドア・サウンド。眉間にシワよせて聴くよりも、もっと愉快に楽しくイージー・ゴーイン!!」

なるほど、キャンプでした。それにしてもボーカルのCheeko、きゃしゃなのにパワフルでカワイイよね。

お次に登場はロッテンハッツ! 9月の21日にアルバム『SUNSHINE』でメジャーデビューしたばかり。パチパチ・パチロク大推薦の注目株。

「ロッテンハッツが全員そろって〝わさわさわさっ〟とステージに登場する瞬間がすっごく好きよ。わさわさっと出てきて、ドラムのケンイチくん以外の人たちが横一列に並ぶじゃない? それ見てると、なんだか幸せになってニコニコしちゃうのよ。それにしても、ロッテンハッツは野外イベントが似合うわ。二子玉川のワイルドな河原と夕焼けをバックに、6人がわさわさっと出てきた時のカッコよかったこと。この日は真心とのセッションもよかったわ。いきなり渋い選曲もナイス。ふだんでさえ楽しそうな彼らだけど、この時はとりわけモーレツに楽しそうだった。ニヒル・ガイの木暮くんでさえ、ハンニャのような笑顔でバンジョー弾いてたものね」

と、語って頂いたのは音楽ライターの能地祐子さんでした。なるほど、確かにロッテンって〝わさわさ〟って出てくる感じ、あるあるある(笑)。



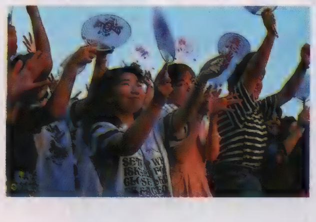
しかしまぁ、ロッテンってキャラクターが立ってるよね。ひとりひとり個性的、というかさ。6人の顔と名前が一致して、それぞれの特徴(笑)がわかってきて「あら楽しそうな人たち」なんて思えてきたら、きっと病みつきになりますよ、このバンド。実際、音楽、魅力的だしね。

さてさて、お待たせいたしました。トリを飾るはザ・真心ブラザーズのお出ましであります。

いやー、これが近来まれに見るハイ・テンション。何がって、倉持陽一のMCですよ。もう、どうしてくれようってくらいのおもしろさ。何かいいコトあったのか、倉持? それとも、何かツライことでも。暴走MCに引っ張られてか、ライブの方も大盛り上がり。楼井ギターギュインギュイン、お客さんウチワ振り振り。時刻はおりしも日没時、夕焼けたそがれ染めて多摩川に赤い雲が飛ぶ。昼間の暑さの証拠のように、川原にビールの空き缶ゴロンゴロン。倉持がハンド・マイクで叫ぶ「ゴミは持って帰れよォーゥ!!」

では、その辺の様子を、音楽ライターの佐野郷子さんに聞いてみたりして。

「ダンナとお散歩気分で観にいってみるかぁって感じで、でかけてみました多摩川。これで子供でもいたら「無能の人」だよなぁとか思いつつ、夕暮れにどこからともなく聴こえてくる音をたよりに河原を下れば、ヘェー、イイ感じじゃーん。大昔は芸人さんのこと〝河原コジキ〟と呼んだそうですが、〝河原フォーク〟ってのも悪かない。ハナからリラックスした真心ではありますが、この夏祭り的ムードでさらにリラックスしまくって、倉持くんなぞ半分へべれけではありませんか? 真心↓河原といえば、あの名曲「荒川土手」を思い浮かべるワタシですが、もちろん演りましたよ〝多摩川土手〟。イヤァ、イイわァ、日本人でヨカッタわァ。空を見上げりゃコウモリが舞い、土手でイチャつくカップルもチラホラ。こういうご近所感覚で楽しめるコンサートってあるようでないよなあ。来年もまたやって欲しいよーん」



この後、真心&ロッテン、+キャンプの怒濤のセッション大会がありまして、多摩川の太陽は西の彼方に沈んで消えたのでありました。いやあ、楽しかったねこのイベント。ナイス・ロケーション、キャスティング。また来年ここで会えたらいいねぇと、しみじみ思う夏の一日でありましたことよ。

真心ライブ情報▶10月 2 日, 武蔵野公会堂/11月25日, 目黒公会堂/12月21日, 浅草公会堂。ロッテン・ニュース▶この秋放送の TBS ドラマ『ホームワーク』の主題歌をやるよん。





浴衣美人大会

いやぁ悪かった。浴衣美人大会やろうっていったのはいいんだけど、数が多過ぎて全員フォローできなかったざんす。すまぬ。〝写真にメンバーのサインをつけて郵送する〟という作戦だったのだよ、実は。「冗談じゃないわよ、私はあの日、パチロク持って浴衣着て来たのよ!!」というあなた。パチロク「冗談ぢゃねいぞ」係まで、お手紙下さいね。往復ハガキだとなお可。どうも段取悪くてすまんね、ごめんね。しょぼん。

好評連載中!

すかんちの BOYS be AMBITIOUS!

第2話　そしてCSAイベントの後に彼らの状況は変わったのか？

すかんち好きのあなたも
すかんち嫌いのあなたにも
御意見求む!

すかんちが真の意味でも
スーパースターになるために
あなたの素敵な御意見を募集中。

すかんち好きのあなたからは、 ① **私はすかんちのこんなところが好き♡**

すかんち嫌いのあなたからはこの際、 ② **私はすかんちのこんなところが嫌いやねん!**

好きな人も嫌いな人も、 ③ **もっとこうして欲しいor それだったら好きになってもいい。**

という答えをできるだけ具体的にたとえば、"生理的に嫌い"だけではなく、どう生理的に嫌いなのかをハッキリと明記して
〒102 東京都千代田区五番町6-2　ソニーマガジンズ　パチパチ・ロックンロール編集部内　"すかんち御意見番"係まで
傑作ハガキの特典としてはメンバーからの返答＋αをプレゼント!　メンバーともども首を長くしてお待ち申す。

すかんちの BOYS be AMBITIOUS!

この連載を始めて、早速、〝すかんちは必ずビッグスターになる〟と力強いおハガキをくれた小平市のすかんちファンさん、どうもありがとう！　さて、バンドの分岐点になる4枚目のアルバムをレコーディングしはじめた彼らの心境は、そして、このバンド淘汰時代を生き残るのに彼らに残された3つの選択とはいったい何なのか？　ますます目が離せないすかんちのスーパースター爆進撃計画！

Photography **Takeo Ogiso**
Text **Kyoko Sano**

悪口も言われんようになったら終わりや。それだけ注目されとるってことやもんね

夏の終りの最終日曜日、午前11時。〝ずかんち〟の取材・撮影日はナゼだか日曜日が多い。これは㊞シミズ・ミホが休日出勤手当てをもくろんでのブッキングかといえばそうではない（らしい？）。日曜のしかも午前中からの取材に私はムッとしかけたが、そこは愛する〝ずかんち〟様のため。せっせと芝浦のスタジオまで出かけていったのである。先月号の記事を読んで青ザメた〝ゾニー・レコード〟のプロモーター、中村氏もめずらしくやって来た。ウム、これは効いたな。天下のソニーも将来を嘱望された〝ずかんち〟にやっと本腰を入れる気になってくれたのか、と、手に手を取り合って喜びを分かち合おうとしたのだが、「あの、ワタクシ、実はこれからプリプリの打ち合わせがありまして……」。この埋め合わせを、イヤ、〝ずかんち〟スーパースター爆進懇談会の打ち合わせを、三茶のイタリアンで決行する日時だけを決めて、中村氏はプリプリの打ち合わせに出かけてしまった。いつか、いつの日か、〝ずかんち〟の打ち合わせを何よりも優先させる日を夢みて……。

それはそうと、〝ずかんち〟は御存知のようにこの夏はユニコーン、スパゴーとのジョイント・イベントで多忙な日々を送っていた。ウワサではかなり好評だったと聞く。

寺西「ものすごく楽しくて有意義なイベントやったね。特にユニコーンの素晴らしさには改めて驚かされるものがあった」

と、いきなり、〝CSA〟の先輩を立てるところが腰の低いローリーらしい。

寺西「何よりも、曲とサウンドとアイデアが素晴らしい。彼らにはやっぱり何かあるね」

小畑「ウン。さすがに売れてるだけのものはあるよね。それは実感やね」

寺西「〝ずかんち〟としても見習うべき点、学ぶべきところはあると思うわ。イベント中は仲良くさせてもらったし人柄も申し分ない。来年は僕らがヘッドライナーにならなアカンけどね」

小畑「才能のある人達やからオーラが出てるんやね。なんしかエエバンドやわ」

ヒトサマのバンドを誉めたたえ、プロモートしてしまうあたり、人の良さが滲み出る。ユニコーン・ファンの皆さんも〝ずかんち〟の人柄にザブトン一枚ですか？

寺西「あとね、鹿児島とか長崎は初めてやったから、すごいうれしかったな。反応も非常に好意的でね、待ってましたというかんじやったわ。ただね、『恋のマジック・ポーション』は大人気やってんけど、『恋のミラクル・サマー』は全然ウケへんかったんよ」

というのは、『ダウンタウンのごっつうつエエかんじ』のオン・エアが九州の一部区域では遅れているかららしい。

小畑「2ヶ月遅れくらいやねん。そりゃ『ミラクル・サマー』がウケんはずや」

寺西「まだまだ日本は広いね……」

シマチャン「それも時間帯が違うの。九州では昼間に放映されてたりするの」

この狭い日本でもタイム・ラグがある。そうかッ！『恋のミラクル・サマー』が爆発的ヒットまでいかなかったのはその〝時間差〟のせいなのかもしれん。と、ここでホッと胸をなでおろす。ウーム、これからだ、〝ずかんち〟の快進撃が全国に波及するのは。

寺西「ついこの前まで新人バンドのつもり





やったけど、考えたら、もうアルバム3枚やん。シングルも小ヒットを飛ばし(笑)、〝ずかんち〟を広めるのにあのイベントは絶好のチャンスやったと思う」

小畑「これですぐにツアーでもあったら……ないねんなあ、ところが」

寺西「スパゴーはこの後ツアーやねんなあ、ユニコーンもあんねんなあ」

田中「まっ、秋には学祭があるから」

寺西「ボクね、コンサート・ツアー、日本語で言うと演奏旅行が好きみたいやね、まだ」

そう、考えてみたら、〝ずかんち〟はまだそれほど多くツアーに出ていないのだ。だから、まだツアーに飽きていない、ライブにスレていないということでもある。

寺西「ホール・ツアーで10本程度やもんね。〝ずかんち〟を観たくても、まだ観られへん人がたくさんいると思うねん」

一度ライヴを観たらもうこっちのもの。現に㊎シミズも渋公を観て、涙ながらに「ワタシ、俄然ヤル気になりました」と言ったほど。〝ずかんち〟にとって、ライヴという強い武器があることはデカイ。イイゾ、その調子。

寺西「でも、ボク、今頃オセンチやねん」

ハッ？　ど、どないしたんや、ローリー？

寺西「だって、もう夏休みが終るやん。明日から学校やん。そう思うと淋しくて……」

プロのミュージシャンになっても、体内時計は学生時代のまんま。このナイーブな感受性をもってして、あの歌が生まれるようだ。

シマチャン「ホンマ、学校行かなあかんのと同じ気分でこれからレコーディングに入るかんじやなあ」

小畑「イベントが楽しかったからよけいに夏が終るのが淋しいねん」

寺西「でも、ボクは一度プールに行ったよ。行ったらプールの入口200メートルの行列や。イモの子に洗われてきましたわ」

ローリーはテレビ、ラジオの出演にも大忙しであった。某東北のテレビではこんな仕組まれたハプニングも……。

寺西「レピッシュのマグミさんと対談やって聞いて行ってみたら、ワシ、司会者やッ！　しかも12時から6時までのオールナイトの生放送やッ！　どうもあの男が隠しとったらしい（あの男＝マネージャー、ペタ山岸）」

ゲストではなく司会者。おまけにクイズの出題までこなし、危うく〝うじきつよし〟の道を歩みかけたらしい。〝ビデオ・ジャム〟のホストでもあるローリーにテレビ関係者はバラエティシャン（©大槻ケンジ）を望んでいるようにもみえる今日今頃、〝ずかんち〟はニューアルバム及びシングルのレコーディングに突入した。

寺西「ここで一度だけ軽く弁解させてもらいたい。『恋のミラクル・サマー』が熱心なファンから今までの曲に似すぎているとお叱りの手紙を頂きましてね。あれはね、僕らはいろんなスタイルの曲をフジテレビに出しました。けれど、彼らが望んだのは〝ずかんち〟の今までの曲を合体させたような曲で、それが『ミラクル・サマー』でした」

小畑「あんまりクドクド言うたらアカンで」

寺西「わかってる！　でね、ファンの一部に〝寺西は最近手を抜いてる。他の3人はあんなに頑張ってるのに〟と」

3人「(爆笑)」

寺西「そうじゃなくて、僕はニーズに応えたつもりやったんやけど。別に手を抜いたわけじゃないんです、と」

ハイ、軽い弁解（〝CSA〟のボス、ルーリード麻生の了解済み）終り。で、次のシングルはいかに？

寺西「田中さんの作った『恋のアンドロイド』という曲が良かったんですけど、またこれまでの〝ずかんち〟サウンドに酷似してると怒られそうなんで、新機軸を考えました。ニューシングルは遠距離恋愛をうたった〝90年代の『木綿のハンカチーフ』〟になります」

遠距離ラブ・ソングといえばユーミンの、「シンデレラ・エクスプレス」とか名曲も多いけれど、〝ずかんち〟がうたえば……。

寺西「フフフ、乞御期待やね。でも、これで〝ずかんち〟はまたファンを裏切るとだけは言っておこう」

田中「今度は『ラブ・ポーション』みたいな曲が好きやったのにィって、言われそう(笑)」

シマチャン「もしかして、寺西さんって、文句言われやすい体質なんかな？(笑)」

寺西「そうやねん……」

ファンはローリーの少心者体質を見抜いている!?　〝最近、ローリーはテングになっている〟はもはや常套句か？

寺西「ボクもう人気なくなったんかなとマジに思うことあるよ。けどね、〝ずかんち〟自体の人気は上がってるらしいねん」

例えばB'ZのCDと一緒に〝ずかんち〟のCDを買うような層に対して、一部のファンは心良く思っていないらしい。この旧ファンVS新ファンとの確執は避けられないものなのだろうか？

寺西「実はこの前、バンドの〝ダイヤルQ〟をこっそり聞いてみてん。……ショックやったわ（小声で）」

こうまでファンの反応を気にしているバンドもいないんじゃないだろうか？　気にしィやなあ、もう。けど、気になるのもわかる。マゾヒスティックな喜びに浸る傾向が〝ずかんち〟にはある。確かにある。

小畑「悪口も批判もないよりある方がマシやん。悪口言われへんようになったらこのショーバイ、アガったりやからね」

そこで、〝私はすかんちのここが嫌い〟も募集してしまうココロの広いパチロクだ。

小畑「ボクらのビッグ・マウスやシャレが通じにくいんやろか？」

田中「バンド名がゲスなんかな？(笑)」

寺西「ボクらのようなバンドにとって、コミック・バンドに思われんのは宿命やね。イバラの道を選んどるね」

自覚はある。ロック・バンド淘汰の時代を迎え、〝ずかんち〟の行くべき道は？　音楽性かカリスマ性かバラエティシャンか？

一同「ウーム」

小畑「チャンスはボクらにあると見たッ！」

寺西「だから、4枚目のアルバムが大事やね。クィーンでいうたら『オペラ座の夜』やッ！　ツエッペリンでいうたら「4」やッ！　エライこっちゃッ！」

一同「エライこっちゃッ！」

大いなるブレイク・ポイントがもうすぐせまっている。どうする〝ずかんち〟、どうなる〝ずかんち〟！（つづく）





おもしろいことに、その土地その土地によって、ロック・バンドにもいろいろな特色があるものだ。

大きくいうと、イギリスのバンドとアメリカのバンドを較べても、どこかに〝こっちがアメリカで、こっちがイギリスだな〟と、なんとなくわかる雰囲気がある。

また、日本の国内でも、大阪といえばヘヴィ・メタル系やブルース系のニオイがするし、博多といえばブルースとロックン・ロールをベースにした〝めんたいロック〟の味があるし、東京の三多摩地区にはロックン・ロール系のイメージがある。

こういうふうに、その地域によって、それぞれなんらかの特色があるのだが、シャケが育った東京郊外の埼玉県南部といえば、70年代の初期の頃から、ロック・コンサートやイベントを開催する団体である〝浦和ロックン・ロール・センター〟の活躍で、けっこうロックが盛んな土地柄だったといえる。

いい意味で、〝来るものはこばまず、いいものは素直にいい〟という考え方が、〝浦和ロックン・ロール・センター〟の持ち味だったし、その地域のロック・ファンの基本姿勢だったのだ。

「ずっと、埼玉県の南部で育って、浦和ロックン・ロール・センターに刺激された部分があってさ。そのへんの連中と集まってコンサートをやったりしていたんだ。オレは、浦和ロックン・ロール・センターには、末期にちょっと参加した程度だよね」

ロック・ミュージシャンとは、本質的に群れることのできない人種でもある。バンドという、社会的な形態を取らなければ成り立たないことをやりながらも、自分自身と他の者を、ハッキリと差別化することによって、自分自身の創造性を育てていくものだ。

シャケの中にも、そういったロッカー本来の性質が、どんどん芽を出してきたという。

20歳くらいから、セミ・プロという感じで、音楽事務所に籍を置き、プロのバンドとコンサートをやっていたシャケだったが、なかなかプロとしてレコード・デビューするチャンスはめぐってこなかった。

「飽きっぽい性格だから、ダメだったら次のことをやって、それに飽きたらまた違うものっていうふうにやっていたんだけど、そうこうするうちにレベッカを作ったんだ。

最初はユカイくん（ダイアモンド・ユカイ）と一緒にやろうと思っていたんだけど、練習をちょっとやったら、ユカイくんがやめちゃったんだよ。それで、NOKKOがいたから、NOKKOに声をかけてさ。

そのときに、ヴォーカルが女の子っていうバンドで、オレが考えていたようなバンドは、日本にはいなかったからね」

シンガーが女性で、あとのメンバーが男というバンドは、日本の音楽シーンでは、けして珍しいものではなかった。しかし、10歳のときに、ショッキング・ブルー（数年前にバナナラマがヒットさせた「ヴィーナス」のオリジナルをヒットさせたオランダのバンド）のビッグ・ヒット「悲しき鉄道員」が大好きで、80年に「愛しのキッズ」を世界的に大ヒットさせたプリテンダーズのサウンドに衝撃を受けたというシャケだけに、それまでの日本にはなかったタイプのバンド・サウンドを作りたいと考えたという。

「あれは70年の夏だったよ。その夏に、オレはドロップ・アウトしちゃって、ロックを聴きはじめたりしたから、すごく覚えているんだ。それで、その頃大好きだったショッキング・ブルーの曲と、プリテンダーズがだぶって感じられて、そこからレベッカにも、結びついていったんだ。

ラッキーなことに、CBSソニーの人が、たまたまコンサートを観にきて、電話をくれって言って名刺を置いていったから、その人に電話したんだ。それで、CBSソニーに言って話して、〝やろうか〟っていう話になってね。ところが、その後でディレクターっていう人が出てきて、その人は昔GSをやっていた人だったんだ。GSっていうのはロックじゃなくて、芸能界でしょ。それで、そのディレクターの言うことが芸能界だったんだ」

もちろん、シャケはプロとしてデビューしたかった。それに、CBSソニーといえば最大手のレコード会社でもある。そういうところからの話が来れば、普通のアマチュア・バンドならば舞い上がってしまっても当然といえるだろう。

メジュー・デビューというおいしいエサを見せられたレベッカに、そのディレクターはいろいろな要求をしたという。

「曲は良くないから、こっちで用意する。洋服やイメージも決める。NOKKOにはすご



Casino Drive Story Vol.2 シャケのバンド遍歴

シャケのアメリカン・ドリームはカジノ・ドライブにつめ込まれている……。前号では彼がどれだけワールド・ワイドにバンド活動をしていくことにこだわっているのかをカジノ・ドライブ結成にあったての話を聞くことでお伝えしたが、今回はその"Why"の部分を彼の過去のバンド──レベッカ、レッドウォーリアズを通して探っていきたいと思う。

Photography **Masahiro Fujita** Text **Yoshiyuki Ohno**

äke"KOGURE

最初はユカイくんと一緒にやろと思ってたけど、ちょっと練習したら彼がやめちゃって、それでNOKKOに声かけてさ、そうやっていくうちにレベッカができたんだ。

く可能性を感じるけれど、ドラムとベースはパッとしないから、メンバーは変えよう。オマエはそのままいてもいい」

彼がシャケに言ったのは、おおむねこんな感じのことだったという。もし、シャケがロッカーではなく、たんなる〝プロになりたがり症候群〟のバンド小僧だったなら、簡単にそのエサに飛びついていたかもしれない。

「オレは、その頃でもいつでもそうだったけれど、自分ではギタリストである前にソング・ライターだと思っているからさ、曲には自信を持っていたんだよね。

そういうふうに自分のことを思っていて、21歳か22歳の頃にそういうことを言われたら、どう思うかわかるよね。〝ゴイツら、わかってない〟って、思うよね（笑）。

それで、〝もう、こんなんだったら、日本なんかじゃロックはやれない。オレはアメリカに行く〟って、その瞬間に簡単にそういう発想になっちゃったんだよね（笑）」

日本でバンドをやることに幻滅を感じたシャケは、親や他のメンバーたちにも内緒で、NOKKOと共にアメリカに旅立った。

「その頃って、サンセット・ストリップにあるモーテルに住んでいたんだけど、ロスアンジェルスにロックがぜんぜんなかったんだ。それで、たまたま知り合った黒人のバンドに入って、パンク・バンドをやっていたんだ。

最初のうちは、バンドがやれるだけでうれしかったんだけど、だんだん〝これをやりに来たわけじゃないんだけどなぁ〟っていうのが大きくなってさ。それに、いろんなカラミがあって、オレの友達なんかからも、〝また行かせてやるから、とにかく帰って来い〟って言われたりしてさ。

でさ、〝オレは一生日本には帰ってこないぜ〟ってようなことを言ったくせに、1ヵ月半くらいで帰ってきちゃったんだよ」

いったんは、日本に帰ってきたものの、ニューヨークに行こうと考えていたシャケは、肉体労働をやりながら、そのための資金を貯めていたという。

「そんなときだよ、レベッカのメンバーから電話が来て、デビルスのサポートで横浜でライヴをやるから、オレとNOKKOに出てくれないかって言うんだ。それでやるっていうことになって。アメリカに行くまでに1回くらいやってもいいだろうと思ったんだ。それでやり始めたら、すごく良かったんだよ」

このときに、レベッカとしてまたバンド活動をやる話がなかったとしたら、80年代の日本の音楽シーンも、かなり変わっていたかもしれない。とにかく、シャケを夢中にさせる音が、そこにあったのだ。

「だんだん本気になって、〝これならやっていってもいいかな〟って思っているところに、またまたCBSソニーが現れてね。今度はロック専門のレーベルでやろうっていう話でね。

それでエッグマンなんかでライヴをやり始めてね。結局レコーディングに入ったのは、次の年（83年）の暮れだったよ」

その頃、CBSソニーは、現在はアレンジャー／作曲家として活躍しているベーシストの後藤次利をプロデューサーに迎えて、フル・アルバムではなくミニ・アルバムで新人バンドを送り出すという、新しいレーベルを作ったばかりだった。レベッカは、このフィッツビートというレーベルからの新人として、84年5月に『ヴォイス・プリント』でデビュー。続いて『NOTHING TO LOOSE』をリリースした後、突然おかしな事件が持ち上がったのだった。

「2枚目が出た頃から、コンサートをやっても観客の動員が増えてきてさ。でも、結局のところ、まわりの見方は、前に誘われた頃と変わっていなかったんだよ。NOKKOにはすごく可能性があるっていう。

音楽はオレが作っていて、いつもディレクターやなんかと大モメしていてさ。それでもライヴ・ハウスで300とか400人も入るようになって、盛り上がってきてはいたんだ。

結局、まわりが判断したことは、オレがいなくなれば、NOKKOがもっと売れる可能性があるって見たんだろうね。それで、ある日オレはクビになったんだよね」

レベッカから、シャケとドラマーのコンマがクビになるという、ある意味ではいかにも芸能界の陰謀めいた事件が起こったという。

「でも、あのときにクビにならなかったら、今やっていなかったかもしれないしね。ただ、もっとオトナとして、ちゃんとしたやり方があったんじゃないかと思うよ。もっと正直に言って欲しかったね。今でも、その部分だけは納得できないからね」

何にも縛られることがなくなったシャケには、アメリカに行くか、もう1度バンドを組むかという、ふたつの選択があった。そして、彼はかつてレベッカを始めようと考えたときに、少しだけ一緒にやった田所豊（ダイアモンド・ユカイ）を誘って、レッド・ウォーリアーズを結成したのだった。

「オレが日本にいる理由っていったら、ユカイくんがいるっていうことだけだったからね。だからユカイくんに、こういうことがあってやめたんだけど、一緒にやらないかって言ってね。

コンマくんとは、そんなに仲が良くはなかったんだけど、そのときに〝オレは心を入れ換えて本気でやるから、絶対にオレにやらせてくれ〟って言うから、コンマくんがドラムで入って。ベースはユカイくんが、知り合いでいいヤツがいるからっていうんで、キヨシくんが入ってきて」

85年の2月末に、レッド・ウォーリアーズは力強く立ち上がった。過去を振り切ったかのようなシャケのギターと、カリスマ性を秘めたユカイのヴォーカルが、独特の輝きを放っていたレッド・ウォーリアーズは、アマチュア時代から、順調にライヴで成長していった。レベッカのファンしかいなかった最初のうちにホールでのコンサートを成功させるほど、彼らはライヴ・バンドとしての地位を確立していったのだった。

「レッドの頃でも、いつもアメリカに行って、バンドをやりたいと思っていたんだ。子供の頃からずっとそうだったようにね。

ただ、レッドのときに、ロンドンに行ってビデオを撮ったときに、すごく豪華なホテルに泊まったりしていて、〝日本でやっていても、こういうことができるんだ。このままでもいいじゃないか〟って思った瞬間もあったよ。でも、そういう考えは一瞬だけで終わったけどね（笑）」

86年10月に、アルバム『LESSON1』でデビューしたレッド・ウォーリアーズは、89年10月30日・31日に行なった、日本武道館でのコンサートを最後に解散するまでに、5枚のアルバムと2枚の12インチ・シングル、6枚のシングルをリリース。

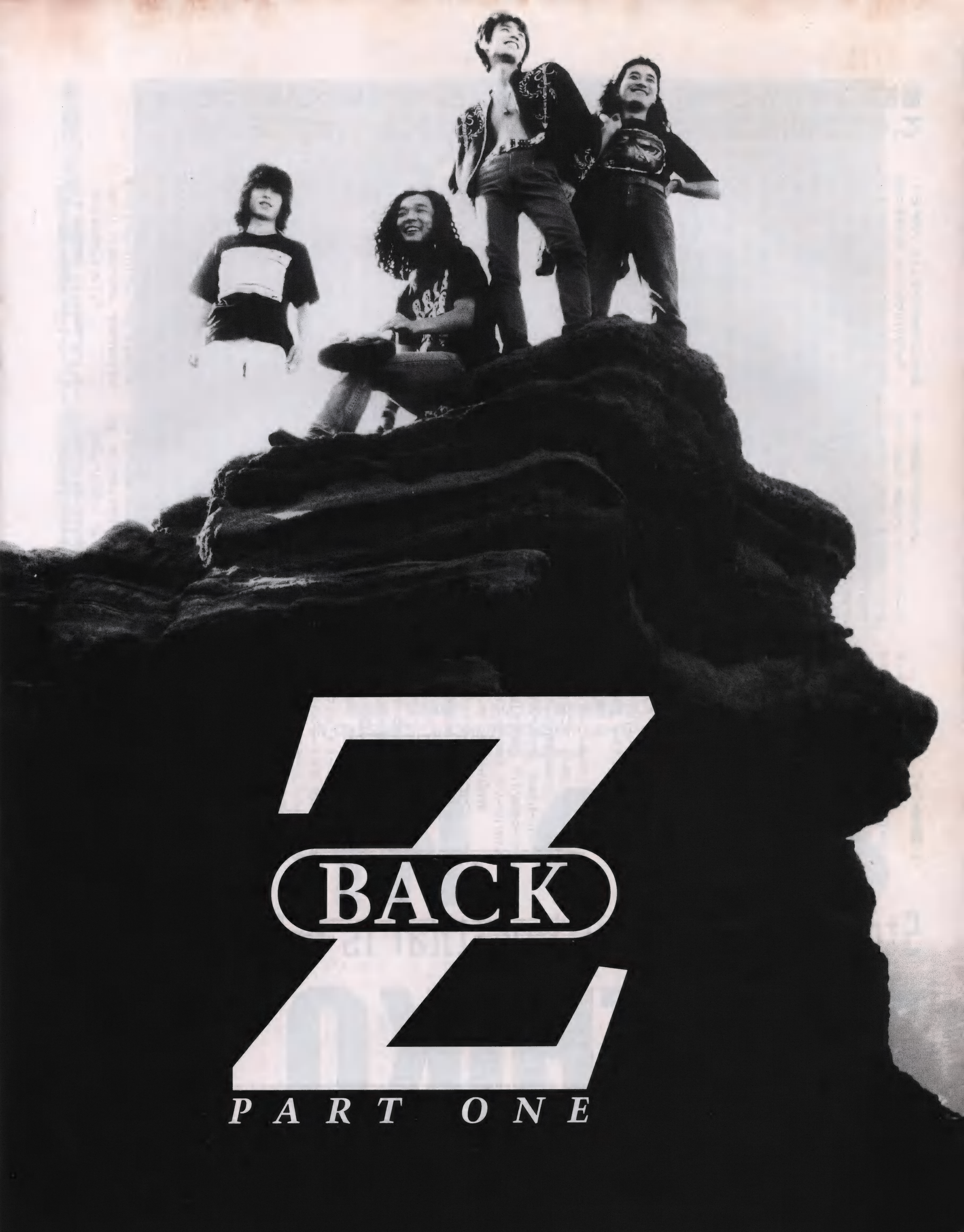
日本には珍しくロックン・ロール・バンドとしての地位をちゃんと築くことができたバンドとして、レッド・ウォーリアーズの名前は、日本のロック・シーンに深く刻み込まれている。

「どうしても、アメリカに行ってやりたかったんだ。レッドのメンバーにも、一緒に行かないかっていう話をしたこともあったよ。でも、結局はこういうことになったからね。だから、解散した次の日には、オレはロスアンジェルスに飛んだんだよね……」

（次月、いよいよ最終回！）

Story of Casino Drive, that is A Long Drive!

TAKEHIKO"SH


BACK
Z
PART ONE

Z-BACK

最初は５人で組んで、編成がストーンズやなんか～（笑）って喜んでたんですよ。

Z-BACK――いやあ、いいバンドなんだワ、コレが。…てえことは先日（９月18日）に発売された彼らのセカンド・アルバム『二枚目』も、いやはや、いいんだナ、コレが……てな具合ですよ。サウンド面に関しては、百読は一聴にしからず、ですから、ゼヒ皆さんご自分でCDをチャックして欲しいんですが、ここでは、「Z-BACKってナニ!?」という読者のために、ボーカル／南澤時正の言葉を借りて、即効のZ-BACK講座を開こうっつー算段です。題してZ-BACKのおすすめ、パート１でゴンす。間違ってもZをTに変えるなよ。

Photograph **Yukio Fukuzato**　Text **Makoto Shimomura**

—Z-BACKとは何ぞや？　というテーマで今回は話をしていきたいんだけど、バンドを結成した当時はどういう音楽を目指していたの。先輩のめんたいロックのバンドとか、北九州という地域性みたいなものは意識した？

時正　意識というか…ルースターズにはやっぱり憧れましたね。だけどやっぱ最初バンドをやる時はローリング・ストーンズみたいなバンドしたいという気持ちが強くて「俺はミック・ジャガーになりたい」って単純に考えてて。Z-BACK組んだ時も最初は5人で組んで、編成がストーンズやないか～(笑)って喜こんでたんですよ。

—あぁ、最初はストーンズと同じ編成でカバーとか演ってたんだ。

時正　そうです。それで、その後バンドを続けていく中で、ギターの奴が抜けて4人編成になる時に「じゃ俺もギター弾こうか」という感じで弾きだしたんです。

—じゃそれまでは完全にボーカルのみだったの？

時正　ボーカルしかやりませんでした。ようするにミックのようなスタンド・マイクで派手に動き回るっちゅうね。(笑)その頃はロッド・スチュアートとかにも憧がれてましたから。

—その時はすでにZ-BACKという名前が付いていたの？

時正　そうです。最初にメンバーと知り合ったのは北九州市の門司区というところにあったコバト楽器店というところで。そこでなんとなくバンドになっていったんです。その時の楽器店の店員で僕らに何かとアドバイスをしてくれた人が、今の僕らのマネージャーの浅川三四郎さんなんですよ。」

—Z-BACKの意味というか、バンド名の由来というのはどういうところからきてるの？

時正　最初この「ジー・バック」というのは「ZWIE-BACK」というスペルだったんですよ。それは高校の授業の時に使ってたアンカーという辞書があったんですよ。それのいちばん最初の言葉で、意味は最初に戻るということなんです。でも「ZWIE-BACK」というのはちょっと長いかな、憶え辛いかな、と思って。あとT-レックスの例もあるし、簡略化してZ-BACKにしたんです。ほらブギーとかブルースという言葉をわざとバンド名に入れて、とんなジャンルの音楽演ってるか、表現するようなバンドがいますけど、僕らはジャンルの匂いがあんまりしない名前がいいかな…と思って。それに最初は憶えにくいかもしれないですけど、色々な意味に受けとれると思うし…それでこれに決めたんですよ。

—バンドのサウンドの変遷というか、現在の4人になってから、上京するまでの間のZ-BACKの音楽性というのはどういう方向性になっていくの？

時正　えーと、結成して2、3年の間は曲作りにしても、僕がアコースティック・ギター1本で作って、スタジオに持っていってそれぞれのパートのフレーズを各自が詰めていくという感じだったんですけど、今のメンバーになる少し前、僕がひとりでロンドンに行ったんですよ。それで帰ってきてから僕がエレキ弾くようになって、その後は、なんか逆にスタジオに全員で入ってジャムしながらサウンドから作っていこうみたいな部分も芽生えて、その後はだいたいが後者の作り方になってきたんですよ。自分の中ではバラードは家でひとりである程度作ってきて、でもビートのあるロックン・ロールはスタジオでゼロから作る、という…最近は全く分かれてるところありますから。曲の傾向によって作り方も違うんです、僕の場合。

—デビュー作の『粗品』に関して言えば、やっぱりメロディーが先行してあって、あとから歌詞を付けるというパターンが多かったの？

時正　前は言葉そのものがメロディーを持っていると思ってたところがあって。僕が思ったことを素直に言葉にすると、その言葉にはすでにメロディーがあって、あとでまたメロディーを付けようとすると、逆にそのメロディーが言葉の邪魔をしてしまうんじゃないか、という考えがあったんですよ。だから最近はメロディーをあれこれ考えるという事は減りましたね。で、メジャーになってから…というか、『粗品』を作る時もそうだったんですけど、東京に移り住んでからは、割とギターを持たずに、鼻歌でメロディーを作ることが多くなりましたね。浮んできたものを感覚でキャッチしてフニャフニャとうたってみるんです。それでカセット・テープを回して、鼻歌で1曲通すんです。

—歌詞が全くない状態で？

時正　だいたいワンフレーズだけは言いたい事が決まってるんですけどね。なんか最初に思いついた出来事の衝動で歌につながるわけですから、そのきっかけとなるワンフレーズはあるんですけど、それとは別に鼻歌でメロディー・ラインが浮んでくるんですよ。僕にとってそういうやり方がいちばん合ってるみたいで。一度録っても、鼻歌だから何度も塗り変えられるし、最終的に完成させる前にメロディーが邪魔なら言葉を優先して曲げていくし。とにかく当分の間はメロディーは先にあっても、最終的に言いたい事を優先していきたいと思ってるんですよ。

—Z-BACKの歌というのは初期の頃から日本語の持つ意味合いというか、日本語でうたうという事に関してすごく執着しているように思えるんだけど、安易に英語を使わねえぞ！　みたいな決意みたいなものはあるわけ？

時正　英語の深い意味がわかったらもちろん英語でも歌いたいですね。今は自信がない、と言ったらおかしいですけど、責任が持てる範囲というのは、やっぱり僕の許容量の日本語というか。だったら解り易い簡単な英語を使えばいい…という意味合いじゃなくて、その「どっちが魂がのっかるかな」という部分で判断してるだけなんですよ。で、どうせなら英語圏の人の気持ちの中にも伝わる…本当に外国の女性にも感情的な部分が伝わるような深いものじゃないと嘘になると思うし。僕が自分の周囲の仲間とか、友達とか自分自身に向けてうたう歌というのはやっぱり日本人の自分なんで、環境も含めて僕には日本語がフィットしてるんだなあ…と思えますから。そういうところで自分をさらすのは日本語じゃないとダメなんでしょうね。

—デビュー作の『粗品』から最新作の『二枚目』に至る1年間にはどういう気持ちの変化があった？

時正　具体的な部分で言うと、ここ1年位いつも僕が考えてたのは「職人になりたい」ということだったんです。音楽家というかアーティストと呼ばれる人になることでより深く自分を見つめて、色々な角度から様々なものを吸収していきたい…とそう思ってきたんです。で、それは僕個人のことなんですけど、Z-BACKの本質というのは、一〇〇%我がままを通すだけの理由があって、それぞれが好きにやって、笑顔が出ればいちばんカッコイイと思ってるんですよ。それはこの1年ずっとそうでしたね。あと個人的な技術面に関しては「向上心がないといけない」と思ってますけど、それは各自それぞれがすごくがんばってると思うし、今回の『二枚目』というアルバムがそれをいちばん物語ってると思うんです。



ライブ・スケジュール▶10月26日／新宿パワーステーション　11月６日／大阪アムホール　11月29日／福岡都久志会館　トータル・インフォメーション▶03(3716)4000


ハートが二枚目 Z-BACK
Z-BACK
ジーバック
NEW ALBUM NOW ON SALE
[二枚目]
■ジーバックのセカンド・アルバム。東京Cityインディアン他全12曲
CD:FLCF-30158 ¥3,000(税込)
NEW SINGLE 9.18 RELEASE 東京Cityインディアン
CDSg:FLDF-10222 ¥1,000(税込)
FOR LIFE



BY-SEXUAL

シングル"Deep kiss"に続き、アルバム「4D Pocket」をリリースしたBY-SEXUAL。ドラえもんのポケットみたいにいろいろなものがつめこまれたこのアルバムは無限に広がる不思議な世界。この辺でちょっと彼らの心という4次元の胸ポケットにある世界を覗いてみませんか？

photography **Hitoshi Iwakiri** Text **Dai Sato**

Styling **Kiichi Arai (K's office)**

●衣装協力 HEAVEN (03-5411-0988)
Twins Acoustic (03-3407-4777)

BY-SEXUAL

4D POCKET はミステリーゾーン!?

『4次元ポケット』……その何となく懐かしくて不思議な言葉は，僕たちが子供の頃の『気持ち』につけられた名前だったんじゃないだろうか。僕たちの冒険だったり夢だったり心の中に限りなく広がっていた『気持ち』は，まさに『ドラえもん』の世界だった。

ここで彼らにアルバムの音楽性について一曲づつ解説してもらうのは簡単だが，意味のない事だと思う。何故なら，彼らの『気持ち』は音楽というカタチのないモノの中にちゃんと入っているからだ。その感じ方は，聞いた人の数だけキリがなく増え続けるし，その全ての『気持ち』が答えなのだ。あとは黙って CD を PLAY すればいい。でも，ちょっとだけ彼らの心（4次元）の中を覗いてみたい。その派手な胸のポケットの中には，どんな『気持ち』という名の4次元が隠れているのだろう。限界がなく広がっていく彼らの音楽と世界に姿カタチからロックとかいう下らないジャンルなんて国境創るのはヤメてサ……。





4D ポケットはキリのない世界で宇宙にも似たモノなのだと思う

SHÖ

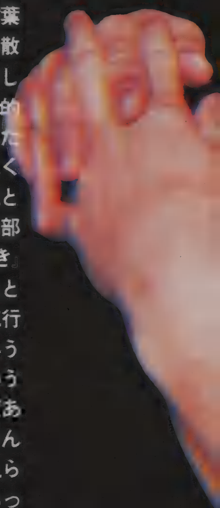
『4次元ポケット』って存在が、昔からというか一番初めに感じた謎というか疑問だったというか。インパクトありましたからね『ドラえもん』は（笑）。だいたい4次元なんて見たことあるヤツいないのにドラえもんではうまいこと表現していたな……という感じですか。で自分で、4次元を別の言葉で言うとしたら『キリのない世界』というか限界のない世界という『宇宙』にも似たモノなんです。それって



RYÖ

心は物質（モノ）として存在してないのに物質（モノ）としての人間を左右してしまう

4次元はまさに『ドラえもん』かな。本当にあのマンガが好きなんですよ。で，何話かは忘れちゃったんですけど，ドラえもんの4次元ポケットの中にのび太が入るっていう話があったんですよ。そしたら，そこはなんの事はない，ただの宇宙空間みたいな真っ暗のところに道具がイッパイしまってあるだけで……ブラックホールとかそういう感じとあまり変わらなかったという。だから，あの藤子不二雄ですら描き出せない4次元は……まさに誰も知らないモノであろうと。知らないとか描けないとか想像出来ないとか，そういう部分に凄く惹かれますね。それにも理由はないワケでですね。という例えば恋愛であったり人との出逢いの中での感情の動きであるとか，そういう答えのないモノに対する『心』の動きとか，そういうものが4次元的であったりすると思うんですが。まさに『心』というのは，物質（モノ）として存在していないのに物質（モノ）としての人間を左右してしまうんですよね。今回のアルバムにこの言葉を使ったというのも，いろいろと理由なく散らばってしまった楽曲（モノ）が，人間としての物質（モノ）を動かしたという4次元的であるという事でいいやという感じでついたワケで。嘘から出た真実というか。なんとなく4次元と選んだけど，そこに答えがあったというか。今回は，カタチにならないという部分を表現したというか。『立て』『横』『奥行き』という3Dの現実世界を超えると何があると言えば4Dしかないワケで。3次元以上に行けないというのが，まさに人類の限界というワケだとしたら，それを超えた4次元というのは，カタチとしてないモノ『気持ち』であったり『心』であったりすると思っているんですよ。ただ言い表せないとか誰にも伝えられないというのが4次元以上のモノであって，例えば8次元空間から宇宙人が攻めて来ると人間が想像したら，その瞬間に8次元を創造している事になるというワケですね。



DEN

全ての物事は発想してから存在し，その意味なんて後から考えていけるものなんだ

4次元というのは自分にとっては『気持ち』である。例えば、胃が痛くなるとか胸が苦しいとか。形にならないモノですね。『心』とも言えるかもしれないですけど……ドラえもんのポケットもちょうど体の真ん中にありますからね。そのいろいろな『想像』っていう事自体が頭で考えてるのか心で考えてるのかわからない。だいたい心がハートってくらいだから心臓にあるのかと思ったら、教科書には右心室とか載ってない。でも、じゃ脳の中なのかと言えばそれだってわからない。ということは、自分自身が一番不思議な存在として歩いているワケだから……。自分が一番気持ち悪い（笑）。無意識に生きてるなんてヘンですよね。そのヘンがちょうど4次元なんではないかなという。人間はいろいろと創って来たけど、人間だけはまだ創れないという……。霊的な意志は残るという話だったり、死ぬとただの肉の塊になるその時『気持ち』はどこにいったんだ？ という。でも体重はちょっとだけ軽くなるらしいですよね。それが『心』なんでしょうか？ 幼い頃からそういう事を考えるのが好きな子供だったんですよ。というワケで、コンセプト的なモノって毎回ろくなのがないんだけど、偶然今回『4D Pocket』というのが想い浮かんできて今まで一番突っ込まれないという（笑）、まぁ4人で4Dでねとか、『4次元ってあなた見たことないでしょ？ これがそうなんです』とか（笑）……便利ですね。誰も見た事がないと

いうのは、誰もが創れるという事でもあるんですね。全ての物事は発想してから存在するワケですから、その意味は後から考えられてゆくものですから。今回もそうだったワケですね。勝手な発想で出来てしまったモノが、偶然『4次元』だったということが後から考えられたんですよ。それでいいんです。人間によって考えられた事は、常識で立証出来ないモノでも全て存在しているんです。それが4次元的な存在という事ですね。

いうのも、小さい頃からキリのない話をするのが好きだったりして。例えば……今のこの瞬間に起きてる自分はホントは寝ているんじゃないか？ この瞬間は夢なんじゃないか？ その寝ている自分が起きたらどんな世界なのか？ とかドンドン答のない話をキリなく続けてゆくというヤツが好きで。その頃DENとよく話していたのは、宇宙っていうのが大きな人の胃の中にあるんだろうとか、でその巨人というのが、もしかしたら自分なのかもしれないとか、そういう話を朝まで盛り上がってしていたんですよ。結局、結果は出ないんですけど（笑）。それが良かったりして。あと3面鏡で合わせ鏡とかやって無限に続く自分の中に違うことやってるヤツがいたりしないか探したりして、でも結構一人でやってると怖いんですよね。そういう考える事ってドンドン自分だけの世界に入っていってしまう。今でもそうなんですよね。自分以外の全ての人間は自分が創ったんじゃないか、自分が死んだら世界もなくなってしまうんだ。そういうヘンに自閉症ぽいところがあって。でも、そういう世界の限界って誰も見た事がないんですよね。歴史にしたって本にあるけど見たり感じたりする事は出来ないワケだから、本が嘘だとしても誰にもわからない。今回は、そういう誰にもわからない限界のない世界を自分たちなりのやり方で表現したかったんですよね。

BY-SEXUAL
4D POCKET はミステリーゾーン!?



NAO

昔のマンガっぽい“なんでもあり”の部分が今回のアルバムなんだな

4次元のイメージはですね。サイケデリックというか，タイムトンネルな空間というか。その空間の壁に手をついたと思ったら，逆の壁から手が出てきちゃうとか。空間がメビウス状態になっている感じ。例えば，朝起きて食卓にみそ汁とかあって食事して「じゃあ行ってきます」ってドアを開けて外に出るとまた食卓に戻ってて，しかもまたみそ汁がちゃんとあったりする。でしょうがないからまたみそ汁すすって(笑)，で永遠やってたりする……そんな感じかな。もちろん4次元ポケットっていう言葉の素は『ドラえもん』なんだけど。その言葉の意味するところは「なんでもアリ」っていう部分なんだよね。アルバムタイトル決める時に毎回なんだけど，コンセプトがないから「どうしよう」ってことになって。しかも今回曲調も「とっ散らかった」(笑)というか，いろんなのが入ってるから。まぁ，なんでもアリだなと。じゃ4次元使っちゃえってことで。世代的にも『ドラえもん』って凄く大きかったし。でも，何故だか自分は，最近の「あったまテカテカ……」より，昔の頭が異常に大きかった『ドラえもん』の方がよく覚えてる。主題歌が「ぼっくのドラえもんがまっちをあるっくぅ〜」って(笑)ヤツね。リアルタイムじゃないハズなんだけど。なんか昔のマンガとかを凄くよく覚えてるヒトなんですよ。あの頃のマンガってアンダーグラウンドですよね(笑)。虐げられていたし，それに危なかった。『バカボン』とか。それから『サスケ』とか『妖怪人間ベム』とか。よくセリフが途切れるヤツ(笑)。ヤバい言葉の嵐だったりしてる。タイガーマスクにもあったな。ホントなんでもアリって感じだったと思う。で，最近のアニメって，明るくなったりヤバい部分がなくなったんじゃないかな。だから，昔のマンガの方がインパクトが強いからよく覚えてるんだと思う。そういう昔のマンガぽい「なんでもアリ」な部分が今回のアルバムにはあると思ってる。





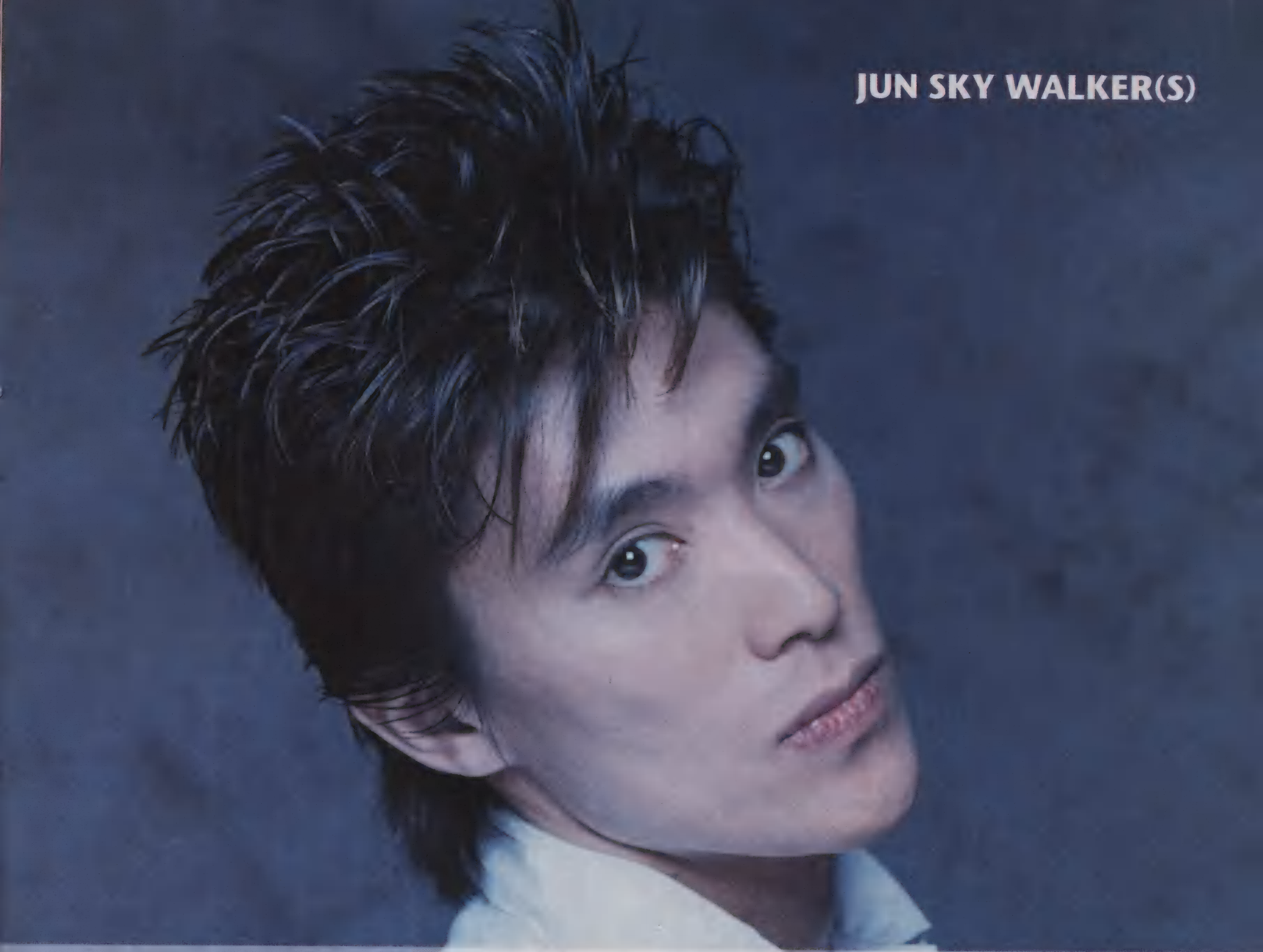
JUN SKY WALKER(S)

MESSAGE

メッセージ

ジュンスカが新作のレコーディングに着手していることは，かねてより本誌でもお伝えしてきたが，その「名刺がわり」とも言える先行シングルが，10月21日にリリースされる。タイトルは「メッセージ」。作詩&作曲／寺岡呼人（詩は宮田和弥と共作）のポップ・チューンだ。今月は，この話題について全員インタビューを試みた……のだが。……ちなみにこのシングル，カップリングの「夏の日の午後」はアルバムには収録されない予定だし，「メッセージ」のカラオケもついてるのよ，ええ。

Photograph **Hideo Canno** Text **Miho Utsunomiya** Styling **Ki-ichi Arai** Hair&Make-up **Kiyomi Yoshikawa**



JUN SKY WALKER(S)

流れを汲んだ仕上がり

レコーディング中という、ミュージシャンにとって最もナイーブな、はたまたナーバスな時期にズカズカ取材に行くというのはいかばかりであろう。「行ってしまったオマエが言うなよっ」という声も聞こえてきそうだが、先行シングルをヤリ玉にあげてあーだこーだとエラそうに言われては、心中穏かではあるまいて。

ジュンスカのニュー・シングル「メッセージ」(C/W「夏の日の午後」)をソースとして、ワタシはインタビューを行ったわけだが、無神経な質問の多くにみなさんマイッてしまわれたようだった。その〝マイッた〟がどのようなカタチで表現されたかというと、〝あくびをする〟〝時計を見る〟〝突如無言になる〟〝カップラーメンを食べる〟等々で暗に「早よ終われー」と、それこそメッセージされていたのだった。

教訓・レコーディング中のミュージシャンには、ネバーネバー、会ってはいけない。

――このシングルはどんなふうにして選ばれたんですか?

宮田 多数決で。スタッフの意見と、僕らの意見を総合して、これに決めたんですけど。

森 いつもと一緒で、アルバムを作りましょうってことになって、作っていって、で出来上がったその中から、「じゃ、シングルはどれにする?」っていう決め方ですね。

――ということは、特別シングルだからっていうような作り方はしてない。

森 そうですね。

――いままでと雰囲気が違いますよね。ていうのは、すごく柔らかい印象があったんですけど。

宮田 そうねっ……まあ、アレンジとか、いろいろしてるから。

――ハモリとか、これまでより強調されてるせいもあるかもしれませんが、いい意味でポップ感があるなぁ、と。

宮田 あ、ホント? 自分ではねぇ、いちばん最初に曲をやって行く段階よりは、出来上がってみると、近づいたと思ったんですけど。

――近づいたのはイメージに?

宮田 そうそう。最初はそれぞれに曲を出してきますよね? そうすると、呼人なら呼人の、森クンなら森クンの〝くせ〟みたいなものが強くて、それは結構バラバラだったりするんだけど、やっぱりやってくうちにこなれてくるわけ、その曲に対してね。だから、僕はいい感じにこなれたっていうか。「メッセージ」とか、ギターの入り方にしても新しいところもありつつ、いままでのジュンスカの流れを汲んで仕上がってると思いますし。

――今回、佐久間(正英)さんをプロデューサーに迎えているわけですが、何か具体的な話し合いはされましたか?

森 いや、これといって話しはしてないですけど…。大体、リハをやってる頃のテープから、やる側の〝こういうニュアンス〟って感じが出てて、それをよりよくしていこう、みたいな。だから例えば、「この楽器を使ったほうがいいよ」とか、そういう話はしましたけど、あんまり具体的な音像の話はしなかった。

寺岡 一回デモ・テープを録ったんですけど、トータルでやってくって感じで、特にシングルだからっていうのはなかったんですよ。そのとき「メッセージ」がシングルになるとも思ってなかったし。ただ、リズム録りとか、いままでより時間がかかったっていうのはありましたね。小林クンとかも納得いくまでとりあえずやって、その後で細かいところを佐久間さんに聴いてもらうっていうような。

――時間がかかったのは、自分の欲求が高くなってるからですか。

小林 それもあるし……ちょっと緊張してたっていうか。(笑)「メッセージ」を録ったのはスタジオに入った初日だったんですよ。やっぱり初日っていうのは、どうしても緊張するんです。まあ、いろいろと佐久間さんとも話をするようになってきて、雰囲気が変わってきましたけどね。

――それぞれの演奏や、歌に対して佐久間さんが発言することって、どんな?

森 えー……こうとかですね。(と言って、ピース・サインを出す)

――はあ。

森 こうとか。(と言って、グー・サインを出す)

――それは〝最高〟という意味ですか。(笑)

森 そうです。(笑)

――別にアドバイスされたりっていうことはないんですか。

寺岡 いや、あります、あります。それもベース・ラインとか、リズムの取り方とかいった基本的なことで、僕の場合は「もっと人の音を聴いてやったほうがいいよ」っ

MESSAGE



てよく言われましたね。

――ああ。

宮田　歌もそうでしたね。いままで僕はしゃくったりするクセがあったんですけど、佐久間さんに「もっとラクにスーッと歌うっていうのをやってみたらどうだ」って言われてね。で、歌ってみたら、思いっきり歌ったテイクより、ちょっと力を抜いて歌ったテイクのほうが、聴き較べてみると全然ボリューム感っていうのが違って、スッと飛び込んでくるわけ。そのへんは実際、佐久間さんの指導を受けて非常によくわかりましたね。

――新たな発見ですね。

宮田　そうそう。まあ、ひとつの発見であり、勉強になったことっていうか。

――「メッセージ」も「夏の日の午後」も歌としては簡単ではないでしょ？

宮田　すごい難しかった。「メッセージ」とかもホラ、歌い方として切ってく感じでしょ？　いままでの僕の歌い方だと、ロングトーンで曲線を描いていく、みたいな感じで、ヘンなクセがついてるわけでしょう？　ねっ？　まぁそれは味というか、技でもあるんだけど、一歩間違ったら自己満足的な世界になっちゃうわけで。

――森さんの場合は？

森　もう、ピックの持ち方から弾き方まで全部ですよ。

――ピックの持ち方まで？

森　そうです。いろいろ教えて下さいました。

――でも、そういう本当に基本的な部分って、かえって直すのが難しくないですか？

森　だから下手になりました。(笑)まあ、レコーディングのときは、結局自分のクセが出ちゃいますから、全然いままでのとうりなんですけどね。気持ちとしては直してるつもりでも、どうしてもちゃんと弾こうとすると、いつものような弾き方になりますから。

宮田　みんなそうなんですよ。そういうこく基本的なところをいろいろ言われたんです。

――ちょっとショックだったりは？

小林　そりゃグサッとはきますけどね。(笑)でも佐久間さんの言い方っていうのが、ホントに「ああ」ってうなずかされるっていうか、「そうか」って納得させられるんですよ。

――結構、淡々とした言い方をする人ですよね。

宮田　そうそう。なんかね、妙な説得力がある。「オレはそんなのやれねえよ」とか言わせない。神がかった雰囲気があるの。(笑)で、あの人って、ドラム叩かせても、ベース弾かせても、なにしろなんでも上手いわけ。しかも言うことは道理にかなってるから。でね、これは何かの雑誌で読んだんですけど、佐久間さんのモットーは〝人に優しく、音に厳しく〟なんだって。まさにそういうことをキチンとやってる人ですよね。

自分が聴きたい音楽を

――話が前後するようですが、そもそも佐久間さんにプロデュースをお願いすることになったきっかけは何なんですか？

森　何人か候補として名前が挙がってたんですよ。でもやっぱり、俺らも（アルバム全体のプロデュース依頼をするのは）初めての試みだから、ある程度こっちでわかる実績を残してる人がいいだろうと。そうすると彼は、スライダーズやBOØWY、ブルーハーツとかもやってきてる人だっていうのがあったから。

――これは私が勝手に想像することなんですが、とりあえずアルバムの先行シングルとしてこの2曲が出て。そうするとファンの人の中には、ジュンスカは変わった、みたいに受け取る人もいるんじゃないかと。

森　う－ん……まあ、俺らいっつも自分が聴きたい音楽をやってるっていうのが大前提だとしたら、それはそう聴こえるんだったらしょうがないかなぁ……。

宮田　だから次に出るアルバム全体を通して聴いてもらえれば、きっと納得できるっていうかね。全体像が見えてくれば、もっとハードな曲もあるし、バラードもあるし、そんなに変わってないと思うんですよ、自分達にしてみれば。確かにシングルとしていままでとは違うっていうのもわかるけれど、でもそれは僕らがよしとしてやったことで、ジュンスカがやる以上、ジュンスカのサウンドなわけですから。

というわけで。このシングルだけで、ジュンスカの次のアルバムを占うことはできないようだ。が、それにしてもワタシには彼らが新たなる世界を切り拓こうとしていると思える。それは、もっと柔軟性に富んだもっと表情豊かな世界だ。姿勢としての攻撃性にもつながるだろう。とりあえず、ニュー・アルバムを待ちつつ、4人へのぶしつけに反省。



X'mas ジュンスカからXmasプレゼント



パチ▶ロク特製

自筆メッセージ入りクリス・カード（5枚セット）が

抽選で1000名様に届きます

次号（10月27日発売）のパチ▶ロクは，ジュンスカさんの表紙&巻頭大特集（ピンナップ付）です。そいつを記念して，メンバーの自筆メッセージ入りクリスマス・カードを5枚セットにし，抽選で1000名様にプレゼントしようというハラです。応募には下にある応募券が必要になります。大切に保管しといておくんなまし。詳細は，そのジュンスカ特集号に掲載しますので，売り切れで手に入んない，なんてことがないように，発売日には本屋さんへダーッシュ。

詳しい応募方法はパチ▶ロク12月号〈10月27日（火）発売〉に掲載!!
ジュンスカの表紙&巻頭大特集号だ!!

この応募券を
大切にキープ

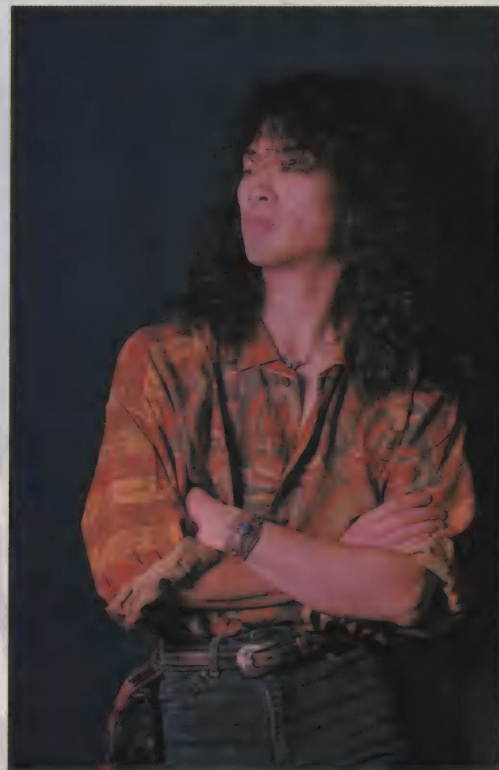
応募券
①
J(S)W
RR 11


unicorn
ISAMU TESHIMA
“眠れぬ夜”

手島いさむ 眠れぬ夜

**ユニコーンさんのシングル5連発を締め括る男・手島いさむ。
彼の最新インタビューと、最近の動向としては要チェック◎のギター・クリニックに関する
情報をお届けしよう。いやあ、さすがサムにーさん、発言に余裕がにじみ出ております。
詞のテーマも余裕ブッこいてるかと思ったら、目指したサウンド・フィーリングも
これまた余裕ブッこいております。今回の記事によって、1人でも多くの読者が楽しんで
もらえるなら、そりゃあもうアナタ、ワタクシどもは至福の喜びでございます。**

Photograph **Yukio Fukuza**　Text **Satoru Kannai**



サウンドとしてはフィル・コリンズ・プロデュースのクラプトン・バンド。詞のテーマは「朝、起きるのがツライ」。早起きは最大の美学です。(笑)

テッシーのソロである。

ユニコーンのソロ・シングル連続リリースの最後を飾るのが、本人曰く〝ビートルズで言うところのジョージ・ハリスン的ポジションにある男(笑)〟手島いさむの『眠れぬ夜』だ。

しかし、何においても最後の登場というのはツライものだ。先に優秀なモノが出てしまった場合の焦燥感や不安。それは、CDのリリースにしてもプロレスのメインエベンターにしても欽ちゃんの仮装大賞にしても、その状況に立った者の誰もが共有するプレッシャーなのだ。

「あれだけ審査員全員がベタボメしたあとに、オレの〝富士山の噴火〟という出し物が、ドラキュラに扮した岡田真澄に正当に評価されるのだろうか」

そんな、愛知県から夜行バスに乗って東京にやってきた自営業・福田一二さん(47)のような心の葛藤を、私はテッシーから聞きたかったのだ。そして都内の某スタジオで、スペースシャワーでOAされるギタークリニック講座の収録が終わったあとにインタビューを申し込んだ。

「えっと今回はですね、ソロ・シングルの話をメインにですね、先ほどのギタークリニックに触れつつ、〝ギターと私〟的なお話を語っていただきたいと思いまして」

「なるほど。『趣味の園芸』みたいなカンジですネ」

テッシーには、そんな葛藤はミジンコほどもないようだ。

☆

――えー、最初にソロの話が来たときに、連続リリースの最後ということでヘンなプレッシャーとかはなかったですか?

手島　いや、却ってすっげぇラクでしたよ。とりあえず5枚連続して出しますって話題になるじゃないですか。あーエビくんが何枚売れました、とかギャーッて騒ぐじゃないですか。第2弾は、第3弾はっていうカンジで。でも第5弾ぐらいになるともう飽きちゃうんですよ。(笑)あら、まだやってたの? みたいな。いいポジションだな、オレって。(笑)で、今回ソロをやって良かったのは、ソロのためのプロモーションという期間があって、今日みたいにテレビとか録ったりしたような1つ1つがすごい新鮮なんですよ。今までは民生がずーっと1人でやってきたこととかをやらざるを得ないという新鮮さがありますね。あと活動的にも「ソロもいいね、でもバンドの方がもっといいね」って思えるようになりましたし。バンドにおける自分の位置も改めて理解できるようになったし。

――なるほど。ではシングルの曲紹介をお願いすることにしましょう。まずはけだるいカンジのロックンロール・ナンバー『眠れぬ夜』から。

手島　この曲にはテーマが2つあってですね、歌詞に関するコンセプトと、オケに関するテーマという、似て非なるものがありまして。まず歌詞の方は、最近この〝時間が来ても眠れない症候群〟みたいな病気があるらしいんですね。それを元に、でも難しいことは言わずに「あー、朝の4時になっても眠れないんですけどー」とか「朝起きるとツラーイ」とか、業界人なら誰しも経験してることですが。(笑)「なーんか夜起きちゃうんですけどオ」ってカンジ。で昼間なんかダルーく仕事して、午後2時ごろになると「あ、眠ーい」と思ううちに5時ぐらいになって、おかしいなおかしいなと思いつつ、でも「じゃメシ食いに行くべ」ってことになって、食ったあと8、9時ごろに「1杯飲みに行こうか」というところで元気になってくると。で、悲しいかな午前2、3時まで飲んで、そっから風呂入って寝たら5、6時という。次の日出勤するのがまたツライ。～とまぁ、単にこーゆー現象を歌ってみたというだけです。(笑)

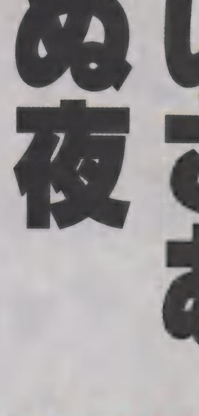
――じゃあ一種、日常のスケッチっぽい。

手島　そう、ボクの歌詞はそーゆーのが多いんですよ。割と日常的な。でも、総じて朝起きるのがツライというテーマが多いですけどネ。(笑)〝早起き〟はボクにとって最大の美学です。(笑)

――じゃあ、その崇高なる理想に近づくために書くと(笑)。

手島　今回はいろいろ考えましたよ。まず、朝起きれないのは何でなんだ。朝起きるのは根性である。ま、低血圧もあろうけれども、ある種根性ですよね。ということは根性ナシが最近増えてるんじゃないかと。すると、親の育て方に問題があるんじゃないか!? という具合に、いろいろ考えていくわけです。(笑)まぁ、とどのつまりは当の本人がしっかりしていればいいってことなんですけどね。(笑)

――(笑)えー、もう一つのオケのテーマの





▲ちなみに、コチラ他の方々のシングル

の方は?

手島 これはですね、ギターを初めて買って演ってくうちに、やがてアリーナ、野外コンサートにステップアップしていくさまをオケでそのまんま表していくという。はじめに家で、ドラムマシンとギター1本で演っていたんだけど、おや!? ギターって実は簡単だったのネとか、いつの間にかメンバーも増えてサックスまで加わっちゃったのネという状態で、後半になるとホーンセクションありーの、サックスソロとギターが2本ウンダカンダやりーの、コーラスのねーちゃんはいるし、という状態で。

——この曲のイントロってヒジョーにヘンな始まり方ですよね。

手島 あれはね、最初ドラムマシンで〝どってんばってん〟ってやってたのを、じゃあ音変えてみるべってカンジで、自分の音源で音を出したらスクラッチの音が入ってたから使おうと思って。バスドラの音も情けないのがいーねってイジッてたらあーなったのです。だから4畳半からスタジオになり、そしてコンサートホールに変わって、いつの間にかアリーナクラスに、という発展の過程を追った曲ですね。一応目指したところはフィル・コリンズ・プロデュースのエリック・クラプトン・バンドみたいなのが肌触りがいいなとは思いましたけど。だからヒジョーにボクのプライベートが反映されている曲ですね。

——次に、インストの『Birds』ですが、何か映画のラストなんかでミョーに感動してるときに流れるような曲ですよね。

手島 全くその通りでございます。(笑) そういうところに使えるように意識して作ってます。(笑) 当初は息を「スゥーッ」って吸って止めて、今にも吐き出すようなカンジのものを作りたかったんですけど、冷静になって考えたら、テレビのエンディングテーマそのままだったという。メンバーに聞かせても、例えば中嶋悟引退! みたいな、ミョーにスローな映像が流れるような。でも意図的じゃなくて、あくまでも結果としてこうなったんですけどね。

——ところで、今回収録していたギタークリニックですけど、テレビ以外にも全国で開催するとか。

手島 そう、一応8カ所ぐらいでね。でも、ギターを教えるといっても、技術的なものはもう現在じゃ語り尽くされていると思うから、新しい奏法を知りたいというのならば専門誌でも買えば載ってるし、ビデオもいっぱい出てるわけだから、ボクが人様に言えるのは、弾くときの心構えというようなことしかないからね。テクニックがどーこーというよりも、ギターのことをもっとわかってほしいっていうのがありますね。実際、フツーの女の子でギターがどういう音を出しているかわからない子もいるから、それを知らしめるチャンスだと思ってます。

——確かに、ギターの構造から何から、すごく基本的なことを恐ろしく丁寧にレクチャーしてましたよね。

手島 うん、て言うか、ある程度弾ける奴は来る必要ネエ、っていうのもありますね。単純にギターに、興味を持ってもらえればいいなぁと思ってやってますけどね。コンサートに来てね、ギターとベースとドラムとボーカルとキーボードがそれぞれ分けて聴けるようになると、より深く音楽が聴けるようになるじゃないですか。別にそれをコピーしようとか思わないまでも、楽器弾かない人だって優秀な音楽リスナーもいるわけでしょ? その点で、特にボクの場合ギターの味方をしたいから、このクリニックを通じて一層音楽を楽しめるようになるのではないかと。それと、30才の男性と14才の女の子に、同じ聴き方しろってのが大体ムリな話でして、別にそのギャップを埋めるわけでもナシに、どっちも楽しめるものがいいんじゃないかな。あと、このクリニックでないカタチにしても、コンサートではボクら以外にも、たくさんのスタッフが動いているからこそ成り立っている、ということろまでわかってくれると楽しめるんじゃないか、っていうのもありますね。

——手島さんにとってギターというものは何でしょうか。

手島 やっぱりなくてはやってけないものですよね。ギターを持ってないと、まるで裸になってるみたいなカンジで果てしなく不安になるしね。

——最後に、手島さんにとって思い入れの深いギタリストというと…。

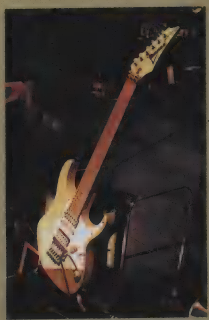
手島 やっぱリッチー・ブラックモアですよね。もー師匠というか、神であり親であり。(笑) 今でもリッチー節というか、アドリブとかで弾くとやっぱり出ちゃいますからね。一種リッチーの亡霊に取り憑かれているような。(笑)

サムにーさんの GUITAR + CLINIC

BOOING 手島いさむスペシャル
SPACE SHOWER TV

全国縦断中のギター・クリニックが、CS放送スペース・シャワーTVでもたのしめるぞ!! 放送日は下記のとおり。ここではその収録の模様をちょっぴりレポートしよう。また、これらに連動して「Birds」ギター・コンテストが開催されるゾ。詳しい応募方法はGIGS11月号に載っている。テクニック不要!!


▲番組の進行打ち合せをするサムにーさん。隣はディレクター氏。


▲これぞ世界に1台しかない名器、テッシー・スペシャル。


▲ギターの裏ってこうなってんのよー、との講議はスゴイ。


▲出た!! 15年前の究極ギター・プレイ、ライト・ハンド演奏だあ。


▶椅子に座ってギター弾くときゃきゃ、足を組むのが正しい。

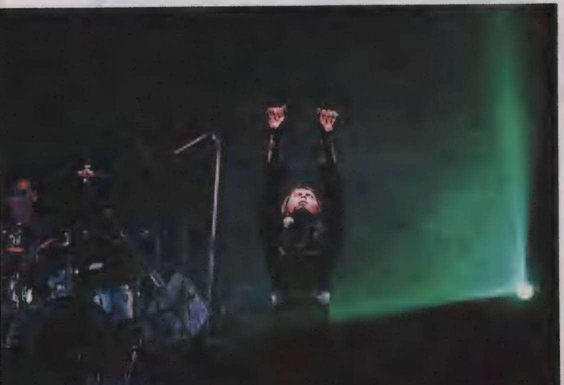
放送日時	10月5日	18:00〜19:30
リピート放送	10月8日	20:00〜21:30
	10月9日	23:00〜24:30
	10月10日	14:00〜15:30
	10月11日	12:00〜13:30



BUCK-TICK

CLIMAX TOGETHER YOKOHAMA ARENA
10&11TH SEP.1992

殺シノ調べツアー終了以来、久々にファンの前に姿を現わしたB-T。しかも、セットからメニューから演出から…すべてが2日間のためだけに用意されたスペシャル・ライブだったわけだ。そうなりゃ日本全国津々浦々、観ることができなかったファンへ、この模様をお伝えせずにはいられないのがパチ▸ロクでごわす。



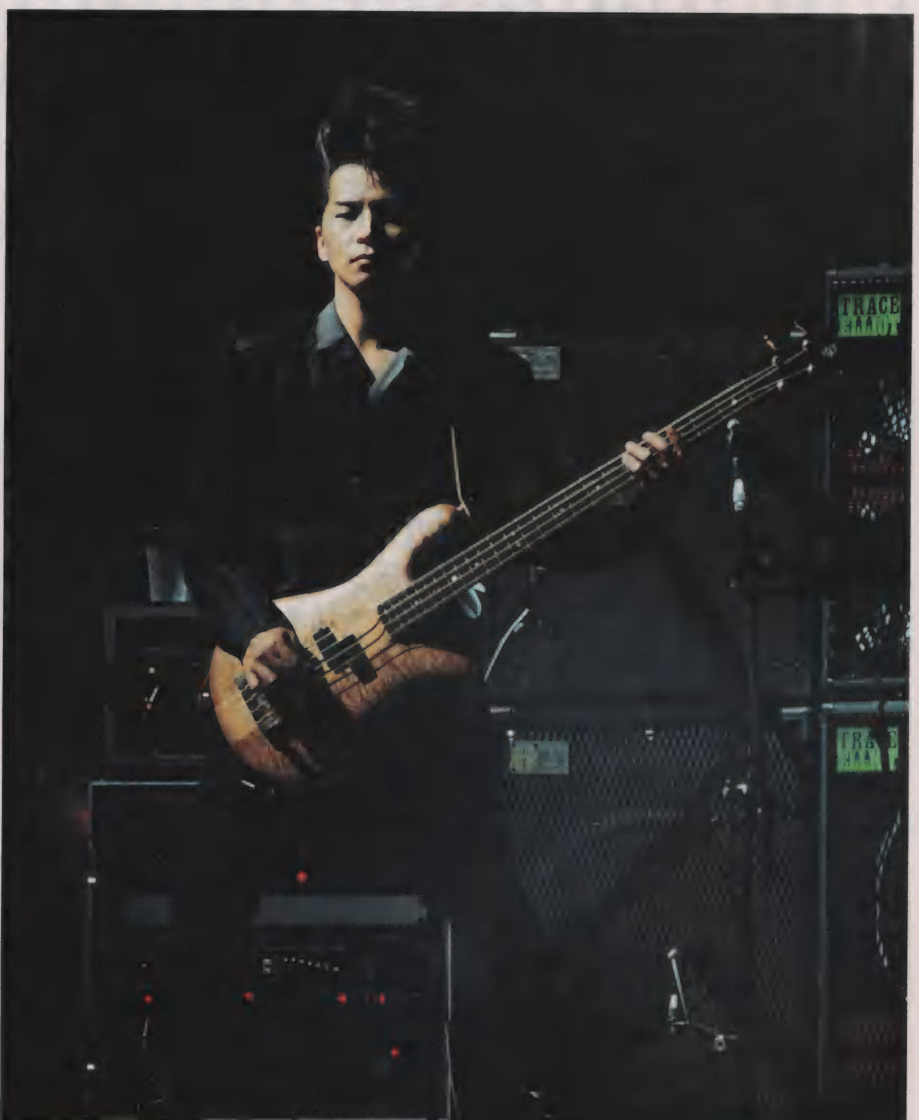


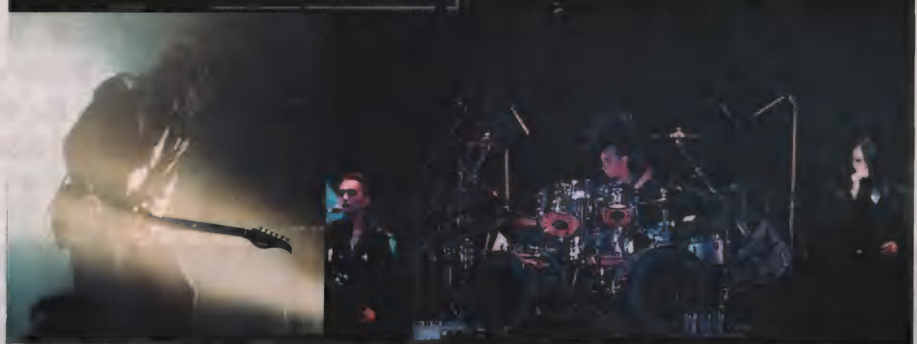


Photograph **Taishin Aoki** Text **Satoshi Kojima**

BUCK-TICK

CLIMAX TOGETHER YOKOHAMA ARENA
10&11TH SEP.1992





今回、ステージ全体を通して貫かれていたイメージは〝聖(saint)〟だったようだ。コンサートのオープニングにステージ前方に誂えられたスクリーンに映し出されたマリアの絵、そしてバックの装飾に時折り使われた教会風のステンドグラス、さらに歌詞にもよく使われる〝ジーザス・クライスト〟という言葉…。彼らの頭の中で今、自分たちが描こうとしているロックとこうしたものとが結びついてきているのかどうかは知らない。が、どうにも荘厳で、どこか重々しいイメージだ。まあ、それは単にこの2日間に予定されていたビデオのシューティングのためにこうした派手な仕掛けがされていただけだったのかも知れないが、この辺りは彼ら自身がある特定のコンセプトのもとに一つ、コンサートという〝作品〟を作り上げよう、そしてそれはイコール、ロックを一つの総合芸術としてとらえようとし始めたことの現れだったようにも僕の目には見えた。そしてこの点がある程度の完成を見るか、また方向を音のように戻し、勢いと、メロディのきれいさだけが売り物のバンドで終わるか。ここが今後、彼らが日本のロックバンドの中で〝抜けた〟存在になれるかどうかのキーになるということもだ。

この3月にもここ、横浜アリーナで彼らのコンサートは観ているので、僕にとってはこの会場でBUCK-TICKを観るのはこれで2度目になる。それにしても客席の殆どを占めた女性ファンたちのファッション面での自己主張ぶりはどんどんコンサートそのものとの脈絡が薄れていくようで面白い。以前のBUCK-TICKのコンサートは黒で身を固めたファンが大多数を占めていたらしいが、この日はベビー服からSM的ファッション、そして何と看護婦の制服をそのまま真似た洋服を身にまとった女性ファンもいた。これはそのままコンサートという場が、これまでの多くの日本のロックのそれがそうであった、共同幻想を抱く場というものからの脱皮を表しているのだろうか。それともコンサートに参加しているという意識がこうまでしないと実感できないという情報過多の現代の風潮そのものの現れなのか…。まあ、その辺りのことは別の機会にでもリサーチするとして、まず単純に前回との比較みたいなものから記しておくと…、強く感じたのは彼らの演奏そのものに余裕が随分出てきたようで、それだけステージ全体に貫禄みたいなものが感じられるようになった、ということ。会場を横長に使ったこの日は、縦に使っていた前回よりもステージ自体の間口は広くなり、その分一人一人の動ける幅はぐんと広がっているにもかかわらず、必要以上メンバーは自分のテリトリーから動かない。ドラムのヤガミは当然のこと、特にベースの樋口などは殆ど不動だ。他の三人も後半になり、ようやくステージの両端まで進んでいってサイドの客を煽る光景は何度か見れたが、この辺りはメンバー自身の、ステージ上での5人の心の結びつきを大切にする気持ちの現れであるとともに、演奏により一層集中しようとしていた意識の現れでもあるんだろう。さらに五人の音の中での定位が以前に比べ、かなりはっきりしてきていること。しばらく前、本誌のインタビューでドラムのヤガミは、「最近今井がデジタルの方向に進んでいるから、俺はボトムの部分をアナログでしっかりと支えたい」というようなことを言っていたが、そうしたバランス感覚——僕はここがBUCK-TICKの楽曲にどんなアバンギャルドな要素が入ってきても、どれもがポップなものとして表に出てきてしまう一番の要因だと思っているのだが——はここへ来てかなり明確な形として現れたようだ。過去の曲のリアレンジという作業を経、自分らのレパートリーに対して客観的な目を持つことができ、さらに自分たちの力量を充分に把握したことなどがこの日、こういう形で現れたのかも知れない。

賛美歌が流され、緞帳として使われていたスクリーンにはキリスト生誕の絵が映し出され、コンサートは厳かに始まった。天地左右、あらゆる位置からあらゆる角度に向けて備えつけられてあった照明はとても豪華で贅沢だ。が、このサイズのホールでのコンサートでは必ずといっていいほど演奏中に使われる、ステージ上を事細かに伝えるモニタースクリーンはない。その辺りは不必要なサービスは極力排除しようとしていたメンバー自身の自信の裏返しの意思表示だったのかも知れない。一点豪華主義。そんな言葉がコンサート前半には何度か僕の頭をよぎったりもした。シルエットのみが映され、唄われた1曲目の「JUPITER」、そして今井がダブルネックギターを持って

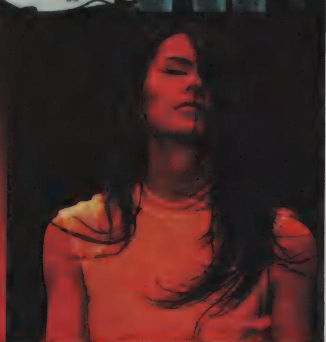


BUCK-TICK

CLIMAX TOGETHER YOKOHAMA ARENA
10&11TH SEP.1992







演奏された「Brain, Whisper, Head, Hate is noise」「LOVE ME」。表向きはあまり熱の入っていないようなクールな櫻井のMCが続き、「地下室のメロディー」、「MY FUNNY VALENTINE」「TABOO」…と曲の方も少々クールなナンバーが続く。しかしこうしたごくオーソドックスなアレンジやメロディ感を持ったナンバーを随分と表情豊かにできるようになったのは単純に言って彼らの表現力の進歩だ。BUCK-TICKの楽曲の持つ一つの特色である不思議と透明な浮遊感覚みたいなものは、例えば『殺シノ調べ』の中で多く試みられたハウス的なアプローチを施した楽曲よりも、この「TABOO」のようなわかりやすいメロディを持ったものによく出されることは多いと僕は思う。そしてその辺りが以前よりも随分と明確にライブで表せるようになってきたのは、やはりメンバーそれぞれが自らの楽曲の持つ特徴を充分に把握した結果によるのだろう。

徒に観客を煽るようなMCなどは殆どなく、コンサートはあくまで落ち着いた感覚をキープしながら、しかし演奏には力が入れられて、続く。後半で特に印象に残ったナンバーは8曲目の「VICTIMS LOVE」だ。間奏で使われていた唱歌の「さくら」のメロディは、どこか奇妙なジャパネスク感覚を僕に与え、その場の空気を一気に引き締めた。全体に描かれていた〝聖〟とこのジャパネスクの対比で作られた不思議な空間。こうしたものの広がりは、彼らの今後のコンセプチュアルな部分での方向性を予感させるに充分なイマジネイティブなものだったと言えるのではないだろうか。さらに「ナルシス」で聴けたアバンギャルドなパートなどでのリズム隊とフロントマンが作っていたサウンドのレンジの広さはまた、テクニカルな部分での今後の彼らの方向性をも見せていたようだった。

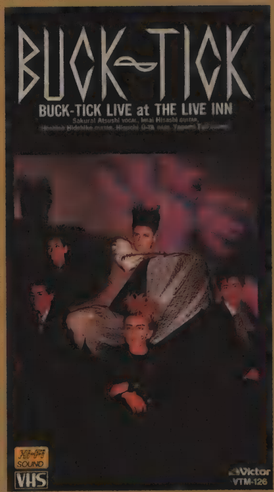
「M・A・D」、「悪の華」、「太陽ニ殺サレタ……」…でコンサートはいわゆる佳境に、そしてエンディングはエフェクティブなギターが大きくフューチャーされた「KISS ME GOODBYE」だ。BUCK-TICK…、80年代半ばに一つの奇妙な〝現象〟までを引き起こし、結果的には例のバンドブームを牽引するような存在になったこのバンドも、今は音楽性の面でも確実にリーズナブルな成長を遂げ、かつシーン全体を代表できる存在になりつつあることを証明した内容、といった所か。アルバム『狂った太陽』での実験で得た一つのサウンドに対する自信と、『殺シノ調べ』での自己のレパートリーへの確信。さらにセールス的な成功を、正しく音楽的充実に結びつけたことができた、簡単に言えば今回のツアーはその結果のものだったと言えるんじゃないだろうか。この日（11日）のアンコールは3回。僕はその2度目の、大胆に打込みのリズムが使われた「ICONOCLASM」と「SEXUAL ×××××！」の陰から陽への展開の仕方がどことなく彼らの反骨精神みたいなものを物語っているようで興味深かった。このアンコールは、その中から選んで演奏していたという予め用意していた三つのパターーンのすべてをやってしまったことになるらしい。最後のこうした衝動の部分なども含め、思いの他全体の起承転結がきちんとしていたのは、やはりメンバー全員の、スタイリッシュなものに対して見せるバランス感覚のようなもののゆえのことだろう。いくらデジタルに寄っていく試みをしたとしても、いくらフェイクが効かされたメロディが唄われたとしても、BUCK-TICKの作り出す音世界が変わらない温度を放っているのもこの辺、メンバー自身の性みたいなもののゆえなのだ。

すべてが終了して一つ気づいたのは、多くの日本のロックバンドのコンサートを見た後に必ずといっていいほど感じる居心地の悪さみたいなものを一度も感じずに済んだこと。それはいわゆる予定調和の部分がコンサート中、殆どといっていいほどなかったからだ。それはそのまま、バンドの演奏が観客を確実にリードしていた、それだけ彼らが作品を常に進化させていくための工夫をすべてにおいて続けていたことの証しだ。最初に書いた、総合芸術としてとらえたロックコンサートの完成、みたいなものはこの日は、その基礎の部分が確認されたのみだったかも知れない。が、よくプロデュースされていながらも、そのプロデュースにバンドの演奏能力が確実に引けを取っていなかった、頭脳と肉体のバランスは充分に取れた、彼らの成長の後は確実に見せていたコンサートだったように思う。いつかきっと、BUCK-TICKが作り上げたロックンロールの聖地みたいなものを僕らの前に提示して欲しい。

【SET LIST】JUPITER Brain, Whisper, Head, Hate is noise LOVE ME 〈MC〉 地下室のメロディー MY FUNNY VALENTINE TABOO HYPER LOVE 〈MC〉 VICTIMS OF LOVE MYSTY BLUE ナルシス 〈MC〉 M.A.D 悪の華 太陽ニ殺サレタ… KISS ME GOOD BYE 〈ENCORE 10. SEP〉 ICONOCLASM SEXUAL ×××××！ スピード JUST ONE MORE KISS 〈ENCORE 11. SEP〉スピード JUST ONE MORE KISS ICONOCLASM SEUAL×××××！ …IN HEAVEN… MOON-LIGHT

BUCK-TICK
VISUAL PACKAGE
DISCOGRAPHY

今回レポートしたライブの模様は、実は12月2日にビデオとしてリリースされる。へたなギミックを排除し、ライブ1本をほぼ忠実に収録した内容になる予定なのでゼヒ楽しみに待っていて欲しい。…というわけで、B-Tが今までにリリースしたビデオ作品をおさらいだ。



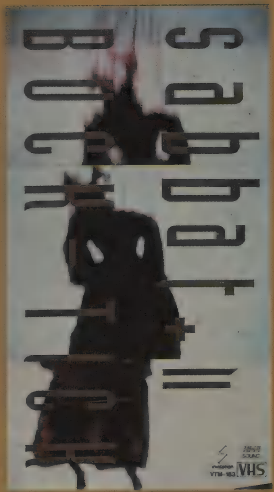
BUCK-TICK LIVE at THE LIVE INN (87年9月21日発売)▶実質的メジャー・デビュー作となったライブ・ビデオ。自前衣裳にライブハウス…今となっては貴重。



MORE SEXUAL!!!!! (88年2月21日発売)▶ファースト・アルバム『SEXUAL××××××!』から6曲をビデオ・クリップ化してリリース。オタノシミはこれから…。



SABBAT-Ⅰ(89年4月21日発売)▶初の武道館公演(2DAYS)の2日目の模様を完全収録したもの。MC部分は一切カット。櫻井敦司が初めて髪を下ろした。



SABBAT-Ⅱ(89年4月21日発売)▶「Ⅰ」と同時発売でチャートの1、2位を独占。収録されている9曲中7曲が『TABOO』以前のアルバムからの選曲である。



悪の華 (90年4月1日発売)▶同名アルバム『悪の華』を、数人の監督を起用して全曲ビジュアル化。ビデオ作品に初めてメンバーの意志が注入された。

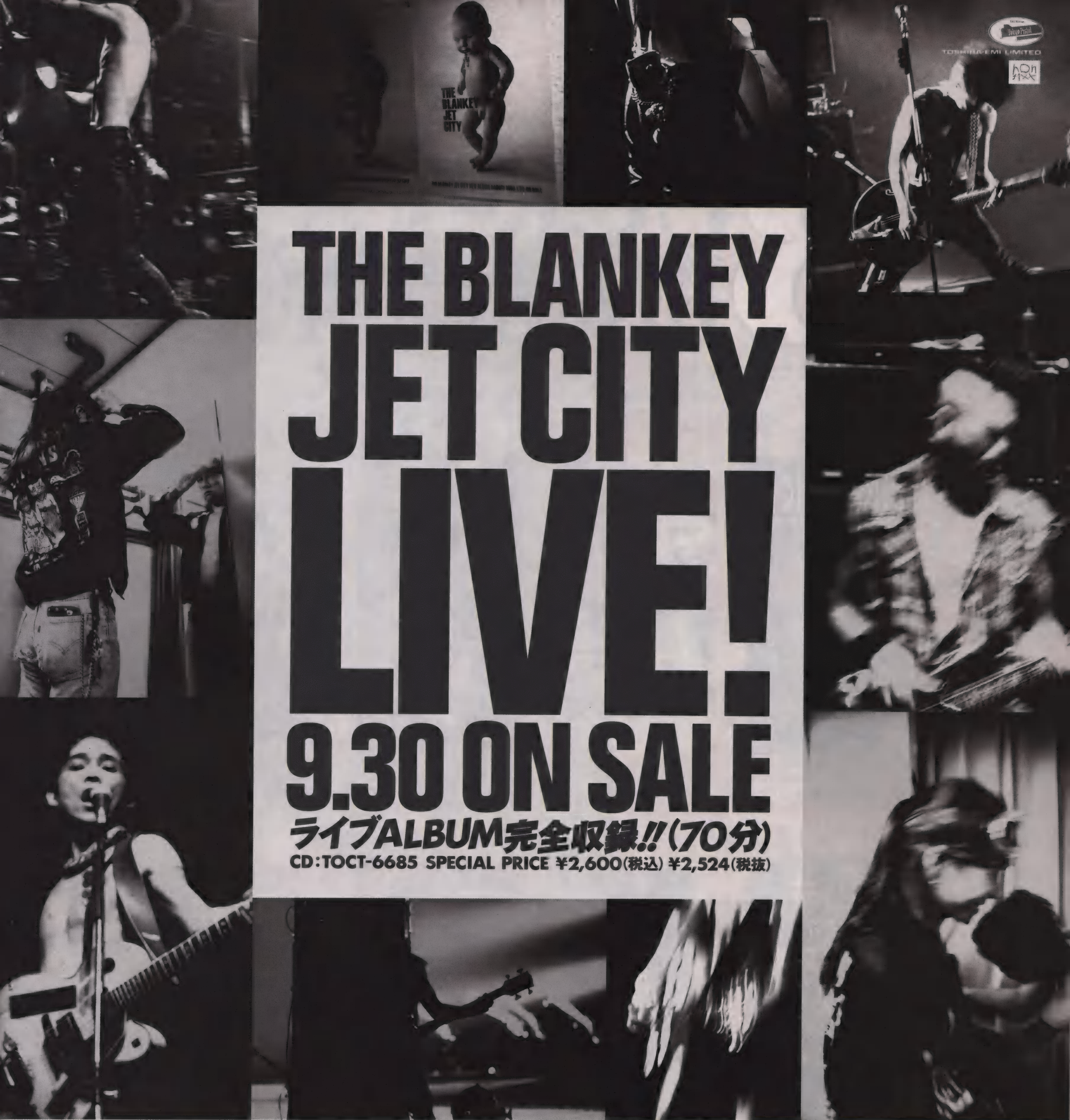


M.A.D (91年6月5日発売)▶いわゆるシングル・ビデオである。カップリング曲は、アルバム『SEVENTH HEAVEN』より「ANGERIC CONVERSATION」のリメイク版。



BUCK-TICK(91年11月21日発売)▶デビュー時からのビデオ・クリップでつづった、まさにB-Tの歴史ビジュアル版。ファンならゼヒ持っていたい1本である。

 ▶次号10月27日発売)にて、櫻井敦司最新ロング・インタビューを掲載。同時にビッグ・ニュース発表!!



Tour Live 1992 地獄はトカゲの夜

10/26(月) 札幌ペニーレイン 問/WESS 011(613)9000
10/27(火) 札幌ペニーレイン 問/WESS 011(613)9000
10/29(木) 仙台青年文化センター 問/キョードー東北 022(223)2188
11/1(日) 愛知県勤労会館 問/サンデーフォーク 052(320)9100
11/4(水) 福岡都久志会館 問/ブレインズ 092(771)8121
11/6(金) 広島アステールプラザ(中) 問/夢番地広島 082(249)3571
11/7(土) 大阪厚生年金会館(中) 問/キョードー大阪 06(345)2500
11/9(月) 渋谷公会堂 SOLD OUT!! CO東京 03(3405)9999
ぴあ 03(5237)9999


1st album
Red Guitar and the Truth
CD:TOCT-6087 ¥3,000(税込価格)
MT:TOTT-6087 ¥2,620(税込価格)


2nd album
BANG!
CD:TOCT-6380 ¥3,000(税込価格)

「灰になるまで」
B.J.C vs 多田由美 ジョイント グラビアコミック
定価2,000円 角川書店より発売中

OFFICIAL FAN CLUB "OUT SIDE MIRROS" 会員募集中
問合せ:〒150-91 東京都渋谷郵便局私書箱78号 (株)オフステーション
「THE BLANKEY JET CITY ファンクラブ」入会希望係 TEL.03(3402)8395



THE BLANKEY JET CITY

LIVE ALBUM TO NEXT

ライブ・アルバムが出る──その名も『LIVE』──。まったく、何の飾り気もありゃしねぇ。実にブランキー・ジェット・シティらしいやり方じゃあないかな。新盤(来春予定)のレコーディングも進行している今、『LIVE』の紹介とあわせて、次回作の展望を訊く。

Photography **Hiderow Asakawa** Text **Dai Onojima**







8月号本誌でブランキー・ジェット・シティのツアー同行レポートを書いたが、その際の渋谷公会堂のステージがライブ・アルバムとして発表されることになった。シンプルに『LIVE』と題された内容は、当日のステージをアンコールを除く全編、一切カットなしで収録したもの。先日出たライブ・ビデオが、単純なライブの再現ではなくパッケージ・ソフトとしての特殊性を考慮した加工作品となっていたことを考えれば、今回は彼らのライブの雰囲気を良くも悪くも忠実に再現したものと言えるだろう。

人によってロックのライブに対して求めるものは千差万別だろう。ぼくに関していえば、そこにパワーやエネルギーを感じることができないものはダメだ。クサい言い方をすれば、熱く脈打つ魂が宿っていない演奏など、ただのBGMにすぎないと思うのだ。曲の良さを味わったりアレンジの巧みさを堪能したり歌詞の素晴らしさに酔い痴れたりするのはレコードでもできる。だが、カッと熱くなって身体中が震えるような興奮は絶対にライブでなくては味わえない。ブランキーのライブはまさにそれだ。3人の魂と聴く者の魂が激しくぶつかりあい、もつれあい、転がってひとつになって、あたり一面を焼き尽くしていく。おれは心地好い疲労感の中で、焼き尽くされた大地に立つ。なにもない荒野に新しい生命が芽吹き、ふたたびゆたかな緑におおわれていくさまを、ぼくははっきりと思い浮かべることができる。今回のライブ・アルバムは、その熱気や興奮をかなりの程度まで伝えてくれる。

だが一方で、彼らの欠点がスタジオ録音盤に比べ、よりあらわになっていることも確かだ。浅井健一のボーカルは、聴く人によってはこのバンド最大の弱点だろう。繊細で壊れやすい心情、眩暈のするような孤独を狂おしいほどに放射する浅井のボーカルは、その声質の細さゆえに、しばしばバックの演奏の逞しさに負けている。しかしそれは、巨大な現実の重圧に必死に耐えている若く純粋な魂の象徴のようにも思えるのだ。

だがこのライブ盤も、彼らにとってはただの過去にすぎないようだった。ライブ盤が出るころ、彼らはニュー・アルバムの制作のためスタジオにこもっているはずだ。レコーディングに突入する前日、彼らの話を訊くことができた。

まずは中村達也。彼は絶好調のようだ。今回のアルバムではついに達也作の一曲が収録される。これまでドラムという役割に徹してきた彼がなぜ曲を作る気になったのか。作りたいという希望は前からあったようだが、今回ようやく実現したようだ。

「別にまわりから作れとか言われたんじゃなくて、作りたいとは前から思ってた。今までも、いいフレーズが浮かんだらテープにとったりしてたんだけど、一曲にまとめることはなかったから。そういうのがたまってきてたのに無視してたからね。自分の音楽を。それに対する反省もあったわけよ。曲に関しては人任せみたいな部分があったからね。それを直そうと。いつのまにか甘えちゃってたところがあったからね、みんないい曲作ってくるからさ。おれも負けたくないって感じ。今までは、どうせこいつの作ってくる曲の方がいいに決まってる、とか思ってたから。自分で録音したものを聴き返したりすると、はぁ〜こりゃダメだ、とか思ったりして。今回もそうだったんだけど、勇気を奮い起こして出してみたんだけど」

数々のバンドを渡り歩き、ブランキーがデビューする直前はいくつものバンドを掛け持ちしていた彼は、「助っ人体質」が非常に強かった。曲を作るのは人に任せて自分はドラムを叩いていればいい。自分の音楽をやるというよりは人の音楽、人のバンドをサポートしよう。そんな気持ちが強かった以前の達也だったら、自分から曲を持ち込むなど考えられなかったろう。だが現在ブランキーとは浅井や照井のバンドであると同時に、達也のバンドでもある。だれが欠けても絶対に成り立たない正三角形なのだ。達也のこのような意識の芽生えは、当然と言えるだろう。ニュー・アルバムを聴くのが本当に楽しみだ。

続いて照井利幸。彼もまたいい状態のようだった。新作に収録される照井の曲は3曲。

「最近まわりに気を使って人のペースに合わせることがなくなった。マイ・ペースになったね。自分にないものを無理に出す必要はないんだって気づいたし。そうしたらすごく精神的に楽になってきた。ベース・プレイにしても曲作りにしても、自分の個性がどんどん出てきたね。ベンジーの作る曲とおれの作る曲の違いがより一層はっきりしてきたね。〝ブランキーでやるからこういう曲を書く〟とか〝ブランキーでやるからこの曲は出せない〟とか、そういうのは関係ないと思うし。じゃないと音楽性が広がっていかんし。本当に自分が大好きだって言える曲が出来るようになったと思うよ」

自信がついてきたようだ。彼は外見こそコワイが、実際にはすごく穏やかで優しい人間だ。自分自身に対して余裕が出てきたから、他人に対しても寛容になれるのだろう。

「だから次のアルバムはおれらの成長が見えると思うよ。演奏技術うんぬんじゃなくてさ。聴いた人が音楽わかる人だったら〝あ、こいつらやっと、なにがカッコいいか気づいたな〟と思うはずだよ」

照井の言う「自分の個性を出した」結果、達也も曲を提供するようになった。3人が対等の立場で自己を主張するようになった。たしかにバンドは前向きのいい状態にあるようだ。では、メイン・ソングライターである浅井健一はどういう状態なのだろう。

レコーディング前日で、曲は完成しているものの歌詞がまだ一部出来上がっていないという状態で、浅井は若干ナーバスになっているようだった。これまでのアルバムはそれまでかきためていた曲を放出すれば良かったが、今回は全曲が新曲。マイペースが許されたアマチュア時代に比べれば、曲作りは一種の義務となっている。その苦しさを、取材の時点の浅井はひしひしと感じているようだった。

「なんか、自分でもよくわからないんだよ。落ち着きがないのかな。落ち着きがないっていうのか、本当に（この曲が）いいのかなっていうかさ。そういうのはヤバイかなとか思ったりとか。本当にいいのかなって思い出させる自分がヤバイなと思ったりとか。ヤバイなと思った自分がカッコ悪いなとか思ったり」

抽象的な言い回しではあるが、彼はその時点での心境をこのように言い表してくれた。これも生みの苦しみなのだろう。次のアルバムの内容については次のように話してくれた。

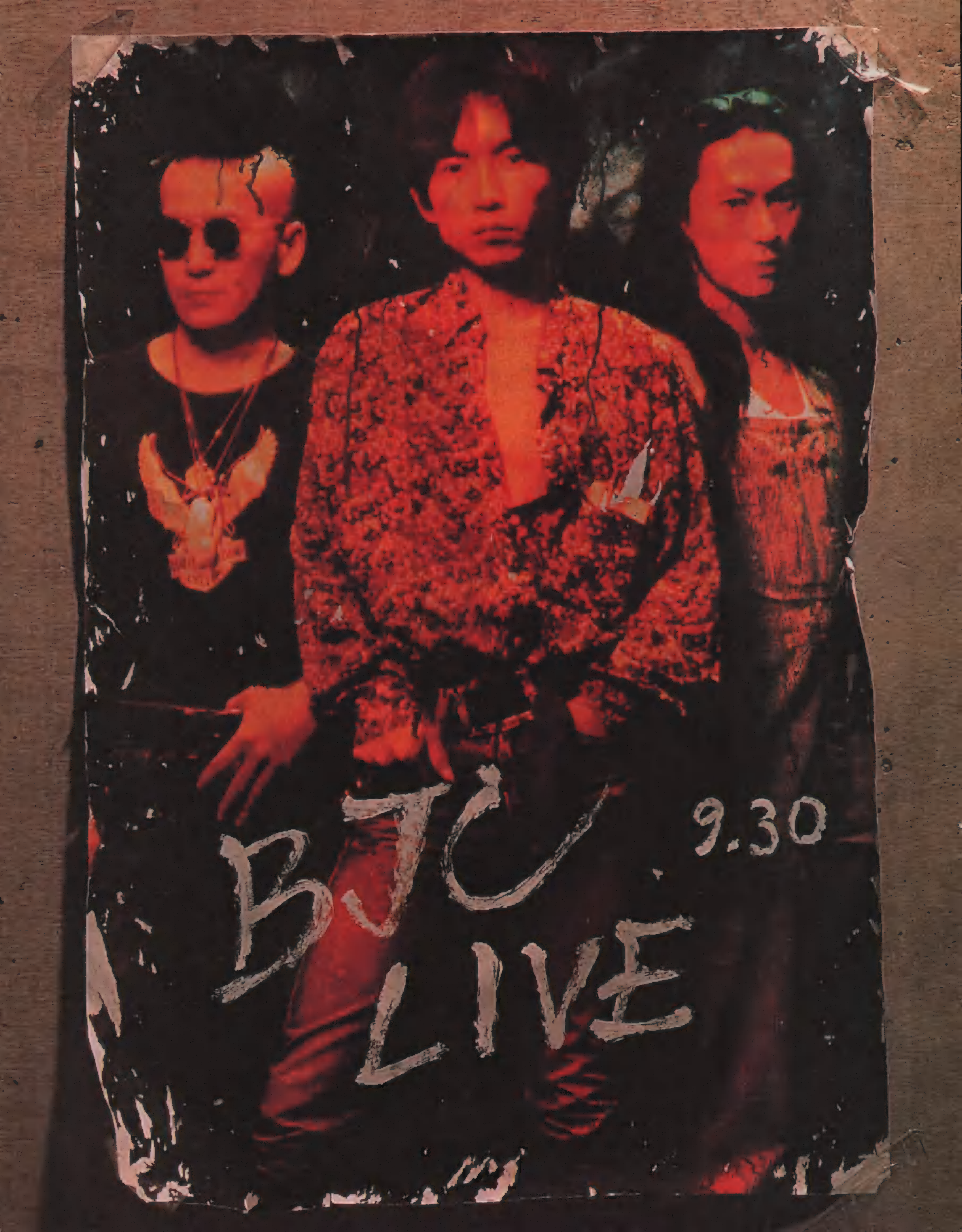
「次のアルバムは、激しさが増すと思う。音も歌詞も全部含めて、激しさを増したい。ファーストよりもセカンド、セカンドよりもサードって具合に。でもその激しさについては、今回限りかもしれない。激しさっていったってさ、いろいろな激しさがあるじゃん。すごい静かな激しさもあるしさ。でも今回は目に見える激しさっていうのが、どんどんどん増してる。でもその目に見える激しさは、たぶん今回が最後……のような気がする。まあ先のことはわからないけど」

これまでのアルバムでも充分すぎるぐらい激しいのに、もっと激しくなるとは……。このあとこの件について突っ込んでいったら「いやー、たんにカッコいいやつを作りたいだけ」と逃げられてしまった。

現在彼らが置かれている状況はある程度理解していただけたと思う。断っておきたいのは、これはあくまでもレコーディング前日という特殊状態に於ける発言だということだ。レコーディングが終了すればまた変化も出てこよう。ニュー・アルバムの発表は来年となるはずだ。期待はとてつもなく、大きい。

THE BLANKEY JET CITY

以前の達也なら、曲を持ち込むなど考えられなかったろう。
ブランキーは、浅井・照井・達也、3人のバンドなのだ。
他の誰が欠けても絶対成立しない、正三角形なのだ。


BJC
9.30
LIVE

Zi:KILL



IN THE HOLE

10月21日、シングル「SLOW DOWN」を、そして10月28日には、1年7か月ぶりのフル・アルバム、『IN THE HOLE』をリリースするZi:KILL。まずはアルバムの全貌をギターのKENに語ってもらう。

Photography **Nobutoshi Takagi** Text **Yūsuke Katoh**



7月30日のNHKホールでの復活ライブも大成功し、ついに本格的に活動を再開したZi:KILL。そのNHKでも発表されたように、いよいよ待望のニューアルバム「IN THE HOLE」が10月28日キングレコードより発売されることになった。ホッピー神山をプロデューサーに迎え制作された、この1年以上の沈黙をぶち破るに相応しいポジティヴなパワーに張る作品群。それらは読んで字の如く「音を楽しむ」というプリミティヴな、しかし、楽曲にミュージシャンの命を吹き込むことが出来る唯一の衝動に貫かれている。そんな原点回帰とでもいうべきシンプルな結論に辿り着いたバンドは何よりも強い。

今こそ心からいおう。

「お帰りなさい、Zi:KILL!」

──「CLOSE DANCE」からどれぐらい振りになるんだっけ?

「「CLOSE DANCE」が'91年の3月だから1年と7か月。たいして売れてないバンドなのにサイクル長ぇよな。(笑)」

──上がってみて正直な感想はどうなの?

「おもしろかったね、作業は。ホッピーとすげぇ気が合ったからさ、音楽のこともそうだし姿勢もそうだし」

──姿勢って?

「音楽に対する姿勢。そういうのがすごい似てるんだよ。同じ世代のヤツとかだと上に行くこととかそういうことを考えてるじゃん? 俺たちも考えてたからさ。今も考えてないわけじゃないんだけどさ、俺たちはヘンな話その世界から抜けてたわけじゃん? そんでもって冷静に〝どうやったら音楽をやれるか?〟っていうすごい自然なところにしばらく浸ってたからさ。そういう意味でホッピーって音楽を楽しむ仕事をしてる人だからさ、いい意味で上に行こうっていうのはあるけど俗にいう新人ダービーとかさ、そういう狭いサークルじゃなくてもっと大きい音楽っていうサークルの中で楽しめたよね」

──それは聴いててすごく感じるな。

「うん、肩の力がスーッと抜けたよ」

──まさに「音楽王」(ホッピー神山のアルバム)って感じがするもんね。(笑)

「うん。(笑)音楽王おそるべしだよ。(笑)だからそういう意味でみんな〝この1枚を楽しもう〟っていうかさ、〝音楽って素晴らしいよね〟っていうさ。そこら辺がちょっと変わったことなんじゃないかな? 聴いての通り相変わらずいろんなことやってるけどね。(笑)それが今回は自信持ってやってるっていうかさ」

──うん、だからそういうパワーが漲ってるもんね、このアルバムには。今までのポジティヴさとはまたちょっと違うパワーが。

「でもさ、この間23歳になったんだけどさ、〝落ちついて来たな、やべぇな〟っていうのがあるんだよね。(笑)ホントだったらもっとガンガンやってなきゃいけないんだろうけど、〝俺30歳ぐらいになったら仙人になってるんじゃないかな?〟って。(笑)」

──(笑)だからさ、そのパワーが単なる上昇指向だけじゃない、上にももちろん、横にも下にも向かうようになったっていうことなんだろうね、純粋に音楽的にね。

「そうそうそうそう。だから、なにも上を狙わなくてもさ、数字っていうのはあくまでも結果でしかないからね。もちろん数字も大事だけどさ、〝必死で売れようと思って売れて何が得られるのかな?〟みたいな。とにかくこの時期は音楽を楽しむことが最高の快感だったからそれが少しでも聴いてる人に伝わればいいかなって思うな」

──じゃあ何曲かポイントになる曲にコメントしてくれるかな。まずはアルバム・タイトルにもなっている「IN THE HOLE」。

「これはTUSKが随分アイデア持って来てさ、ある程度のリフもあいつが作って来て。おもしろいよね、これ。ライブで再現するの大変だけど。(笑)うん、タイトルはまぁその通りだよ。(笑)いろんな意味があるけどね、まだ穴の中かもしれないしさ。もちろん〝出よう〟っていう意志はあるんだけど、穴から出る以前に〝息を吸いたい〟とかそういう次元だろうね、こんときは。穴ん中でも上見て空が見えりゃ良かったけどまだ真っ暗だったからさ。今は〝少し空が見えたな〟って感じかな」

──次は「Kiss me good-bye」かな。

「なんでよ? 「TOUCH ME」聞いてよ! (笑)この曲大好きなんだよ、俺。サ

相変わらずいろんなことやってるけど、今回は自信を持ってやっている。

ックスが入ってるじゃん？　俺どうしても入れたかったんだよ。もう最高だね。こういう曲ばっかりやってるバンドってあるじゃない？　ダンス・バンドみたいなのはさ。でも俺たちみたいなバンドがこういう曲やってもこれだけ形になったっていうことにすごい自信持てたよね」

——そして「Kiss me good-bye」と。これすごいよね、しかし。(笑)

「いいでしょう？　俺好きでさ、こういうの。去年の夏ずっとハウスじゃなくてヒップホップばっか聴いてたのよ、夏だから」

——夏はヒップホップ？(笑)

「うん、夏はヒップホップかスラッシュでしょう。(笑)でさ、俺ダメなんだ、グランジだのガレージだのって。もっと肉体系の、レッド・ホット（・チリペッパーズ）とかのが好きなんだよ。だから「Kiss me good-bye」では♪スッタンタスタスコタン♪っていう、あれの気持ち良さっていうのをウチでもやりたいなっていうのがあって」

——そのせいかもしれないけどちょっと音のスクリッティ・ポリッティとかあの辺の雰囲気があるよね。

「うん、俺スクリッティ・ポリッティ好きだよ。そうなんだよ、だから今さ、ハウスとか流行っちゃってるからいわれてるけどもとはといえばABCとかさ、あの辺の、ハウスと呼ばれる前のハウスって好きだからさ。

　だからさ、いくら一生懸命がんばってても活動停止するときは停止するんだからさ、せめて好きなことをやりたい放題やっとこうっていうね。(笑)そしたらなんかすごい気がラクになって音楽をもっと楽しむ姿勢がわかった。ただ歌詞は暗いけどね。(笑)でもそこがいいんじゃないの？　俺の脳天気さとTUSKの感情とが電池のプラスとマイナスみたいな感じになっててさ、それがなんでかしんないけどひとつになっちゃうんだよね、ウチは。いいパートナーだと思うよ、TUSKは。(笑)」

——で、シングルにもなってる「SLOW DOWN」。

「こういうまともな曲もやってみたかったんだよ。ストレートでしょ？　俺が最初に作ったコンセプトはエレキ・ギターとアコースティック・ギターが5対5でやれる曲っていう。ウチは途中にアコギが入って来るっていう曲はいっぱいあったんだけど、最後までこういうバランスの曲が欲しいなと思って。メロディーラインもウチにしちゃポップだし。なんか、追求するかアンダー・グラウンドに行くかじゃなくて違う意味でもっと音楽が広がったような気がして。ただ、この手の曲はいろんな人がやってるから説得力出すのがたいへんで。(笑)」

——「CRACK EYE」はエクスタシーから出たベストに収録されてるのとは違うバージョン？

「うん、全部撮り直した。ギターソロがカッコいいんだよ、また。TUSKのボーカルも全然良くなってるしね」

——で、これまた問題の「Mr. Market」と。歌詞重いよ、これ。(笑)

「重いよね。(笑)でもこれだけストレートに歌詞にしたっていうのはすごいことだと思うよ。ぴったしハマってるんだけどさ、歌詞と曲が。でもこういう方向に持ってったTUSKっていうのもすごい評価するな。そういうTUSKの意外性って今おもしろいよね。まぁホーン・セクションも思い通りにハマったしさ。とにかくスカをやりたかったの、俺。(笑)「笑ってごらんよ」っていう曲作ってたときもホントはスカやりたかったんだけどさ、それをやった時点ではなんか曲げたりしないと説得力がなかったんだよね、バンドに。それがこれだけストレートなスカになってあれだけの歌詞が入ってるっていうのは非常にいいバランスだよね。好きなんだよ、スカ。スペシャルズとか好きだったからさ。(笑)」

——そして「Miss You」で綺麗に終わるという。

「とにかくこういう曲がやりたかったのよ」

——全部それだな。(笑)

「ギターはクールに、ボーカルは少し丸いっていうかさ、柔らかい。それとバイオリンと絡みたくてさ。でもそれだけだとそこで終わりになっちゃうから〝そこからまた始まりにしよう〟って話になってああいうオーケストラが入ったんだよ。そしたらまさに始まったよね。次のための序曲っていうかさ。ギタリストとしてもおもしろかったよ。今までは〝バンドのギター担当です〟みたいな感じで俺がアイデア出してそれを実現するためにギター弾いてたって感じだったんだけど、今回は違うからね、ギター弾きたくて弾いたっていう。多少でしゃばって来ようがうるさかろうが自分がギターでどれだけ楽しめるかなっていう。こういうシンプルな曲が出来るようになったのもまたひとつ大きな進歩だよね」

Zi:KILL IN THE HOLE

いくら一生懸命がんばってても活動停止する時はするんだから、せめて好きなことやりたい放題やっとこうっていうね。(笑)




ZI:KILL
10.21▶NEW SINGLE
SLOW DOWN
c/w IN THE HOLE (Super Effective Version)
●KIDS-114・税込定価¥900
10.28▶NEW ALBUM
IN THE HOLE
IN THE HOLE/華麗/TOUCH ME/kiss me good-bye
SLOW DOWN/AC DC/CRACK EYE
NO MORE TO SAY/HEAVY DAMAGE/Mr. Market
Miss You〈全11曲収録〉
●KICS-244・税込定価¥3,000
●アルバム初回プレス限定 ピクチャーCD仕様!
ZI:KILLスペシャル・ビデオコンサートACT.1決定!!
～最新映像満載のジキル・イベントへ無料ご招待～
お問合せは下記各専用ダイヤルまで!!
10/3土 名古屋・広小路ヤマハホール PM4:00 START
問☎052-251-8691(PM1:00～5:00)
10/11日 大阪・難波W OHOL PM12:00 START
問☎06-535-1212(24HOUR)
10/17土 東京・護国寺天風会館 PM13:00 START
問☎03-3945-9301 (24HOUR)
Vinyl Solution
DISTRIBUTED by KING RECORDS


もはや救いはない。
衰弱する肉体、昂揚する精神。
BRAIN DRIVE“完全驚異”
10.21爆裂。
完全驚異
BRAIN DRIVE
XEO-FUTURAMA OF ROCK-CAMPAIGN
XEO SPECIAL REMIX CDを抽選で5,000名様にプレゼント
BRAIN DRIVE他　XEO所属4アーチストオリジナル曲のこのCDでしか聴けないREMIX VERSIONを編集した8cmCD。
応募方法：キャンペーン対象商品 BRAIN DRIVE／完全驚異(10／21), SOFT BALLET／MILLION MIRRORS(10／21), M-AGE(11／21発売・セカンドアルバム)それぞれに封入されている応募ハガキにてご応募下さい。
応募しめ切り；92年12月10日(消印有効)　※詳しくは応募ハガキをご覧下さい。
初ライブ決定
1992 11/6(FRI.) 大阪心斎橋クラブ・クアトロ
(問)キョードー大阪　06(345)2500
XEO
INVITATION


BRAIN DRIVE
笑点
完全驚異之巻

一所懸命やりすぎたかもしれない。生き方も全力でやっちゃうからね。（笑）←自虐的

ブレドラのデビュー・アルバム『完全驚異』のリリース日，10月21日まで残すことあと3週間あまり…。先月号でお届けした作品の概要に続き，今回は自虐ソルジャーズのパーソナル・インタビューを皆さんにプレゼントしよう。ああ，なんと生真面目な2人でしょう。でも自閉症なの。ファンの皆さん，アナタたちも笑ってる場合じゃないですよ。

Photograph **Yousuke Komatsu** Text **Mitsuru Hirose**

もうビクビクしなくていいんだなって、やりたいようにやっていいんだなって。

ステージでの表野雅信は"何をそんなにイラついてんだ!"と、観る者をアゼンとさせるほどの自虐ソルジャー的パフォーマンスを繰り広げる。"みんなブチ壊してしまえ! ハレツしちゃえ!"と叫ぶかのごとく、ドラム・パッドを叩きまくる。

しかし、それは彼の冷静さと紙一重。オフ・ステージでの彼はブレイン・ドライヴのブレイン（頭脳）の部分を統治している。

感性のままドライブする水田。アンドロイド野郎をコントロールするマッドサイエンティストが表野なのだ。自分達の今後、そして今、いちばん重要なメジャー・デビュー・アルバム『完全驚異』のことも冷静に分析している。

――僕がブレインに興味を持ったキッカケは、ダムドやイギー・ポップが好きなパンク/R&R少年がバリバリの打ち込みに向かった、いったい何が生まれるんだろう? という点なんだけれど、今回のアルバムでその答えが、ある程度見えてきたような気がするんですが?

表野「前のアルバム（インディー盤『BRAIN WASHING』）で、ハウス・ユニット的な見方をされたのもあって、もちろん意図的にハウス・ビートを取り入れたりしたんですが、ロック的な部分を見せないとヤバイんじゃないかっていう気持ちはありましたね。もちろん、誤解を解くために今回のアルバム作ったわけじゃないですけど」

――ハウス、ボディ・ミュージックというより、このアルバムは打ち込みのロックだよね。

表野「ボディと言われてもいいんですよ。打ち込みでロックっぽいことを表現していこうとするとボディになりますよね。そのへんは皆さんにわかってほしいんです」

――ふたりとも、いわゆるテクノ世代のアプローチとは違う?

表野「もちろんYMOも聴いてますけど、オレ達ってロック通ってから打ち込みに行っちゃったから。すごくロック的に打ち込みを聴いてたんです。打ち込みを極限までわざとらしく、ロック的にしたらボディになるんじゃないかって感覚でやってますからね」

――水田クンが曲を作るとき、○○ふうにしようというスタイル優先で作ってるって言ってたんだけど、それは曲のバリエーションの多さになる反面、頭優先、考えすぎになったという意識はありませんか?

表野「自分達で言うのもアレなんですけど、一所懸命やりすぎたかもしれない。1曲ごとの完成度を追求しちゃう。生き方も全力でやっちゃうからね（笑）」

――デビュー作だし、今まで聴いてきた、憧れていた音楽に近いことをやりたい、自分達を近付けたいっていう気持ちがあったと思うんです。

表野「ありましたね。それは否定しません」

――曲をスタイル優先で作るという潜在的な理由はソコにあると思うんです。すると、その作業は今回やってしまった。この後、音楽的な指針をどこへ向けるか、と?

表野「実はアルバム作り終えて、ふたりで言ってたんですけど、影響受けたものは出しちゃったし、また同じ方向で作ろうと思えば作れるんですけど、これからは違う目標立ててやらないと、音楽に飽きてきちゃうなって。もっともっと、ブレイン・ドライヴらしさを出していかないとヤバイんじゃないかって」

――このアルバムでハッキリと"これがブレイン・ドライヴ流だ!"と言い切れる曲はありますか?

表野「あぁ、そうそう、だからそういう事なんだよ。もちろん、まだ自信を持って言い切れないですよ」

――もちろん、デビュー作から、そこまで求めるのもなんだし、逆に完成し過ぎてたら後が続かないかもしれないし……。

表野「やっぱり考えすぎたというか、デビュー作ってことでビクビクしてたんですよ。でも、もうビクビクしなくていいんだなって。レコード会社の人もなんにも言わないし、もう、やりたいようにやっていいんだなって。もちろんポピュラリティを無視するってことじゃなくて。何もフィルターを通さないで、私らしさを出していいんだなぁと」

――アルバムの評判は気にする?

表野「っていうか、評判いいみたいなんで。前作は音がありすぎ、フレーズ詰め込みすぎみたいなのがあったけどね。"ユー・リアリー・ガット・ミー"が受けてるっていうのも、カバー曲でオレ達のやってることがより確かにわかってもらえるんならうれしいですよね」

――東京の初ライブがいきなり渋谷公会堂でのイベントで、ソフトバレエらと共演ですが?

表野「初めからいろいろ仕掛けしちゃうと誤解されるかもしれないんで、ストレートにいきますよ」



10月2日，渋谷公会堂にて行われるイベントにブレドラが出演。他にソフトバレエ，M-age，ペイント・イン・ウォーターカラーが登場するゾ。

オレにも意図的に商業音楽ができるっていうのを示せたかなという。



最近はボーッとしてます。クーラー買ったんですよ、近所の電器屋で7万円。

水田逸人が住んでいる某駅周辺には、偶然にも『パチ▼ロク』『パチ▼パチ』『ワッツイン』の編集者が1名づつ住んでいる。

「そういえば近所のコンビニにブレイン・ドライヴのチラシが貼ってあったぞ。確か『パチ▼ロク』の記事も貼ってあったような気がする」という情報が寄せられた。どう考えても貼ったのは水田だ。かつてバイトしてたコンビニに頼んだに違いない。カワイイ奴だ。かように、水田はカワイイ男だ、ヤングなのだ。しかし、どこかヒネている。21歳だし、歳上のオネーサマから誘惑されることもあるだろうが、そう簡単に攻略できるタマではないんじゃなかろうか。ま、それはさて置き、大いに語ってもらいましょうか、『完全驚異』。

——この夏はどんな生活を？

水田 「最近はボーッとしてます。クーラー買ったんですよ」

——ビッグカメラで、か？

水田 「近所の電器屋で7万円で。そこのオバチャンと友達なんで。(笑)自分で説明書読みながら汗だくになって取り付けて。クーラー浴びながらボーッとしてるというか」

——それだけ？

水田 「う〜ん……あとは〝お香〟をたいて……」

——……。最近、取材なんかで、アルバム『完全驚異』の反響をいろいろ聞くと思うんだけど？

水田 「なんか〝ユー・リアリー・ガット・ミー〟が受けてるみたいですね。原曲がハッキリしてるんでわかりやすいんですかね？」

——たぶん、そうだろうね。で、今月は少し曲の解説をしてもらおうかと思うんですけど？

水田 「あぁ、自分の曲はうまく解説できないんですよ。感性だけで作ってるから」

——深く解説してもらおうなんて始めから思ってないよ。

水田 「ハア。じゃあ、詞の部分で1曲だけ。(笑)〝TIME TRICK STAR〟(アルバムの1曲目)ってのはタイムトリップした自分に自分が追いつめられているという」

——タイムトリップって？

水田 「タイムトラベルでもいいんですけど……」

——なるほど、SFね。

水田 「まだ納得しないで、(笑)先があるんですよ。利用してると思ったとたんに利用されてるという状況に気がついた。でも、そのスリルにとりつかれて逃げられない。これは自分のことなんです」

——〝利用してると思ったら利用されてる自分〟ってのは今のキミの状況からしてイミシンだなぁ。

水田 「でしょ、でしょ(笑)」

——アルバム聴いて思ったんだけど、曲を作ってから詞を書いて乗せてるんじゃないかな？

水田 「だから、うまく詞が乗らないんですかね。タイトルも何も決めないで(曲を)打ち込んでから、合わせようとして詞を書いてんですけど、詞の書き方がなってないなって最近思いだして(笑)」

——打ち込みも感覚優先なの？

水田 「違うんですよ。〝TIME〜〟ならハードロックとボディ・ビートの融合をやろうと考えて」

——曲作りはスタイルから入る？

水田 「そうそう。詞と曲に分けて考えるなら、作る上で全身欲しいんです。詞が感覚なら曲は頭で」

——それなら、歌いやすい曲、覚えやすい曲を作ってやろうという意識は当然あると？

水田 「ありますよ。若者なりに戦略を立ててたんですよ。バカ者とも言われてますが。(笑)キャッチーなメロディがあってギュイーンってノイズが入るというだけじゃなくて、たとえば〝SET ME FREE〟って曲では、オレにも意図的に商業音楽ができるっていうのを示せたかなという」

——ほぉ〜っ。

水田 「たとえどんなスタイルでも、メロディでも最終的には自分の世界というか、自分のモノになりますからね」

——自信だねぇ。

水田 「表野くんがほめてくれると自信がつくんです。(笑)表野くんは信用のおける、僕にとってのリスナーでもあるんです」

——そういう感覚があったから、メンバーが減っていって2人組になってしまったんだな？

水田 「最近はディレクターのTさんを驚かせようっていう、驚かせれば、その曲は大丈夫だという気持ちもあるんですけど、表野くんに関しては、音楽的に信じられるのが彼しかいないから。彼に聴かせるといろいろ分析してくれる、いろいろ言ってくれるから作りがいがあって。ホントはね、戦略的な部分は彼にまかせてるんですよ。もう、安心してまかせてますね」

嗚呼、忌しい。誌上応援団『無礼淫怒雷舞』結成。次号にて会員募集。

あ〜あ，…ワタクシ㊟もヘンなことを思いついてしまったものだ。なんと忌しい，なんとオゾましい…ブレドラの誌上応援団を作っちまおうなどという愚かな行為。しかし，こうして発表してしまったからには，やっぱりマジメにやらんとなあ。……というワケで詳細は次号にて。カンタンなプランだけ申し上げますと，ちゃんとした会員ナンバー入りメンバーシップ・カードをこさえます。入会金，会費 etc 一切無料。会員だけの特典たまに有り。会報は月イチでパチ▶ロクに掲載。その他，爆笑必至の連載企画。全国の自虐ソルジャー予備軍救済と，ブレドラを酒のサカナにとにかく楽しむ，という 2 大目的を持った，暗くて不健康でアブナイ応援団です。もちろん会員登録をしなくとも充分たのしめますが，どうせなら自分の中にある自虐的部分を潔く認めてはいかがでしょうか!? …なにがなんだかわかりませんね……。あいスミマセン。とにかく次号をおたのしみに。『無礼淫怒雷舞』とはなんなのか!? 皆さんがいったいどのようにたのしめるのか!? これら一切の全貌を次号にて発表いたします。とにかく本人たちも悪ノリしています。どなたか助けてくださいまし。

自虐兵士予備軍、爆笑必死

あまりに唐突で申し訳けないが……。水田逸人が好きな女性のタイプは「天使のような人」だそうだ。うん，あまりに唐突だ…。

よくわかる林アキオ。

今月の問題点

"ロックンロール"と"根クラ"の相互作用について

林アキオはクライ――このマイナス・イメージになりがちな言葉も、彼の音楽を聴いたあとでは非常に"いい意味"として作用する。挫折がロックンロールを産む場合はそうそうあるもんじゃない。しか〜〜し、しかし。林アキオの場合、ところがどっこい…なんだろう。



Photograph **Taishin Aoki**
Text **Satoshi Kozima**

親戚のお兄さんの家に安手のエレキギターがあって、それをぶら下げて写真撮ったりして、その重さが子供心にハマッた、なんて記憶もありますね。

AKIO HAYASHI

林アキオの妙にフェイクされた歌声を聴いた時、僕がどこかほっとした気分になれたのは、直接的でわかりやすい唄い方を避けることにより、ロックの持つ奥深い人間味だとか、暖かさみたいなものを何とかして表現しようとする姿勢がそこに窺えたからだ。もちろんそれが未だ完成していない所もあろう。が、パンクのようなノリ一発で終わる音楽を本能的に避け、確実に音そのものの背後に隠れる何かまでをも見せながら、聴き手に何かしらのマインドゲームを強いるような不思議な手触りのある楽曲を唄い続ける彼は、本当の意味でのロックの魔力みたいなものを見つけ、信じていられるアーティストの一人のような気がしたのだ。現在二十八才の彼。これまでの音楽体験は今の彼のサウンドスタイルから容易に想像できたものだったが、多くの同世代のロッカーたちとはまた違った独自の哲学を彼は持ち、確実に個体としての音楽の存在に身を委ねつつ、今を生きている。

●

――小学校六年の時にビートルズを聴いたのがきっかけだったってことですけど、その年齢じゃあ、ロックのことを語りあえる友達なんかいなかったでしょう?

「殆どいなかったですね。でもその頃は野球もやってたんですよ。近くに東大の農学部があって、グランドがいくつもあったから。だから友達はいないわけじゃなかったですね。昼間は野球やりつつの、夜、ラジオで音楽を楽しむ、みたいな感じで」

――小学生だと例えば車や鉄道に興味を持ったり、何かを集めたり…、なて趣味がやっぱり普通でしょ。その中で一番音楽に惹かれたのは、何が大きかったんですか?

「鉄道の写真をよく撮りに行ってた友達もいましたけど…。よくわかんないけどしっくりきたんですよ。親戚のお兄さんの家に安手のエレキギターがあって、それをぶら下げて写真撮ったりして、その重さが子供心にハマった、なんて記憶もありますしね」

――当時よく聴いてたラジオというのは?

「まあ、何かの特集番組とか、ヒットチャートものですよね。アーティストでいうとベイ・シティ・ローラーズとかエアロスミスとかが流行ってた時で、俺もすげえかっこいい、とか思いながら聴いてましたね。で、中一の時にビートルズのコピーバンドみたいのを組んで…、その頃たまたまラジオでジミ・ヘンドリックス聴いたんです。あの時の力強さはいまだに覚えてる感じですね。もちろんロックなんだけど、ジミヘンだけは何のジャンルにも入れないような雰囲気あって、特に興味持ったんですよ。火つけて燃やすとか、レコードの作り方とかあらゆるものに。最初に買ったのが『スマッシュ・ヒッツ』で、次が『アクシス・ボールド・オブ・ラヴ』って、モロ、サイケのデザインのやつで、あれは今も自分のベストアルバムですね」

――十代の頃にロックに惹かれるのって、ある種エリート意識のアピールたいな面もあったでしょ。他とは違うんだっていう。

「確かにそういう意識は持ってたと思いますよ。でも…、ジミヘンに惹かれたのはとにかくすごいなって、曲にしろ録音のし方にしろ、完璧に打ちのめされちゃったからなんですよ。で、何としても自分でやってみたいなって、いろいろやりましたね。ディレイなんか買うお金ないから、テープレコーダー二台使ってそれらしくしたりとか。二台一度に録音状態にしてギター弾いて、ある程度その音を録ってから二台同時にスタートさせると、どうしても回転ムラができて、だんだんずれてくるでしょ。それがディレイに聴こえて（笑）」

――（笑）当時からプロでやってこうと?

「ありましたね。当時から結構弾けちゃってたんで、それ以外は考えられなかったし。まあ、友達に"将来プロになるの?"と訊かれると"わかんないけど"とか答えてたけど、自分じゃこれしかないと思ってましたね。でも、ただ"プロになります"って手挙げただけで簡単なれるもんでもないですからね」

――でも、林さんが中学生の頃ってちょっとした日本のロックの盛り上がりがあった時期じゃないですか。東京ロッカーズがあったり、めんたいロックとかが出てきたり…。あの辺でわりと楽にデビューできちゃう、みたいな風潮が少しできましたよね。

「俺ね、パンクがダメだったんですよ。体質的に合わなくて、ピンと来なくて。ラモーンズとかは聴きましたけど、妙に直接的に衝動を表す音楽ってどうもダメでしたね。だから見えない方が好きなんです。何か後ろに隠れてるかなって感じが歌詞とかにあるのが好きで。あんまりストレートにダーって出しちゃうものはどうもね」

――あくまでもロックはインテリジェンスのある所とか、哲学的な背景がある部分が好きだったわけだ。

「そうですね。で、若干暗さを感じるものっ



ていうか、音は見えないものなんだけどそういう空間が広がるものですよね。で、それが色で見えたり。ジミヘンの音楽なんか聴くと俺、すごい色を感じるんですよ。で、その色もつかみ難いけど自分にはわかるっていうのがいいですね。それを自分で何とかしてみたいなっていう」

——前号のインタビューで、高校に入っていきなりギターバトルをかましたって武勇伝がある、とか書いてあったけど、今はソロでやってるわけですよね。それはやっぱり当時から自分についてこれる仲間がなかった、なんて理由があったから？

「基本的にはバンドでやってきたんですけどね。ペニーズって五十年代のロカビリー系の音を出すバンドやってて、それが解散状態になった時、自然な流れで俺は一人でも大丈夫かなって思ったことがあって…」

——ほう、大丈夫だと思った。ってことはやっぱりバンドでやるよりソロでやった方がきついと思ってたんだ。

「確かに楽ですよね。バンドだと。これまで俺もバンドでライブハウスとか出たけどその頃は一人でやってる重さとか感じなかったし、一人になってからテープとかあちこちに出しては落ち、みたいなこと繰りしてる間にそれは痛感しましたよ。バンドは責任も分担できるけど、ソロだとそれができなくて。でも自分の音のイメージとか…、自信もあったし、これはバンドじゃなきゃダメだってもんでもないなって感じて」

——林さんがその時期にそうやって楽な方を選ばなかったことには興味ありますね。ソロだといろいろデメリットもあるのに。

「それは流れもあるんですけどね。とにかく自分は一人で大丈夫だと思ったんですよ。まあ、一度あるレコード会社のオーディション、一人で受けた時、テープ審査は通って、最初はそんな話なかったのに次にライブの審査がありますって聞いた時は少しあせりましたけどね。（笑）で、自分でカラオケみたいのをテープで作ってやったりして、さすがに生でやることとのギャップは大きくて、悉く落ちてましたね（笑）」

——人との共同作業が苦手だったってことはなかったんですか？

「そうでもないと思うんですけど、バンドでやってる時、他のメンバーのやることが〝自分だったらこうするんだけど〟って思うことは多かったですね。それなら自分でやった方がイメージは強く出せるって。でね、一人ってことでいうと、実は…、恥ずかしい話だけど、高一の時二年に上がれなくて一年余計にやってるんですよ、俺。その時に〝あ、俺は一人なんだな〟って感じて…、一応卒業はしたんですけどね。まあ、周りから冷たくされるとかはなくて、逆に年上だから大事にはされてたんだけど、それが結構いやんなっちゃってね」

——その時の挫折体験も今の音楽性に影響を与えたりしてる？

「自分ではよくわからないけど、あるかも知れないですね。だからもう、心があるとしたら、それが薄いガラスで包まれてた状態ですよ。で、そのガラスには色がついてて。ちょっとしたことで傷がついちゃう、みたいなね。だから授業なんかマトモに受けられなくて、途中でプイと出てっちゃったり、酒飲んで学校行ったり（笑）」

——その頃やっぱり音楽が支えになった？

「やっぱり周りで落ちてた先輩とかいましたからね。そういう人のアレと…、音楽かな。当時は五十年代の音楽にどっぷり漬かってて、ロカビリーとかね。あの辺の単純だけど、反抗的な雰囲気にのめり込んだりしてたから。ジーン・ヴィンセントとか、エディ・コクランとか、プレスリーの腰を振り振り唄うのがカッコイイみたいな」

——高校を十九で出て、デビューが二十七ですね。その間はどんなことを？

「そのロカビリーのバンドを二十歳ぐらいまでやって、それからまた二～三年バンドやったのかな。その後は自分で曲書いてテープ録っていろんな所に送る毎日。もうその頃は意地になってましたね。でもいつかは何とかなるんだって思ってた。当時夢とかよく見ましたね。ちゃんとしたきれいなスタジオに入ってって、レコード作ってる」

——バンドブームとかあったでしょ。その辺で周りがタコに見えた、なんてことは？

「少しありましたね。音楽やってる知り合いとも結構いろんな話するんだけど、皆話だけがでかくなっちゃってね。何もしないで〝俺はいつかいい曲書くんだ〟とか言われてもピンと来ないでしょ。やっぱり現物があってこそわからせられるものなのに、俺は絶対それは違うと思った」

——デビュー前にオーディションとか結構受けて、どれも惨敗だったって話ですけど、その頃に音楽業界に対して何らかの諦観を持っちゃった、みたいなことはどう？

「一度最後にやったバンドの時に、ある事務所の人が練習見にきたんですよ。テープを送っといた所の。で、その時は〝ストーンズみたいな匂いがする〟とか言われたんだけど、その後お茶飲みながら話してる時に、〝君はギター持たず黒人みたく踊りながら唄うのがいい。作家を用意するから〟とか言われて。ダンスものが流行り出した頃なんですけど、その時は〝何じゃこいつ？〟って感じでしたね。それから〝そういうことなのかな〟とか思ったけど…。そんなの聞いてたら収集つかなくなるでしょ。チェッカーズにしてもデビュー当初のあのイメージが残っちゃってるじゃないですか」

——チェッカーズを評価する人の理由は黒人マニアの部分を残しながら、歌謡曲フィールドも巻き込んでいったことだって言いますよね。そういう考え方はイヤなんだ。

「自分じゃダメですね。だから説明つかない、よくわかんないものなんだけどパワーを感じるものがどうしても好きなんですよ。ある程度カッコつけられて、〝ハイ、この音楽です〟っていうのじゃ面白味ないし」

——そうなると日本じゃ難しくないですか？ 評価のされ方がまだ、画一的でしょ。

「自分じゃそんなに難しい音楽やってるつもりはないし、共感してくれる人は絶対いるはずなんですよ。だから…、今までやってきて、いいって言ってくれる人が一人もいなかったら考え方も変わったかも知れないですけど。やっぱり何人かは〝最高だ〟って言ってくれるからその意見は尊重したいんです。だってその人の意見聞かなければ、自分も存在しないことになっちゃうでしょう。やっぱり音楽って一対一の感覚のものであって、それがいかに膨らんでいくかってことだと思うんですよね。最初から皆にわかるように、ってやってってもダメじゃないかって思いますよ」

——これまで出た二枚のアルバム聴かせてもらって、すごく下世話なことを言っちゃうと、例えばビートルズがあったりマーク・ボランがあったり、すごく背景が見えるじゃないですか。その辺でオリジナリティってものはどうとらえてます？

「自分じゃT・レックスって言われるのはよくわからないけど、もちろん好きだからそういう要素は出ちゃうんでしょうね。でもやっぱり自分で曲書いて、今録音してるわけだから自分は出てると思うんです。で、すごく思うのは何でも殺すことはないっていう。そういう意識でやってれば、いつか自分の色みたいなものはどんどん絞られていくんじゃないかって感じはしてますね」

いつかは何とかなると思ってた。夢をよく見ましたね。ちゃんとしたきれいなスタジオに入ってって、レコード作ってる。


WILD FLAG
NEW ALBUM 10.7 RELEASE!!
THREE FACES
ロック魂たたきこみオ2弾!!
WILD FLAG
THREE FACES
STUDIO RECORDING／DERECT STUDIO POWER TAKES／LIVE TAKES
16ページブックレット 初回特典：バンドロゴステッカー
TOCT-6718 ¥2,500 (TAX INCLUDED)
WILD FLAG 2nd TOUR
GOING ON
10/26 前橋 RATTAN 048-648-1691 キョードーロッケン
10/28 新宿 NISSIN POWER STATION 03-3857-9999 ホットスタッフ
10/30 神戸 チキンジョージ 06-345-2500 キョードー大阪
10/31 京都 MUSE HALL 06-345-2500 キョードー大阪
11/5 仙台 BEEBベースメントシアター 022-222-9999 GIP
11/7 札幌 PENNY LANE24 011-613-9000 WESS
11/12 長野 J 025-245-5100 キョードー北陸
11/13 新潟 CLUB JUNK BOX 025-245-5100 キョードー北陸
11/14 金沢 VAN VAN V4 0762-60-0999 キョードー北陸金沢
11/17 高松 オリーブホール 0878-22-2520 デューク
11/18 岡山 ペパーランド 0862-31-3531 夢番地岡山
11/19 広島 WOODY STREET 082-242-8187 WOODY STREET
11/21 博多 DRUM Be-1 092-712-4221 B.E.A.
12/3 大阪 アム・ホール 06-345-2500 キョードー大阪
12/4 名古屋 ELL 052-936-6041 ジェイルハウス
〈総合インフォメーション WILDING TEL.03-3470-6040〉
WILD FLAG Official Fan Club
WILD GANG
information TEL.03-3402-8395
TOSHIBA EMI
EASTWORLD



Fishmans



税込定価 ¥3,000　税抜価格 ¥2,913
MRCA-10001

フィッシュマンズ ニューアルバム

92.10.21 ON SALE "KING MASTER GEORGE"

ライブスケジュール

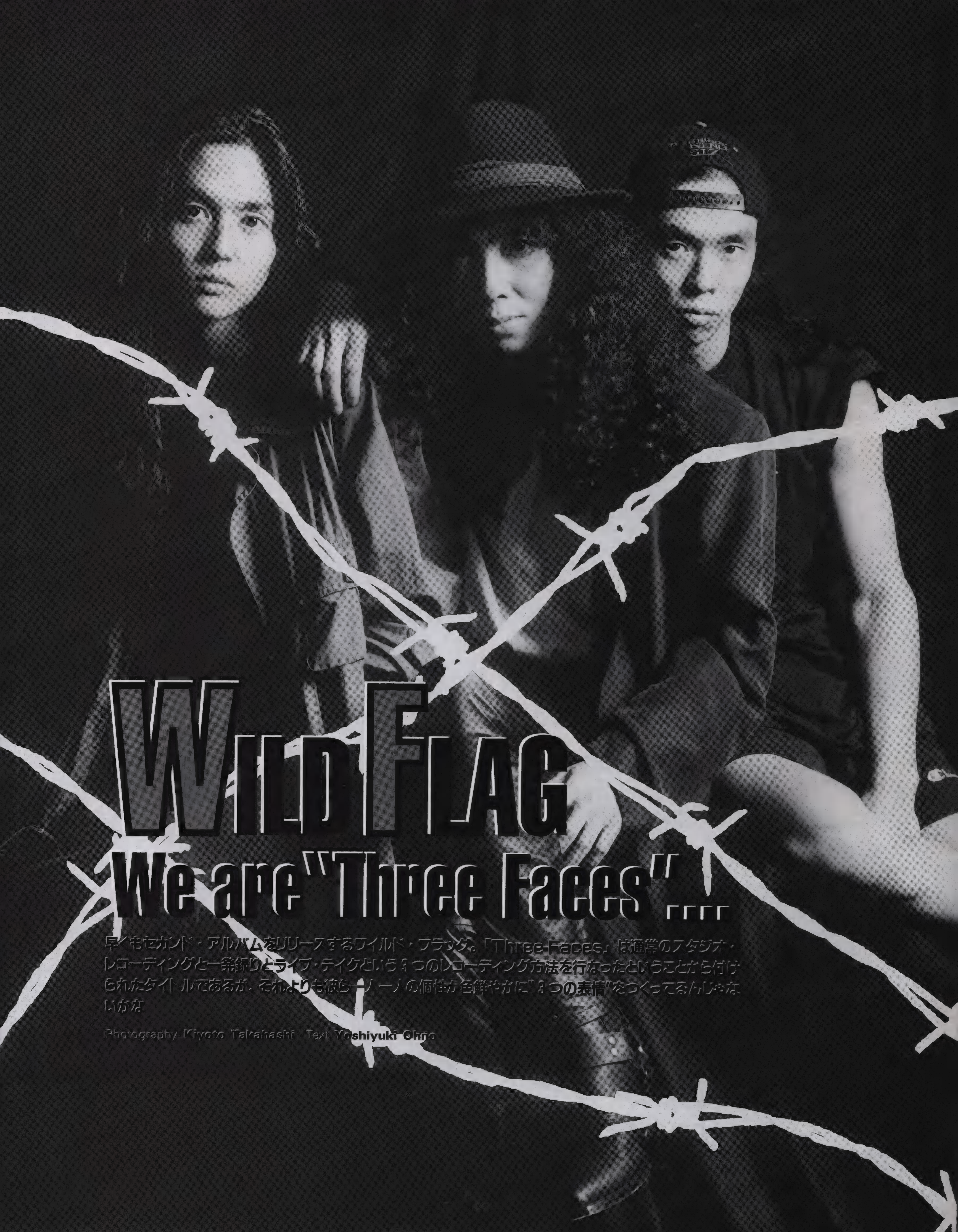
11/10　東京＝日清パワーステーション ソーゴー東京 03-3405-9999
11/16　名古屋＝ハートランド スタジオ ハートランド スタジオ 052-202-1351
11/17　大阪＝心斎橋クラブ・クアトロ サウンドクリエーター 06-361-9900

Now On Sale

ファーストアルバム〝チャッピー・ドント・クライ〟 VJCA-00004 税込¥2,800
ミニアルバム〝コーデュロイズ・ムード〟 VJCA-10001 税込¥1,500

下記各レコード店にて、フィッシュマンズのニューアルバム「KING MASTER GEORGE」の曲を収録したスペシャル・サンプラーカセットを9月末より無料で配布します。数量に限りがありますのでお早めに。問い合せ：株式会社メディアレモラス Tel.03-3356-0361

〈札幌〉玉光堂四丁目店、玉光堂オーロラ店 〈青森〉ジョイポップス、ビーバップ古川店 〈仙台〉スーパーレコード、タワーレコード仙台店
〈東京〉WAVE渋谷店、CDぴあ、ディスクユニオン渋谷2号店、山野楽器池袋パルコ店、帝都無線新宿ミロード店、新星堂国分寺丸井店
山野楽器吉祥寺サンロード店、池袋五番街、HMV原宿店 〈横浜〉山野楽器横浜そごう店 〈厚木〉新星堂本厚木ミロード店 〈静岡〉すみやSBS通り店
〈大宮〉山野楽器大宮そごう店 〈春日部〉新星堂ロビンソン 〈川越〉エイブル第一家電 〈船橋〉ヤンレイ 〈千葉〉ラオックス 〈水戸〉フジディスク 〈高崎〉新星堂高崎店
〈前橋〉新星堂前橋店 〈新潟〉ツモリレコード 〈名古屋〉ヤマギワメルサ店、太陽サウンドオン 〈京都〉JEUGIA河原町店、JEUGIA四条店、ビーバーレコード四条京極店
〈大阪〉WAVE梅田店、ワルツ堂梅田店 〈神戸〉星電社三宮本店 〈広島〉メイソングレイ、カワイショップ 〈福岡〉サウンドベスト 〈熊本〉マツモトレコード



WILD FLAG

We are "Three Faces"....

早くもセカンド・アルバムをリリースするワイルド・フラッグ。「Three Faces」は通常のスタジオ・レコーディングと一発録りとライブ・テイクという3つのレコーディング方法を行なったということから付けられたタイトルであるが、それよりも彼ら一人一人の個性が色鮮やかに"3つの表情"をつくってるんじゃないかな

Photography Kiyoto Takahashi　Text Yoshiyuki Ohno



Shotaro(b)



Kyoji(vo.g)



Eiji(ds)

出せるものはどんどん吐き出していくのがワイルド・フラッグ。

―ファースト・アルバムから、たった4ヵ月で、セカンド・アルバムがリリースされるけれど、最初の予定では、6曲くらいのミニ・アルバムになるはずじゃなかったの?

KYOJI「でも、これも入れたいあれも入れたいっていう感じで、どんどん曲が増えて7曲になっちゃったんだ。ちょうど、フル・アルバムとミニ・アルバムの中間にあるっていう感じだよね。価格的にもね(笑)」

―じゃあ、3千円まではいかないけれど、2千円じゃない、と(笑)?

KYOJI「そうだね(笑)」

セカンド・アルバムに入っている曲も、実際の話、去年のツアーのときには全部やっていたんだ。とにかく、出せるものだったら、どんどん吐き出していくのが、ワイルド・フラッグなんじゃないかな。そうやって吐き出すことによって、自分達自身にもプレッシャーを与えて、もっと曲を作っていくっていうことができるしね」

―たしかに、この『THREE FACES』に入っている6曲は、どれもライヴでやっていた曲だから、みんな耳になじんでいる感じがしてね…。

KYOJI「新譜っていう感じがしなかったのかなぁ(笑)?」

―そういう感じではないけれど、ファースト・アルバムの続編っていう感じがしたんだ。みんな、ライヴにいったことのある人ならば、聞いたことのある曲ばかりだから、逆にCDになっていないのが不思議な気分がするくらいだったからね。

KYOJI「たしかに、聞いてくれている人にしてみたら、そういう気分になるかもしれないね。でも、今回はライヴ・テイクとか、一発録りとかっていう曲が入っているから、ちゃんとスタジオでレコーディングしたものだけが入っているファースト・アルバムとは、違うおもしろさがあると思うんだ。

1枚目を作ったときにも、どんな録り方がいいかなって考えていて、「せっかくライヴ・バンドとしてやっているんだから、1枚目をライヴでレコーディングしちゃうのも、おもしろいね」っていう話をしたりもしていたし、一発録りっていうのも試してみたかったから、2枚目でそれが試せたから良かったよ。まあ、どのやり方が一番いいかっていうのは、それぞれ違っているけれど、それぞれのいい部分がこのアルバムで出たって思うんだ」

―入っている曲でいうと、「GOING ON」と「MAGMA」が、ちゃんとしたスタジオ・レコーディングで、「NOBODY KNOWS」と「LIVE TO BE WILD」そして「BREAK THE WALLS」が一発録り、「COUNT DOWN」と「PURPLE HAZE」がライヴ・レコーディングっていうふうに、3パターンのレコーディングで録られた作品になっているよね?

KYOJI「やっぱり、いろいろと試してみたいって思っていたのが一番だよね。それで、このアルバムを最初から聴いていくと、だんだんむき出しになっていくでしょ。

最初はSEも入れて、キチッとスタジオで録ったものが入っているんだけど、それが次にはスタジオでの一発録りになって、あとはお客さんの声も入ったライヴになっていくでしょう。なんか、だんだん脱いでいくような感じがあって、聴いていると気持ちがクレシェンドに興奮していく感じがするんだ」

―それで曲順がそうなっているの?

KYOJI「ウン、そういうのがあったからね。最後の方、ライヴ・テイクの2曲なんて、ヘッドフォーンでヴォリュームを上げて聴いていると、すごく臨場感があるんだよね。録ったままの音で、あとからいじったりしていないしね。

ライヴ・テイクの前に入っている3曲と較べてみても、ぜんぜん演奏が違うんだけど、やっぱりそれはライヴがお客さんとのコミュニケーションで成り立っているからだろうね。お客さんのパワーが、ホントにこのライヴ・テイクに入っていると思うよ」

―ライヴ・テイクは、どこのライヴ?

SHOTARO「デビュー前の4月にやった新宿パワーステーションのときに録ったんだけど、ライヴを録っているなんて考えてもいなかったから、ベースをバンバン叩いて弾いたりしちゃった(笑)」

―あの日は、たしか酸欠ライヴだったね?

KYOJI「そうそう。ボクなんて死にそうになってたよ。だから、改めてこのライヴ・テイクを聴くと、もう頭が真っ白になった状態で、こういうことをやっていたのかって、自分たちで驚いたりしたよ」

SHOTARO「そうそう、ほんとに〝よくやっているな~〟っていう感じ(笑)」

KYOJI「エンディングのEIJIのドラムなんて、もうホントにとんでもないことをやっているよ。あんなプレイは普通の状態じゃ絶対にできないと思うよ」

―それじゃあ、スタジオでレコーディングした2曲は、いつどこで録ったの?

KYOJI「これはファースト・アルバムを録ったときに、一緒に録ったものなんだ。だから、レコーディングは山中湖で、ミックス・ダウンはロスアンジェルス。最初から、ファースト・アルバムには入れないでおいて、次になにかするときに、おもしろい形で出そうと考えていたんだ」

―この2曲は、早いうちからライヴでやっていた曲だから、ファンにしてみたら、ファーストに入ってなかったのが、不思議だったと思うんだ。

KYOJI「やっぱり「GOING ON」って曲は、ライヴでもハイライトになる曲だから、次のアルバムの核になると思ったんだ。これがなくても、ファースト・アルバムには、存在感があるしね。それで、この曲はライヴでも、お客さんが「待ってました」っていう感じの曲だから、今度のアルバムにこの曲が入っていると、やっぱり「待ってました」って言ってくれるんじゃないかな」

―そして、一発録りの3曲があるけれど?

KYOJI「5月頃に、1日だけで録っちゃったんだ。時間が余っちゃったから、この他にデモ・テープとして2曲録ったから、1日で5曲録ったことになるね」

SHOTARO「いやー、できちゃうもんだなあって、感心しましたよ(笑)。実際、昔のいいロック・アルバムには、一発録りのものがたくさんあったでしょ。ああいうものを聴いて、一発録りに憧れていたから。それで、普段リハーサルしているときに、カセット・テープを録ったりしているでしょ。そういうものを聴いて、ワイルド・フラッグならば一発録りができると思っていたから。やってみて、一発録りならではの勢いとダイレクトな感じが出ていて、やっぱり正解だなって」

KYOJI「ちゃんとスタジオでキチッと作ったものもいいけれど、こういう録り方をしてみると、スタジオで録ったのとは異質のスピード感とかエネルギーが出てると思うんだ。やっぱり・ヴァン・ヘイレンのファースト・アルバムにしても、そういう一発録りならではの迫力があったしね」

EIJI「このアルバムの中では、時間的には一発録りが一番最後に録ったことになるんだけど、いい意味で緊張感があった。ファーストのときにはレコーディングも初めてだったから、手探り状態だったけれど、今度はみんなでやったことが、そのまま入るっていうことを考えて、〝オー、ファンタスティック!〟っていう感じでね(笑)」

SHOTARO「普通のレコーディングみたいに、ひとつひとつの音を別々に録るのもいいんだけど、一発録りっていうのはある意味でラフなんだけれど、その場でしか出ない何かが入っているから、ロックだと思う。

どんな録り方をしても、いいものはいいっていうことが、証明できたんじゃないかって思った」

―そういう3種類のレコーディング方法で作ったから、このアルバムのタイトルを『THREE FACES』にしたの?

KYOJI「まあ、そういう意味もあるし、この3人の顔っていうのもあるし。このアイディアを出したのは、ファースト・アルバムでエンジニアをやってくれたスタン片山だったんだ」

―メンバー自身としては、このセカンド・アルバムを、どう考えてる?

SHOTARO「これはメチャクチャ気に入ったアルバム。なんか、自分がどんどん露出していっているっていう感じで。自分で作ったのに、自分でうれしくて思わず笑っちゃうような、そんな感じのアルバムだし、すごく親しみの持てるものになったと思いますよ」

KYOJI「このアルバムが出て、お客さんがもっと曲を知ってくれれば、また次のことができるから、それが楽しみ」

EIJI「本当に、ライヴでは酸欠で、頭の中がトランス状態で演奏している音が、こんなにクリアーな音で聴けるのが、なんといってもおもしろい。〝へえ~、こんなことをやっていたのか〟っていう驚きがあって、自分でも楽しめた。初めてテープを聴いたときには、本当に〝ウワーッ!〟っていう感じでね」

―考えてみると、ファースト・アルバムがリリースされる前に、すでにこのセカンド・アルバムのレコーディングはすべて終わっていたっていうのもすごい話だね?

SHOTARO「まあ、まわりの人たちが、いつでもオレたちが飛び出せるようにしていてくれているっていうことですよね」

EIJI「オレたちは、いつでも飛び出す準備ができているから」

KYOJI「ミュージシャンがやりたいことを、素直にできる時代になったっていうことかもしれないよね」

衝動のままに動いたら、こういうアルバムになった。



SEVEN SONGS ALBUM『NODE』をリリースしたDIE IN CRIES。
前作の『VISAGE』からは大きく変化を遂げている。
DIE IN CRIESの中でどんな変化が起きたのか!? ボーカルのKYOに迫る!!

Text **Kumiko Murayama**

DIE IN CRIES

ミニ・アルバムでもフル・アルバムでもないDIE IN CRIESのセブン・ソングス・アルバムは『NODE』という。前作『VISAGE』ともまた印象の違う今回の作品をKYOは「わりと特別な位置にいるけど、通過点というより駅にあたるもの。けっこう大切なところを通ってるアルバム」だと言う。

※　※

――すごいストレートになりましたね。

「たまたまなんですよ。変わったたっていうよりは、すごく楽曲が自然になったたっていう。だから〝すごいポップですね、今回は〟って言われるんですけど、でも前のアルバムからキャッチーさっていうのはあったと思うんですよ、いろんな面で。ただ今回はメロディーが目立つようなアレンジになってるから、そういう印象を受けるんだろうな、っていう」

――前のアルバムがけっこう作り込んだものだったから、そういうところで比べても違うなっていうのがあるんだけど。

「やっぱり前回は、DIE IN CRIESっていう母体はあるんだけど、ライブをやってるわけじゃないし、アルバムを作るのに何をビジョンにするかっていったら、自分たちでイメージを作りこまなきゃならなかったわけですよね。だから1枚目はああなったんだけど、今回ミニ・アルバム――って形で最初は進んでたんだけど――を作ろうとした意図っていうのは、アルバム1枚でコンサート組み立てるのもきついっていうのがあって。そういう部分で曲が欲しいっていう欲が出てきたりとか。でまあ、そういうところをメインに作ろうっていうことから始まって、レコーディングもツアーの後すぐにやって。だから制作もすごく期間が短かったし、ライブ感覚もまだ残ってたし」

――そういうライブ感覚を持ったまま、一気にレコーディングをしたと。

「うん。だから時間を置けば、もうちょっと作り込んだものになったと思うんですよ。それは結果論だからわからないけど、でもすごく衝動的に作った、っていうのかな。そういう部分でピュアっていうか、リアルさっていうのはメインだったんですよね。今回は7曲入ってるんですけど〝あと2～3曲録ってフルにしちゃえばよかったのに〟とか言われて〝シマッタ!〟って言っ

てたんだけど、(笑)でもフル・アルバムとなると、またビジョンが違ってきちゃうから。だからそれとも別のところにあるんですよね。俺、ミニ・アルバムって言い方、あんまり好きじゃないんですよ。場つなぎ的なニュアンスが自分の中にあって。でもこれは全然そうじゃないし、アルバムとしての形からいうとミニでもフルでもないし。ただ、すごくフル・アルバムに近い形ではありますよね」

——そうですね。曲が比較的長いっていうのもあるけど、ボリュームがありますよね。

「うん。ライブの感覚に近いですよね。『VISAGE』の曲も作り込んであるわけだけど、ステージではライブっぽさが出てきてる。そういう部分で観客とのコミュニケーションがとれたり、メンバーとのコミュニケーションが深まったりっていう刺激があって、それを今回パッケージしたかったっていうのもあって」

——やっぱりDIE IN CRIESにとって、1枚目のレコーディングとこの間のツアーは、かなり大きな意味があったんでしょうね。

「そうですね。初めてのツアーだったし、イメージで作ったアルバムでコンサートをやるわけだから、多少不安もあったし。自分の描いてるイメージを信じてやってるわけだけど、すごい怖さもあって。でも、ツアーをやってその反応があって〝信じたことは間違ってなかったな〟っていう自信も徐々に出てきたりとか。そういう部分で自由になれたっていうのかな。だから詞の面にしてもそうだし、歌のテイクもそうだし、アルバムの中のボーカリストっていうスタンスもそうなんだけど、個人的にすごく自由になれたっていうのが、このアルバムを生んだいちばんの原因なんじゃないかな」

——『VISAGE』を作った時と、意識としてはまた違うもの?

「うん。ただ、新しいことをやろうとか、そういうことは全然思わないんだけど。だから変わったっていうよりも、自然になったとか、表現の仕方が素直になってきた、ってことなんじゃないかな」

——そうかもしれない。タイトルの言葉の選び方や歌詞の内容を見ると、だいぶ違ってきた気がしますよね。

「そうですね。詞も変わったねってよく言われるんだけど、書き方自体はそんなに変わってないと思うんですよ。ただ、何でそれが耳につくのかっていうと、すごく素直な言葉のフレーズが入ってきたからだと思うんですよ」

——なにか、日常的な言葉っていうのが増えてきましたよね。

「今まではけっこうこだわりで、二人称的なものは入れてなかったんだけど、それは自分の伝えたいことが、人称がなくても歌詞にできたからなんですよね。ただ、今回はすごく気持ちが大きかったんですよ。だから歌詞にまとめる作業も時間がかかったし、どうしても〝君〟とか〝僕〟とか、そういうものが入ってこないと、自分の言いたいことにたどり着かなかったっていうのかな。わりと物事に対して、広い見方ができるようになってきた気がする」

——他のメンバーにしても、今までよりそれぞれのカラーが出てきたっていうか、〝あの人はこういうフレーズも持ってるんだ〟みたいな部分もけっこうあったんですよ。そのあたりも、ツアーをやることでメンバー間の距離が近くなった分、出しやすくなってきたのかな。

「そうですね。みんなもすごい自由になったんじゃないかな。今まではわりときっちりしてたけど、例えば今回はクリックがズレても、それがグルーヴとしてかっこよければOKだってスタンスになったってことは、やっぱりツアーの経験が大きかったんじゃないかな。DIE IN CRIESって、すごい駆け足できたバンドじゃないですか。結成からデビューまでも早かったし。でもそういうところだけ駆け足で、例えば〝やっていればついてくる〟っていうフォローの言葉はあるんだけど、そこに頼ったら都合良すぎるでしょ。やっぱ最低限のことはしないと。刺激的なものとか吸収しなきゃいけないものは、こっちから積極的に飛び込んでいかなきゃダメかな、みたいな。1ツアーやっただけでこういう形のアルバムが作れたんだから、それがひとつの答えじゃないですか。だからその答えで満足するんじゃなくて、もっとそういうところで欲張りになったほうがいいなって」

——音を聴いた印象としては変わったなって気がするけど、これは今現在のDIE IN CRIESだって考えたほうがいいってこと?

「うん。歩きはじめたDIE IN CRIESでしかないですよね。だから『NODE』ってアルバム・タイトルの意味も、〝接合点〟とか〝節目〟とかあるんだけど、そう言うと〝これは軌道修正かな〟って捕らえられがちじゃないですか。まあ、細かいところだけ見れば分岐点なのかもしれないけど、1本の木で考えればいろんな枝があって当然なわけですよね。だからDIE IN CRIESっていう1本の木を作るための枝でしかないわけで。すごい衝動のままに動いたら、こういうアルバムになった、っていうことでしかないかな」

——じゃあ今は、その成長過程?

「だと思いますよ。でも、次のアルバム作る時にその枝を延ばすのか、別のところに枝を作るのか、それはまだわからないですけどね」

——フル・アルバムじゃないわりにはシングルも切ってるし、初回特典もついてるし、フル並の展開をしてますよね。

「初回特典の、「RAPTURE THING」のリミックスは、やっぱりアルバムのビジョンとは別なんですよ。今回は、作り込んでない部分がわりと全面にでてますよね。本来打ち込みとか作り込む部分ていうのは、バンドの要素としてあるわけで、それを極端に押し出したのがあの形なんですよ。今までだったら、ああいう形で出すことで誤解を受けるのが怖かったけど、少しずつ自信が出てくるにつれて、そういうスタンスも広がっていったっていうか。だからあの曲に関して俺はノータッチだし、そういうところで自分の自由さみたいなのも確認できましたね」

——シングルを「My Eyes」にしたのは、どういう経緯で?

「当初はアルバム6曲の、未発表の曲をシングルにしようってことだったんだけど、やっぱ録っちゃうと逆にビジョンが見えてきて外せなくなって。で、単純にサビが覚えやすいし、シングルっぽいってことで。カップリングの「無口な夜」っていうのは、前回のレコーディングで録った曲なんですよ。いろいろ検討した結果外したんですけど、実は今回のアルバムは、この曲を発表するためのものだったという。(笑)これも何か誤解されそうで嫌いな曲だったんだけど、ツアーの後改めて聴いたらへんなこだわりがなくなってて。そういう部分でも自分の許容範囲は広がってますよね」



テレビは楽し!!

究極のコラム・マガジン
『スーパーコラム』第2号

総力特集/カルトTV ティーピー

『たけし・逸見の平成教育委員会』
『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで』
『北野ファンクラブ』
『爆笑王誕生』
『探偵ナイトスクープ』
他 人気番組徹底研究



"深夜番組の逆襲"
"30年後のトレンディー・ドラマ"
"NHK教育テレビの楽しみ方"
"生コマ・お茶の間ショッピングの実態"
"視聴率はこうして決まる!" "テレビ40年史"
"裸の限界" "2001年のテレビ"
等々、**怒濤の260**ページ!!

発売中!!

(A5判/260ページ/定価980円)

Sony Magazines

CDエイジのミュージック・マガジン

WHAT's IN? ワッツイン

10月号 好評発売中!! just290yen(税込)
※内容は変更になることがあります。

●FEATURING
サザンオールスターズ/B'z
布袋寅泰/永井真理子/UNICORN

●コンプリート・ファイル **氷室京介**

●2大物別企画
史上最大のクイズ作戦PART 2/夏のイベント'92総まくり

●2大連載スタート
渡瀬マキ/槇原敬之

ソニー・マガジンズ 〒102 東京都千代田区五番町6-2 TEL.03(3234)5811

憶えてろよ。

epic

ロックの雄、"バービーボーイズ"の集大成
10月1日ここに発売。

2枚組34曲入り完全ベストアルバム。



「BARBEE BOYS」

「表紙が3Dビジュアルの豪華52Pブックレット付き」

DISC 1

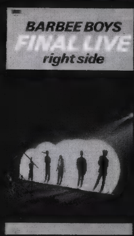
暗闇でDANCE／帰さない／もォやだ！／小僧／ふしだらVSよこしま／Shit! Shit! 嫉妬／midnight peepin'／負けるもんか／チャンス到来／タイムリミット／でも!?しょうがない／ダメージ／なんだったんだ? 7DAYS／ショート寸前／離れろよ／STOP!／翔んでみせろ／ラサーラ

DISC 2

C' m' on lets' go／あいさつはいつでも／女ぎつねon the Run／Dearわがままエイリアン／泣いたままでlisten to me／ナイーヴ／はちあわせのメッカ／ごめんなさい／chibi／目を閉じておいでよ／さあどうしよう／勇み足サミー／ノーマジーン／三日月の憂鬱／あいまいtension／おやすみよそもの

全34曲収録●CD：ESCB 1327～8 ¥4,600税込定価（¥4,466税抜価格）

ファイナルビデオ ライヴ&ドキュメント2巻同時発売!!



「FINAL LIVE right side」

「憶えてろよ!」の言葉を残して活動に終止符を打ったバービーボーイズ。FINAL TOURより、1月22日、23日中野サンプラザホール、24日渋谷公会堂でのライヴを収録。彼らの最後の勇姿をとどめるメモリアルビデオです。

収録曲：帰さない／あいまいtension／プリティドール／でも!?しょうがない／わぁい わぁい わい／小僧-cryin' on the beach／はちあわせのメッカ／STOP!／マイティウーマン／三日月の憂鬱／打ち上げ花火／ラサーラ／C' m' on let's go!／負けるもんか／さあどうしよう／全15曲収録

68min.／COLOR／STEREO／hi fi ※LDのみ11月1日発売。

VHS：ESVU-360 β：ESUU-3360 LD：ESLU-360 各¥5,500税込（各¥5,340税抜）



「FINAL LIVE reverse side」

FINAL TOURの楽屋裏からリハーサル、移動、打ち上げまで、とことん追いかけたドキュメント映像。超特価1,800円也。最後の瞬間を迎えるまでの彼らの息づかいが伝わってきます。ただしこれはあくまでもドキュメント・ビデオです。ライブを御覧になりたい方は"right side"をどうぞ。

52min.／COLOR／STEREO／hi fi

VHS：ESVU-373 ¥1,800税込（¥1,748税抜）

「The Moment of Truth BARBEE BOYS COMPLETE BOOK」

'92年1月24日のFINAL LIVEをメインに結成から最後までの軌跡を追った待望のCOMPLETE BOOK!

●定価（税込）1,800円 ●B5判172頁 ●10月上旬ソニーマガジンズより発売

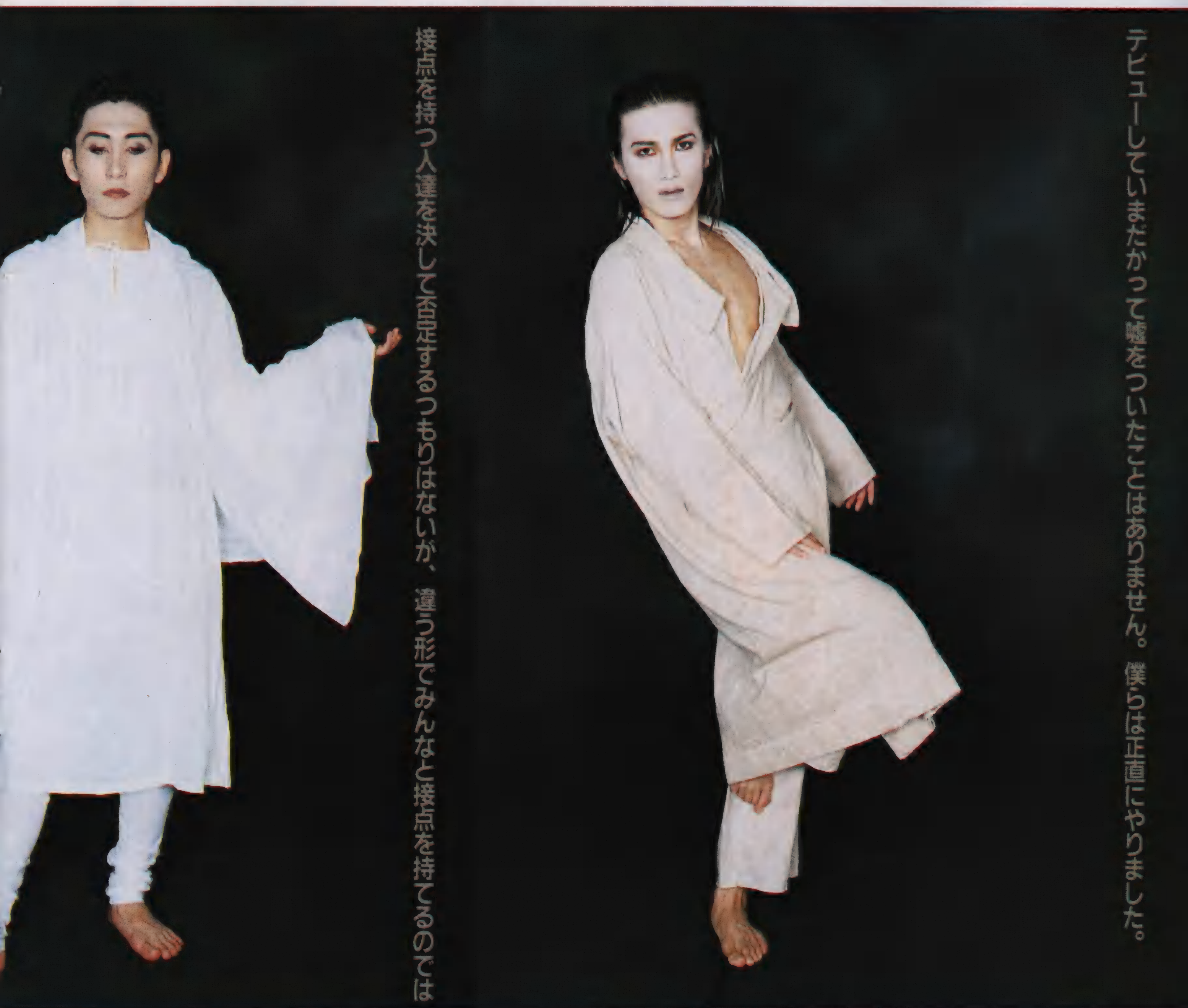
Barbee Boys

Epic/Sony Records
Sony Music Entertainment (Japan) Inc.


SOFT BALLET

移籍第１弾である「MILLION MIRRORS」。これは大いに波紋を呼ぶ１枚になりそうだ。次のページではこのアルバムについて対談をしているが，本ページのメンバーのコメントはそれに対する答えである。だから，このソフトバのコーナーの正しい読み方は P98 を先に読んでから，このページに戻ってきてほしい。そして両者のギャップを楽しんでほしい。

Photography **Kiyoto Takahashi** Styling **Reika Ijima (K's Office)**



KEN MORIOKA

RYÖICHI ENDOH

SOFT BALLET
MILLION MIRRORS



全てに対して深読みしないで下さい。リラックスすることはコンセプトではありません。

MAKI FUJII

●衣装協力　BEAUTY & BEAST（06-539-4177）

SOFT BALLET
MILLION MIRRORS

待望の新作「MILLION MIRRORS」を斬る！ 三者対談の結論はいかに？

このアルバムを聴いて，ソフトバレエが変わったと思う人が必ずいるはず。そこで彼らをこよなく愛すライター今津氏，広瀬氏，そしてファン代表として某編集部飯塚氏の3人で行なった「MILLON MIRRORS」対談。あんな意見こんな意見が飛び交い本音をぶちまける彼らにメンバーはどう応えるか？　ちなみにアルバム・タイトルに他意はないそうだ（後日談）

広瀬「今回のアルバムは自然に肩の力を抜いて作ってることがよくわかりますね。前作までは自分たちのマニアックな部分とか露骨に出さないでポップなフィルターを通して聴きやすくしていたわけだけど、商売的考えを全部取り払った分、今回はリラックスしてやりたいことを自然にやっているのが伝わってくる」

今津「確かにリラックスしている面はわかるんだけど、僕はそういう部分もありつつ、ツッパったアルバムだなって気がしたの。何でかというと前まではファンの子がパッと見てイメージがつかめてて、聴き手と作り手が一致している部分があったと思うんだけど、今回のはメンバーの感じたまま作ったというのがコンセプトになっているし、その分、あの人たちは作っている人、私は聴いている人っていうのが逆にすごく出てると思う。そういうのって、この御時世においてはすごいツッパったやり方だなって気がしたな」

飯塚「レコード会社を移ったということで、もっと変わるのかなと思ったんだけど、思ったほど変わってはいなかったなと。3人の色が曲にずいぶん出ているとは思う。聴く側の距離感というところでは、踊れる曲が少なくなった分、ステレオから流れてくる音を聴き入るというアルバムになったから、前よりかはあるのかな」

今津「踊れるとそれだけで一緒になれるような気がするからね。唯一、最後の〝Threshold〟がハードで踊れる曲なんだけど、この2曲はメンバーがおまけだって言ってたの。これって突き離しているよね」

広瀬「でも、僕はテクニック的なことでは進歩したとは思えなくて、ボーカリストとしての遠藤クンは成長したと思うんだけど、音作りとかアレンジとかは別に進歩してなくて前からこれくらいのことはできたと思うの。変なたとえだけど、自分がマゾだってことを3年くらいつき合っている女の子にずっと黙ってて、〝実は…〟みたいなね。ファンが彼らと距離を感じるとしたら、恋人が黙っていたことを突然打ち明けたっていう質の驚きなんじゃないかな」

今津「なるほどね」

広瀬「進歩的なバンドって昔のプログレの時代から変わっていくことで生命力を得るっていう宿命的なものがあるじゃない。そういう意味では質的変化は必然的なものだし、その刺激をファンが楽しめないようならダメだよね、でもそんなことより、この作品を出せたことがすごく良かったよね」

今津「あれだけヒットチャートの主流が共感できるものの中でこれを出すということは勇気がいることだものね。でも今回の歌詞ってやっぱり抽象的なんだけど、よく読むと世界がわかるところまでやってきたなって感じがしたんだよね」

広瀬「詞に関して言うと、僕、歌詞カードをもらってなかったから必死になって聴いて書き写したんですよ。こんなのって高校の時以来。そういう歌詞を書いてハマれる音を創るバンドってなかったから、詞と音の一致が高いレベルでなされてるのが良かったですね」

今津「確かに詞って全てわかることがいいこととは思わなくて、わかるところから自分のイメージが膨らめばいいのかなって」

広瀬「タイトルだって、ミリオンは彼らの一部分、ミラーは鏡っていうんじゃなくて、ミリオン通りの解釈ができるってふうに思ってたんですけどね」

今津「なるほどね、詞も極端に断定を避けてるしね。くどいくらい、レコーディングが始まる前から、ただそこに作品を置くだけみたいなことを彼らは言ってたから」

広瀬「だから曲のタイトルだけでも結構ゾクゾクして背筋にきますね。あと遠藤クンのボーカルに他の2人からの良きアドバイスがあったということが表われている」

今津「確かに今回のは言葉がハッキリ聴こえて、なおかつ、低い音が伝わってくる」

飯塚「今まで遠藤サンの声っていい意味でも悪い意味でも浮いた感じがしましたもんね。でも今回は遠藤サンの声という楽器を通して聴こえてくるって感じがして聴きやすい」

今津「曲にうまくハメ込まれたって感じがあるものね」

広瀬「あとね、今までの遠藤クンの声って低音でハナにかかった甘い声でね、それって女を濡らす声なわけだけど、今回ので男をも濡らす声になってきたよね。デビット・ボウイは男も女も濡らす声をしてるんだけど、その域に遠藤クンも達したんじゃないかな。ただ本人はもうちょっと軽快なものを歌いたかったんじゃないかなって気はするけど」

飯塚「全体を通しては、今までの不要な部分を削ぎ落として浄化されたってカンジはするんですけど…」

今津「裸になったというのか、それで彼らはこのアルバムが新しいデビュー・アルバムって言い方をしてるからね」

飯塚「逆に昔のポップなカンジを求めているファンの子から見れば突き離されちゃった気もするだろうし、本人たちもそういうファンたちを除外したいって気持ちがあるのかなって気がする」

今津「ダーウィンじゃないけど、進化論で言えば淘汰って絶対あるじゃない。結局、聴き手にとっては他人の作品であるわけだし、いつまでも同じところに作り手と聴き手がいるのも気持ち悪いし、不健全だと思うよ」

広瀬「長くやるか、一発当てて終わるかってところでは彼らは長くやっていく方を選択したんだと思うし、それは日本でやるのか、外国でやるのかとか、バンドとしてやるのか、ソロでやるのかって問題ではなく、個人として長くやっていく選択をしたんじゃないかなって気がするね。あと、状況的に〝えっこれでいいの？〟ってのがポピュラーになっちゃう速度が今って異常に速いじゃないですか。そういう意味では〝ミリオン・ミラーズ〟が突然ものすごい評価を受けてしまって、爆発的に当たるとか、そんなことは誰にもわからないわけだから、そこで対外的なことを意識するよりかは、自分のやりたいことを素直にやっていった方がいいと思うんですよ。何年かに一枚、すごいアルバムが出る方が自然だし、今まで彼らの曲の中には社会的な歌詞もあったりしたけど、もう完全にパラダイムが変わっちゃった感じがするじゃないですか。僕たちはアナザーワールドから社会を見てるんですよっていう彼らの意志表示はある意味では保守的なんだけど、保守も突きつめればすごく過激だと思うんですよ。もうほっといてくれ、私たちはこっちの世界にいるんだからってことはなかなかできないし、それができるって彼らはすごく信じられる人たちだと思う。だから、ミュージシャンというよりも表現者としてすごく素直だなって感じる」

今津「そういう意味ではロックン・ロールなアルバムって言い方もできるよね。ロックン・ロールって音楽の形態じゃなくて自分の生き様をさらしていくことだと思うから。森岡クンが〝DANCE 2 NOISE 003〟の時にただ思ったことをスケッチしたって言ってたんだけど、今回のは同じスケッチなんだけどスケッチの中に自分がいるんだって言ってて、確かに強力に作り手が存在するものってみんな慣れてないよね」

広瀬「僕は正しい聴き方ってないと思うんだけど、このアルバムを聴いて眠くなる人も多いと思うけど、パッと起きた瞬間に音楽が流れてるって気持ちいいんだよね。ハイになるじゃなく、ローになるっていう（笑）」

今津「それにはきっと、中に浮いているんだけど、ちっとも怖くないっていう安心感があるんだよね。それが気持ち良さのひとつの要素だと思うけど」

飯塚「言葉で言うと、難しいアルバムですね。わかんないけど、何かわかるという（笑）」

広瀬「イージーリスニングとハードリスニングの2つできますね。それがきっとミリオン個あるんですよ。そういうのを感じ取ってみたいですね」

今津「イージーとハードってゆうところをとっても、鏡に向かって手を挙げると、自分は右手を挙げても鏡の中は左手を挙げてるじゃない。でもどっちも同じ人なんだけど、両極っていうところでミラーなんだと」

飯塚「タイトルに関して、くだらないことを思い浮かんだんだけど、ドリカムに〝ミリオン・キッス〟ってあったじゃないですか。それに対抗したのかなと」

今津「意外とあったりして」

飯塚「ドリカム批判というか、大衆に受け入れられているものの象徴としての部分で何かあるのかなってフッと思いついて」

今津「フジテレビの歌番組を観ながら作ったっていう曲が森岡クンか誰かの曲でたしかあったな…」

広瀬「ああ、ま、そんなとこスかね」

CROSS REVIEW
"MILLION MIRRORS"



◆今津甲◆

「なんの解釈もなく感じたままをただ表現したアルバムになると思いますよ」

作品が完成するまでの間，何回となくそういう御言葉を聞いていたせいで，新作を聴こうとすると必ずこのコメントが頭をよぎる。そして，その度思うのだ。これは懐石料理とかヌーベル・キュイジュンのような作品なのだから，邪念を捨てて，耳の鮮度を高めて聴こうって。実行してみると，それはすごく新鮮な作業だったりする。聴く度に新しい印象や解釈が生まれたりもして…。根っからのテクノだとか，100%のボディ・ミュージックとかでは味わえない賞味の仕方が，ここでは許されているのだ。言ってみればリスナーが聴き方を自由にアレンジできるアルバム。なにせ鏡の数は100万枚。聴きとれる鏡像はほとんど無限に近いのだから。

◆広瀬充◆

●座談会では，ある程度，一般論に抽象した物言いをしてたと思うので，ここでは，まったく個人レベルの作文をします。読んでもらおうという対象も限定してみます。

● 〈ソフトバスの新作を聴いて，あぁ彼らは変わってしまったと，お嘆きのアナタへ〉

●まだ発売前なので，実際↑な人はいません。しかし，そのように感じるアナタがムクムクと頭をもたげることが予想され，同時に幸福を感じるアナタもたくさんいるでしょう。

●変化したと感じる部分は十人十色。しかし，驚いたあとに続く言葉は「……」だったり，「！」程度にしておいたほうが楽しいんじゃないかと思います。刺激は刺激です。

●彼らは音楽とアナタとの間に音楽以外の何者かを封じ込めようとはしていないと思います。音楽からインスピレイションを広げるのは楽しいことですが，嘆きはお互い気の毒です。ときには前向きになんて，テクノらしからぬ言葉も書いてみたくなります。

◆飯塚早苗◆

前作『愛と平和』がかなりドロッとした印象を受けたので，今作はポップ路線へ行くのかなーと勝手に想像していた私。一聴してみて「あら!?」。裏の裏をかかれたような心境です。7曲目の「FAIRY TALE」なんか「うーん，森岡さんたら♡」と思わずニヤリとさせられたり。9曲目の「THRESHOLD」では，ついつい藤井さんの怒顔を思い浮かべてしまったり…。全体的に言うと遠藤さんの声が，いいっ！　とにかくいいっ!!　ファンの皆様，『微笑』を見て怒り狂ってる場合ではありません。とにかくこのアルバムは，〝3人の個性が明確に出た，だけどソフトバレエのアルバム〟です。このアルバムを聴いて，それでもオメエらソフトバレエを〝生理的にちょっと，ねぇ〟と言うか!?　と，アンチ・ソフトバレエ派に詰めよりたくなります。……それにしてもライブ，どーなるんだろう？



飯塚早苗（ファン代表）

老けて見えるがこれでも22歳。ソフトバレエのライブには，わざわざ実券を購入して入っているという，そんな私は実は某音楽誌の編集者。（でもたまにインビテーション・カードのお世話にもなっていたりして…)。ちなみに藤井さんの出身地と私の出身地の間で，毎年〝歩け歩け大会〟が開かれている。



広瀬充（ライター）

63年生まれ。編集&物書き事務所の社員。あまり仕事していないが，最近の代表作として「ワッツイン」誌で連載していた"CCガールズの悩み相談室・バディに聞け！"がある(なんつって)。「パチロク」ではブレイン・ドライブも書いてます。ただの打ち込み好きってわけでもないんですが。



今津甲（ライター）

春から秋にかけての私は〝日焼け〟が大好きです。日焼け，っていうのは人間が他の星の影響をその場で読みとる事が出来る唯一の行為。それから，日焼けの素である太陽の光とは，恒星の核爆発によるもの。つまり，日焼けするってことは自分が被爆者になることでもあるわけです。

ソフトバレエ初の写真集

完全予約注文限定生産

数々の「異常」と「犯罪性」の記録、遂に発売。

全撮影◎北岡一浩



全て，最新撮り下ろし未発表写真。

特殊サービス

- 直筆サイン入りポスト・カード３枚封入
- シリアル・ナンバー入り
- 購入者全員の氏名を掲載

ファンの圧倒的訴求に応え，ソフトバレエ初の写真集が遂に発売されます。しかも，完全予約注文による限定生産の上，全商品に直筆サイン入りポスト・カード（３枚セット）が封入され，世界でひとつのあなただけの愛蔵ナンバー（ちなみにメンバー所有は0001～3)が記されたピンナップ・カードを添付。そして御購入者全員の氏名を掲載(印刷)しての発売という，マニアならずとも触手が伸びる写真集といえます。とても一般書店で販売できない(？)ビジュアルの数々は，176ページというボリュームもあいまって，驚異的な「別世界」を構築しています。まさに本人プロデュースによる「異常」と「犯罪性」の坩堝。なにはともあれ，パンフレットをご請求ください……。

●Ａ４判 ●愛蔵ケース入り ●176ページ

定価 **6800**円（税・送料込）

本書は一般書店での販売を致しません。詳しいパンフレットと購入申込書（これがないと購入できません）を下記まで官製ハガキでご請求ください。

〒102 東京都千代田区五番町６の２ ソニー・マガジンズ「ソフトバレエ写真集」係 問 03(3234)7906(尚,電話での受付はできません)

※1.住所・2.氏名・3.年齢・4.電話番号・5.「ソフトバレエ写真集」資料希望の５点を必ず明記してください。

TOMOYASU HOTEI in ROCK'N'ROLL BAND



布袋がかねてより公言してははからなかった"『GⅢ』はよりバンド的な造りになる"との言葉どおり、『GⅡ』リリース後のツアーで寝食を共にした仲間が作品に大きく貢献している。そして今度はこの4人に、今回都合により欠席したベース・浅田猛を加えたバンドとしてツアーをスタートさせる。ツアー・タイトル"GUITARHYTHM WILD"がストリートに炸裂する!!

Photograph **Yukio Fukuzato** Text **Koh Imazu** Styling **Keisuke Baba** Hair&Make-up **Kenichi Saijyo Syoji Koshinuma**

——前回のツアーが終わってから皆さんなにをしてたんでしょうか？

布袋　ここにいる人とは一緒にバリ島に行ったんだよネ。ツアーの打ち上げで。

成田　で、帰ってきたら人間が大雑把になっちゃって、なにもする気がおこんなくって。(笑)

布袋　小森さんとかも、社会人として心配になるぐらい何もしなくって。(笑)

小森　いや、ツアーがすごく充実してたからネ。そのあとにスグなんかつめ込んじゃうと自分のバランス、とれないような気がして。ま、もともと仕事するのが好きじゃない、っていうのもあるんだけど。(笑)

——しばらく人それぞれの期間があってから『GⅢ』のレコーディングへ？

布袋　その間も友達づき合いはしてたけどネ。この面子で作ったライブ・アルバムがリリースされたりもしたしさア。

——新作のレコーディングでは、それぞれ参加した曲数が違ってたんだっけ？

成田　ボクとかは1曲だけ。やっぱ"一発ノリのバンド・サウンド"とかじゃなくて、考えつつ作ってくタイプの音楽でしょ？そうなってくると、なんでもかんでも参加っていうわけにはいかないから。

布袋　でも、とりあえずスタジオには、気づくと皆んないたってカンジだった。



無機的でスピードがあった『GI』に、魂を入れたのが『GIII』っていうとこかな。

小森　もしかするとオレが一番よく居たかもしれない。

布袋　小森さん、家がスタジオの近所だから。（笑）

椎野　メシ時になると来ちゃう。（笑）

──椎野さんもよく通ってたロ？

椎野　ボクは7曲ぐらい参加したこともあって。といっても1曲フルで叩いた曲、スネアだけ叩いた曲…色々だったんだけど。

布袋　ガラパゴスのドラマーと一緒に叩いたのとか、おもしろかったよネ。

椎野　布袋クンとは「色んなやり方、あるよネー。今度はどういうのにしようか？」って話したりしながら録ってった。でも、「とりあえず叩いてみよう」って言ったのがOKになることも多かったネ。

──レコーディング・スタジオが“考える場”だったりしたの？

椎野　もちろん自分の家でデモ・テープを聴いてイメージはふくらませていったけど、スタジオ行ってから布袋クンと考えることも多かったな。

──その辺、小森さんの場合は？

小森　ボクはふだん、どっちかっていうと時間をかけて煮つめて煮つめていくタイプなの。それはキーボードっていう楽器の性格上、十分に煮つめてから録音に向かう。でもあるんだけどネ。だけど今回は、布袋クンに、「たとえばこういうの、考えたんだけど」って披露すると、すぐ「じゃ、それでいこう」って反応が返ってくることが多かったネ。

布袋　オレ、気が短いから。（笑）「小森さーん、早くしようよー」ってネ。

小森　でも、布袋クンが「よし、コレでいこう」って言ったものって、たいてい曲にピッタリハマっていたりもするから。

椎野　「MILK BAR PM11:00」とか、スタジオに入ってから布袋クンが「こんな曲、あるんだけど」って言って、その場で作れちゃったしネ。

布袋　アレは皆んなで大笑い、って曲だったから。「オッ、このドラムはむかし横浜でサンタナ叩いてた奴にしか出来ない」とか言いつつ。（笑）

──話を聞いてると、けっこうリラックスしたレコーディングだったようで。

椎野　でも最初はドキドキしましたよ。

成田　声、出しちゃうし。

椎野　ボク、叩きながらうなっちゃうんです。

TOMOYASU HOTEI in ROCK'N'ROLL BAND

自分たちがステージでどうワイルドになっていくか!?予想もつかない楽しみ。

布袋　声を出さないと叩けない。（笑）

椎野　これでもスタジオでは抑えてるつもりなんだけど。ライブとかになると周りの音も大きいからおかまいなしですが。（笑）でも今回、叩き終って「今のどうだった？」って聞くと「うーん、ちょっとウナリ声が入っちゃってー」とか言われて。（笑）

――CDをよーく聴くとそういう声も入ってたりするのかなァ？

成田　それはどうだろう？　次回、ドラム・ソロの曲でも入れたら聞こえるかもしれないけど。（笑）

布袋　ドラム・ソロ録ったあとにその音ぜんぶカットしちゃうんでしょ？　で、こっそりセットしてたボーカル・マイクの音だけ残す。（笑）

成田　ま、ボクもギター弾きながらけっこう口が動いてるけどネ。金魚みたいに。（笑）

――アルバム『GUITARHYTHMⅢ』。完成形を改めて聴いて、どんな印象だった？

成田　最初の『GUITARHYTHM』とかって、わりと無機的なカンジがしたのネ。でも、スピードはあった。そのスピードに魂を入れたのが今回、っていうとこかな？

小森　『GⅠ』『GⅡ』っていうのは100パーセント布袋クンの世界だった。そこへいくと『GⅢ』は、ボクらが参加したことが関係しているのかもしれないけど、これまでより外を向いた解放感みたいなもの、感じるネ。

布袋　たしかに『GⅠ』『GⅡ』っていうのは自分でも背負ってた所があったかもしれない。その点、『GⅢ』っていうのはバンドでやって、もう1回ギター弾きの視点に立てたという言い方、出来るかもしれないネ。

椎野　今になって思うと、『GⅡ』を聴いた時以上に「これをライブでやったらどうなるか？」って考えられるアルバム、でもある。

――さて、そのライブの話に行きましょう。

布袋　『GⅢ』とオレとの位置関係は変えちゃいけない、とは思うんだよネ。ライブでやるにしても。このアルバムを作ってる時のオレっていうのは、スタジオのスピーカーの前に座って、そこから流れてくる音という〝ライブ〟を聴いていた。で、今度は自分の位置を同じポジションでクルッと180度変えて、バンドの音を背に客席に向かうという。タンタカタッター、じゃないけどさァ。

成田　まわり舞台のように。（笑）

布袋　オレもいっしょにまわってお客さんに背を向けちゃったりして。（笑）ま、『GⅡ』の時はさァ、アルバムがあんだけストーリーを持ってたからライブでも〝再現性〟ということを考えた。SEの事まで含めてネ。でも『GⅢ』は1曲〳〵が独立しているからリアレンジとかしてもフレッシュかもしれない。アルバム作りとメンバーが同じなんで、曲への接し方も含めて妙に気が楽なんだよネ、今回は。

――新たなツアーへの準備は着々と進んでる？

布袋　うん。成田さんとか個人練習のオニだし。

成田　今ネ、体きたえてるんですよ。（笑）ジョギングも始めたりして。やっぱり、あらゆる方向から前回のツアーを越えたいと思うから。

布袋　そうやって、オレらなりのワイルドなステージにしたいんだよネ。いわゆるノリノリ、とかいうのではなくって。みんなどっかワイルドな所があって、ソレがぶつかり合うようなステージを。

――それぞれ、自分が思うところの〝ワイルド〟とは？

成田　うーん…むずかしい。その質問は昨日中に聞いときたかった。そしたら作文してきたのに。〝ワイルド〟の〝ワ〟は○○の〝ワ〟で、って。（笑）

椎野　ワイルドがどうのって事じゃないかもしれないけど、ボクの中のドラマーのイメージって、スティックを持ってドラムのイスに座ると人が変わっちゃう人、なんだよネ。あと、自分が出来ないことは出来ない、ってハッキリしてるのもいいな。

布袋　うん。同じ理由でボクも早弾きやめましたから。（笑）

――小森さんは？

小森　キーボードっていうと、一般にはワイルドっていうイメージから一番遠い存在のように思われてたりする。でも、本当はそうじゃないっておもうわけ。自分の頭の中にある音色をワイルドなモノとして伝える、っていうやり方だってあるしネ。

布袋　ステージで、気がついたら自分はこんな所にいた、みたいのもありじゃない？

成田　それぞれ。ボクはそういう時のためでジョギングをしてる。（笑）小森クンだって「音で…」と言いつつ鍵盤にナイフ突き立ててるかもしれないよ。（笑）

小森　それも好きです。（笑）

椎野　形はどうであれ、「オレはこうなんだ」っていうのをカッと出す、っていいよネ。

布袋　結果的に自己主張になる分にはなんの問題もないよネ。今回はワイルドにならざるを得ない曲ばっかりだし。曲がそうだから、ソレを演るオレらがステージでどうなってしまうのか分からない。予想もつかない。それってオレらにとっても楽しみなことだよネ。自分達がどうワイルドになっていくのか？　〝GUITARHYTHM WILD〟っていうツアーにしたのは、そういう含みもあったのかもしれないネ。



L to R ▶ S. Komori(Key) K. Shiino(Dr) T. Hotei(G) S. Narita(G)

ROCK'N'ROLL

ORIGINAL ROCK'N'ROLL 1992・NORBEMBER

11

ZIGGY／ラヴ・ミサイル／FISHMANS／東京パノラママンボボーイズ／
ZELDA／G.D.FLICKERS／山下久美子／XEOレーベル／ダイアモンド・ユカイ
テレビアス／Bonnie Duck!?＋SOY SOUCE SONIX／DOG FIGHT／etc…

ZIGGY 8・17 武道館

復活後，全国ツアーを行っていたZIGGYが，8月17日の武道館でファイナルを飾った。ZIGGYの魅力がひきたった，涙あり，笑いありの内容の濃いライブとなった。

ZIGGYはそれぞれのキャラクターを上手いこと使いわけられるようになった。

3曲めの〝ロック・ザ・ナイト・アウエイ〟を歌いおえた森重が「久しぶりの武道館でこんなにお客さんが入って驚いています」といった。

それもそのはず。ZIGGYの武道館公演は北西，北東のバック・ステージの席まで観客がびっしりと入っていた。こんな満杯の武道館を観たのも久しぶりだ。

ZIGGY復活後のメディアへの露出を考えると，レコード・リリースのタイミングで表紙を飾ったりはしたが，その後は他のバンドほど派手ではなかった。この武道館公演の告知だって，今までに比べれば，地味だったという気がしてならない。正直いって，僕は観客動員に多少不安なものを感じていた。にも関わらず，ZIGGYは武道館をフル・ハウスにしてしまったのだ。僕はZIGGYを支える固定ファンの力の大きさを知った。

また，これこそがZIGGYが今まで蓄積してきた財産という以外にない。だから，ZIGGYは活動休止というネガティヴ・ファクターをポジティヴなものへ変換することができたのだろう，とも思う。

そんなこんなで，武道館内に漂う雰囲気が悪かろうはずがない。この日のコンサートはまさしく歓迎ムード一色といった感じだった。そして，コンサートの内容の方も，その歓迎ムードにしっかりと応えたような内容になっていた。

活動休止前のZIGGYは，それぞれのキャラクターがカオスの名のもとに成立していたように思う。それこそがZIGGYの魅力，と僕もいろんなところで書いてきた。しかし，一歩間違えると，ある方向に進もうとした時に，相反するキャラクターを抱えるがゆえにドツボにはまることも多々あった。

それがこのコンサートを見るにつけ，ZIGGYはそれぞれのキャラクターを上手いこと使いわけられるようになっていた。

例えば，1曲めの〝ホット・ガールズ・イン・ブラック・レザー〟では松尾が高校時代に憧れていた場末のライブ・ハウスに漂う一触即発の雰囲気を前面に持ってくる。2曲めの〝アイム・ゲッティン・ブルー〟では森重の持つ華やかさで飾る。8曲めの〝バーニン・ラヴ〟では森重を前面に持ってきつつも，戸城がアコースティック・ギターを弾き，彼のシリアスな側面にスポットを当てる。そして要所要所に大山のそこはかとなく漂ってくる味を注入するといった具合に，コンサート全体を通して四人のキャラクターをバランスよく配してあった。

アンコールの一曲めの〝のらねこのKUROクン〟では猫の格好をした戸城が歌う（他のメンバーも勿論猫になった）ということをやったのだが，コンサート全体を通すと一つの要素でしかなかったのも，四人のキャクターの使いわけの上手さによるところが大きい。

その昔，ZIGGYがブレイクした時に「ZIGGYは軟弱になった」とかいってまわる古参のファンがいたりしたが，そういう人にこそ今回の武道館公演を観せたかった。そうするとそういう発言も出来ないだろう。つまり，ZIGGYはきわめて硬派に軟派を演出したり，硬派を演出したりしているのだ。それがメジャーのフィールドで音楽をやる，ということなのだと僕は思う。

こうなってくると，ZIGGYの未来はきわめて明るい。バンドを120%活かす方法をこのツアーで見つけ，アルバム『イエロー・ポップ』ではポップとロックンロールとハードロックとメジャー感が合体した新しい方向性を見いだすことができた。武道館公演では彼らを圧倒的に支持するファンの存在を確認できた。あとはバンバン，ツアーをやって，ガンガン，アルバムを発表していくだけだ。いやあメデタシメデタシ。と思っていたところ，最後の最後にファンを不安にさせるような発言が森重の口から飛び出した。

「このライブの後のスケジュールは全く白紙です」

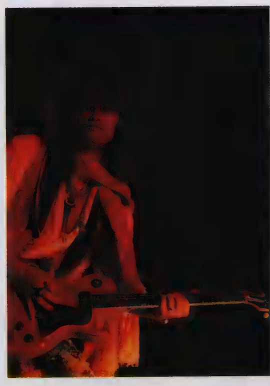
ち，ちょっと待ってくれ。となると，また当分ZIGGYはお休みするのか？　いやいや，そう思わせておいて大逆転の一撃を食らわそうというのかも……。どちらにしろ森重の武道館のステージでの発言は謎が多すぎる。しかし，ZIGGYは再び沈黙するのだった。新たな情報を待て。

（森内　淳）

緊急NEWS●8月17日の武道館公演をもってギターの松尾宗仁とドラムの大山正篤が脱退することになりました。詳細については，まだ発表になっていません。詳細は次号のパチロクでお伝えいたします。

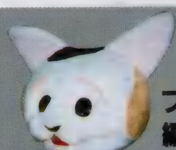


Photography **Motoko Sashi**









**ファン投票大予想!
編集部はこう考える**

先月号で10月発売予定――と書いたベスト・アルバムですが，12月に延びました。で，ここではその中に入りそうな曲を，ちょっとだけ予想してみたので参考になるかわかんないけど見て下さい。①EASTSIDE WESTSIDE②I'M GETTIN'BLUE③GLORIA④それゆけ！R&R BAND⑥ONE NIGHT STAND⑦WHISKY R&R AND WOMEN⑦DON'T STOP BE LEAVIN'⑧午前0時のMERRY-GO-ROUND⑨LET'S DO IT WITH THE MUSIC⑩のらねこのKUROクンさて結果は？



M-age

中2の時に刈り上げして真ん中で分けてたから、学校では変な奴とかオカマって言われてました。

パーソナル 第3弾！ KOICHIRO の巻

M-ageに至るまで

バンドのリーダーであり顔であるボーカリスト KOICHIRO。かわいい顔をしてなかなか頑固者である彼が M-age に至るまでを語ったパーソナル前編。彼の話を聞くと思い出すクラスにいたあんな奴，こんな奴。後編にもどーんと御期待を!

Photography **Kiyoko Takahashi** Text **Tsutomu Noguchi**

──今のメンバーの中で一番古いつき合いっていうと，岡崎君？

「そうです。小学校の途中で彼が転校してきて，英会話スクールに通ったんですけど，そこでよく一緒で。スクール行かないで，公園で岡崎君と遊んでた」

──中学に入るとバスケ部で一緒になるわけだけど，岡崎君の方がひとつ先輩だよね？

「ええ。でも岡崎君はすぐやめちゃって。あんまり先輩，後輩っていう関係ができるところじゃなかったし，これといって仲良くしたってことはなかったんですよ」

──そうだよね。中学校の時に先輩と後輩と同等につき合うってないよね。

「小学生ではなくて，中学校に入るとそういうのできるじゃないですか。そういうのがすごい嫌で，ツッパリとかにも興味なくって。何か違うって思い始めたのが中学生位の頃」

──その頃音楽は，どんなのを聴いてた？

「中学校入ってすぐの頃に YMO を聴いて，すごいショックで。髪型も中学2年の終わりに刈り上げて，真ん中で分けて。中学で刈り上げって，見本の生徒じゃないですか。だから先生には怒られなかったんだけど，クラスの連中っていうか，学校では変な奴だなとか，オカマとか言われて(笑)。ヤンキーって嫌いだったんですけど，たまたまヤンキーみたいな奴で，アナーキーを聴いてる奴がいて，音楽の話でそいつと合っちゃったんですね。色々話してる内に（セックス）ピストルズが出てきて，それでパンクにいったんです。YMO の後には3つ上のいとこの影響があって，パンクは友達から，いとこからはテクノだったりニューウェイヴだったりを教えてもらいました。洋楽で一番最初にいいなと思ったのは JAPAN で，ピストルズも聴いてショックだったけど，自分で一番面白いなと思ったのが JAPAN でした。当時はミーハー的な人気があって，女の子がギャーギャー騒いでたから，JAPAN のどこがいいんだとか言いつつ，聴いてました」

──何かひとつのことに興味をもったというのは，音楽以外にはないの？

「英語好きでしたよ。中学，高校位の時は。ほとんど全然今は覚えてないけど。あと一時マンガ家になりたいとかありました。何か音楽とマンガの密接な関係ってあるじゃないですか。で，友達とマンガ描いたりしてました。でも結局，そういうのをやる奴って音楽聴いてる奴と小学校からのつき合いの奴と…遊ぶ奴って決まってるんですね」

──その遊ぶ奴が決まってるっていうのは，音楽的に話が合うっていうのが大きかった？

「ええ。当時にしてみれば，変わってる奴らが多かった。すごいツッパリなんだけど JAPAN を知ってるとか，そういう奴がいるんですよ（笑)」

──違うなと，こいつは。

「こいつは違う。そいつと会って，また何か変わったんですけどね。自分が好きなものを，例えば格好だったり，音楽だったり，みんなに揃えることないっていうのは，そいつが身をもってやってたから，そこで自分らしくすればいいんだなっていうのを学んだ」

──自分でバンドやろうかなっていうのは，そういう頃だよね。

「バンドをやり始めるのが，中学3年位の時から。みんな楽器を買い出したりする頃なんだけど，たまたま知り合いにギターもらって，ピストルズ好きの奴がベースを買ったから，じゃあバンドをやろうかって騒いだんだけど，俺がギター弾けなかったもんだから，そいうが違う奴と組んじゃったんですよ。残ってるのは僕と，そのヤンキーの奴しかいなくて(笑)，あとまあ何人か，じゃ残った奴らでやろうと思って。たまたま音楽的にね，好みの合うのがそのツッパリだったから。バンドにはね，結構，単純に入りましたよ。女にもてたいとか，そういう欲求じゃなくて。自分たちが好きで，そういうのをやりたいなって」

──楽しいんじゃねえかって雰囲気？

「そうそう。やったらすごい楽しいだろうなって，それが一番強かったな」

──普段自分たちが聴いてる好きな音楽をやってみたいなって。その時に演ってた曲ってどんなの？ YMO をやるわけ？

「いやいや。シンセサイザーは高くて買えないから。YMO なんかは，最初から出来るわけないと思ってましたね。最初に演ったのは，やはりピストルズとか，アナーキーでしたね。でも楽しかったですよ。アンプ通して，ギターがガーンと鳴ると，演奏もムチャクチャで歌も下手なのに，上手く聴こえたりするじゃないですか」

──おー，音でけえみたいな。

「そうそう，そうそう。これアナーキーと同じ音じゃねぇかって思って，そういうので感動してたんですけど」

──それを中学3年の時に演ってたんだ。

「演ってました」

(次号へ続く)



Love Missile

この胸のときめきを

ヒャッホー〜〜ッ!! ラヴ・ミサイルが放つ、もうマカセテちょーだい極上ポップ・チューンだぜベイベェなニュー・シングルが10月21日にリリースされる。聞いて聞いて絶対聞いて。おまけにカップリング曲はひと足早いクリスマス・ソングでロマンチックなのじゃあ。

Photograph **Kazuhiro Kitaoka** Text **Mika Sasaki**

家でラヴ・ミサイルを聞くと，ついベイ・シティ・ローラーズやらエンジェルやらを続けて聞いてしまうクセが私にはある。おぉあの懐しさ，つぶした学生カバンにチェックのマフラーとキスミーシャインリップの日々よ。シングル盤は600円で，ソックタッチがかゆくて，未来は霧の中だった。

10月21日にリリースされる新曲「この胸のときめきを」は，そんな気分をまたしても助長してくれるカラフルな勢いがあるポップ・ナンバーだ。コスチュームもシックに一新。青木さんも廣野さんも髪を切ってすっかりダンディだ。

★

——シングルのための書き下ろしですか？

青木　シングルのためってわけでもなくて，新曲としてライブでやってた曲ですよ。

——このイントロのフレーズどこかで聞いたことがある気がするんですけれども。

青木　（70年代後半に人気があったとあるポップ・アイドルのデビュー曲名があがる）

——あーっ，そうだそうだ。思い出した。

青木　僕はメロディをパクるってことは100%ないんだけど，他の曲をイントロに持ってきて遊んだりとかブリッジにしたりとかそういうのは結構やってますよ。

——この詞はラヴ・ミサイルの所信表明というか提唱のような感じですね。

青木　サビの部分やタイトルに関しては我我のテーマですよね。この胸のときめきを伝えたいっていう。

——歌詞にあるグラマラス・ライフとはどういうものなのでしょうか？

青木　まず絶対，物質的なことじゃないっていうのはわかりますよね。あくまで精神だっていう。だから，やろうと思ったことが実現することですよ。なんでもいいんだけど。例えばプロのライターになりたいと思って，なったこととか。

——全然グラマラスじゃないですよー。

青木　どうしようもない言い方だけど，夢がかなう，みたいなね。

——でもグラマラスって言葉はもっとゴージャスなイメージですよね。

青木　フェラーリが何台もあって？

廣野　それも可ですけど。

青木　ただ俺たちはまだそういう沈況になってないから言えないだけで。それ言っちゃうとダサダサだもんね。武道館で出来ないバンドが武道館なんかやりたくないって言ってるのと同じで。

——さすが年の功ですねぇ。

青木　やめてよ，もう。ロッキンオン・ジャパンじゃないんだから。(笑)。パチロクはミュージシャンの味方だもんね？

——ははは。でも廣野さんの声だとそういう深い意味がある歌には聞こえませんね。

廣野　それでいいんです。あんまりメッセージ性が強いと聞いてる方も構えちゃうじゃないですか。聞き流してもらってもいいし，意味をかみしめてもらってもいいし。

青木　カップリングの「特別な夜，特別な君」は廣野の良さがよく出てると思うな。すごい歌唱力のある人が歌ったら，もうそれこそトム・ジョーンズとかフリオ・イグレシアスみたいなイヤらしい歌になる。

——こっちの曲もいいですね。

廣野　胸キュンの究極ですね。女殺し。

——青木さんもよくこういう詞を……。

青木　（笑）いつも最初にまずロマンチックを通りこして気持ち悪い詞を書くんですよ。そこからだんだん理性をとり戻していくと。

——その第一稿はメンバーに見せる？

青木　誰にも見せません。（笑）

——夜に書いたラブレターを朝になって読み返して赤面する，みたいな？

青木　そう。だから書くのは必ず夜中ですよね。で，起きてから自分を責めるんですよ。なんちゅう恥ずかしいことを書いてるんじゃ，コイツはって。

——もともとロマンチック体質なんですね。

青木　でも本当にロマンチックな奴ってそんなこと詞にできないんじゃないかなぁ。言葉は心を越えないって飛鳥涼も言ってますからね。（笑）

——アルバムの準備も進んでるんですか？

廣野　秋からレコーディングに入ります。ラヴ・ミサイル第2章の幕開けですね。

青木　1曲1曲のテンションをすごく高くしようと。前回はロンドン・ポップを中心にやってみたつもりなんですけど，今度はもっと洋邦問わず，時代問わずで，バランスよくやりたいですね。そういう曲はきっと俺たちしか出来ないんじゃないかなと思うし。前のアルバムはときめきを感じさせるものだったけど，次のは感動というか，深い部分をたぶん表現できると思うんで。

廣野　ハンカチ用意しとけよ！……って感じですね。（笑）

9月30日、渋谷 ON AIR でライブがあるんだけど、いまこの情報を読んでいるアナタ、もしまだ間に合うなら絶対駆けつけるベシ!!

NEWS BEAT

ORIGINAL ROCK'N'ROLL

●ボアダムス

大阪出身でアンダーグラウンド・シーンでの熱狂的な支持を得ているボアダムスがついにWEAからメジャーデビューする。過去に発表された作品はアメリカやヨーロッパでもリリースされ、高い評価を受けている。またリーダーの山塚EYEはネイキッド・シティに参加、その作品も多くリリースされている。今年は国内外でもライブを数多く行なうらしいのでカルトファンなら要チェック。

●真島昌利

真島〝マーシー〟昌利がソニーレコードに移籍し、第一弾のアルバム『RAW LIFE』を11月1日に、そしてアルバムに先行して10月1日にシングル「GO-GO-ヘドロマンC/W踊り踊れば」をリリースする。ニューアルバムはいかにも彼らしく、反骨的でパワーあふれる歌詞。攻撃的で「ロック」している。シングルはストレートなR&Rでアルバムを代表するにふさわしい。期待十分だ。

●忌野清志郎&2・3'S

忌野清志郎&2・3'Sが、シングル「いつか観た映画みたいに」をリリース。この曲は今週公開の映画『プロゴルファー織部金次郎』の主題歌。またカップリングの「NEWSを知りたい」は、TBS『筑紫哲也のニュース23』のエンディング・テーマ曲。9月30日発売です。そして、忌野清志郎&2・3'Sのデビューアルバムも発売決定、これももうすぐだ！ こちらの方もお楽しみに。

●友部正人

友部正人さんとブームのミヤさんが一緒に曲を作りました。アルバム『遠い日の日時計』に入っていて今度シングルカットされた「すばらしいさよなら」がそれ。作詞が友部氏で作曲がミヤ。そして演奏はブーム。ミヤはコーラス、ハーモニカなどでも参加しています。友部さんと言えば、ブームの〝スペシャル〟ツアーでミヤもカバー曲を演奏していたよね。あったかくて、でもちょっぴり寂しい感じの曲。

Fishmans "KING MASTER GEORGE"

久し振りのフィッシュマンズのフルアルバムはなんと16曲が同居する不思議なアルバム。「久し振りでなんかキンチョーしちゃうよ」というギターの小嶋くんと，ボーカル佐藤くんにインタビュー。アルバムと同じくヘン（不思議）な人たちだあ。

Text **Natsuko Kawano**

──窪田晴男さんに影響されたことは？ 佐藤「できないことはやるな、と（笑）」

約1年半ぶりに届いたフィッシュマンズのニュー・アルバムは，ちょっと意表をつく音作りだった。賛否両論，必須。「なに，これー」。これまで彼らを好きだった人たちはそう叫ぶかもしれない。だけど，私は好きです。「KING MASTER GEORGE」。切ない名曲と意味もなくくだらない小曲が同居するヘンな一枚。「ただ今回はこんなアルバムを作りたかっただけ」…という感じで，ヒョーヒョーとしてるけど，彼らの新しい一面，結構楽しみである。

──しばらく音沙汰なかったですが(笑)，ずっとレコーディングしてたの？

小嶋「そうですね。遊んでたわけではなくて（笑）」

佐藤「2月から曲作りに入って…」

小嶋「本調子になったのは4月下旬くらいすかね」

佐藤「本当はね，そもそも6月に発売の予定だったんですよ，このアルバム。

──まぁ，何と。でも，今回のアルバムってもろこれ1枚作るために曲作ったっていうか，コンセプト重視って感じがしますね。

佐藤「そうですね。コンセプト先走りっていうかね。それで遅れたんです。これは合わないなーとか」

──コンセプトは具体的には何？

佐藤「今回はね，とにかくストロングなアルバムにしようっていうのがあって…まずね。あとはわかりやすいアルバムにしようっていう予定だったんですけど，当初は(笑)。ちょっとそれはわかりづらいですけどね。ただね，前2作よりはずいぶん前向きで，小さい子にもわかるんじゃないかなっていう気はしますけど。

──わかりやすいっていうのはどういう意味のわかりやすさ？

佐藤「とっつきやすい」

──それは今までがとっつきにくかったとか？

佐藤「いや，僕個人は思ってなかったけど，視聴者からの意見」

小嶋「今回，表現が凄く素直だよね。昔はちょっと遠ざかって表現してた部分があるんだけど，今回は前に出て，こういうもんだよって言ってる曲が多いですね」

佐藤「『誰かを捜そう』って聴きました？　キャッチーでしょ？」

──うん，確かに。でも，その分不思議な曲も多いですよね。

佐藤「それが結果でしたね，結局は。個人的にはくだらない曲をいっぱい入れたかったなというのがありましたね」

──くだらないっていうのは？

佐藤「聴いて感動しないっていうか」

──曲に意味を持たせたくないってこと？

佐藤「うん，そういう曲を何曲か入れたかったっていう…多すぎましたかね(笑)」

──(笑)。今回プロデューサーが窪田晴男さんってことで，かなり窪田さんの色が出てるなっていう感じもしたんですけど，そのへんの人選はどういう経緯で？

佐藤「意外な人選っていうことで（笑）いや割とプロデューサーは欲しいタイプなんですよ，我々は」

──具体的にどうして窪田さんってことに？

佐藤「適当だよね，割と」

小嶋「予備知識なし。誰も知らないっていう」

佐藤「戦いを臨んだんだよな。いかにも合いそうな人っているでしょう。そういう人は一応避けて。でも全然戦わなかったっていう…」

──やってみたら結構合っちゃったみたいな？

佐藤「そうですね」

──窪田さんとは最初のコンセプト的な部分の話から一緒に始めたんですか。

佐藤「うん，今回はですね，ダブを取り入れてやりましょうっていうのを最初に窪田さんと決めて，だからミックスダウンに凄い時間をかけたんですよ。一応3パターンあってそれをあとで選んでっていう。僕と窪田さんとハカセがやるんですけど，ハカセがキマってましたね」

──一緒にやって影響されたことってあります？

佐藤「できないことはやるなという，非常にわかりやすい発想に影響受けたかなと」

──え？

佐藤「器用貧乏になるなというか，得意なことだけやってればいいんじゃないということですね。当初はね，ポップ・ミュージックの基本は歌だとか言われて，音程はみっちりやるからとか言われてたんだけど，2曲くらい録ったところで，キミには合わないって（笑）だから思いきっていこうかーって。割とみんなそういう感じで，いいところを引き出すっていう」

──ところでアルバムなんだけど，16曲入りっていうのも凄いけど，「曲目紹介」っていう曲？　とか，ああいうのを入れたわけっていうのは何かあるの？

佐藤「ない」

小嶋「素材だよね。今まで結構真面目に作り込んでたでしょ。ちょっと今回は遊びたいから」

佐藤「でもラップなんかもあんなもんですよ（笑）」

小嶋「狙いはなかったよね，大袈裟な」

佐藤「そうそう，これが10曲だと思って聴けば真面目なアルバムなんですよね」

小嶋「時間もあんまり感じさせないでしょ。これ16曲入ってるけど，60分きってるんですよね。そのへんは凄くいいんじゃないかな」

──ああ，映画のサントラみたいなね，ああいう作りのノリに近いものがある。

佐藤「その通りです，実は」

小嶋「サントラっていい表現ですね。それが狙いです」

──ヘンな言い方だけど，一生懸命ヘッドホンで聴くっていうよりは，これを聴きながらみんなで楽しむっていうのかな，楽しんでる時にかけてたいみたいな，そんなアルバムかなって。

小嶋「そうそう，楽しんで欲しいよね。でっかい音で。ダブはでっかい音で聴かないとつまんないし」

佐藤「聴き所はこのダブ・サウンドをキミも経験してみないかっていう」





NEWS BEAT

●JUSTY NASTY



Photography Mori-Q

アルバム『RAIN』リリース後，好調のウチにツアーを展開してきたジャスティ・ナスティの野外音楽堂。

デビュー当初の耽美的なイメージには野音の空の広がりは似合わない？　などと思っていたらいやいやなかなかどうしてどうして。

美的な雰囲気と世紀末的な性急のスピード感をそのままに，野外音楽堂という空間を制御するスケール感をモノにしてきたようだった。徐々に暗がりの広がってゆく情景も，ジャスナスには結構イケる。意外なハマリ舞台を発見した，といったところか。

メンバーの甲斐バンド好きも有名になってしまった（笑）今後の活動に期待。

●ワールド・カレッジ・ポップ・フェスティバル

世界各国から選りすぐられた大学生バンドが，11月15日，国立代々木競技場に終結!!　日本から，Color Palette／PETER FUNK／MOTHERSが，マレーシアからALTERNATIVE MUSIC HOUSE，アメリカからSAINT BOOTY，イギリスからACCRINGTON STANLYが出演。スペシャル・ゲストとして谷村有美も出演。このイベントを見たい人は，ハガキに郵便番号・住所・氏名・年齢・学校名・職業を名記の上，〒231横浜市中区山下町69 TVKテレビ内「SUMITOMO ONE'92事務局」まで，10月22日までに送って下さい。抽選でペアで6000組ご招待。





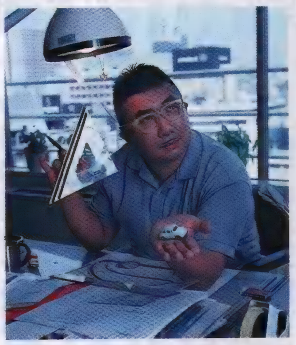


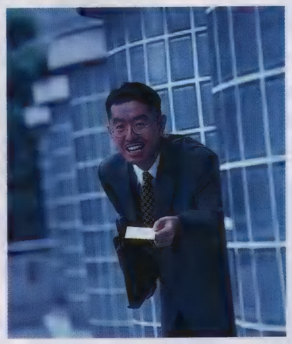
──悪の秘密結社・テイチク──。表向きは老舗のレコード会社だが，ここでは総師・桑田社長（⇦本物）の指揮の下，恐ろしい計画が進められていた。人間の自制心を惑わす禁断のリズム〝マンボ〟を使って全人類を南国化⬅征服せんとする目論見がそれである。「わははは，このテープを全ての人間が聴けば，世界は我がテイチクのものだ。わははは」魅惑のリズムが満載のオープン・リール・テープが東京タワーから人工衛星へ発信され，それが世界中に流れれば，人々の自制のタガが飛んでしまう。地球総南国化。危うし人類↙

東京パノラママンボボーイズ
MAMBO SPY 1 東京編

ソビエト連邦崩壊の後，東西対立は緩和された。CIA も KGB も MI－6 も失業状態！もはや世界にジェームズ・ボンドやナポレオン・ソロは存在しないのか？ いやいや，そんなことはない。平成の世に，密かに悪に立ち向かう 3 人の男たち──マンボ・スパイ 1

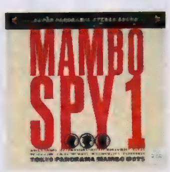
Photography **Hirohiko "Charlie" Eguchi**





この〝マンボ悪用計画〟を阻止せんがため，マンボ・スパイが秘密裏に行動を開始しはじめた。
コモエスタ八重樫──日頃は古道具屋〝パノラマ〟の主人に扮して諜報活動を行なう。マンボ・スパイのリーダーにして，昭和30年代のエキスパート。コード・ネームはY─41。
パラダイス山元──普段は富士山重工の工業デザイナーを職業としている。爆発物，精密機械の専門家。昔の特撮映画にもなぜか精通。コード・ネームはY─29。
ゴンザレス鈴木──昼間は文化村放送の営業マンとして働く。銃器・火器類のプロフェッショナル。昭和天皇にちょっぴり似ている。コード・ネームはS─28↘







禁断のマンボが録音されたオープン・リール・テープを巡る激しい争奪戦!! コモエスタが走り，パラダイスが飛び，ゴンザレスが泳ぐ。「わははは，テイチクの野望を止められるかな？ マンボの諸君」不敵に笑う桑田（社長⇦本物）。

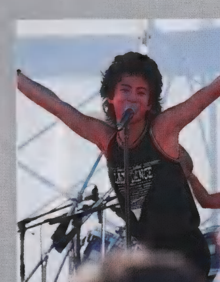
わかったぞ，テイチクの秘密のアジトは東京虎の門だ!! 一気に潜入した 3 人だったが，しまった一足遅かった。テイチク桑田は逃亡した後，部屋はモヌケのカラ。テープはどこだ，テープを探せ。しかし，社長と共にテープの姿も見当たらない。

ややっ!? まだ葉巻に火が点いている，ここを出てから間もないぞ。むっ？ この航空チケットは……。「おのれマンボ・スパイめ。こうなったら，東京タワーからのマンボ発信は諦めて，テイチク・ロンドン支部から電波を飛ばしてくれよう」←

テイチクの№.1 桑田はイギリスへ飛んだぞ。こちらも英国諜報部・MI─6 に協力を要請だ。地球の南国化をガードせよ。マンボ・テープを追跡だ。
マンボ・スパイ＝コモエスタ八重樫，パラダイス山元，ゴンザレス鈴木は一路ロンドンへ飛び立った。Go Go マンボ・スパイ，それゆけマンボボーイズ！／次号「霧のロンドン」編，乞うご期待。『MAMBO SPY 1』も絶賛発売中。

NEWS BEAT

●THE PRIVATES



Photography Mori-Q

いっやー，良かったぜ。プライベーツ。なんか室内よりか野外が絶対似合うな，このバンドは，うんうん。
この日は大仁田厚の呼びかけによるチャリティイベントーN相模原。えっ？ 大仁田を知らないって!? ヘイヘイ，そんなこと言ってちゃあプライベーツのマネージャー・並木さんにブッ飛ばされちゃうゼェ（大仁田はFMWプロレス！）。
お祭りの会場アイ・ワールド駐車場に登場のバンドは，まるで我が意を得たりの大活躍!! 青空の下，ノブちゃんのMCも光るヒカル。リフもビートもバッチリだぜェイ。まさにラフなロッケンロー・バンド！ コレなんだよ，プライベーツの魅力は!! 観たヤツは幸せ♡

●オルタネイティブ

アルファより9月21日，「オルタネイティブ・エレクトリックス～フューチャリズム 1992」と題したエレクトリック・ミュージックのバンドばかり集めたオムニバス盤がリリースされた。
出演バンドは，御存知ソフトバレエと，ーCBM，Oscilloscope（オシロスコープ），EUR（エウル），UD-ZE-ROといったラインナップ。どれをとっても前衛的で，都市感覚あふれるものばかり。ソフトバレエを除いてはまだメジャーで活動しているものはないが，この手のジャンルのアンダーグラウンドシーンがこの1枚で垣間見れるという1枚。
少しでも興味のある人はぜひ一聴をおススメしたい。

ZELDA
1年の活動休止を経て復活。



10月1日Sg発売。

くり返されるあらゆるシーンの中で常に第一線で活躍してきたZELDAのアルファ移籍第一弾になるシングル「MY LITTLE CRYING」が10月1日に発売される。一年間の活動休止を経ての新籍。心待ちにしていた人も多かろう。10月21日には完全ジャマイカ仕上げのアルバム『LOVE LIVE LIFE』も発売される。要満を持して動き出したZELDA。要注意なのはまちがいない。

山下久美子
9月30日，ライブ・アルバム・リリース。



Photography Tashin Aoki

代表曲が次々と登場。ライブの女王健在。

6月にリリースされたアルバム『Sleeping Gypcy』も記憶に新しい山下久美子が9月30日にライブアルバム『COSMIC LOVE』をリリースする。このアルバムには、今年の夏に行われた『Sleeping Gypcy』ツアーの、7月27日、NHKホールのライブの模様が収録されている。ステージでは、エレクトリックバイオリンの金子飛鳥、ロンドンからのJeffとDawnがコーラスで参加しており、アルバムとはまたちがった山下久美子が堪能できる。収録曲は〝プティックJoy〟のCMでもおなじみの「真夜中のルーレット」など、アルバム『Sleeping Gypcy』からが主だが、他にもデビュー曲「バスルームから愛をこめて」や大ヒット曲の「こっちをお向きをソフィア」「赤道小町ドキッ」など、ファン泣かせな曲も収録されていて実にうれしい。

11月には、同日のライブビデオ『COSMIC SON』も発売されるとのこと。久美ちゃんファンは金をためて、秋を待て!!

G.D.FLICKERS
土屋公平を迎えて新たな極面が…。



カバーを含む全6曲。

サウンド・プロデュース&アレンジに土屋公平を迎え完成したミニ・アルバム『I WISH YOU WOULD』。ショッキング・ブルーなどのカバー4曲に、オリジナル2曲という構成。R&B、R&R、フォーク・ロック…全6曲、それぞれが個性と緊張感に包まれていて聞きごたえあり。またゲストに斎藤ノブ、大谷幸、チープなどを迎え、さらに色あいを深めている。ノリのいい曲ばかりなので気持ちいい。

ダイアモンド・ユカイ
ユカイらしいダイナミックさ。



ロック界の荒くれ者。

ダイヤモンド・ユカイの新アルバムが到着！ これがなんと『海賊盤』なんだな。(笑) イヤ、冗談ぬきで。つまり、アルバム全体のコンセプトが〝海賊〟ということ。人呼んで『SHADOW BROWN&BLACK PIRATES』。

キャプテン・ユカイ＝シャドウ・ブラウン率いる荒くれ野郎どもの誕生と大冒険、ってとこだな。

前にリリースされた『ピエロの囁き』が大人らしい、田所豊の静の側だとするならば、今度のアルバム『シャドウ〜』はまるっきりのポップなダイナミズムで、潔さを感じさせる展開。ハッキリ言って、俺はコッチの方が好きだぁあああ！

良い。取りあえず聴くべし。このコンセプションはしばらく続行、とのことなので、ライブも楽しみだね、うん。

XEOレーベル
型にはまらないニュー・レーベル。



今後の活動に目が離せない！

ビクターのロック・レーベル〝インビテーション〟から、新たにXEOレーベル（ゼオ・レーベルと読む）が発足した。

このレーベルは日本のロックという狭義の解釈からはみ出そうとする前衛的なエネルギーが未知なる領域を切り開いていくために作られたもの。邦楽という概念では片付けられないスケール感を背景にしたものだ。

所属アーティストは次の通り。本誌でもおなじみのSOFT BALLET、M-age、BRAIN DRIVE、PAINT IN WATER COLERの4バンドによるものだ。どのバンドもニューウェイヴ以降のブリティッシュ・ロックの香りが漂う日本のロックの領域を超えたものばかりだ。

この4バンドの今後が、とても楽しみである。

Bonnie Duck!?+SOY SOUCE SONIX
ツアーを共にまわった結果は!?



お互いを刺激し合えたツアー。

千葉ルート14、大宮フリークス、市川GIO、そして前橋ラタンの4ケ所をまわる関東近郊ツアーが行われたボニーダックとソイ・ソース・ソニックス。この2バンド、同じ事務所ということもありとても仲がよろしい。「一緒にまわってからより仲よくなれましたね。ソイはうまいからすごく刺激になったし、楽しかった」とボニーダックのボーカルの芝でんが言えば「明日、一緒に海行く約束してるんですよ」と笑いながらソイのボーカルの木村君が言う。ふたバンドともタイトルだけ見たら笑ってしまうようなものが多いのだが、音楽、ライブはとてもカッコイイ。背筋がゾクゾクしてよだれが出るほどカッコイイ。「肩ひじやって私生活からカッコつけてもしょうがないしね」(木村)「また一緒にまわりたいねぇ」という芝でんに「事務所通して下さい」と。このふたりはイッタイ!?(大庭)

テレピアス
3rdアルバム，11月21日発売。



今までより聞きやすい仕上がり。

デビュー時から3作目までの構想ができていると言い切っていた彼ら。その3枚目のアルバムが11月21日にリリースされる。〝今度は変拍子が減って、もう少しわかりやすくなりますよ〟と言っていた彼ら。確かにずいぶん聴きやすくポップとまではさすがに言い切れないのだが、コンセプトもハッキリとわかりやすいものになっている。このアルバムのタイトルは『DREAM IS OVER』で、同時発売で初のシングルも出される。こちらは「虹の橋」という曲で、ビクターからリリースされるアニメ・ビデオ『幻想叙譚 エルシア』のテーマ曲に選ばれている。アニメ界でも大いに盛り上がっているという作品だけに、シングルの方も耳にする機会が多くなりそうだ。

3rdアルバムでもこちらのシングル曲は収録されているので、乞うご期待！

本当にいいバンドなので、ぜひ、みんなに聴いてもらいたいと、強く思う。

NEWS BEAT

●THE MODS



ザ・モッズの新作は『F.A.B』。相変わらずの森山節が健在のアルバムは、ここ数年来のモッズ＝政治的スタンスといった意味付けは特に見当たらないようだ。いい意味でのオンリー・ロックンロール。強面が苦手の人にも素直にカッコ良いモノとして聴けると思う。4曲目の「ロメオとジュリエット」なんか、モッズのバラッドを今まで知らない人にこそ、ぜひ聴いてほしいナンバー。性急なビート、哀切のメロディ、正にモッズの真骨頂。ライブが楽しみだ。

9月25日同日には先のスカーフェイス・ツアーのビデオもオン・セール。

●THE BOOM

お待たせしました。ブームのベストアルバム『THE BOOM』が9月21日に発売。ミニアルバム『DEMO』以外の4枚のアルバムから14曲を選び、全曲をリミックス。手がけたのは学生時代からYMOのレコーディングに参加していた日本を代表するエンジニア飯尾氏。ただ〝シングルを集めただけのベスト盤〟ではない。改めてブームに触れられる気がする。秋の夜長に聴くのがふさわしい。

●りんけんバンド

りんけんバンドの4枚目のアルバム『アジマァ』が完成した。うちなーぐち（沖縄方言）で「交差点」という意味だそう。あいかわらず優しげな、沖縄（日々の生活や自然）を歌ったものは、どこかのんびりとしたのを感じさせ、都会の生活を忘れてしまいたくなる気さえする。OTOら多数のゲストミュージシャンが参加するなど、さらなる広がりを見せてくれる。沖縄に強烈な興味を持つかも。

親を恨んだり世の中に愚痴言っても始まらん。こんな時にしっかりせなあかん、負けたらあかんって……

「自分のことも，バンドのことも，これから先のこともすべてを考えたうえで，納得のいく詞が書けたのは初めてだった」

デビューアルバムは99% NAOKIによる作詞だったDOG FIGHT。ニューシングル「STORM IN MY HEART」はボーカルTAISHOの作詞・作曲だ。テンポのいいリズム，メロディアスな楽曲。けれどもそこで歌われている言葉は，何の意味もないお決まりのロックンロールとは違う，傷ついて，そして這い上がってきたTAISHOの思いの丈がくっきりと刻まれていた。「15の年から水商売始めて，まだ子供で，礼儀も知らん生意気な口ばっかりたたく小僧やったん。勝手に仕事休むわ急にやめるわで迷惑かけっぱなしやった。で，家が傾いて，つぶれた時にひとりで東京に出てきた。まだその頃は欲しいもんは欲しい，彼女に会いたくなったら，もう金なくてもタクシーに乗って今すぐ会いたいっていうそのくらいの年頃やった。でも，もう友達もいない場所にひとりやし，世の中のシステムもわからん。親を恨んだり世の中に愚痴言っても始まらん。そん時〝あ，オレはしっかりせなあかん，これに負けたらあかん〟って。たぶんその時期にそういう気持ちになってたんやと思う」

その時期にひとりになって，いろんなことがわかったという。友達のこと，仕事のこと。同時にあまりの辛さに耐えきれなくなったこともあった。

「こっちに出てきて一回行きかけた。1週間日雇いの仕事やって，事務所に寝泊まりしてた時，辛くて〝あの窓から飛び下りたら楽になるんやろうか〟と思った。がまんするより楽になろうかって。でも，考えた。今までオレがやってきた甘えはもうきかん，とりあえず時間かかるけど，ゆっくりとひとつひとつやっていけばいいんやないかって」

衝動的で自信家で世間を知らなかった少年が，突然襲ってきた逆境の中でひとつの真実を見つけたに違いない。

「もし，家が倒産してああならんかったら，オレはまだ地元でわいわいと，駅前でたまってるような少年やったと思う。ところがそれを機にね，どーんと放り出されてから何年もかけてこうやって生きてるんや。いろんなこと，いろんな人に会ったりすることも全部オレの宝になってるし」

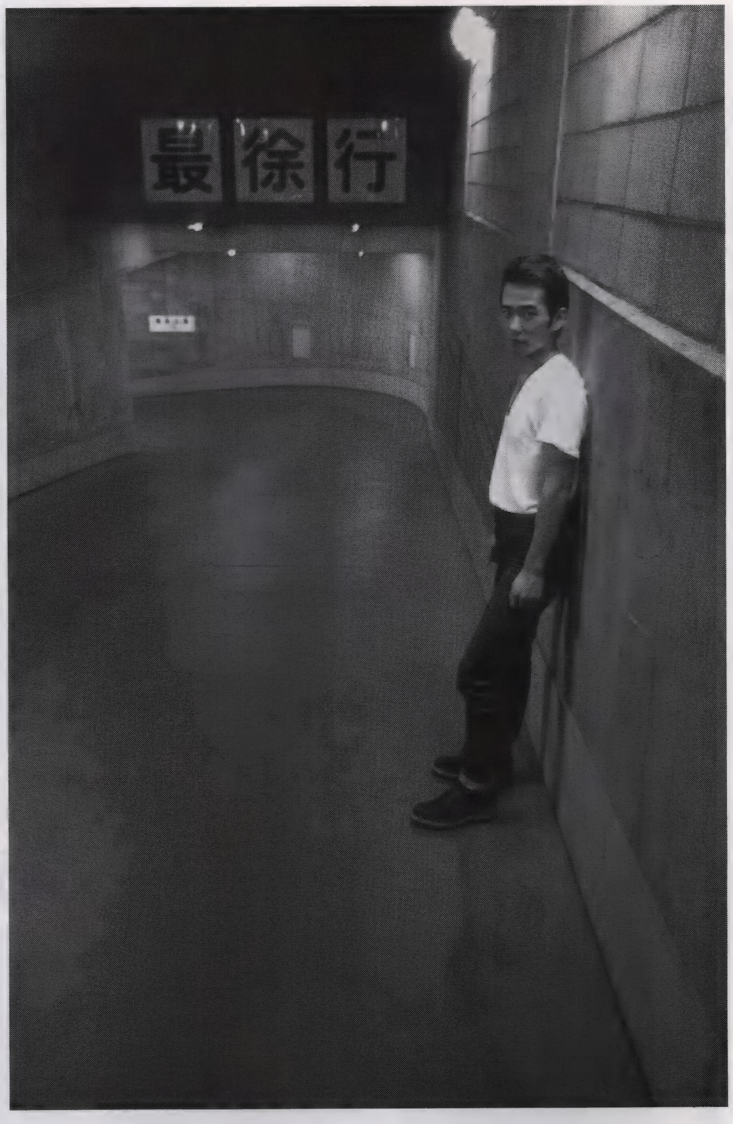
25歳にしてはなんとも真面目な男である。辛気くさいとか真面目くさいとかいくら言われても，これだけはゆずれないという部分が自分の中にある。TAISHOはそれを下の世代に伝えたいのだそうだ。

「自分より年上の人のことはオレはわからん。だけど下の世代に伝えたいことはある。オレは今25であって26じゃない。25まで生きてきた自分があるからや。自分もひとりになって仲間もいない，電話をかけるところもない，職場に行っても，なんかなあっていう状況の時に「辛いわあ」って言ったとするやん。そしたら隣の知らないオッサンが「アホか，お前の苦労なんかワシの苦労に比べたらなんでもない」って言うやんか。でもそういうことじゃないでしょ。苦労の重さを比べたいんじゃないよ。若いもんが途方に暮れてんのにや，「アホか」じゃなくて，オレは「そうやな」とかもっと何か言ってあげれればいいと思う。とまどってる部分を支えてあげれればいい。オレは歌でめいっぱい話しかけてあげれると思ってる。10年かかろうが何年かかろうがどんな状況におかれようが，やっていかなあかんよ，っていう。やりたいっていう気持ちがある限り，あした，あさって，しあさってとずーっとやっていけるわけだから。そんなん夢なんてすぐかなうわけがないよな。せやから，じっくり損とか得とかじゃなしにやっていく。オレの歌を聞いてくれた人のどっかにそのカケラを少し置いといて欲しいんや。

冗談でバンドやってるんやない。本気でやってるんだから。嘘じゃない，自分が確かだと思ってることをそのままやって，どこまでできるのかを確かめたい。嘘八百で何かを狙ったりするんやなしに。今はこれが書きたかったっていう詞なんや。今までは書こうとか歌いたいとかあんまり強くは思わなかった。

このシングルに書いてある時期は，すごくおもしろく痛くて辛いのね。でも自分がこれから船に乗って何日も何か月も海に出ていく時に，家の中がぐちゃぐちゃやと心配で出られへん。やること全部やっといて，それから船出したいんや。オレは自分の過去や気持ちをしっかり見つめて，それから目的に向かいたいから。この気持ちを今歌わんと次に行けない気がして」

今から海に出ようとするこの船は，まぎれもなくDOG FIGHTのことだ。TAISHOは今ようやく自分が舵を取る船に巡り合い，船出しようとしている。「STORM IN MY HEART」は過去の歌じゃなく，船出の歌なのだ。



Dog Fight

タイショウのSTORM IN MY HEART

25歳にしては真面目で辛気くさいタイショウ。何が彼をここまで駆り立てるのか？　音楽というフィルターを通して，彼がどうしても伝えたいメッセージとは？　答えは"Storm In My Heart"にあるはずだ。

Photography **Tatsuyuki Okamoto**　　Text **Yūko Toishi**

NEWS BEAT



Photography Motoko Sashi

●SHADY DOLLS

毎年恒例の日比谷野音ライブが、8月15日に行われた。曲は、6月にリリースされたアルバム『砂漠のライオン』を中心に、それにSHADYの代表曲が彩るといった感じ。山あり谷ありだったけど、なんだかとてもリラックスしている。それに何よりもメンバーそれぞれの表情がとてもいい。音楽をやることの楽しさが、歌と体、全体から伝わってきた。やっぱりSHADYには野音が似合う。心地良い風と、SHADYの心地良い歌。このライブはSHADYにとって、大きな一歩になったことだろう。

●お詫びと訂正

先月号のバッド・メサイアの所で感激の意を～を歓迎と掲載してしまいました。お詫びと共に訂正させて頂きます。

●MIND GAMES

MIND GAMESが情報ダイアルを設置。☎03(3289)3789に電話をすると、㊙話やオリジナル曲や運がよければ未発表の新曲まで聞ける。これと同時にファンからのメッセージ・ダイアル☎03(5467)3769も有り。

●GRAND SLAM

懸念されていたGRAND SLAMのドラマーがついに決定。今までGRAND SLAMと言えば有名どころのバンドからのメンバーが集まっていたが、今回のドラマーは有名なドラム・スクールを出てはいるが、メジャーではGRAND SLAMが初めてという弱冠22歳の北岡新紀(SHINKI)。ドラム歴は親の都合で渡米した'82年からというので実力は折り紙つき。その彼がバンドの台風の目となるか？

ZIGGY BEST ALBUM 発売決定!!

あなたが選ぶZIGGY BEST15曲 完全他人（ヒト）まかせ選んだ者勝ち！

DISCOGRAPHY

ALBUM

「ZIGGY ～IN WITH THE TIMES～」



1. EASTSIDE WESTSIDE
2. MAKE IT LOUD
3. I'M GETTIN' BLUE
4. BIRDS ON STRINGS
5. LAZY BEAT
6. 上海GIRL
7. HOW
8. CRISIS
9. I WANT YOUR LOVE
10. BOOGIE WOOGIE TRAIN
11. 6月はRAINNY BLUES

「HOT LIPS」



1. HOT LIPS
2. WHAT DO YOU WANT?
3. BORN TO BE FREE
4. HIGHWAY DRIVING NIGHT
5. GLORIA
6. PLAYING ON THE ROCKS
7. LAST DANCEはお前に
8. TOKYO CITY NIGHT
9. POOR BOY
10. STARTIN' AGAIN

「NICE & EASY」



1. GYPSY BLOODED
2. WHAT CAN I DO? (UNDER CONTROL)
3. ONE NIGHT STAND
4. STARDUST BLUES
5. NOT SO EASY
6. SING MY SONG
7. SHOUT IT OUT LOUD
8. SWEET SURRENDER
9. DEEP INSIDE
10. TAKE THE CHAIN AWAY FROM MY HEART
11. SWEET SOUND OF R&R
12. CLOSE YOUR EYES

「KOOL KIZZ」



1. WHISKY, R&R AND WOMEN
2. WASTED YOUTH
3. PASSION REDのおまえを抱いて
4. TOO LAZY TO BE GOOD, TOO SERIOUS TO BE WILD
5. I WANT YOU TO KISS ME ALL NIGHT LONG
6. DON'T STOP BELIEVING
7. 928
8. MAYBE I'M A FOOL
9. NERVOUS BREAKDOWN
10. DRIVE ME WILD
11. I'M JUST A ROCK'N ROLLER
12. DON'T YOU LEAVE ME ALONE

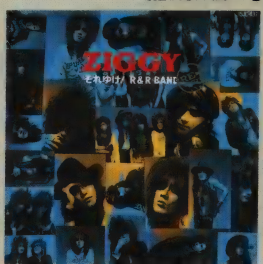
「YELLOW POP」



1. SWEET MAGIC
2. SUMMER DAYS FOREVER ～8月のMother Sky
3. 午前0時のMERRY-GO-ROUND
4. ROCK THE NIGHT AWAY
5. CLASH! CLASH! CLASH!
6. 眠らない25時の街で
7. STAND BY MY SIDE
8. 蒼ざめた夜～Too Fast to Live, Too Young to Die
9. Hot girl in black leather
10. 訪れる夜だけに
11. のらねこのKUROくん
12. LET'S DO IT WITH THE MUSIC
13. EMPTY HEART

MINI ALBUM

「それゆけ！ R&R BAND ～REVISITED～」



1. それゆけ！R&R BAND
2. I CAN'T STOP DANCIN'
3. FEELIN' SATISFIED
4. BURNIN' LOVE

「SOUND TRAX」

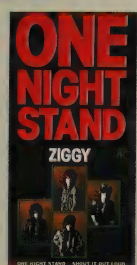


1. GOIN' CRAZY
2. I'M A LOSER
3. La Vie en Rose
4. LONG AND WINDING ROAD

SINGLE



「SING MY SONG」
■ MIDNIGHT TRIPPER



「ONE NIGHT STAND」
■ SHOUT IT OUT LOUD



「GLORIA」
■ FEELIN' SATISFIED



「I'M GETTIN' BLUE」
■ BOOGIE WOOGIE TRAIN



「午前0時のMERRY-GO-ROUND」
■ LET'S DO IT WITH THE MUSIC

［選んだ者勝ち！］

ZIGGYの今まで発表した全アルバム、シングルの中より、あなたの好きな曲を15曲選んで下さい。その中から投票数の多い順に15曲をBESTALBUM「15 NUMBERS SELECTION」に収録させて頂きます。

［スペシャルプレゼント］

- あなたが選んだ15曲中12曲以上が収録された場合 ➡もれなくZIGGY武道館ライヴ未発表シングルCDをプレゼント。
- あなたが選んだ15曲全部が収録された場合 ➡もれなくZIGGYサイン入りスペシャルGジャン（非売品）をプレゼント。

［応募方法］

レコード店にて応募ハガキをもらうか、もしくは官製ハガキにあなたの選んだ15曲分の曲名を記入し、住所・氏名・年齢・電話番号及びハガキの左下に"パチログ"と記入の上、下記の住所まで応募して下さい。

〒105 東京都港区新橋1-18-21 第一日比谷ビル8F ㈱徳間ジャパンコミュニケーションズ ZIGGY「15 NUMBERS SELECTION」係行

※締切り92年10月10日消印有効

11.6 NEW VIDEO RELEASE
"COME ON EVERYBODY"

（1992. 8. 17 日本武道館にて収録）

VHS:TKVA-60467 ¥5,800（税込）／LD:TKLA-50079 ¥5,800（税込）

12.4 BEST ALBUM RELEASE
"15 NUMBERS SELECTION"

CD:TKCP-30718 ¥3,000（税込）／CA:TKTP-20275 ¥2,800（税込）

TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS CO., Ltd.

PUBLIC IMAGE RECORDS

君もイラストレーターだっ！ 第1回

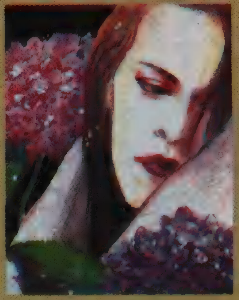
今月の櫻井敦司さん



さくらいまこと・目から流れるものは雨、それとも涙……？　なーんて。色がキレイ。



櫻井桜羅・マンガチックだけど本当にこんな顔だもんね。こんな人が息をしてるのねー（↑アホか）



そめいよしの・このあっちゃんを描いてくれた人は多かったけど、バックのあじさいが秀逸。

今月はたまたま櫻井敦司さんのイラストが多かったので，こんなタイトルをつけてみました。やっぱりキレイだよなあ，この人。女の私から見てもうらやましいです，ホント。これは臨機応変に開催していくので，特に「今月はだれ」って決めて募集はしません。

まだまだあんまり来てないのですが，今回から始まりました！　イラストハガキコーナーです。応募するときは封筒で送ってもいいけど必ず裏に住所・氏名（ペンネーム）・年齢を記入のこと。締切りはないのでいつでもどうぞ！　とじこみハガキの宛先まで。



kyle 藤臣・絵の線と，雰囲気がとっても TUSK にマッチしてるよね。ていねいですね。



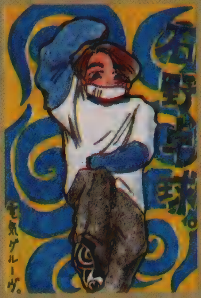
JR 東日本・どーしてこんなにアバウトなイラストで似てるんだろー？　才能ってことかしら？



ながちぃ〜・純太さんなのね。（ヤックかとも思ったわ）ものを使って描くって，小学校でやったな



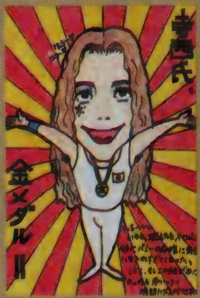
あば SAN・おおざっぱに描いているようで実はキチンと描かれているのだ。エライね。



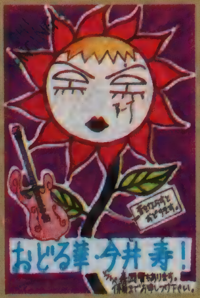
ヤクシ・うん，確かにね，卓球くんはこんな人だよ（ホントはもっとすごいけどね）次は瀧は？



ベティハナコ・よく考えつくなオイッ。かわいくていいけど，これでかわいくなかったら……



まつむらみか・どーも似ている気がするよね。似顔絵だからあたりまえだっつーの（笑）



ぶぶんぶんすうぶんかいあつし・「友達に送ろうと思ったけど，あやしすぎて。引き取って下さい」



なかむらあき・これはっ！　13歳とは思えないぞ。キミ，将来バチロクで働かないかい!?

Go Go Paradise

Letters Column

新学期を迎えて，学校ではそろそろ体育祭や文化祭の準備の真っ最中ではないでしょうか。体育祭というとあまり体力を使った覚えもなく，どっちかというとサボってたことのみ思い出されるワタクシですが，文化祭といえばやはりバンド演奏。高校の時も，大学の時も（自分もやってたし，当然男の子目当てで見に行きもした）。あとよその学祭にコンサートを見に行ったり。……あっ，そうだ，たしか東京農大の体育祭に出て野菜を賞品にもらった思い出がある。今もやってんのかな？

今月もたくさんのお便りどうもありがとう。届いたハガキは責任持って全部、目を通しています。本当だよん。

●友達が信号待ちをしてたところ、どこからともなくおばさんの怒りの声がしたので振り向いてみるとなんとそのおばさん、猫をつかんで右へ左へと百たたき！「あんたは何回言えばわかるんかねっ　あぶないやろ！　道路に出たら……」何回って、あなた　猫に何回言っても……でも笑った。（猫の百たたき（笑））

○抵抗しないのか？　猫は（笑）

●この前、阿部さんのシングルを予約しに行ったとき、お店のお兄さんが「あー、阿部ちゃんねぇ」と、ちゃんづけで呼んでいた。友達なのかな。（あべちゃん♡）

○阿部って名字の人って絶対に「あべちゃん」って呼ばれる。

●この間、みんなできび団子を食べに行ったときのこと。友達の一人が重いカバンをせおっていたのですが、そこに子供をせおったお母さんが入ってきたのです。みんなその子供を見て大きいなあとかおっさんみたいとか思ってたんだけど、重いかばんをせおった子が「子泣きじじいせおってるみたい」と言ったとき辺りはしーんとなりました。その子はカバンのことを言っていたのに、お母さんは自分の子供のこと言われたと思ったみたいで、きまずいムードになってしまった。（長崎由佳）

○徳島の女子高生はきび団子の買い食いすんのかい？

●私の家のちかくの箕面公園のサルに100円をあげると自販機でハチレモを買っていた。今は110円になって悩んでいるらしい。

●このサルは日本一ガラが悪くて、タコ焼きを欲しそうにしてるからあげたらそれがとっても熱かったみたいで私んちの車のワイパーをへし折られた。

●うきうきして300円の特大チョコベビーを学校の友達Aさんと食べようと思って手に持っていたら、後ろからAさんが驚かしてくれたおかげでふたが飛んで全部チョコが出て、ろうか中チョコベビーになって先生がびっくりしてた。（稲葉美也子）

○3連発全部おかしかったので採用！

●暑い日、私は足に〝BAN16〟をかけたつもりだったのに、髪につけるスプレー〝ケープ〟をかけていたのでした。そして足の毛が固まってた。（EBーくんのパン2）

○学生必需品制汗スプレー。私ら「編集者」は外に出ない仕事なのですっかり買ってないよぉ。

●私はまりんくんがかわいそうです。ゴキブリのばか。どうしてまりんくんをイヂめるの？できることなら、ゴキブリのいない世界につれていってあげたいです。大好きなまりんくんだもん、助けてあげたいな。……なぁーんて、言うと思ったか、バーカ。ゴキブリくらいどーってことないやろ。ヘラヘラしやがって。そんなこというてんと、チャッチャッと熱湯CMに出ろ、このスカタン。（泉ンピ子）

○このコーナーではミュージシャンの悪口は受け付けておりません。

●私の身の周りでXのヨシキは女で、あの写真集「NUDE」は弟がヌードになっているというデマが流れている。そして私の友達（ヨシキの大ファン）はそれを本気にしてその会社に問い合わせた。向こうの人からは「は？」という言葉が返ってきたそうだ。（RYOくんに金メダル）

●私はS×G×Gも大好きなのですがこの前友達の前でスパークスゴーゴーってすごい良いんだよーっと言ったら「なにそれ、ハリックスゴーゴー？」と言われた。（佐藤真由美）

●今、部活の1年生の中では「ドラえもんの最初の歌」が話題になっている。歌のなかの「アンアンアン」とはなんだ？　ドラえもんとアンアンアンはどういう関係だろう。どらやきの中の「アンコ」という説もある。（まっかなお鼻のトナカイさんのつけたのはかわいいハナクソ）

○またドラえもんネタか。

●沖田ヒロユキの彼女は、つりあわないほどの美人だと友達が語っていた。（友達が見た）。（ヤプシBとわ他人のモンキー）

○彼女かどーかわからんじゃん。おーきなお世話だす（どーして沖田浩之とドラえもんは毎回ハガキがくるざんす？）

●この間ススキノの某パブで沖田ヒロユキが、一般人の人々に気をつかいながら朝方まで飲んでいたそうだ。（札幌ペニー）

○ほらねっ。本当はいい人なのよ。

●8月3日のNHKで午後7時半から男子バレーやってたんだけど、アナウンサーの人が「おぉーこれは大きなミソだぁー」と言っていた。そりゃーもう大笑いさ！　その後その人は「失礼しました。ミスでした」と大真面目に言ったのよ。（スキスキRYOno　1）

●中日VS巨人のラジオ中継で代打の福王が出てきたとき、アナウンサーがまちがえて「さあ、ここで代打のフクロウ」と言った。それを聞いた解説者は爆笑し「時刻は9時半。そろそろフクロウも出てくる時間です」とわけのわからんフォローをしていた。

○アナウンサー2連発！　アナウンサーも大変だ。

●群馬に住む私のおばあちゃんはライブを見に行くことを「応援に行く」と言う。ちょっと前までは「宴会」と言っていた。私に座ぶとんとお弁当を持たせよーとした事もある。でもそんなおばあちゃんが、私は大好きです。（ちむちむちむりぃ）

●お出かけなのでオシャレな洋服を着て鏡の前に立ったうちのおばあちゃんは、胸のところにしわがあるのに気付いたので服を着たままアイロンをあてた……。「飛びあがってまったわー」と、おばあちゃんは笑って話してくれた。（八木祐三子）

○ま、ほのぼのしてていいこの作文みたい♡　だがこんなおばあちゃんもいる。どうする？

●昔お兄ちゃんが大切に飼っていたカブトムシは虫カゴから逃げ出したために、おばあちゃんにゴキブリと間違えられて、フマキラーをシューッとやられていました。あとでそれがカブトムシと気付いたおばあちゃんはカブトムシを水で洗っていました。（まようねぇ♪なんだかな）

●ねえ、冷たいこと言うようだけど……氷。あのー、かたいこと言わしてもらうと……石。非常に愉快だ。はっはっはっ。（いやいや）

●TVで街頭インタビューの「あなたはオリンピックで何の種目が好きですか？」というので、ある親子に聞いたところ、母親が答えてから3才くらいの子供に「僕は何が好きかな？」ときくとその子は「ハンバーグ」と答えていた。（のび太）

○食べ物といえば。今月のドーナツ。

●この前ドーナツを買いに行ったときとなりにいた客が「穴代をまけてくれ」なんて言ってた。その人は冗談で言ったみたいだったけどいつのまにか店長さんとかが来て大騒ぎになった。なんかその人がすごくかわいそうだった。（バリ島）

●何年か前、親戚のおばさんがミスタードーナツに行って、「ミスタードーナツ5個下さい」と一生懸命言ってお姉さんを困らせていました。（坂上牧子）

●自転車に乗って家に向かっていると前の方から運動部のお兄ちゃんたちが列になって走ってきた。先頭のにーちゃんが「前方から自転車～」と言うと、残りのにーちゃん全員が「前方から自転車～」と叫んだ。どういうリアクションをとろうか悩んだ。（タミヲ氏の愛人1号）

○もうひとり、自転車に乗っていた人から。

●自転車に乗っていて、曲がり角を曲がったらヒモらしきものがあった。よけるにもよけらんなかったので私は「え～い、ふんでしまえー！」と思い、踏んでしまった。ヘビはのたうちまわっていた。帰りにその道を通ったらいなかった。死ななかったと見て、のろわれずに済んだと思った。（たみおくだ）

○……こわいよう。大胆なヤツ。

●朝早く海に出かけたら男の人が近寄って来たので見るといちもつを出していた。すごくあせったけど、ここは冷静に「小さいですね」と言ってやろう、と思ったら「大きいですね」と親切に言ってしまった。そしたら調子こいて付きまとってきてついに泣いた。ああリアリティー。（ゴマだれ）

○なんで間違える？

●つい最近兄は結婚して子供が生まれるそうだ。今から名前をつけるのに考えている。決まった名前とは……女の子だったら〝はずみ〟男の子だったら〝なりゆき〟とばかげた名前を考え、奥さんになぐられた。（た）

○ウマイッ。ざぶとん1マイ。そして姉は？

●昔、姉はレコードを買ってポスターを持って帰って来たところ、ポスターには〝マドンナ〟と書いてあったのに開けてみるとそのポスターは〝たけし軍団〟のポスターだった。

○ポスターね。一番最近私が貼ってたのはニッセイの真田広之のやつ。（もちろんもうずーっと昔よ！　1年くらい……でも真田トランプはまだ使ってるよ。

●生ダラの〝セクシー小学生〟で4番目に登場したメタルなお嬢サン。ヘビメタ好きでBーTはないだろォ!!　おぉーい。（ウーッマンボ!!　ハッ）

○でもあのコーナーはキテるよね。セクシーな小学生多くてウラヤマシイ。

●保健の授業で「ニコチンでミミズまっぷたつ実験」をした。わざわざ生徒にミミズを持参させ、その先生はタバコを吸わないので、生徒からタバコをうばい、ニコチン水を作ってミミズをほうりこんだ。が、野性のミミズは強かった。……死なない！　先生はあせり、ビンをシェーカーのように振ったがミミズはニコチン中毒にかかったの如く平然と泳いでいた。化学の実験「ワインからブランデーを作る」も失敗したし、私のクラスで実験の成功はのぞめんゾ。（ANGELヒムロ）

○うわー、なんかオモシロイ学校。実験なんて今考えるとすごく興味津々。

●私は大阪人です。大阪人は〝な〟を使わずにおしゃべりすることはできません。大阪人の方ためしてみて下さい。（例）「あんなー、それでなー、だからなー、でもなー」（シャ乱Qのワンフー by大阪人）

○〝な〟を使わずにしゃべれる大阪人の方は御一報を。

●大阪弁に対抗して広島弁じゃ!!　生まれは大阪、育ちは広島なんじゃ。じゃけえ広島弁しか話せんのじゃぁ～。これからもお金があれば買うけぇー。そんときはちゃんとハガキ出すけえー。広島弁覚えてねー♡（佐々木由佳）

○次は〝どこ弁〟がくるかな？

●先月、パチンコをしていたらどっかのオヤジが「おっ、ねえちゃん、調子いいねえ」と後ろに立ってなかなか離れないので「おじさん、今ドラマの撮影中なんだから、邪魔よ!!」と言うと、ぎょっとして帰っていった。その日は1万9千円の勝ちだ。（小島投手〔巨人〕は昔の民生さんに似ておるのじゃ）

○パチンコは18歳からだよん。この人はいいよ。19歳だから。しかも稼いでいる。それなのに次の人は。

●誰にも言えない話。私の父はパチンコで70万円も使ってしまった。おかげで毎日の夕食のおかずはふりかけだ。（EBーの愛人）

○誰にも言えない……涙……

●私、むかし海外文通をしてたんです。そして、この間いきなり〝プルルーン〟取ってみるとアメリカからのTEL。私おどおどして「私アルヨ。元気アル」と、謎の中国人になってしまったんです。誰にも言えない……。（阿部典子♡）

○あたしも英語苦手なのだ。でも中国語もしゃべれない（笑）

●初めてバイクに乗る時、初めてヘルメットをかぶったら、いきなり真っ暗になって、一体どうした!?　と思ったらヘルメットの前後が反対だった。誰にも見られてないダロー。（ソロモンワルモンドラエモンモンモン）

てな感じで、皆様のオモシロハガキ、どんどん送って下さいね。それから、各アーチストのコーナーにも励ましのおたよりをお待ちしております。〒102千代田区五番町6―2　ソニーマガジンズ　パチパチ　ロックンロール「Go Go Paradise」まで。

大槻ケンヂ

野口“業界”ゴロ

書けないよー、書けないよー。アーッ原稿が書けない。今度ね，某雑誌で連載してた興味のある所へ行ってみようっていうヤツの単行本を出すんだけど，それが書けないんだよぉー。原稿を書けって言われればすぐ書けるんだけど，それがおもしろいのかどうかって気になるともうダメ。電車の中とかでも何回も読み返して“大丈夫だ”って納得するんだけど，少しするとまた不安になってきて読み返しちゃうんだよね。でもさ，自分が好きな作家の人の本の中にもつまんないのってあるもんなぁー。いや，そういう人と比べちゃいけないんだけどさ。もうこれはスランプじゃないんだよ。才能が枯れてしまったんだ。俺はもう何も書かないぞー。小説も詞も何も書かないぞー。とか言っておりますが，最近私はバラティストとして活躍しています。バラティストというのは，バラエティアーティストの略で僕が作りました。なんでもやるミュージシャンとして，若者の憧れの職業になるのだ。“ごきげんよう”，“徹子の部屋”と続けて出演したけれども，それを越える素晴らしい番組に出演することになったのだよ。だってね，“徹子の部屋”に出たミュージシャンはけっこういるのよ。ヨシキも出た。デーモン小暮も出た。渡瀬マキちゃんも出た。でも，未だかつてこの番組に出たミュージシャンはいないよ。いやー，自分で考えてもすごいなぁ。その番組こそ“欽ちゃんの仮装大賞”（審査員）なのだぁ！　きっと欽ちゃんにツッこまれたりするんだろうなぁ。“オオツキさんの１点で入賞だぁ”とか言われてしょうがないなぁと思ってランプつけようとすると“ダメだよぉ”とか言われるのかなぁ……。楽しみだな。でも，僕はバラティストとして出演したいと思っている番組があるのだ。その番組こそ“誘われてふたり旅”だ。いいなぁ，出たいなぁ。ま，そんなとこで。　（語り・大槻ケンジ／文・リバ）

調べちゃるけん!!

●ANGIEのメンバーは今何してるんですか?（あすなろ　あすなろ）
○三戸華之介と岡本有史はGOOというバンドを元ベルズの野山昭雄、大島香とやっています。中谷ブースカはソロシンガーソングライターとして活躍中。大阪地域限定のフロムAのCMソングを担当しているらしい。ライブもやっているらしい。藤井雅彦は10月21日メルダックよりソロアルバム第一弾「太陽の男」リリース。
●JSWの純太さんがギターで使っている弦のメーカーなども教えて下さい。（心からラ・ラブ）
○ダダリオっていうそうです。
●長髪の男の人ってシャンプーとリンスは男物なのか、女物なのか……プレゼントしたいんですけど、どっちなんでしょう。ポニーダックの川井健さんが大好きな私に愛の手を!（I LOVE 川井健）
○川井君の使っているのはドクタードラレという外国の物だそうです。今は でも男物、女物ってあまりないんじゃないかな? 美容院にも両方いるし。
●BY-SEXUALのDENちゃんのよく飲むお酒、吸ってるタバコって何ですか?（ダイナマイトセクシー）
○タバコはセーラム・ライト、お酒はドンペリ（?）、アリナミンV（??）とのこと。
●T-BOLANと言う名前の由来と意味を教えて下さい（森友者）
○「T-REX」というバンドのMARK-BORAN（ボーカル）から取ったのですが、森友氏がずーっと昔、練習スタジオで偶然見たビデオに出ていて、音的な意味合いよりも「存在感のカッコ良さ」にあやかりたいということでつけられた名前とのこと。レコード屋さんの洋楽コーナーで探してみてね。
●ブランキーの秋のツアータイトル“地獄はトカゲの夜”は誰がつけたのですか?（トカゲだぴょん）
○ベンジーです。
●ミスター・チルドレンのメンバーが自ら作っているという「ファザー&マザー」はどこで手に入るのですか?（横浜市のプリティーガール）
○基本的にライブでアンケートを書いてくれた人にお送りしています。でもライブには行けないんだけどどうしても欲しい! という人はハガキにミスチルへのご意見、ご要望、パチロクの感想などを書いて、パチロク「ミスター・チルドレンDM係」まで。
●DIE IN CRIESのファンレターの送り先を教えて下さい。GBイヤーブックにのってなかったので。（RYOさんLOVE）
○……ゴメン（小さい声で）渋谷区恵比寿4-5-28 恵比寿ガーデン408 デンジャークルー です。
●すかんちのFCの住所等教えて下さい。（かったん）
○CSAマネージャーに聞きました、が。「今のところない」とのことです。でも、今計画中という噂もありますので、希望を捨てないでネ。
●ユニコーンのFCの入り方をぜひ教えて下さい。（ユニのよしはる元気）
○62円切手を貼った返信用封筒を同封のうえ、渋谷区神宮前2-19 シャンボール原宿505 CSAユニコーンFC入会希望係まで。
　ところでこの、返信用封筒（〒、住所、氏名記入済、62円切手貼付）は基本なのでおぼえておいてね。
●バクチクのインディーズ時代のCDやシングルはもう買えないのでしょうか?「TO-SEARCH」や「HURRY UP MODE」とか、欲しいよーん!（らんたったるんぱっぱ）
○ビクターに問い合わせたのですが、残念ながら入手方法は中古レコード屋さんを探してもらうしかないようです。この秋は中古屋さんめぐりよッ!

LUNA〜SEA〜

表現者のページ vol.2（J）

今月はJ君が登場　ツアーについて語る

こんにちは、ルナシーのJです。みなさま元気にしていますでしょうか? 俺は暑さにちょっと参ってますが…。とりあえず連載ということなので、デビューツアーの話でもしましょうか。

今回は全国7か所、アンコールTOURを入れると10か所かな、初めてのホールツアーということで、ルナシーにとってのは未知のことでしたね。PAさん、照明さんとTOUR前に念入りにミーティングをかさねて、全国のみんなに、ルナシーのLIVEを、カンペキなLIVEを本当に見せてあげたくて、そういうことになったんだ。でTOURが始まって、やっぱり最初は不安だったよ。今までとシチュエーションが違うのもあったしさ。けどね、どんなに考えてもさ、俺達がいいLIVEをしなければ何もならないって、メンバーみんなで話してさ、やるしかねぇって。で、TOURに突入したわけだけど、考えてた俺がばかみたいだった。どこを回っても、みんな最高の顔で出迎えてくれて、全か所SOLD OUTで、やればやるほど“LIVEっていいな”って再確認しちゃったよ。本当にステージの上でさ“ここで死ねたら本望だな”って何回思ったことか……。でFINALの野音。俺正直言って、あの日のことってあんまり覚えてないんだ。たぶん暑さのせいと、がむしゃらにやってたからだと思う。うちのLIVEを見たことのある人はわかると思うけど、異常に照明にこだわってて、そのライティングの熱と、あとはLIVEにかける意気込みが、FINALということもあって、頂点へいってたんだと思う。頭がとんでたんだと思う。で後日、VIDEOを観て“あれ? こんなことした?（笑）”みたいに、本能で動いてたんだなぁって思った。でも何も考えず、本能だけでがむしゃらにやってたLIVEって絶対にいいLIVEなんだよね。

それから、9月の終わりから“AFTER the IMAGE”というツアーが始まります。タイトル通り、みんながイメージした後に、俺たちに何かをぶつけてもらいたいって気持ちがあるんだ。それから、今年最後のツアーです。来年、いつから動きだすかわからないし…。だから、全国のみんなに、また最高の夜を届けたいと思ってます。けっこうハードなツアーだけど、俺たちとFANのみんなでどこまでやれるか勝負だな。（笑）それでは。

リバコラ!

季節はすっかり秋ですね。秋の夜長と言うくらいだから，夜更かしは基本です。夜更かしと言えばテレビ。さぁ，今月もテレビネタで。

今は“チューして”のCMがお気に入り。アレの２度目の“チュー”が可愛くてラブラブ。そー言えば，先日，昼寝をしていたらば（なんという生活）二重人格の人に襲われて殺されそうになるという夢を見てうなされてしまったのだよ。するとだね，あーイヤな夢だと思って起きてみるとテレビでは再放送中の「あなただけ見えない」をやっているではないか。寝ている間でもテレビは人間に影響をあたえているという証明なのだよ，わかるかな。わかんねぇーだろうな。だって，本当にわけわかんないもん。というわけで，毎週ビデオに録ってまで見ていた「天使のように生きてみたい」と「ずっとあなたが好きだった」，「おかみさん」じゃなくて「まったナシ」と「ニュースなあいつ」も終わってしまうのねぇ。この中で一番のヒットは佐野史郎だったけど。佐野史郎が SM のお店に連れていかれて想像の中で女王様にぶたれているシーンでは思わず笑ったけど。リスナーを裏切らないストーリー展開をありがとう。

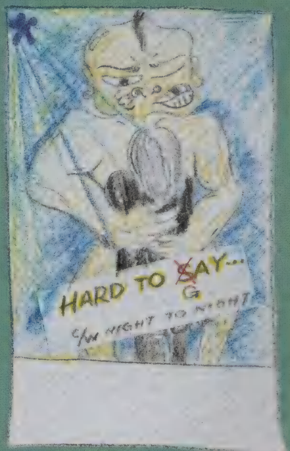
そうそう，テレビと言えば私は生まれて初めて「笑っていいとも」を見に行ったのだよ。カズヤ君が出演した時だったんだけど（ちなみに「ONE」の CD を置いた CD 立ては私の物なのだ），その日はダウンタウンも出ていたってとこがポイント。でも，その昔，「夢で逢えたら」を取材したことがあったから，生のダウンタウンを見るのは２回目だもんね。（とエバル）。それにしてもスタジオはテレビで見るより全然狭いのにはビックリしたなぁ（なのに，すっかりただのファン）テレフォンショッキングが終わってからも，客席に座って「笑っていいとも」を見ていたカズヤ君に微笑ましさを感じてしまったけどね。まぁ，幸せになって下さいという月並みな言葉を連ねて，今月は終わりとしましょうか。

こんなLIVEあんなMC

●7月18日のスピッツのルート14でのライブの時、マサムネくんは選挙の日にちをまちがえ、客から「バカー」の声がかかった。（ハニーハニー）
●エッグマンでの「それ行けタマゴ男」でダイブしてたワケワカンナイ人はみんなよけてまともに落ちて苦しんでた。ライブ後、彼はキレイに飛べてたかとおなかを押さえてきいていたのが根性あるなと思った。（アミちゃん）
●7月31日のサウンドコニファー（ジュンスカとユニコーン）でかずボーンはショートパンツをはいてたんだけど最前列の私には彼の黒に蛍光ピンクのラインの入ったパ○ツが気になってしかたなかった。（ねずみの一家心中）
○もう一発コニファーネタを。
●バスで行ったらそのバスのチケットに「ユニコーン（他）」としてあった。たった2バンドなのに（他）ゆるせない!!（ふう。ウインド。岡。）
●8月2日長崎佐山でのこと。雨で私たちはびしょぬれ。それを気づかってか西川くんはバケツを持って登場。バケツの水をかぶっていたのはいいけどそのあとすべってこけてた。（あっちゃん）
○優しい人柄がでてるじゃないですか。おまけに笑いまでとったんでしょ。

LADIES ROOM

ど～です。先月号の絵を見て，JUN様の才能がわかっていただけたでしょうか。今月もまた，笑える作品を，さらりと描いてくれました。やるぅ。

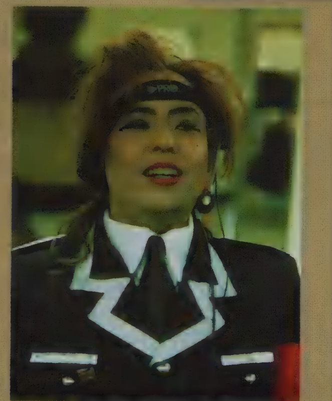


さて、本当は今月から読者のみなさんの似顔絵を描いていただこうかと思っていたのですが、こちらの諸事情により、ふたたびJUN様オリジナル・イラストを描いてもらうことになりました。

左のイラストがそれです。と言っても、このままではなにがなんだかわかんないでしょう。そうですね。実はこれ、JUN様の逆襲なのであります。某月某日のことでした。百太郎氏があるラジオ番組に出演した時のことです。メンバーのことをなんやかんやと話している時、百太郎氏がこんなことを言ったのです。「NAOとGEORGEはバックバンドで、JUNはヘルパーだよね。(笑)」と。これを聞いたJUN様が激怒。(←したかどうかはわからない)そこで、このコーナーでの復讐を誓ったのであります。「HARD TOGEY」よく見ると、ごっつい男に抱かれているのは、百太郎氏じゃぁ～りませんか。本当は、もっと過激なイラストもあったんだけど、良い子のみなさんにはとっても見せれないようなものだったので、残念ながら掲載できません。(笑)

というわけで、来月からはいよいよ本格的に似顔絵を描いてもらいたいと思っていますので、みなさん、どしどし応募してくださいね。先月号を読んでいないというフトドキ者のあなたのために、もう一度応募方法を。あなたがJUN様にぜひ描いてもらいたいというものの写真・もしくはビデオなどを、下記の住所まで送ってください。〒102東京都千代田区五番町6－2パチロク「JUN様にイラストを描いてもらいたい」係まで。ちなみに何度も書くけど、ヌードでもいいそうです。(笑)自分の似顔絵でも、好きな人の似顔絵でも、なんでもOK。応募者多数の場合は、JUN様の厳選なる審査の上、抽選で描かせてもらいます。みなさんの応募、お待ちしてます。

すかんちの時事放談



やぁどぉも！すかんちのポンプでございます。楽しかった夏のイベントも終りまして、我々は現在大好きなレコーディングの真最中なのであります。早いもんで、もう4枚目のアルバムなんですねぇ、これが…。ついこのあいだ3枚目が出たばかりの様な気がするんだけど、時の過ぎるのは早いものです。

レコーディング中というのは、世間の出来事なんかにどうもうとくなっちゃって、今何が話題になってるんだか…。というわけで、今回の僕の話は時事ネタじゃないけどゆるしてちょ。

ミュージシャンにも色々なタイプの人がいらっしゃいます。自然保護だの難民救援だのに熱心にとりくんでいる人がいるかと思えば、その横でスプレーバリバリでオゾン破壊に一役買ってるバンドがいたり（今はフロンガスじゃないから、そうでもないか）、我々すかんちの様にそういう事に全く興味のない人間もいるわけです。でもそういう色々な人達が同じ様に興味を持ってるのが、AIDSの問題じゃないかな。ちょうど前のアルバムのレコーディング中にフレディ・マーキュリーがAIDSで亡くなったりして、いやおうなしにAIDSの恐さやなんかも聞いたりする事があって、自分は大丈夫かいな？なんて思ったりした時期があったのね。もちろん大丈夫ですけどね。もし僕がそうならこんなに太ってないし、そういうHな事もしないしね（「おいおい本当かよ」という外野の声が聞こえそうだけど…）。身近な人がAIDSだって分かったら恐いだろーなぁ。今のところいないみたいだけど、日本人の有名なミュージシャンがフレディみたいに死んじゃったら、もっともっとみんな真剣に考えるようになるだろうなぁ…。ユニコーンの阿部B君がAIDSをもっと真剣に考えようっていう意味のバッジをくれたんだけど、本当にそういう時期なのかもね。そうそう寺西さんも一度検査受けた方が良いかもよ。(笑) なんてね…。

the Pillows 山中さわお 東京モダンタイムス

HELLO、SISTER!! 元気かい？ 僕は相変わらずだよ。OK？

しかし、シンプルであたり前のテーマとして最近思うに、人生くじけなければ、かなり素敵な日々を送れるだろうね。自分の24時間をふり返れば、まあ、当然くじけっぱなしだ。我慢が足りずに投げ出しておきながら、後悔しちゃったりするカッコ悪い姿を何度世間にバラしちゃった事だろうか…。すごい奴もいっぱいいるよな。目標目指して一直線にサ、それに付いて回る出来事は〝苦しい〟とか感じないようにインプットされてるような…うらやましいよね本当。僕だって頑張りたいのに、気持ちは行ったり来たりでうまく行かない。〝継続する〟ってパワーいるよな。仕事も恋愛もサ。初めの頃のトキメキを忘れちゃって慣れちゃって、くじけた恋もたくさんあった。「もっと今より心地良い場所へ」と弱く甘い自分が気まぐれに姿を現わし誘惑するのサ。

幼い頃、24歳はとても大人で強いイメージだったのに、どうしたもんだ!? 全く子供のまんまだよ。(ズルガシコイ知恵はけっこう働くけどな) 強く生きたいね。自分にしっかり自信を持って、正直にサ。タイミングって何にでもあるだろうから、おもしろくない日々、寂しい季節、やりきれない出来事、必ず降りかかってくるんだ。わかってるんだよ。でもそんな時って何故か〝楽しい毎日〟の記憶はうすれ、「あーどうしていつもこうなんだ」とか弱音を吐いてしまいがちだろ？ ダメだよな、もう世の中じゃ大人の年齢なんだし、甘えてちゃイカンよな。僕の尊敬するチャップリンの自伝なんか読んでると本当にパワフルだ。どんな事も全てプラスにしようと努力してるんだよ。きっと歴史に名を残すような人達って、どのジャンルにしてもそういう〝くじけないパワー〟を持ってたと思う。

僕はずっと歌ってきた。悲しい事も楽しい事も情けない事も歌ってきた。自分の力って何だろうと悩みながらも今日もステージに立って皆の前で歌ってる。こんな僕なんかでも人にうらやましがられる時もある。でもね、いつも今より上を見ていたいから、やっぱり悩み続けているんだよ。もっと強くなりたい。もっと自信を持って正直になりたい。ロッキー・サリバンになりたい！ 思いもよらない突風が吹いて雨に打たれて、もしかしたら傘さえないかもしれない…それをどうするかは自分だよね、きっと。「もうダメだ」って思うのと「どって事ないよ」と思うのじゃ気分は違うよな。90'S MY LIFE世紀末で、不安材料が転がってるけど、文句言ったって逃げ道探したって、仕方ないから、毎日目が覚めたら、つぶやくよ。「どうって事ないよ」OK？

A 今月の答え

7月の終わりに無事、引っ越しも終わって、今のところゴキブリともスッパリ縁を切り、平和な生活を送っております。さて、皆さんに送っていただいた解答編を紹介したいと思います。「にんにくを部屋のすみにまいておくと出てこないとTVで見ました。飲食店でやっているそうです（コンタまり子）」黒くて大きいやつが死ぬのかな。飲食店は小さくて茶色いやつが出るんだよな。「ホウ酸ダンゴに限る（シュプレ・その他多数の方から）」これは時間がかかるよなあ、死ぬまでに。でも今回ホウ酸ダンゴをたくさん送っていただいたので、新居でもし出たら使ってみます。「まりんさん！ バルサンやコンバットはだめですヨ。だってゴキブリがどこで死ぬか分からないんですヨ」もっともだ。「ネコを飼ったらいかがでしようか？（鉄腕タミィ）」瀧んちにいますけど、出るよ？ ゴキブリ。という感じで、今月は「ゴキブリについて」の辞書のコピーを送ってくれたもりさきよしこさん。これを読んで勉強します。というわけでサイン入りレコード屋の会員券（私物）をお送りします。

Q 今月の相談

やっと引っ越した念願の新しい住居なんですが、ゴキブリはまだ今のところ出ないというものの、また新たな悩みがあるんですよ。それは何かというと道路が近いのですごくうるさいんです。職業柄、眠りにつくのが朝の4時から5時くらいなんですが、そのころがちょうど車が走りだす時間なんですよ。もしかして壁が薄いのかもしれないんですけど。それに実は、4時になったところで別に眠くもならないんですよね……。なんとか安眠したいので、安眠方法を教えて下さい。というのが今月の相談です。救いのおハガキをお待ちしてます！ とじこみハガキのあて先までじゃしじゃしどうぞ♡

電気GROOVE まりんの自分相談



Go Go Paradise Letters • Column

Peepin' inside

●フィッシュマンズ（8月25日　ソニーマガジンズにて）
いやー私は初めてお会いしたメンバーでしたが、不思議な人達でした、とっても。予想どおりだったけどね。ふわふわ、ぽわぽわという感じかな。ま、ちょっと緊張気味だったみたいだけどね。

●電気グループ（8月20日　六本木アートセンタースタジオ）
この日まりんくんはなんと!!　編集者とヘアメイクさんの次に来たんだよ。3番目だよ。早ーい、エライ。パチパチ。瀧さんは二日酔いということで、つらそうにスタジオのど真ん中に大の字で寝てました。そして登場した卓球氏はもーっとひどい二日酔い。撮影の途中で吐いてたもんね（トイレでだよ）。お酒の飲み過ぎは良くないよ。それから人にデブデブ言うなあ!!　今に見ててよねっ。DIET!

●DIE IN CRISE（芝浦スタジオ）
残暑がすごいザンショ。あ〜、空気がヌルイとギャグもますますヌルくなる。さて、イベントで指を骨折してしまったKYOちゃん。ギブスがちょうど取れたばかりということだったんだけど、まだままならない状態。これじゃあ大好きなUFOキャッチャーもできないのではと思ってたら、最近その熱は冷めてしまったらしい。これからは、UFOキャッチャーではなく、新しくバーニングできるものを探しているそうだ。

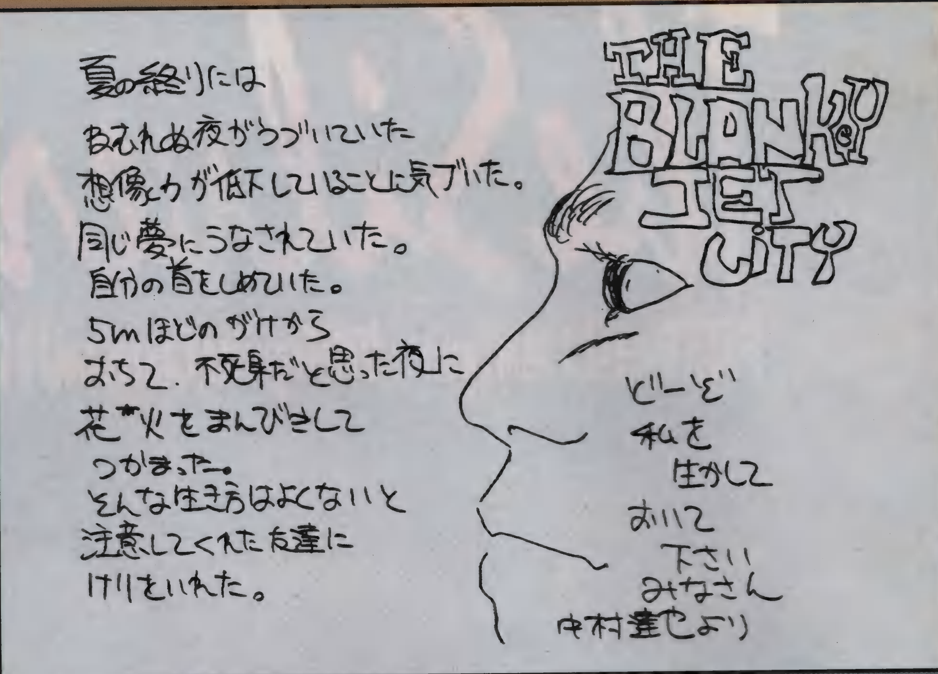
●すかんち（8月31日　芝浦スタジオにて）
ローリーのポラをモノクロで撮ったところ、最初の1枚が妙に写真が暗くしていく度、〝褐色の恋人〟から〝鹿鳴館（ライブ・ハウス）の人〟へそして本番は〝北欧メタル〟の人へと同じ民族とは思えない移り変わりをし、一同大爆笑。いやー、写真というものはいかにも奥の深いものであると、身を提して教えてくれたローリーとカメラマン小木曽氏であった。

●ブレイン・ドライブ（8月14日　ソニー・マガジンズ→焼肉店）
㊟と彼らが初対面の時からの約束だった「焼肉を腹いっぱい喰わせる」を、ついに実現。表野のヤロー、カルビに集中攻撃しやがった。

●ラブ・ミサイル（8月25日　六本木）
メンバー全員、本当にデカイ!!　しかもヤセている。…うらやましい…。

●J(S)W（9月6日　新宿）
ヒヤヒヤもんですよ。やっとあがったニュー・シングルの音。いやあ、間に合ってよかった。来月は大特集だよ。

●取材ウラ話──今月のヒラハラ。
〝人間、死ぬ前に何を食べたいか?〟編集部の小娘・平原淳子はなんと「玉子かけごはん」だそうである。うーむ、なんとも安あがりというか、ビンボくさいというか、うーむうーむ。
ところで、平原は現在ダイエット中である。2ケ月でマイナス5kg目標!「ヤセられる」と思う人は、ソニー・マガジンズ　パチロク「ガンバレ平原」係までハガキ下さい。見事減量したあかつきには、抽選で玉子かけごはんを平原がおごります。励しのお手紙待つ。



集中連載

Mr.Children 今月のおススメ

12月にリリース予定のセカンド・アルバムのレコーディングもひと段落して、28日からツアーが始まる彼ら。というわけで、今月はちょっぴり趣向を変えてレコーディング中の過ごし方。

●桜井和寿（ボーカル）
今回のレコーディングは、ホテルでコンピューターを使って音をひろったり組み立てたりという変わった形式をとってやったの。一度だけコンピューターに入れてあったギターのデーターが飛んじゃったりした失敗もあったけどいいアルバムを届けるから楽しみにしてて下さい。

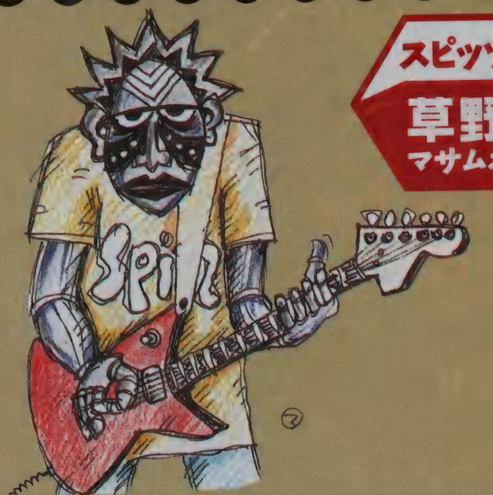
●田原健一（ギター）
前回とは違うレコーディング方法なので、今まで自分たちが経験してきたものとは違う発想、違う考え方を要求されるものだったかな。選択肢はひとつじゃないってことを学んだし。やっぱりレコーディング中はタフでいることが一番大事だね。

●中川敬輔（ベース）
シンセベースを使ったり、弾き方を変えてみたりと新しい試みが多かったのですごくおもしろかった。大変なのは、コンピューターの機嫌によって何時間も待たされることが多かったことかな。ライブで新曲も演るからね。

●鈴木英哉（ドラム）
レコーディングについてはみんなが言ってるみたいなのでわかってくれたと思うけど。僕もいろんな新しいことを試せてすごく楽しくできたと思う。なんてったて僕の曲も入るしね。気をつけてたことは、ベラベラしゃべってみんなにウルセーって言われないようにしたことです。ハイ（笑）。

生きるヨロコビ

スピッツ
草野マサムネ



② ター・マシーン

二十世紀までは、どんなに精巧なロボットがつくられても、そのロボットが「心」をもつことはありえませんでした。そもそも心、すなわち生物の個々の肉体に宿る霊的エネルギー＝タマシイの存在すら、科学的には認められていなかったんですから。

ところが2018年、ドイツのナニヤッテン博士により、その意識体の存在が科学的に証明されました。さらに2025年、中国のター博士により、空中に浮遊している、肉体を持たないタマシイを割とシンプルなシステムによって捕獲できる機械が開発されたのです。その機械は博士の名をとって「ター・マシーン」と命名されました。

そして、2030年現在でも、タマシイについては未だ解明されていない部分が多いのですが、空中には成仏できないタマシイ（人間だけでなく動植物のものも）が多く浮遊していること、特定レベルの電磁波空間を作ってやると、そこに必要なタイプのタマシイを宿らせることができることなどがわかっています。

そしてこのター・マシーンによって捕獲された意識体を、様々な物体に植えつける実験が繰り返されています。人間型ロボットをはじめ、クルマ、飛行機から掃除機、ヒゲソリに至るまで、タマシイを植えつけることによって、よりファジィな機能を持たせられるようになりました。もっともイノシシのタマシイを持ったクルマとか、狼のタマシイを持つヒゲソリなど失敗作もありましたが。

また、このター・マシーンは比較的簡単に製造できるので、ヤミで悪用され始めてもいます。例えば、ダッチワイフ・ロボットに娼婦のタマシイを宿らせて、それを高額で取引していると か、殺し屋のタマシイを植えつけた殺人ロボットなども造られているようです。もっとも、殺人ロボットには「心」など持たない冷酷さが要求されるため、タマシイを植えつけることはかえって逆効果だったようです。

こういったタマシイ利用については、道徳上、あるいは宗教上さまざまな問題が浮かび上がってきており、世界中に大きな波紋、反発を生んでいるのも確かです。

ともあれ二十一世紀の文明は、このター・マシーン抜きでは語れないものとなりそうです。

実はこれを書いている私も、二十世紀にはミュージシャンとして生きていたのですが、肉体が滅びてしまった後、母胎に宿るチャンスにめぐまれず、フラリフラリと浮遊していたところをター・マシーンによって捕えられ、現在ミュージシャン型ロボットとして働いているのです。

（2030・9・28）

The Silver Doggs

FUJITOvocal,JIMMYguitar,OMMYguitar,CrazyCoolJOEbass,DAXXdrums



アルバム緊急発売決定 !!

Album"SUNDANCE KIDS"
10.21 Release

COCA-10308 ¥ 2800(withTAX)

Debut Single"WILD TRAIN"9.21 On Sale

限定10,000枚→SOLD OUT!!

JumpOnTheWildTrainTour

10月14日(水)日本青年館

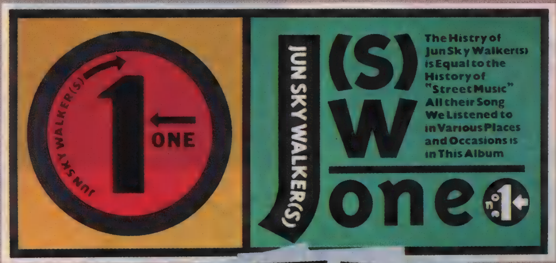
open18:00,start18:30 ¥ 3,605 <全席指定>

BODY distributed by COLUMBIA RECORDS

Present

夏休みにいろんな経験をした人は多いと思います。なにしろあーんなに長いんだもんね。受験勉強，アルバイト，旅行，ケガなど，探せば絶対，あなたのオリジナルの「'92年の夏休み」があったはず。そしてそこに流れていたあの曲，あのアルバムを思い出すために，このプレゼントを。締切りは10月20日です。

14名





JUN SKY WALKER(S)

⑮ステッカー10名（提供　トイズファクトリー）⑯ポラ４名（提供　編集部）ベストアルバム『ONE』いかがでした？　いろいろとニュースの多かった今月のジュンスカでしたが，「もし本当なら，おめでとう」っていうハガキ，とても多かったです。そしてダウンタウンのテレビに出た小林くんはキョーレツなこと（KISS）をしたそうですが……（笑）

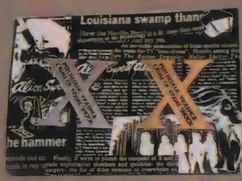
5名



ハミングス

⑧ステッカー（提供　ソニーレコード）大阪弁で見かけよりずーっとユカイなひとたちだ

2名

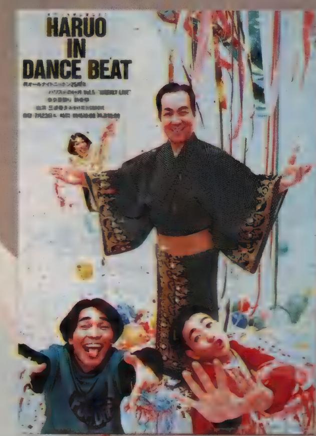


X

⑨バッチ金&銀各１名づつ（提供　編集部）少しでごめん。編集部に隠れてたものです

33名





4名



JUSTY NASTY

㉒ライター（提供　ポリスター）ジャスティナスティ，略してジャスナス!!（しーん）



6名

10名



ARAKAWA RAP BROTHERS

⑩ステッカー（提供　ソニーレコード）EBIくんの名前のもとのARBとはチト違う。



ブランキージェットシティ

㉓ステッカー（提供　東京ピストル）現在レコーディング中。ライブアルバム素晴らしい。

3名



吉川晃司

⑰ポスター（タテ）３名⑱ポスター（ヨコ）３名（提供　東芝EMI）おフランスでの写真集，見てくれたでしょうか。ちょっとエッチだけどムードばっちりだよねえ。

12名





電気GROOVE

①ポスター10名②エプロン５名（提供　キューンソニー）③ポラ18名（提供　編集部）こーんなフシギな10ページ特集だったので，新旧をとりまぜて33名にプレゼント。次号でも（おそらく）KARATEKAグッズがプレゼント出来ることでしょう！　ねっ，キューンソニーさん。みんなもキューンさんに期待しよう！　そしたら『KARATEKA』の売上も一気にあがるかも？

20名





THE BOOM

⑲パンフレット（提供　ムーブメント）夏祭りのです。もうここでしか手に入らないよっ

5名



3名



ZARD

⑳テレカ（提供　ポリドール）顔がかわいいくてさらに才能もある。キーッうらやましい

M―AGE

⑪ポスター５名（提供　ビクター）⑫ポラ４名⑬サイン入り撮影小物３名（シャボン玉を作るやつでかわいいクマの形をしてます。ピンク，黄色，青でサイン入りです。）



ソフトバレエ

⑥ポラ（提供　編集部）レコード会社が移りましたのでよろしく。

2名



2名

L↔R

④Ｔシャツ（提供　ポリスター）読み方はくれぐれもエルアールだよ。良質なポップ。



LUNA SEA

㉔パンフ10名㉕ステッカー10名（提供　SLAVE）人気急上昇!!　新聞で「原宿で黒づくめの服を着た少女たちはLUNA SEAのファンなのだと言う」って書いてあった。びっくり。アサヒ新聞よ。



5名

シュガービート

㉑テレカ（提供　ソニーレコード）双子なんだけど，そっくりでもないか。かわいいよね。



10名

楠瀬誠志郎

⑭ミニブック（提供　ソニーレコード）『素晴らしい恋をしよう』が出ました。



10名

真心ブラザーズ&ロッテンハッツ

⑦うちわ（提供　キューンソニー）裏表にプリントしてあるので，一石二鳥（違うか？）



5名

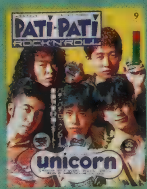
FLYNG KIDS

⑤Ｔシャツ（提供　ビクタースピードスター）「ワザワザイチャイチャ」がお気に入り♡

Back Number



1992.10
布袋寅泰／BY-SEXUAL／SHAKE 他



1992.09
UNICORN／BUCK-TICK／BY-SEXUAV／J(S)W 他



1992.08
BOOWY／J(S)W／X／BUCK-TICK／UNICORN 他



1992.07
ZIGGY／寺田 VS 宮B／ラウドネス／ANGIE 他



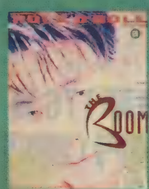
1992.06
LA-PPISCH／HEAVAN／BUCK-TICK／J(S)W 他



1992.05
BUCA-TICK／ANGIE／the PILLOWS 他



1992.04
X 特集号　ごめんなさい売りきれました



1992.03
THE BOOM／Dance 2 Noise／16TONS 他

バックナンバー購入方法

早いものでもう10月。今年はあと 3 か月しかないんだね。ビックリです。まだまだ新入社員気分でいる私ですが24歳…（ちょっとアセる）私は早生まれだけど友だちは25歳だもんね。にじゅうご…時のたつのは早いものだ。今のうちに出来ることは早くやっとこうね。本も若いうちにたくさん読むのだよ。私が最近読んだ本はサマセット・モームの「女ごころ」。面白かったよ。文庫本で安いしね。パチロクバックナンバー購入方法は書店で。「ソニーマガジンズのパチパチ・ロックンロールの○月号を注文します」と言ってね。ハンサムな店員さんと仲良くなれるチャンスかも。

9 月号当選者発表

①佐野元春・ポスター／北海道　樋口恵理／他 4 名
② PJ・T シャツ／熊本県　安達純子／他 4 名
③ ZIGGY・ポスター／滋賀県　井上麻実／他 4 名
④ ZIGGY・布バック／埼玉県　市川紀子／他 3 名
⑤スチャダラパー・T シャツ／大阪府　牧内佳子／他 9 名
⑥ナガランド・テレカ／高知県　黒川昌子／他 4 名
⑦ The wells・ポラ／新潟県　藤田清美／他 5 名
⑧ J-WALK・ダンガリーシャツ／群馬県　松島サチコ／他 2 名
⑨ LÄ-PPISCH・ポラ／北海道　佐々木智恵／他 5 名
⑩東京パノラママンボボーイズ・アナログ LP レコード／埼玉県　小倉朋子／石川県　井東由貴
⑪東京パノラママンボボーイズ・ポラ／山口県　樹みさ江
⑫MR.CHILDREN・映画¥券／横浜市　山本朋美／他 3 名
⑬BY-SEXUAL・ポラ／港区　古園佳江／岡山県　西山雅美／栃木県　渡辺香代
⑭電気 GROOVE・ポスター／静岡県　小玉夏代／他 9 名
⑮電気 GROOVE・ポラ／足立区　北田小夜／静岡県　千葉智美
⑯ARAKAWA RAP BROTERS・チョーカー／小平市　三田井泉／千葉県　大谷めぐみ／群馬県　松岡久美子／他13名
⑰モダンチョキチョキズ・小冊子／奈良県　石田優子／他 3 名
⑱DOG FIGHT・T シャツ／福岡県　久保恵子
⑲ときめきマリン・テレカ／鹿児島県　冨川由美／他 4 名
⑳ROCKS・クリップケース／大阪府　国米真理／他 4 名
㉑GAO・T シャツ／鹿児島県　小牧勇一郎／他 2 名
㉒UNICORN・ポラ／世田谷区　田中幸子／新潟県　宮脇紀子／豊中市　竹内亜矢子／福岡県　梅崎圭子／広島市　赤尾益美／山形県　八鍬清香／本村美奈子／茨城県　川原有沙
㉓杏里・テレカ／兵庫県　大歳奈美／杉並区　小林友香／他 1 名
㉔FM802・テレカ／京都府　竹島優子／他 2 名
㉕男闘呼組・T シャツ／横浜市　渡辺奈緒子／他 2 名
㉖男闘呼組・CD ケース／立川市　遠藤智美／他 2 名
㉗ELEGANT PUNK・パンフ／栃木県　荒田友美／他 4 名
㉘立川亮子・テレカ／品川区　進藤玲子／他 2 名
㉙RAM JAM WORLD・ステッカー／愛知県　山口恵里子／静岡県　北川暁子／京都府　森田あゆ子／他 2 名
㉚RAM JAM WORLD・T シャツ／愛知県　中根睦子／兵庫県　藤田称生／杉並区　中山千世子
㉛すかんち・うちわ／大阪府　西川三枝子／鹿児島県　小牧奈美／愛知県　市瀬圭子／茨城県　福原浩幸／川崎市　林恵美／他 5 名
㉜THE BARRETT・ステッカー／札幌市　泉加奈／他10名
㉝高中正義・水時計／世田谷区　久保田智香／他 9 名
㉞サザンオールスターズ・定規&キーホルダー／大阪府　石井直子／和歌山県　東周治／静岡県　望月美枝／他 2 名
㉟LADIES ROOM・ツアーパンフ／葛飾区　土井弓子／新潟県　山田康子
㊱谷啓・T シャツ／品川区　神山千代／他 2 名
㊲ROTTEN HATS・ドラムの皮／君津市　村上由香里／大阪府　辻本多恵子
㊳DATE OF BIRTH・T シャツ／半田市　佐々木誉／和歌山県　森下理恵／新宿区　足立恵子／中野区　止田里奈／他 1 名
㊴SME オーディション '93・ペンセット／国立市　林一恵／他 4 名
㊵JUN SKY WALKER (S)・ポラ／大阪府　渡辺美紀／広島市　高津麻紀／大阪府　岩田孝美／山梨県　秋山正美／滋賀県　畑美里
㊶大黒摩季・ストップウォッチ／板橋区　猪本英里／千葉県　柴田奈緒／岡山県　清水恵美
㊷白井良明・T シャツ／千葉県　林千嘉子
㊸PEARL ポスター／埼玉県　石橋加代／他 9 名
㊹久保田利伸・ポスター／千葉県　岡本育子／他 3 名
㊺JT スーパーサウンド '92・T シャツ&リュック／神奈川県　大瀧陽子／立川市　佐藤三千代／熊本県　福山理香他 7 名

5 名



セルフィッシュ

㉜ボールペン（提供　ポニーキャニオン）なんとトウモロコシで出来てるんだってよ

6 名



3 名



SION

㉝テレカ（提供　テイチク）デザインが渋い!! シオンだもんなー。さすがだなー。

5 名





篠原利佳

㉞シューシャイン（提供　テイチク）お便利な靴磨きだよん。オシャレな人は忘れずに！

BY-SEXUAL

㉖ポスター 3 名（提供　ポニーキャニオン）
㉗ポラ 3 名（提供　編集部）この人達もお美しいよねえ。男なのに。あーうらやましいったらありゃしないいっっ。エステに通ったりしてるのかなあ。

1 名



ブレインドライヴ

㉟サイン入りメンバー私物（提供　メンバー）や，撮影の時もらったんだ。人気上昇中。

1 名



オルケスタ・デ・ラ・ルス

㉘キャップ（提供　BMG ビクター）おしゃれなサルサバンド。ちょっぴりアダルトよ。

5 名



シャ乱 Q

㊱ポスター 3 名（提供　アップフロント）㊲ビーチマット 2 名（提供　BMG ビクター）このマットはレジャーマットとしても使えます。行楽のお供に!!

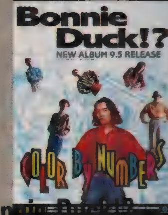
3 名



DOG FIGHT

㉙ポスター（提供　ポニーキャニオン）シングルのポスター。渋くてカッコイー。

5 名



Bonnie Duck!?

㉚プレスキッド（提供　トイズファクトリー）開くと文字や写真がもりだくさんなのだ

2 名



林アキオ

㊳ポラ（提供　編集部）ちょっと不思議な雰囲気持っている人です。

2 名



東京パノラマンボボーイズ

㉛ポラ（提供　編集部）サイン入りのほうは実はテイチクの社長さん（本物）

編集後記

●「ずっとあなたが好きだった」の佐野史郎はイイっすよね。あの変態ブリは類を見ないっすよ。私の友人ですごい佐野史郎ズキな奴がいて，そいつは「佐野史郎にならら切りきざまれてイイっ」と言っとった。……ここにも居た，変態 1 人。ウッキャ――。（チバ）

●暑中お見舞をネタに久々に手紙を書いた。すると何日か後に返事が届き始めた。やはり手紙はいーもんだ。ジョーチョってもんがある。そんでもってハッキリと言葉にしない愛情とそれぞれの悲しみがあるのだ。文学的。それは季節が秋だから（リバ）

●最近，GB の古海（♀）と密に遊んでる。ローラーゲームを観に行ったり，お互いの家訪問したり，カラオケ行ったり。冷静に考えたら，6 週間連続で週末を共に過ごしていた。このままいったら，ゴールイン近いわ♡　女同志やろ！← 一人ボケ・ツッコミ ㊕

●高校（佐賀）の同級生が神戸に転勤になった。私は神戸は憧れの街なので「やー嬉しいわ」と言ったら彼女は怒って「アンタだけは泊まらせん」と言い放った。だってさ，オシャレなとこじゃんね。でも東京より家賃高いってさー。カワイソ。でも泊めて。（ヒラハラ）

●9 月と言えば早パチロクに移って丸 1 年。そしてお誕生日月でもあるわけよ。去年の誕生日はパチパチ村田，GB 飯塚とゲロを吐き，今年はいったい誰と……▶夏休み，帰省（岐阜へ）したんはええんやけど，家族にとうとう記憶ぶっちぎれを見られた。嗚呼（みほ）

●キャンプに行ったよラッタラララッタッター♪　セミは鳴くは子供は泳ぐは高校生は酒飲んでゲロ吐くはの大変な騒ぎであるよサマータイム。それにしても自然は良い良い気分が良いぞ。東京はホントごみごみしていやねー♪　帰りにフジモトさん犬のウンコ踏んだ。㊑

●あれだけ暑かった夏も，もうすぐ終わり。皆さんはこの夏，どんな思い出を作りましたか!?「ただなんとなくボーッと…」という人も大丈夫。なんたってこれから秋がやって来ます。（笑）一生に一度しかない“92年の秋”です。タップリと愉しんでくださいね。㊖

●秋です。巷では「秋味」というビールも出ているようで，電車の中吊り広告が気になって仕方ありません。が，この本が出ているころにはいいかげん残暑もおさまっていることを期待します。パチロクデスクの秋山さん（24歳）が結婚されました。おめでとう（Ago）

Rock'n'Roll News A Go Go

秋や，9月や，せやけどまだ暑い。食欲の秋や，せやけど夏から食欲はあった。
読者の秋や，スポーツの秋や，そんなヒマないで！　あーあ，仕事でもしょっと。
何かおもろいことないかなぁ……。

"体感センサーが創り出すアメニティリスニング"



ケンウッドから電源オンからプレイまでノータッチで行なえる体感センサーを搭載したコンポが新登場。しかもAMステレオ放送にも対応したチューナーになっている優れモノ〝もっと〟かわいい、〝もっと〟簡単、〝もっと〟音がいいをコンセプトにしたMS-5は欲張りなトマト世代の女のコのハートをつかむはず。

●ケンウッド　マイクロコンポ　WOODS TOCK MS-5 ¥65、000（税別）

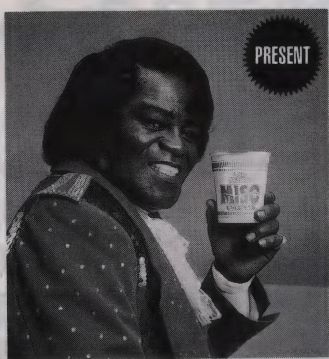
新しいタイプのウィンターシューズが登場！



アシックスより〝ホワイトパッケージ〟と総称されるウィンターシューズが新登場。ギア的要素の強いもの（レースフリークス）、スノーボードを意識した（スノーハンター）、ファッション性を重視した（ネーベティブル）と大きくは3つのタイプがありグリップ性や雪除け機能に富んだ撥水加工がしっかりとほどこされているのでご安心を。

●アシックス　ウィンターシューズ　ネーベティブル（3タイプ）¥12、800、¥14、000、¥15、000

カップヌードルMISOのおいしさをお試しあれ



ジェイムス・ブラウンのCMでおなじみのカップヌードルMISO味。彼の大ヒット曲〝セックスマシーン〟の替え歌を〝ミソンパミソミソ　カニッパ　カニカニ〟と彼が歌っているのが印象的なのだが、このカップヌードルMISO20個をパチロク読者3名さまにプレゼント。プレゼント希望者は下記までお名前、住所、年齢、職業を書いて送ってね。商品の発送をもって発表とさせてもらいますのでご了承を。

豊富な機能と使いやすさの留守番コードレス電話



ポケット型コードレスホンにはどうしても使いにくいのではないかとか電波が届きにくいのではないかという不安がつきものだったが、IS-W708は軽量・小型化を実現する一方で商品質・多機能性を重視し、使いやすさを追求。そしてテレビのリモコン機能の拡大と振動着信機能付きだからうれしい。

●ケンウッド　小電力タイプ留守番機能付きコードレスホン　IS-W708　¥67、000（税別）増設子機　IB-K708　¥35、000（税別）

CMJK Presents スペース・オデッセイ'92

コロンブスのアメリカ大陸発見から500年そして4万6000kmのスピードで旅をしながら宇宙観測を続けているパイオニア10号の打ち上げによる「パイオニア計画」からちょうど20年迎えた今年は国際宇宙年に制定された。それを記念した〝スペース・オデッセイ'92〟というイベントをCutemenのCMJKが中心人物となって開催される。

●インフォメーション
10月10日（土）
クラブチッタ川崎
午前0時スタート
¥4、000

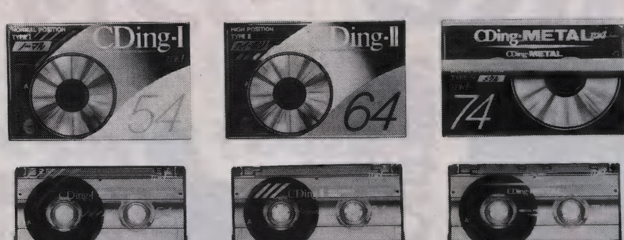
●出演バンド
Cutemen
ハバナエキゾチカ
POTSON GIRLFRIEND
SIDE DISH
サエキけんぞう（予定）
RAMJAM WORLD（予定）
GONTITI（予定）

●問い合わせ先　クラブタッチ川崎
044-244-7888

日本はテクノロジーの国であるのにも関わらず日本人の宇宙開発の立ち遅れと、日本人ミュージシャンがワイルドワイドに通用する作品を作れないという問題には共通項があると主張するCMJKはこのイベントを政治的な臭いを漂わせずポジティブにロマンチックに日本の宇宙開発についてアピールできれば良いと考えているそう。

興味のある方はぜひ足を運んでみて。

80分以上の長時間タイプをラインアップに加えたCD対応のオーディオカセット



75分以上のCDに対応するために80分以上のカセットをラインアップに追加されたCDingまずCDingIはCDの澄み切った高音を、CDingIIではCDの迫力ある重低音を、CDing METALではCDのパワフルなサウンドを圧倒的パワーでキャッチ。一段と開けやすくなったパッケージフィルムに透明ハーフの高精度HPメカニズムを採用。

●TDK　オーディオカセット　ニューCDingI、II、CDing METAL

'92年度NHKヤングバトルのお知らせ

今まで、えび、シャ乱Q、GAO、Rokka Baby's、ホブルディーズとメジャー進出組を輩出してきたNHKヤングバトルの決勝大会が11月8日にNHKホールにて行なわれる。

決勝大会への出場権を獲得できるのは、各ブロックで優勝した1組だけ。とはいえ全ブロック大会終了後に各ブロック大会で準優勝を獲得したバンドを今度はビデオで集約し、ビデオ審査を行い、多大な推薦を受けた3組程度のバンドが敗者復活ということで決勝大会へと進出できる。

応募総数は確かにバンド・ブームの頃より減っているらしいが、流行でバンドをやっている人が減り、本当に音楽が好きでやっている個性的なバンドが今年は多いという。

各ブロックの代表としては、

東京ブロック　P・O・P
中国ブロック　ペットシーン
北海道ブロック　SUZZY
東北・南ブロック　BRAW-BLO
関東甲信越・北ブロック　Green
関西・西ブロック　THE PETE BEST
関東・西ブロック　BLUE BOYS
東海ブロック　S・H・P

そして、この日のゲスト・バンドはLINDBERG。

入場方法は無料だが、整理券が必要なのでNHKのヤングバトル事務局03-3481-0172まで問い合わせを。

尚、この模様は当日、BS2で生放送され、後日、再放送の予定もあり。また毎週1～3土曜日の18時よりBS2で〝ヤングバトル〟関連の番組である〝がむしゃらMAP〟も放送されている。

プレゼントの応募先

〒102
東京都千代田区五番町6-2　ソニーマガジンズ
パチパチ・ロックンロール編集部内〝パブリ係〟まで
今すぐ急いでポストに直行だー！

MONTHLY
PATi-PATi
おもしろ大気ヤング・ミュージック・マガジン パチ・パチ

●表紙・巻頭20ページ特集&ジャンボ・ポスター ソロ・アルバム発表決定!!

小室哲哉(from TMN)



●特集
B'Z/UNICORN
木根尚登/福山雅治
米米 CLUB/氷室京介
JUN SKY WALKER(S)
リンドバーグ/BUCK-TICK
プリンセス²/BAKU
電気グルーヴ/THE BOOM
BY-SEXUAL/大江千里
ロッテンハッツ/吉川晃司
チェッカーズ/CHARA
ミスターチルドレン etc

A4ワイド版・232ページ・ポスター付・600円(税込)

パチパチ 11月号

10月9日(金)発売

パチパチ読本。
dokuhon

No.9

BAKU解散! 最後の総力特集60ページ!!



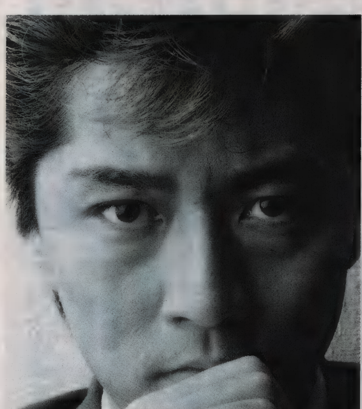
●特集
電気 GROOVE/浅倉大介/中村あゆみ/清水ミチコ VS 久本雅美/杏子/米米 CLUB/CHARA ▷その他にも小室みつ子&上条淳士の『路上のカイン』最終回/藤沢映子『KID'S STORIES』/などなど。秋の夜にゼヒ!!

B5版・320ページ・680円(税込)

パチパチ読本 NO.9

9月30日(水)発売

米米CLUB



「Nマガジン」

ついにその全貌を明かす, 噂のビジュアル・エンタテインメントマガジン第2弾がいよいよ発売! "E"でも人気の幻想紀行シリーズ, お待ちかねのジェームス小野田の顔面アートギャラリー, さらに日本の歌謡界の重鎮S・Kとあの『素顔のままで』の名ディレクターが登場。イラストレーションやエッセイも強力!

A4判変型・156ページ・2000円(税込)

9月26日発売

BAKU

最後の単行本
3冊セット・ケース入り



FiNAL BOX

● BOOK1 初登場からこれまでのGB掲載記事を完全再録。未公開写真中心に, さらにEASTでの最後の3日間密着取材● BOOK2 パチ▶パチ誌上でデビュー以来BAKUを追ってきた伊藤亜希によるストーリー● BOOK3 64ページオールカラー写真集

全500ページ・3800円(税込)

10月下旬発売

リンドバーグ

ストーリー単行本



アイドル「渡瀬麻紀」は, アイドルであることに疑問を抱き, バンド・リンドバーグを結成する。しかし, その道は決して平坦なものではなかった……。パチ▶パチ・パチパチ読本で連載中のリンドバーグ・ストーリーが, 熱烈なリクエストに応えて単行本になります。現在再取材加筆中。

B5版・272ページ・1500円(税込)

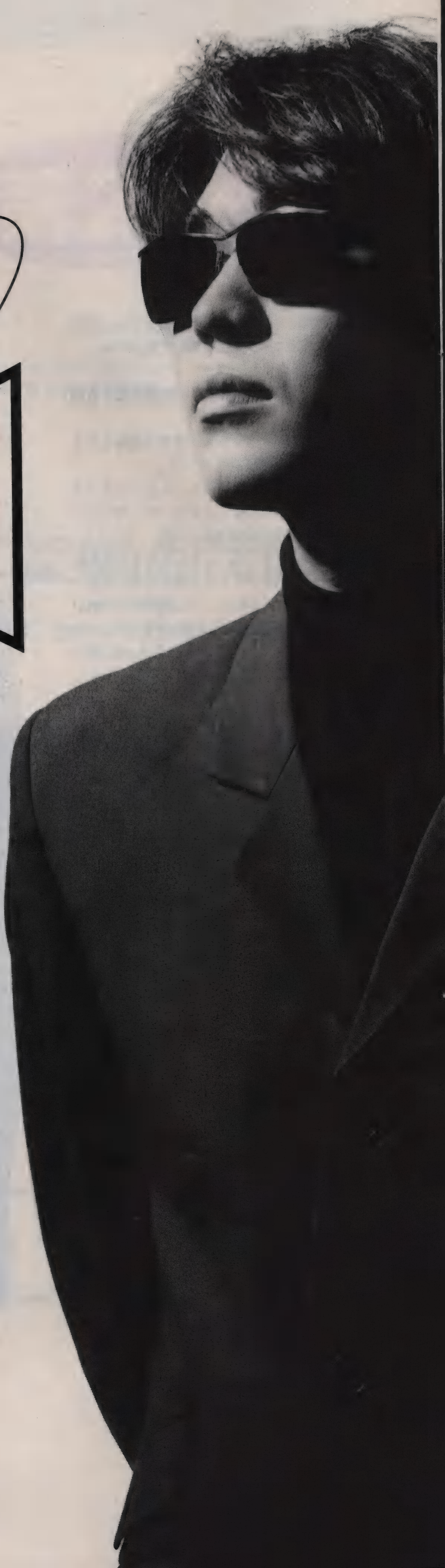
予約受付中

12月8日発売


PATi▸PATi•PRESENTS ーパチ▸パチ特別編集
電グル・マガジン
DENKI GROOVE MAGAZINE
“KARATEKA” 緊急発売決定!!
●定価 980 円
●パチ▸パチサイズ●平とじ 100 ページ
パチ▸パチが電グルの毒に犯された!
待ってました!! まるごと一冊電気 GROOVE マガジン!! NEW アルバム「KARATEKA」と同日発売で、タイトルも“KARATEKA”と同じなんだよ。内容をほんのチョッピリだけ教えてあげます。電気 GROOVE 3人の赤裸々な告白、大バカ者どもの暴走の軌跡、歴代電気 GROOVE マネージャーの語る秘話、超ポップでキュートなビジュアル、各界有名著名人のコメント集 etc. 今すぐ本屋さんへ GO!
アルバム“KARATEKA”と同時発売!!
10月21日発売予定
今すぐ注文しなさい!!
“まるごと1冊電グルだらけ”



KARATEKA DENKI GROOVE WORLD



〈カッコイイことはなんてカッコ悪いんだろう〉と昔，ジャックスというGSの人は言ったが，〈カッコ悪いことはなんてカッコイイんだろう〉とは誰も言わないところをみると逆もまた真なりではないのか／電気GROOVEという名前が好きだ／オシャレもイイけど喰えないオシャレは渋谷で捨てろ／いかんせん電気は電気，パーフリのはずもなく'92年もそろそろ秋じゃん／天高く馬肥ゆる〈人事をつくさず天命を待つ〉この秋，電気GROOVEにRAVE　OFF！／天下分け目の九段下，武道館まであと少し／だからって，電気は電気，BAKUじゃないのよ，夢は食っても

って」

㊟　実はストーン・ローゼズの大ファンである卓球のリスペクト＆了解してねがミソ。

5．ドカベン

〈作詞　ピエール瀧／作曲　石野卓球＋良徳砂原〉

瀧「“ドカベン”はデッカイ弁当の意味もあるからチェック問題OKだった」

卓球「コレもすごく瀧らしいよな。こういうヤツがいて，こんなことがあって，だからどうしろとは言ってないところが」

瀧「他人にどうしろ，こうしろなんて言えないじゃないですか？　オレはそんなにエライのかって思いますから。でも熱帯魚の水槽がカラになってる音楽ライターがいるんですよ，ノダ·ツトムっていうんですけどね(笑)」

卓球「あながち作り話でもないからな。オレらも一歩道を踏みはずしたら，今，クリエイターはやってないな（笑)」

まりん「コレ，最初はエレ・ポップだったんです。途中でテンポが倍転になる」

㊟　〈がんばれドカベン〉のラストがナミダ。

6．Hi-Score

（作詞　ピエール瀧／作曲　石野卓球）

卓球「いるよなー，こういうヤツ。オレ，好きなのが〈ゴリラの顔して追い掛けて　いやがる顔にむりやりヒゲを書く〉のところ。だって“SMスピリッツ”の編集者をして，ピエール瀧は日本のバロウズだって（笑)」

瀧「SM雑誌の編集者なんですけどね」

卓球「かなり面白い文体を確立してるよ」

瀧「〈大人のくせして〉僕もゲーセン行ったりしますけどね。でも，自分のことはイイんです。自分はさておいて，世間を見る」

卓球「自分だけは　人間だって思ってるもんでしょ，誰でも」

㊟　バロウズはアメリカのヘンな作家です。



WHAT IS KARATEKA?

1．スネークフィンガー
（作詞／作曲　石野卓球）

卓球「直球ですね。」
まりん「ポップッ！」
瀧「バカの人でもわかる」
卓球「初心に戻ってサンプリング・マシーンを買ったときの気持ちで作りました。だんだんネタも増えて使い方がうまくなるとフォーマットにハマっちゃうでしょ。昔の電気のCDを聴き直したら，こういうのもやってたよなと思って，歌詞は別にブーヤンを批判したってわけじゃありませんッ！」
瀧「身のほどをわきまえろってヤツですね」
卓球「でも，そうじゃん？　『ケダモノの嵐』を狙ってみました（笑）」
㊟　タイトルはレジデンツで有名なスネークフィンガーなるギタリストに由来する。

2．Twist of the world
〈作詞／作曲　石野卓球〉

卓球「“ワールド・オブ・ツイスト”っていうバンドからそのまんまタイトルを頂いたんだけど，最近解散したらしい。別にイミないです。響き優先」
まりん「音はポップ・ハウスですね」
卓球「バカ明るいハウスって好きで。これも歌詞はどうでもいいですね。セクハラですかね？『TVタックル』の女の先生に怒られそうだけど」
瀧「歌詞に意味を求めちゃダメです」
卓球「歌詞は聴かなくてもイイくらいです。だから，気にしちゃダメだぞ！（笑）」
㊟　ブーヤンにつづいて，糾弾されるのはアナタかもしれない？　真実は「愛は勝つわきゃない」？　男はみな人でなし？

3．ケトルマン
（作詞　ピエール瀧／作曲　石野卓球＋良徳砂原）

卓球「コレはむしろハゲを励ます歌だろ？」
瀧「励ましてるわけでもないけどさ」
卓球「でも，オレ，コレ好き。歌詞も音も電気GROOVEを象徴してると思うよ。去年“パワステ”で“瀧の不思議ナイト”ってやったでしょ？　あのときの“笠置シズ子のジャンケン・マンボ”の評判が良くてね。ある種，それに近いスタンスの曲かな？」
瀧「ハゲ→ヤカン頭→ケトルマン。劇的にタイトルが決まったな」
㊟　ライブニューとトゥゲザーしなくたって〈ぴかっと光ればヒーローじゃん〉と，頭髪に悩む男性に一筋の光を与えるピエール瀧らしい“いいじゃん”節。

4．人事をつくさず天命を待つ
〈作詞／作曲　石野卓球〉

卓球「人生の応援歌です」
瀧「教訓が含まれてるしね」
卓球「ヒントになったのがWMの『死んでるみたいに生きたくない』という曲のタイトルです。曲を聴いたことないけど，タイトルだけでピピンときまして。特に誰というわけじゃなくて，若者に勇気やら希望を与えるジャパニーズ・ロッカーってヤだったから。差別はイケナイかもしれないけど，それを許容するくらいの心のゆとりって大事だと思うしね。だって，人を励ますために生きてるわけじゃないでしょう？　でも歌詞の意味ってギターの音の意味みたいなもんだから，僕にと

『KARATEKA』って一体どーいうモノ？　メンバー3人による曲解説のまずは前半戦。まだ聴くことは出来ないんだけれど，聴きたくてうずうずしてるアナタ。これを読んでぐんぐん妄想，もとい，想像を広げてくださいな。なにしろ電気だからねー。あんな曲やこんな曲や，うっわー，なんだコリャ!?　ってな曲まで。アルバムを聴く前に想像して楽しみ，聴きながら解説とつき合わせて楽しむ。1粒で2度おいしいゾ!!　（つづく）

MARIN

今まで作れなかったポップなセンを狙ってたので，今回は勉強させてもらいました。卓球氏の片腕になれるだけでも……(笑)

――レコーディング，どうでしたか？

「前回よりはやること多かったんじゃないかな，『UFO』のときはまだ入って間もなかったんでほとんど見学のようなもんでしたから。細かいとこで口出しした程度で」

――じゃ，本格的なレコーディング参加はこれが初めてに等しいのか。

「実はそうなんですよ。でも，こう見る限りではそんなにコイツ何にもやってないぞって感じですよね（笑）」

――イヤ，でも共作含めて4曲も作曲してるじゃないですか。電気も一応"選曲会議"っぽいことってするの？

「一応やりますよ，それに近いことは，僕は何曲書いたんだっけな？　けっこう書いたことは書いたんだけど，自分の狙ったところにいかないんですよ」

――狙ってたセンというと？

「ポップなセンを自分では意識して狙ってました。でも，石野氏は意識せずにポップになったって。僕はわりと違って，ポップなものが今まで作れないハズだったんですよ。デス・テクノでもポップにしようがあるんでしょうけど，メロディとか作るタイプじゃないし，作ったことってないんですよ。テクノ的なピコピコいってるものなら作れたんですけど，今回はそれは避けて別なものを吸収しようと思って。だから，わりと勉強させてもらったって感じですかね」

――勉強？　プロなのに（笑）

「ええ，いつもそうですよ，僕は。『UFO』のときはレコーディングに行ってメンバーと顔馴じみになる程度でいいからって（笑）　だから『コズミック・サーフィン』のシングル・バージョンがレコーディングとしては最初なんですよね」

――今回もレコーディング合宿をしたとか？

「ウチら，作業するときは没頭した方がいいみたい。逆に周りに誘惑があると仕事になんないから。成果はあったのかな？　『KARATEKA』も『無間地獄』も僕が作った曲とは全然変わっちゃいましたし」

――アルバム・タイトルになってる『KARATEKA』ってどういう意味なんですか？

「ウーン，何でもよかったんですよ（笑）　元は『ガンダム』だったんだけど，それは登録商標の問題で使えないってきいて。でも，『ドカベン』は大丈夫みたいですね」

――熊倉一雄さんのナレーションのアイデアはどこから？

「それは石野氏のアイデアで。僕は曲自体はラップにしようと思って作ったんですけど，これはラップにする必要はないと判断されましてインストになったんです。これまでの2枚のアルバムにインストって入ってましたからね。ナレーションに声優さんを使おうっていうアイデアは前からあったんですけどね」

――"ポップに"というのは常にテーマとして頭の中にあったんですか？

「『KARATEKA』に関してはなかった。完全に趣味で作りました。作ってる際中も電気GROOVEのこと忘れて，自分の中に完全に入り込んでましたから。で，コレ，ちょっと電気でやる曲じゃないなって。自分でも一応電気向きかどうかっていう基準があるもんで……」

――その"電気GROOVEらしさ"ってこの1年でわかってきた？

「ウン，ある程度は。でも，卓球氏はかなりのスピードで進んでるんで，彼に追いついたと思ったら彼は先に居るんですよ。実験を行いつつなおかつポップなものを作ってますからね，彼は。感心します，毎回。僕は全然ついてってませんね。でも，彼の片腕になれるだけでも……（笑）」

――幸せデスって？　おそばにいるだけで本望？（笑）　愛人じゃないんだから……。

「でもね，曲作るのってあんま得意じゃないんですよ。アレンジするのは好きなんですけどね。ライヴのバック・トラックは殆んどやりましたけどね」

――でも，電気のような音楽形態では音作りが限りなく曲作りに近いともいえるでしょ？

「そうですね。アレンジが作曲の域まで達しちゃうことがありますからね。だから，卓球氏と瀧がネタフリをしてくれるとラクなんですよね。そこからアレンジを拡げていけばいいんですから。0（ゼロ）からっていうのはヘタクソですね。向いてないのかもしれない」

――自分がうたわないからってことない？

「それも多少はあるかな。自分でうたおうとも思わないし，多分うたわしてくれって言っても断わられますよ（笑）」

――でも，電気が目指しているであろう"ポップ"って御手本がない難しさってあるんじゃないですか？

「サンプリングのネタにしても何回か聴いてるうちに"アレ？　これ，どっかで聴いたことあんなあ？"っていうものが多いですからね。やっぱり一回しか聴けないものってつまんないじゃないですか？　聴いていくうちに型が変わっていくっていうか。右から左に流れる音楽もポップといえるのかもしれないけど，僕が提起しているポップは引っ掛かりのあるものなんで。それがサンプリングであったり，妙なアレンジや歌詞であったり……。完成度は高いと思いますよ。僕がいなかったらもっと高かったかも……（笑）」







――なんでそうも奥ゆかしいんですか？

「イヤー，立場をわきまえてますんで（笑）でもキャッチ・ボールで作品を完成していく面白さとか今回はあったんで良かったです。本当はね，もっと貢献しなきゃいけなかったんですけど，ちょっと甘かったですね。まだまだ勉強不足です，ハイ」

――"テクノ"っていう柱はますます強固になってきたのでは？

「前作と違って意識してなかったんですけど，これはもう血ですね，どうやら僕らにはテクノの血が流れてるみたいですよ。僕自身は排除したつもりでも，やっぱりそうはいかなかったですね」

――まりんが参加したこの1年で電気の状況ってずいぶん変わったでしょう？

「ウン。スピードは速いですよね。まだ1年ちょいでしょ。速いんだか何だか……。密度は濃いし，スピードは速いしで吸収するのが追いつかない。反省ばっかです，反省の毎日っスよ（笑）」

――音楽以外で消耗する部分が多いんじゃないだろうかとか？

「それはまあ分けて考えてますけどね。一時期は難しかったけど，完全に切り離せるわけでもないし，一緒にも考えられないし。まっ，"スーパージョッキー"の"熱湯コマーシャル"までやりましたからねー（笑）」

――3人で？

「イエ，僕一人で（笑）　熱湯につかったのは僕だけです。でもね，後でダチョウ倶楽部見て，僕ら勢いねえなあと思いました。まあ，あちらはプロですからしょうがないけど（笑）」

――どうしてそっちと比べてしまう？

「わかんないけど（笑）　でも，ミュージシャンとしては早く次のアルバム作りたくて」

――打ち込みやってると自分がループ化していきません？　打ち込む行為で自己完結しちゃうみたいな？

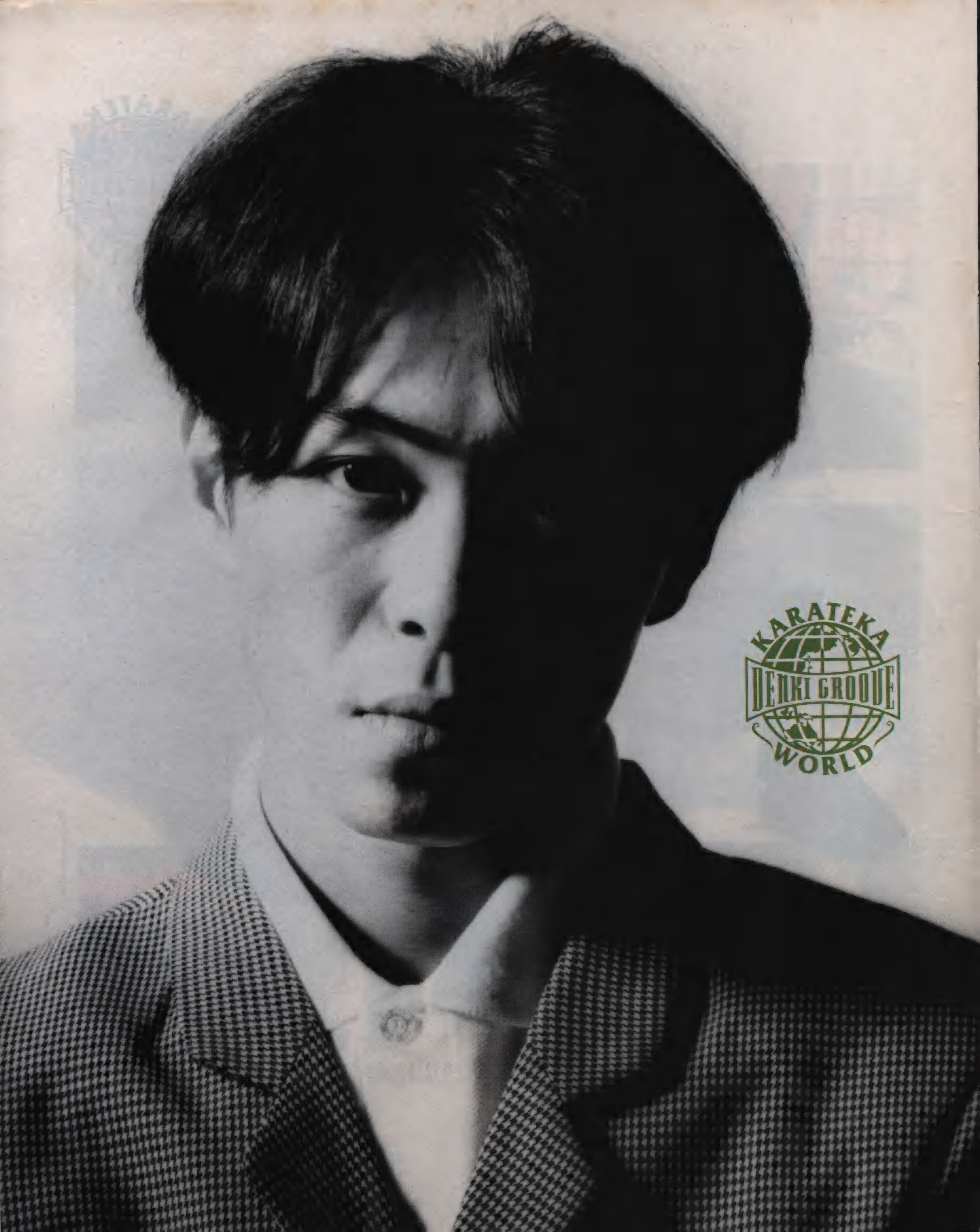
「それはあります。今もあるなあ。コックピット願望とかね。あれに囲まれてると落ち着くというか，ハマれるというか。そういうのも含めてテクノは男のものだっていう説もありますよね」

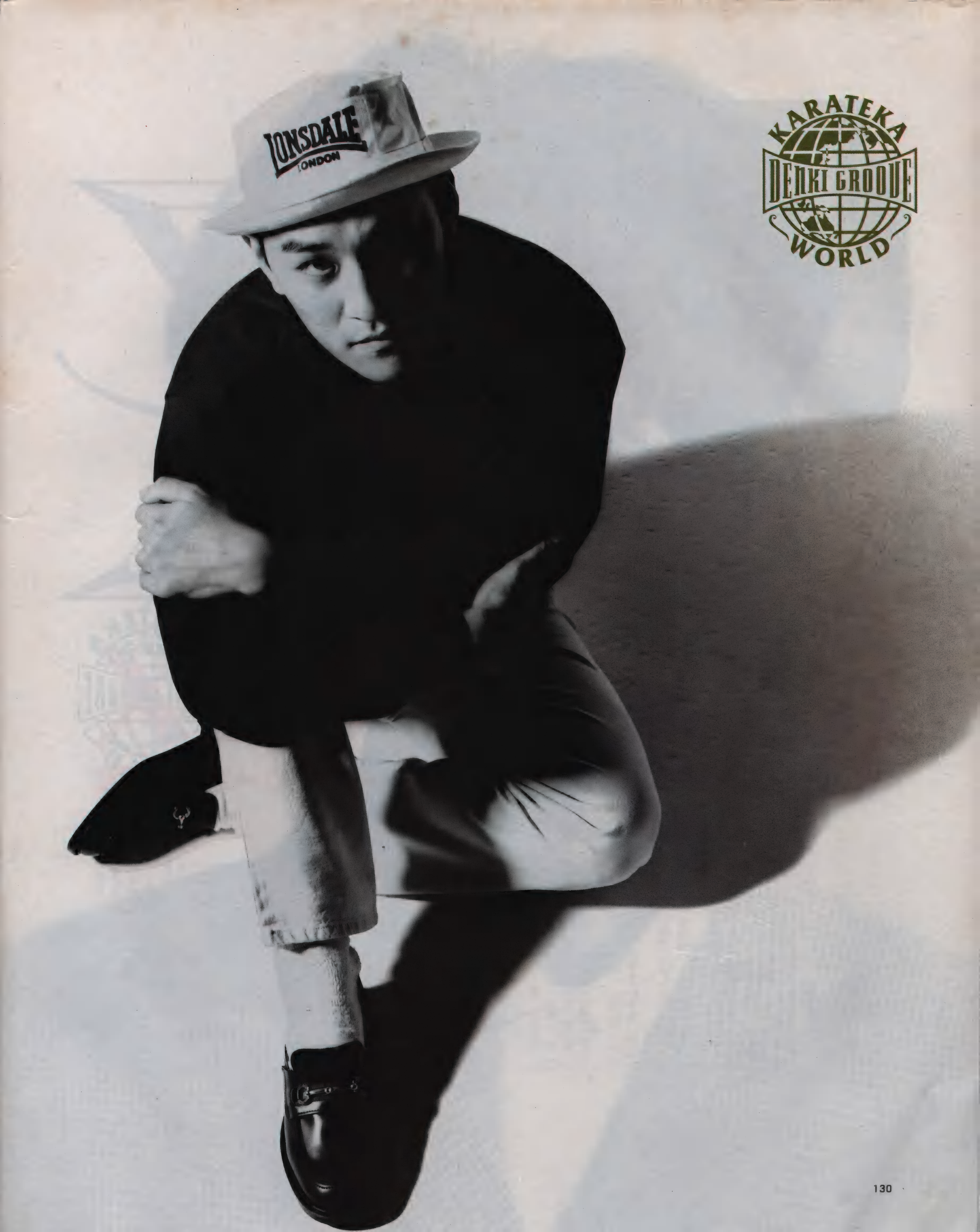
――テクノにハマれるって，もしかして男性的な特性なんじゃないかなあ。

「ウン。ウチら3人ともそうですからね。自分の打ち込みのスペースを"俺の基地"って言ってますからね。もしかしたら，ウチらって男っぽいのかなあ……」

――永遠のガキともいう（笑）

「たしかに（笑）」


KARATEKA
DENKI GROOVE
WORLD


LONSDALE
LONDON
KARATEKA
DENKI GROOVE
WORLD

『KARATEKA』は裏があるポップ。好きだけど嫌い，嫌いだけど気になる。でも好きも嫌いも聴いてくれないと判断できない。

PIERRE TAKI

——アルバムを作るにあたっての狙いはどこにあったんですか？

「こういう風にしようとか狙おうとかはそんなになかったと思いますよ，無意識のうちに出てきたのがこれだったってだけで」

——今回のアルバムで自分でも出色の出来だったと思う曲は？

「自分の書いた詞では『ザ・ケトルマン』が好きかな」

——ハゲてる人はこの曲で励まされるんでしょうかねぇ？

「さあ。まっ，ハゲの人に限らないんですけど，そんなこと気にしたってしょうがないじゃん，もっと大っぴらにいこうぜっていうポジティブな歌なんですけどね。応援もしないけど，小さくなる必要はないんじゃないかって。ヅラの人，いっぱいいるでしょ？　あんまり大きい声じゃ言えないけど（笑）　そんな判りやすいヅラ付けてるんだったらまだツルッパゲの方がましだろっていう」

——でも，それは瀧さんがハゲでないからってことない？

「イヤ，オレ，ハゲますよ，そのうち。でも，ハゲたらハゲでイイッス」

——大らかなんですねぇ。

「オレ，小さいこと気にしないんですよ。コンプレックス，ないことないですけど気にしたってねぇ。オッパイ小ちゃくたってね，イイじゃないですか？　僕，ハナっから悩むことってヘンだと思うんですよ」

——音楽に関して頭を悩ますとかもない？

「ウ〜ン，今回はね，言いたいことが何もなかったんですよ，詞で。で，どうしようかなあと思いましたけど，結局書いたら埋まっちゃった。こりゃ詞にするまでのことじゃないなとか」

——創作意欲が減退したんでしょうか？

「表現って何事も衝動じゃないですか？　衝動からスラスラ書けたのが『ザ・ケトルマン』で，他は考えて考えて」

——苦心したのは？

「『ドカベン』か『Hi-Score』かな。『ドカベン』も，だから何なんだって気もするんですけどね」

——うすら淋しい都会の一コマというかね。

「それは多少ありますね。でも，それを描こうとしたわけでもなくて。『B.B.E.』みたいに完成されたバカをやっちゃうと，あれを越えるのは容易じゃないですよ，やっぱり。『B.B.E.』を書いたときからわかってたんですよ，これ越えんの大変だなって。かといって同じフォーマットじゃダメだし」

——歌詞の素材になりそうな事柄を普段から書きとめておいたりしないんですか？

「しませんね。歌詞書くのはレコーディングの際中だから。プレッシャー，ありましたね。だから。辛いってわけでもないけど，どうせやるんなら前回より抜けたものをって考えるでしょ。自分が一番わかりますから」

——瀧さんの歌詞って，"床一枚下は地獄"じゃないけど，危うい世界に生きてる住人を俯瞰しているようなところがある。

「ありますかねぇ，やっぱねぇ，物事って全部裏があるじゃないですか。詞にネガティブな要素を詰め込まないのが，"お約束"ってところあるでしょ，日本の歌って。でも，物事のネガティブな側面を黙殺しちゃいけないんじゃないかという気もするしね」

——「HI-SCORE」の主人公もよく街のゲームセンターで見るヤツだねぇ。

「僕も徹夜してて眠れなくてゲーセンとかパチンコ行っちゃったりするんですよ。そうすると，朝の10時からいるんですよね。ちゃんとしたオヤジとか。コイツら，昼間っから何やってんだろうなあって，自分のこと棚に上げて。でも自分はコレコレの理由でここにいるってわかってるからイイんですよ」

——街のゲーセンって何か妖気迫るものがあったりするからなあ。でも，昼間っから大のオトナがゲーセンにいる風景ってひどく日本的な気がする。

「ウン，一種異様な雰囲気ありますね。たんまり金持ってる小学生とかさ，コイツらの親ってッ！　って，思うじゃないですか？」

——わりと常識人だよね，自分のこと棚に上げての"常識人"だけど（笑）

「そうですね。自分を棚に上げて（笑）」

——芸術家気質の変人でもないし。だからこういう常識的視点があるのかな？

「かもしんないですね。一歩引いたクールな視点っていうんですか？　といっても，結局自分もそこに居るわけだから，周りから見たら同じなんでしょうけど」

——『デマリンピック』は"街のウワサ"がテーマに……

「薄っぺらいです，コレは。内容的には，とか言っちゃうとダメなんで，コレは遊び感覚で。オレ，困っちゃうんです，今回，コメントできなくて。まあ，イイや」

——小市民的というか市井の人々と同じ高さの視野でものを言ってるという感じがする。

「ミュージシャンが普通の人と違う存在なんだってこと自体妄想でしょう。でも，それを突き崩すことが僕らの役目でもないし。僕ら，狙ってやってるんじゃないんですよ，確かに考えることも重要だけど，考えずにやることもそれ以上に重要だと思いますからね」

——深いなあ，その考え方。

「飽きたら，そのときはそのときです」

——電気の場合，加速度的なスピードでここまで進んできたと言えませんか？

「わかったからもういいやと思うか，わかったからじゃあそれを突き詰めようとか広げようと思うかはその人の性格によりますからね。今ですか？　今は，まだ広がるんじゃないかという気はしますけどね。見えませんけどね，先は。見えない方が面白いし」

——見えないから面白いというのが大きい？

「大きいでしょうね。見えちゃったら，だって，つまんないですよ」

——電気がどうなっていくかなんて誰も読めちゃいないのかな？（笑）　バラエティシャンとしての要望もあるみたいだけど？

「僕らね，要請があるなら断らずにやるんですよ。仕事は断らない主義。仕事を趣味として楽しんだ方がイイじゃないですか？　仕事は仕事として割り切って，その仕事をいかに楽しむかっていう考え方の方が絶対ポジティブですよね。でも，僕って，そんなにクールですかね？」

——さあ，どうだかねぇ。

「オレって，誰なんスかねぇ」

——そりゃ，ファンは"面白い怪人"だと思ってるんじゃないの？

「でしょうねぇ。オレね，絶対100は出さないんですよ。」

——まっとうなところがある種音楽をやる人間としてはコンプレックスでもあるって言ってましたもんね。

「ウン。それはありますね。でも，それが自分の色ですからね。石野みたいな"最初に爆発ありき"のタイプじゃないからうらやましいと思う半面，僕は僕ってところもあるし。そこは悩んでどうなるもんでもないスから」

——とはいうものの，やってることが……

「○チ○イですからね（笑）　本当は最も破綻してるヤツなのかもしれませんね」

——そんな気もしてきた。

「ヒツジの皮被ってんですよ」

——でも，「KARATEKA」はメジャーな発想で作られたアルバムでは？

「ウン。わかりやすいと思いますよ。ポップって言葉が合ってますね」

——けど，裏があるポップかな？

「好きだけど嫌い，嫌いだけど気になる……嫌いでもしょうがないでしょう，こんなことオマエらに言われたないわっていうのも筋が通ってますからね。でも，好きも嫌いも聴いてくれないと判断しようがないだろうから。たくさんの人に聴いてもらわないとね」

KARATEKA DENKI GROOVE WORLD

電気GROOVE，早くも３作目のアルバム「KARATEKA」である／ああ見え（せ）て，ただのマニアックな音楽好きなところが玉にキズだらけの電気ちゃんだが，いくら仕事とはいえ，広報活動にもホドがある働き者のくせに，こうしてアルバムが完成したことはリッパというより締切りの問題だったのだろうか／いよいよ電気がスパークしてきたとは世間の一部でよく囁やかれることであるにせよ，こんな頭の良いオバカが実在している事実に泣きたくなるのはなぜであるのか／嗚々，オセンチな秋だわ／ボロロン

PHOTOGRAPHY **Yousuke Komatsu** TEXT **Kyoko Sano**
HAIR & MAKEUP **Hiroto Narisawa** STYLING **Miwako Uyama**

START!

衣装協力 33 TEL 0422-48-7926・HEAVEN TEL03-5411-0988





GUITARHYTHM VIDEO PROPAGANDA Vol.3 放映開始

現在、レコードショップ店頭にて布袋寅泰オリジナル・インフォメーションビデオ第三弾を放映開始。ロンドンでのレコーディング風景や、6/28 (Sun) ロンドンのブリックストン・アカデミーでのANC80周年イベントでのLIVEの模様など未発表シーンの連続。また、ニュースペーパー“GUITARHYTHM PROPAGANDA PAPER Vol.3”も手に入る。

実施店名及びインフォメーション、布袋最新情報は下記番号まで。**03-3249-7210 (Access code 3555#)** この電話は通話料しかかかりません。

GUITARHYTHM TV ［布袋 寅泰スペシャルTV番組サーキット開始！］

秋田テレビAKT･･･9/28 (月) 25:25～／岩手放送IBC･･･予定／山形放送YBC･･･10/1(木) 24:55～／新潟NT21･･･9/29 (火) 24:30～／群馬テレビ (J-POP) 10/4(日) 22:00～／テレビ神奈川TVK･･･10/10 (土) 25:05～／石川テレビ (ビートゴーズオン)･･･10/5(月) 26:10～／長野・朝日放送・ABN･･･10/3 (土) 25:10～／西日本放送･･･10/5 (月) 25:10～／テレビ愛媛･･･9/30(水) 24:45～／福岡TVQ (MOON WALKERS TV) ･･･10/1(木) ･10/8 (木) 24:30～(予定) ／熊本KKT(サタデーMTV) ･･･10/3(土) 25:50～／長崎NIB (サウンドMTV)･･･10/19 (月) 25:10～／OBS大分放送 (パラパラ生5ミュージックジャック) ･･･10/8 (木) 17:10～／宮崎UMK (DOKITTO STATION)･･･10/3 (土) 予定18:30～／鹿児島・南日本放送･･･10/上旬予定／沖縄・琉球放送･･･9/末～10/上旬、週末予定 (未公開・最新フィルム一挙公開！GUITARHYTHM III 完成特別番組)

RADIO PROGRAM FM 青森 ［布袋寅泰スペシャル］･･･10/1 (木) 20:00 ～／FM 山形 ［布袋寅泰スペシャル］･･･9/27 (日) 18:00～／FM 秋田 ［布袋寅泰スペシャル］･･･9/24 (木) 19:00～／NHK 福島 ［FM リクエストアワー］･･･ 10/3(土) 15:00～／FM 静岡 ［J-ROCK-SHOWスペシャル］10/2(金) 26:30～／FM 三重 ［サウンドサークル］･･･10/3 (土)･10/10 (土)19:00～／FM 石川 ［プレシャスベール］･･･10/10 (土) 20:00～／FM 大阪 ［フライデートリコロール］･･･9/25 (金) 20:30～／FM 福岡 ［RADIO BAGUS］･･･9/28 (月)～9/30 (水)17:30～／FMK ［YOU GOTTA LIVE サウンドパラダイス］･･･10/2(金) 17:15～／FM 長崎 ［FMRIDERS］･･･10/4 (日) 19:00～／FM 大分 ［サンセットアベニュー］9/29 (火) 9/30 (水) 17:00～／FM 宮崎 ［トワイライト・ステーション］9/29 (火) 18:00～／FM 鹿児島 ［ミューFM テイク・オフ･スペシャル］10/3 (土) 20:00～／FM 沖縄 ［布袋寅泰 GUITARHYTHM III スペシャル］･･･9/26 (土) 18:00～(予定)

GUITARHYTHM WILD

10/12 (Mon.)	渋谷公会堂 SOLD OUT	DISK GARAGE	03-5704-3200
10/13 (Tue.)	渋谷公会堂 SOLD OUT	DISK GARAGE	03-5704-3200
10/16 (Fri.)	群馬県民会館	FLIP SIDE	0286-33-1009
10/18 (Sun.)	日本武道館 SOLD OUT	DISK GARAGE	03-5704-3200
10/19 (Mon.)	日本武道館 SOLD OUT	DISK GARAGE	03-5704-3200
10/22 (Thu.)	大阪城ホール	夢番地・大阪	06- 341-3525
10/25 (Sun.)	宇都宮市文化会館	FLIP SIDE	0286-33-1009
10/27 (Tue.)	仙台サンプラザ	G.I.P	022-222-9999
10/30 (Fri.)	福岡サンパレス	BRAINS	092-771-8121
10/31 (Sat.)	福岡サンパレス	BRAINS	092-771-8121
11/13 (Fri.)	静岡市民文化会館	SUNDAY FOLK・静岡	0542-84-9999
11/14 (Sat.)	京都会館/第1ホール	J音楽企画	075-231-7776
11/16 (Tue.)	岡山市民会館	夢番地・岡山	0862-31-3531
11/17 (Mon.)	名古屋市民会館	SUNDAY FOLK・名古屋	052-320-9100
11/18 (Wed.)	名古屋市民会館	SUNDAY FOLK・名古屋	052-320-9100
11/20 (Fri.)	広島厚生年金会館	夢番地・広島	082-249-3571
11/27 (Fri.)	札幌市民会館	WESS	011-613-9000
12/12 (Sat.)	鹿児島市民文化ホール	K&M CORP.	0992-23-7710
12/15 (Tue.)	大阪厚生年金会館	夢番地・大阪	06- 341-3525
12/16 (Wed.)	大阪厚生年金会館	夢番地・大阪	06- 341-3525
12/19 (Sat.)	横浜アリーナ	DISK GARAGE	03-5704-3200
12/26 (Sat.)	神戸国際会館	夢番地・岡山	0862-31-3531

TOUR TOTAL INFORMATION : 03-5466-1325 IRc2 CORPORATION


すべての若き
ロックンロール
ボヘミアンに捧ぐ
布袋寅泰 ギタリズムIII NOW ON SALE
TOCT-6658 ¥3000（税込定価）
New Single "LONELY★WILD" NowOnSale! TODT-2881 ¥930（税込定価）
GUITARHYTHM III アナログ盤 完全予約限定版。ボーナストラック（新曲）1曲収録。11.18 発売予定（9.30 店頭予約締め切り）
EASTWORLD TOSHIBA-EMI LIMITED

11月号 第6巻第12号 通巻70号1992年11月1日発行 1988年(昭和63年)12月3日第3種郵便物認可 発行/ソニー・マガジンズ 〒102 東京都千代田区五番町6番地2 電話/03-3234-5811(販売)03-3234-7906(編集)03-3234-5101(広告)

MONTHLY

パチ・パチ・ロックンロール

PATi-PATi ROCK'N'RO

11

NOV.1992
VOL.65
390YEN



電気GROOVE

PIERRE TAKI
MARIN
ISHINO TACKQ

KARATEKA WORLD

UNICORN
JUN SKY WALKER(S)
BRAIN DRIVE
SOFT BALLET
すかんち
布袋寅泰
etc.

雑誌07567-11 定価◎390円(本体379円) ©Sony Magazines Inc. Printed in Japan 印刷:大日本印刷株式会社

T1007567110394